大乗寺客殿及び庫裏（25頁参照）

帝釈寺本堂（33頁参照）

大糠神社観音堂（79頁参照）

黒野神社本殿（74頁参照）

森脇神社本殿（100頁参照）

若宮八幡神社天満神社（長坂、105頁参照）

白山神社本殿（市午、61頁参照）

八坂神社本殿（梶原、63頁参照）

わたしたちの香美町は北に日本海、南は1000メートル級の山々に囲まれる自然豊かなふるさとです。わたしたちの祖先がこの地で連綿と生活を営んできたことは、山間部で約１万年前の縄文時代早期の土器が見つかっていることからもわかっています。

わたしたちの祖先はこの途方もない時間の流れの中、多くの恵みと、そして時には酷薄な表情を見せつける自然とともに生き、文化を育んできました。

育まれた地域文化の中で生まれ継承されてきた村落内の神社やお寺、お堂は信仰の対象でもあり、また、地域の集会所としても利用され、まさしく物心両面からの地域コミュニティの核としての役割を果たしてきました。

近年、日本中の多くの地域がそうであるように香美町においても急激に少子高齢化が進んでおり、長い年月をかけ醸成されてきた地域の文化は、今その担い手を失いつつあります。その大きな流れは神社やお寺、お堂を護持してきた地域社会のシステムをも飲み込もうとしています。

町内に残る神社やお寺、お堂などの寺社建築をより良い形で将来に残していくためには、まず学術的な調査を実施し現状を把握しなければなりません。

この度、兵庫県文化財保護審議会委員の神戸大学大学院教授黒田龍二先生、同じく京都大学大学院教授山岸常人先生、そして調査に参加していただいたみなさまのお力添えにより、寺社建築の専門的な調査を実施することができました。ご多忙にもかかわらず長期にわたり香美町の寺社建築を詳細に調査していただき、誠にありがとうございました。また、地域の寺社役員様をはじめご協力いただいた関係各位に感謝申し上げます。

この報告書が地域で活用され寺社建築を改めて見直すきっかけとなり、地域文化の誇りの萌芽となることを期待しています。

平成２５年３月

香美町教育長　**森　脇　俊　晴**

目　　次

序章　調査の概要 ……1
1　調査の目的と方法……1
2　報告書の作成……1
3　香美町の地理と歴史……2
第一章　一次調査の成果 ……4
1　一次調査の整理……4
2　一次調査の所見……4
第二章　主要な寺社建築 …… 11
1　二次調査の成果…… 11
2　各個解説…… 18
第三章　寺社建築の特質 ……151
1　村堂と籠りの場……151
2　大糠神社観音堂の墨書について……164
3　棟札に見る香美町域の建築工匠……168
4　丹波彫物師中井氏の活動……172
まとめ ……175

史料一　棟札等釈文…… 一
史料二　大糠神社観音堂墨書釈文…… 四四

序章　調査の概要

１　調査の目的と方法

目的　この調査は兵庫県香美町域内に所在する寺社建築の実態を明らかにすることを目的として、香美町教育委員会及び香美町歴史文化遺産活性化実行委員会が実施したものである。町内の主として近世（一部近代も含む）の寺社建築は、どの地域にどのような建物が遺されており、それらはどのような建築的・歴史的・文化的特色を持っているのかを把握しようとしたものである。

香美町は城崎郡香住町、美方郡美方町、同郡村岡町が平成17年に合併してできた町であり、町内には円山応挙の障壁画を多数所蔵する古刹大乗寺があり、室町時代前期の神社建築である県指定文化財郡主神社本殿もあるが、町域内の古建築の残存状況は充分把握できていなかった。しかし、それぞれの地域には地域の固有の歴史や文化を背景にした建物があり、それらは地域の個性を示すものである。香美町固有の文化的な資産を「発掘」することは、それらを文化財として守るだけではなく、今後の地域の社会的な資産として活用してゆく基礎的なデータを提供することになる。

調査方法　これまで兵庫県下の神河町・太子町等で実施された寺社建築の調査方法に倣って、以下のような方法で調査を実施した。

まず平成21年度に、香美町教育委員会社会教育課の職員が、町内の宗教法人及び宗教法人に登録されていない社・祠・堂等をくまなく踏査し、その外観写真を撮影するとともに、既存の行政資料や郷土史関係資料から、それぞれの建物の沿革を整理した。これを一次調査と称する。一次調査では339棟の建物の資料が収集された。

この資料から、顕著な特徴を持つと思われる建物99棟を選択し、二次調査を行った。二次調査の内容は平面の実測、特徴の把握、建立年代の確認、改修過程の調査、関連史料の収集、写真撮影である。二次調査は神戸大学黒田龍二・京都大学山岸常人に依頼した。

一次調査の結果、小規模ながらも上質で、建立年代も江戸時代中期以前の建物が多数見いだされたので、調査期間を延長し、三カ年計画で実施することとした。

調査組織　調査は上記黒田・山岸の大学研究室の共同調査として行った。調査参加者は以下のとおりである。

神戸大学大学院工学研究科教授　黒田龍二
同大学大学院生及び学生　合田喜賢・廣岡幸義・村木良衣・杉本順平・谷口雄紀・松村大輔・中森康裕・向谷唯以・角矢洋平・本倉由佳・星野将扶文
京都大学大学院工学研究科教授　山岸常人
同大学大学院生　瀬見理絵・河原海七渡・平川晴子
九州大学大学院芸術工学研究院准教授　岸　泰子
京都橘大学文学部助教　登谷伸宏
（大学教員の肩書は報告書刊行時、学生は調査当時）
OFFICE萬瑠夢　文化財修理技師　林田信夫
事務局　香美町教育委員会事務局生涯学習課　石松　崇

調査期間

一次調査　平成21年度
二次調査　平成21年6月22～24日
22年3月15～17日、10月26～27日
23年1月11日、3月9～11日
24年3月21～22日、9月4～5日

２　報告書の作成

調査成果は、単に行政の内部資料として保管されるだけではなく、報告書として公刊し、町民の利用可能なものとするとともに、広く文化財保護や歴史研究の資料としても活用できるものとしておく必要がある。調査の成果を本報告書として刊行する。

報告書の作成は、黒田・山岸を中心に、調査参加者が分担してその任に当たった。執筆分担は以下の通りである。編集は山岸が担当した。

序章・第一章　山岸、第二章　黒田・山岸・岸・登谷、第三章　黒田・登谷・岸・山岸、まとめ　山岸・黒田、史料一　岸、史料二　登谷

なお調査票原本は神戸大学黒田研究室に保管し、写真は香美町教育委員会にて保管する。

3　香美町の地理と歴史

香美町は兵庫県の北西部に位置し、約369平方キロメートルの面積がある。人口は約20,000人である。

北は日本海に面し、東は豊岡市、西は新温泉町と鳥取県に接する。平地部は海岸沿いや川沿いにわずかにあるのみで、町域の大半は中国山系の山地である。

町域南端部には鉢伏山・氷ノ山・陣鉢山など標高千メートルを超える山々が屹立する。町域をほぼ貫通して矢田川とその支流の湯舟川が北流し、東部には佐津川が流れる。これらの川沿いに集落が点在する。

鉄道はJR山陰本線が海岸沿いを走って、畿内と山陰地方を結んでいる。一方、古代以来の山陰道が養父市（旧八鹿町・関宮町）から湯舟川沿いに村岡区内を抜けて、新温泉町を経て鳥取に至る路線を通っていた。この道は国道九号線となって、自動車交通の幹線路として使われている。

美方郡香美町は旧香住町・村岡町・美方町の三町が合併したものである。近世までは、香住町は美含郡に属し、明治二十九年（1896）に城崎郡となった。村岡・美方両町は七美郡に属し、明治二十九年に美方郡となった。

旧町の町役場のあった香住・村岡・小代に町場が形成されている。香住は漁港として栄えており、冬期の蟹漁で賑わう。山間部では但馬牛飼育や高原野菜の生産が行われている。

旧村岡町内では、縄文時代からの遺跡があり、古墳時代の遺跡としては、壁画古墳である三の谷古墳等の特徴的古墳が遺されている。奈良時代は高井に七美郡衙が置かれていたと推定される（豊田遺跡）。中世には長講堂領の七美（しつみ）荘・菟束（うつか）荘、歓喜寿院領射添（いそう）荘があり、近世には山名領となった。山陰道が通っていたため、兵庫から鳥取へ抜ける交通の通過点として、政治・経済的にも重要な地域であった。

旧美方町内は、中世には長講堂領小代（おしろ）荘があり、中世後期に大谷・忠宮に城郭が築かれていた。

村岡に村岡陣屋が置かれ、旧村岡・美方町域は、ともに山名氏の支配下にあった。

香住は中世には九条家領と推定される美含（みくみ）荘と上皇領佐須荘があり、近世は主として出石藩領となって、幕末に幕府領に替わった。

町内の宗教法人の分布を見ると表1のようになる。真言宗と曹洞宗が多いが、寺院の総数は多くはない。これに対し神社は法人数がきわめて多い。

香美町域には近世になっても、真宗や浄土宗の勢力があまり展開していないように思われる。中世後半には禅宗勢力が兵庫県下に勢力を展開しており、顕密仏教（天台・真言宗）とともにこの地域の主たる仏教勢力となっていた。

明治前期の神仏分離の影響も大きかったらしく、出石藩や豊岡藩での廃仏は相当厳しいものがあったようである。古仏が集められていると伝える「堂」がいくつも知られるのは、廃仏の影響かと推察される。一方で、神祇伯白川家からご神体を新たに拝領するなど、神社の継続に意を用いていた事が香美町内のいくつかの神社で知られ、明治以後の神社の存続には村人の強い意志が働いていた。このことが、今に至るまで、一つの大字に一件以上の神社を維持してきた要因と思われる。神社の多さはそのままそこに建てられ守られてきた本殿や「堂」の質の良さにも反映することになった。

なお、町内の指定文化財の建造物は表2に掲げるとおりである。

表1　香美町内寺院宗派分布

	旧香住町	旧村岡町	旧美方町	計
真　言	7	4	1	12
天　台	0	1	0	1
浄　土	3	1	0	4
浄土真	3	0	2	5
臨　済	3	0	0	3
曹　洞	4	2	1	7
日　蓮	1	1	0	2
寺院計	21	9	4	34
神　社	53	50	19	122

表2　香美町内の指定文化財建造物

種　別	建　物　名	所　在　地
県指定有形文化財	大乗寺客殿及び庫裏	香住区森
	石造五輪塔	香住区訓谷
	郡主神社本殿	村岡区板仕野
町指定有形文化財	大放神社社殿	香住区鎧
	宝篋印塔	香住区小原

図1　香美町位置図

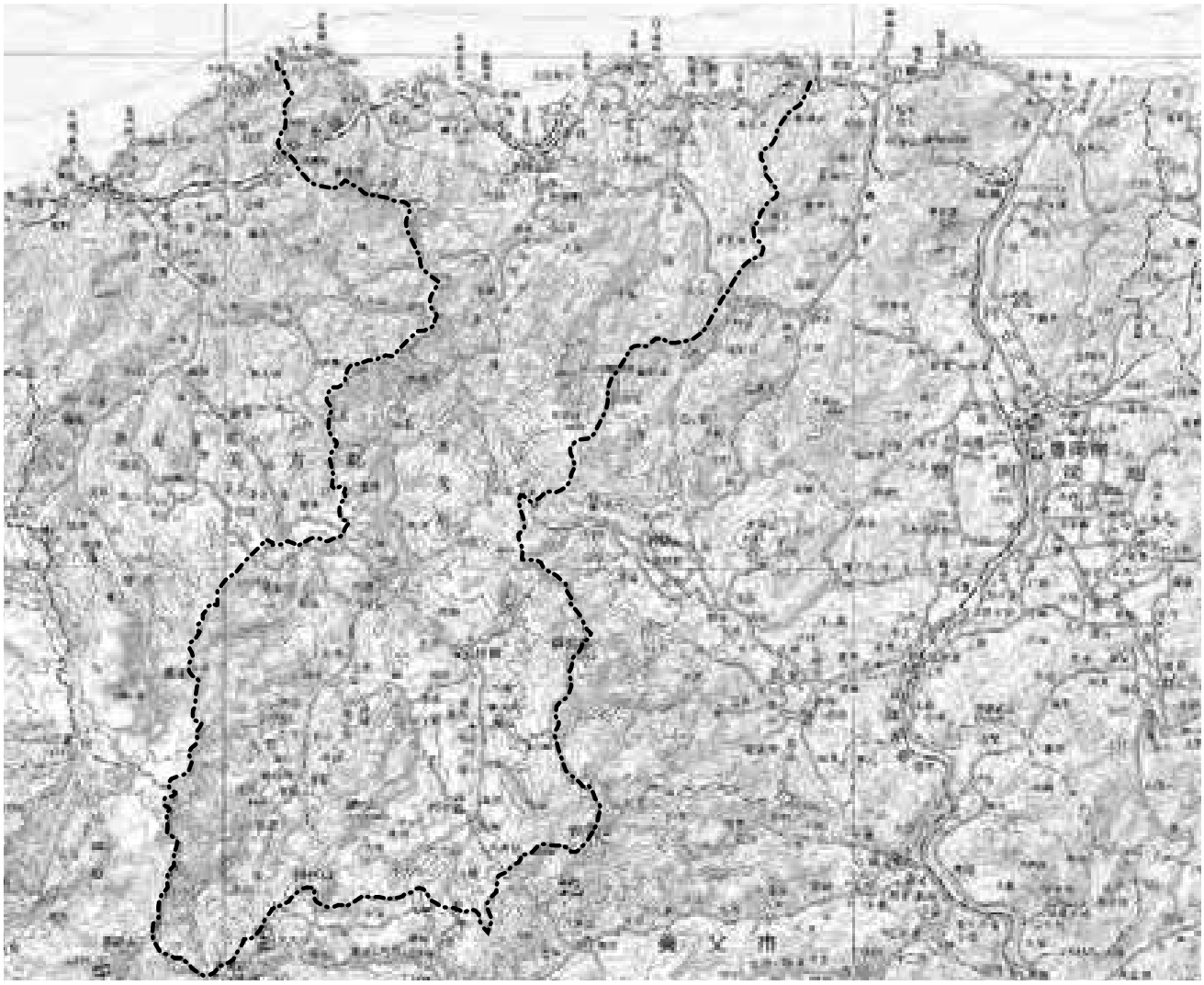


図2　香美町周辺地形（国土地理院5万分ー地形図香住に加筆）

第一章　一次調査の成果

1　一次調査の整理

一次調査は、1頁に記したように、寺院・神社・堂・祠などをもれなく写真撮影するとともに、沿革に関する情報を自治体史・既往調査・行政資料などから収集し、調査票のファイルを作成した。調査票ファイルは厚みが十五センチメートルを超える大部なものとなったが、これを整理して、確認された建物を一覧表にまとめたものが、表3である（6～10頁）。

調査票ファイルでは表3以外の建物の写真も収録されているが、小規模な境内社や附属屋、明らかに近年建設された建物等は割愛した。

建物の構造形式や建立年代は、収集資料を参照しつつ写真から判断した。建物全体が充分に写っていないものもあり、年代判定の根拠となる絵様・繰形が明瞭でない建物も少なくない。可能な限り判読し、推定したが、建物を実見していない以上、その確度は高くない。ただ、確認できないからといって不明のままにしておいても、一次調査の成果が無駄になるだけなので、できる限り読み取って表記することとした。

2　一次調査の所見

一次調査では極めて詳細な資料が得られたために、香美町内の寺社建築の全般的な特質を掴むことが可能となった。

寺社別の棟数　表3に掲げた建物数は339棟であり、寺院の堂舎は57棟である。これに対し、神社の殿舎は202棟である。この内の185棟は本殿・境内社・拝殿などの社殿であり、17棟は境内の堂である。神社建築の棟数が圧倒的に多く、一つの集落に複数の神社がある集落が多いことになる。これに対し、畿内のように集落ごとに寺院が建てられている様相は、香美町では見られない。寺院数の少なさは地域の特質の一つである。

香美町域で顕著なのは、寺院の管理下にはない堂が随所に見られることである。具体的には「堂」「お堂」「籠堂」「辻堂」と呼ばれたり、本尊名を冠して「薬師堂」「阿弥陀堂」などと呼ばれたりしている。村の周辺に単独で立つものもあり、神社の境内に立って、神社の施設の如きものもある。これらを「堂」と総称しておく。

「堂」は一次調査では97棟が見いだされた。その内17棟は神社境内にあり、寺社に付属せず単独で立つものが80棟にのぼった。

建立年代　これらの建物の建立年代を一世紀を三等分して集計すると表4のようになる。19世紀中期に建立された建物の棟数が多いのは、写真による判定の際、判然としないものをこの時期に充てているからであり、実際は前後の時期に分散する可能性がある。

この建立年代の分布を見て注目されるのは、18世紀の遺構の遺存率が高い点である。かつて調査した兵庫県神河町の内、旧神崎町域も江戸時代中期以前の遺構がよく残る地域であったが[1]、18世紀の遺構は19パーセントで、香美町の25パーセント弱との差は大きい。18世紀の遺構の多さは、香美町の重要な特質である。

神社本殿の形式　185棟現存する神社本殿には極めて顕著な特質がいくつも見いだされる。まず形式別の棟数を整理すると表5のようになる。なお一次調査票では、庇を桁行一間としながら身舎では二間ある二間社の判別は難しく、二間社として分類はしていない。

流造が圧倒的に多く、春日造・入母屋造がこれに次ぐのは、重要文化財の棟数で知られる形式別棟数の比率とも一致する[2]。ただし、春日造が少なく入母屋造が

表4　一次調査による建立年代別棟数

建立年代	棟数	世紀ごとの棟数と比率
16世紀以前	3	3　(0.9)
17世紀前期	0	10　(3.0)
17世紀中期	2	
17世紀後期	8	
18世紀前期	26	82（24.8）
18世紀中期	23	
18世紀後期	33	
19世紀前期	25	109（33.0）
19世紀中期	68	
19世紀後期	16	
20世紀以降	126	126（38.2）

表5　一次調査による神社本殿形式別棟数

形式	棟数
一間社流造	83
三間社流造	8
春　日　造	11
入 母 屋 造	47
切妻造平入	12
切妻造妻入	8

（　）は全体に対する比率を％で示す。

1 『神河町の寺社建築－旧大河内町域－』（神河町教育委員会　平成21年）
2 黒田龍二編著『国宝と歴史の旅』4（朝日新聞社　平成12年）

多いのが香美町の特質である。

入母屋造本殿には三つの類型がある（表6）。第一は通常の入母屋造平入で23棟あり、一次調査資料で確実には確認できないものの、この類型と推定されるものが他に9棟ある。第二は入母屋造妻入で4棟、第三が正面入母屋造・背面切妻造で9棟ある。第二・第三の類型では千鳥破風や軒唐破風を付ける例が多い。そもそも入母屋造は屋根が複雑な形状をしているが、さらに複雑にして外観を飾ろうとしたのであろう。このような形式は18世紀前期から造られていた。

ところで、第三の正面入母屋造・背面切妻造は特徴的な形式である。これらのうち、267荒霊神社と68三柱神社を除く7棟はいずれも正面一間、側面二間の規模を持つが、正面の2本の柱は角柱、後方の四本の柱は円柱であって、平面的には方一間の身舎の正面に庇が付いた形をとっている。つまり一間社流造や一間社春日造と同様の平面形式を持っているわけである。しかしながらこの類型では、母屋・庇一体に屋根をかけている。正面の入母屋造屋根を構成するための隅木は庇の柱上に載ることになる。庇と身舎の柱は虹梁形頭貫で繋ぐ例が多く、一次調査資料で確認できないものもあるが、庇には天井を張る。この地域の独特の神社本殿形式として注目される。

神社本殿の軒　神社本殿で注目される特色として、垂木の配列方法がある。入母屋造本殿の場合、扇垂木を用いる遺構が8棟ある。向拝が付かない場合は135黒野神社本殿のように、地垂木も飛檐垂木もすべて扇垂木にする事が可能である。しかし向拝を付ける場合は、中央部の垂木間隔が開きすぎるおそれがある。そこで正面は地垂木・飛檐垂木とも平行垂木とするもの（119八柱神社本殿）、正面の地垂木は扇垂木だが飛檐垂木・打越垂木は平行垂木を用いるもの（237長須神社本殿・38兵主神社本殿・76国主神社本殿・27十二社神社本殿・232松尾神社本殿、205天満威徳神社）がある。正面の隅木は片側に平行垂木がささり、片側は扇垂木のため垂木がささらないという、変則的な納まりになる。18世紀以降、特定地域に偏することなく、これらの遺構が分布する。香美町の神社本殿の特質の一つといってよいが、香美町固有ではない。

寺院建築　神社建築に対して、寺院建築では顕著な特質を見出しがたい。これは一次調査では内部の写真撮影ができないためである。特色ある建物は二次調査の成果に示した。

「堂」「堂」に分類した建物の地元での呼称から推定すれば、村落社会の中で多様な役割を担っていたと推定される。それらの成立の歴史的経緯も多様であったと推察される。このことについては第三章第一節を参照されたい。

表6　一次調査による入母屋造神社本殿の遺構分類

一次番号	神社名	建物名	唐破風の有無	千鳥破風の有無	建立年代	同西暦	所在地
通常の入母屋造							
56	兵主神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	18世紀前期		香住区隼人
135	黒野神社	本殿	軒唐破風付	千鳥破風付	明和二年	1765	村岡区川上
38	兵主神社	本殿		千鳥破風付	安永四年	1775	香住区九斗
41	多田神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	天明六年	1786	香住区丹生地
234	勢主山神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	寛政九年	1797	村岡区高津
31	八幡神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	18世紀後期		香住区下浜
179	八幡神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	18世紀後期		村岡区大野
207	八幡神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	文政三年	1820	村岡区作山
119	八柱神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	19世紀前期		香住区西
173	八幡神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	19世紀前期		村岡区福岡
76	国主神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	19世紀中期		香住区奥安木
93	八幡神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	19世紀中期		香住区上計
152	八幡神社	本殿			19世紀中期		村岡区萩山
160	稲荷神社		向拝軒唐破風付	千鳥破風付	19世紀中期		村岡区高井
189	大田神社	境内社（本殿）	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	19世紀中期		村岡区大笹
309	多他神社	拝殿			19世紀中期		小代区忠宮
319	安明神社	本殿	軒唐破風付	千鳥破風付	明治十年	1877	小代区城山
91	丹生神社	本殿	向拝軒唐破風付		明治二十九年	1896	香住区浦上
92	森本神社	本殿	向拝軒唐破風付		明治四十年	1907	香住区上計
69	三柱神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	明治		香住区相谷
232	松尾神社	本殿	向拝軒唐破風付		大正七年	1918	村岡区川会
95	八坂神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	昭和ヵ		香住区上計
136	黒野神社	皇大神社	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	明和二年	1765	村岡区川上
入母屋造と推定されるもの							
105	松尾神社	本殿	向拝軒唐破風付		19世紀中期		香住区大谷
151	天満神社	本殿	向拝軒唐破風付		享和三年	1803	村岡区神坂
165	八坂神社	本殿	向拝軒唐破風付		天保十二年	1842	村岡区耀山
237	長須神社	本殿	向拝軒唐破風付		天保十五年	1844	村岡区長須
239	伊曾布神社	本殿	向拝軒唐破風付		19世紀中期		村岡区味取
103	三柱神社	本殿	向拝軒唐破風付		明治十六年	1883	香住区三谷
27	十二社神社	本殿	向拝軒唐破風付		明治三十六年	1903	香住区油良
82	沖野神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	明治四十四年	1911	香住区訓谷
99	八幡神社	本殿	向拝軒唐破風付	千鳥破風付	明治ヵ		香住区守柄
入母屋造妻入							
205	天満威徳神社	本殿	向拝軒唐破風付		嘉永二年	1849	村岡区日影
143	八坂神社	本殿	向拝軒唐破風付		明治二十五年	1892	村岡区用野
50	八幡神社	本殿（覆屋）	向拝軒唐破風付		明治ヵ		香住区下岡
62	蔵王大権現閣		向拝軒唐破風付		明治		香住区三川
79	八坂神社	本殿	向拝軒唐破風付		明治ヵ		香住区浜安木
正面入母屋造、背面切妻造							
303	吉滝神社	本殿	軒唐破風付		天明二年	1782	小代区鍛冶屋
306	八幡神社	稲荷社	軒唐破風付		寛政七年	1795	小代区貫田
204	作田井神社	本殿			天保七年	1836	村岡区宿
267	荒霊神社	境内社			19世紀中期		小代区広井
73	金比羅神社	本殿			明治十五年	1882	香住区相谷
68	三柱神社	本殿	向拝向唐破風造		明治		香住区大梶
72	八大荒神	本殿			明治ヵ		香住区相谷
75	下の宮神社	右本殿	軒唐破風付		明治ヵ		香住区相谷
208	荒霊神社	本殿			明治		村岡区作山

表3　一次調査建物一覧

一次調査番号	寺社名	建物名	所在地		構造形式	建立年代	同西暦	二次調査番号	第二章掲載番号
1	米粉神社	本殿	香住区	境	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、板葺	寛政九年（板札）	1797	06	1
2	八坂神社	本殿	香住区	一日市	三間社流造、軒唐破風付	明治三十年（神社誌）	1897		
3	八坂神社	芝居堂	香住区	一日市	切妻造、桟瓦葺	近代ヵ			
4	愛宕神社	本殿	香住区	一日市	桁行三間、梁間二間、切妻造、向拝一間、桟瓦葺	近代			
5	長福寺	本堂	香住区	一日市	二重入母屋造、向拝一間、桟瓦葺	天明七年（県資料）	1787		
6	願行寺	本堂	香住区	一日市	桁行三間、入母屋造、銅板葺ヵ	平成ヵ			
7	三柱神社		香住区	若松	一間社流造、柿葺	大正九年（神社誌）	1920		
8	法正寺	本堂	香住区	若松	RC造	昭和戦後			
9	香住神社	本殿	香住区	香住	正面一間、側面二間	大正五年（神社誌）	1916		
10	香住神社	三柱神社	香住区	香住	一間社流造	大正五年（神社誌）	1916		
11	金刀比羅神社	本殿	香住区	香住	一間社流造	19世紀中期ヵ			
12	通玄寺	山門	香住区	香住	桁行一間、梁間一間、二重入母屋造、妻入、桟瓦葺	19世紀中期		100	2
12	通玄寺	薬師堂	香住区	香住	正面三間、側面三間、宝形造、桟瓦葺、背面下屋庇付、銅板葺	元禄六年（寺伝）	1693	99	2
13	通玄寺	薬師堂	香住区	香住	桁行三間、梁間三間、宝形造、桟瓦葺	元禄六年ヵ（県資料）	1693		
14	本誓寺	本堂	香住区	西香住	桁行13.3メートル、梁間12.7メートル、入母屋造、向拝一間、側・背面軒下張出付、桟瓦葺	安政二年（鬼瓦銘）	1855	04	3
15	天滿神社	本殿	香住区	七日市	三間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、銅板葺	文化六年（木札）	1809	05	4
16	大乗寺	観音堂	香住区	森	正面三間、側面五間、宝形造、背面軒下張出付、向拝一間、銅板葺	正徳二年（棟札）	1712	03	5
17	大乗寺	客殿・庫裏	香住区	森	桁行33.0メートル、梁間18.9メートル、入母屋造、銅板葺、背面軒下張出付、背面下屋庇付、式台玄関、正面一間、奥行二間、向唐破風造、銅板葺	寛政六年（棟札）	1796	02	5
18	大乗寺	土蔵	香住区	森	切妻造、桟瓦葺				
19	大乗寺	鐘楼	香住区	森	桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺	平成六年	1994		
20	大乗寺	薬師堂	香住区	森	桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺	昭和五十一年	1976		
21	大乗寺	山門	香住区	森	桁行三間、梁間二間、八脚門、入母屋造、桟瓦葺	安政二年（寺蔵記録）	1855	01	5
22	吉野神社	本殿	香住区	森	一間社隅木入春日造、正面軒唐破風付、柿葺	平成ヵ			
23	吉野神社	境内社	香住区	森	一間社隅木入春日造、正面軒唐破風付、柿葺	19世紀前期ヵ			
24	阿弥陀堂		香住区	森	入母屋造、妻入、桟瓦葺	近代ヵ			
25	山野神社	本殿	香住区	間室	一間社隅木入春日造、正面軒唐破風付、柿葺	昭和五十七年（棟札）	1982		
26	地蔵堂		香住区	間室	切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
27	十二社神社	本殿	香住区	油良	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、正面軒唐破風付、柿葺	明治三十六年（神社誌）	1903		
28	大山神社	本殿	香住区	矢田	一間社流造、柿葺	文政八年（神社誌）	1825		
29	唐田神社	本殿	香住区	矢田	切妻造、妻入、鉄板葺	近代ヵ			
30	法庭神社	本殿	香住区	下浜	一間社流造、鉄板葺	明治二十八年（神社誌）	1895		
31	八幡神社	本殿	香住区	下浜	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	18世紀後期		25	7
32	伊勢神社	本殿	香住区	下浜	一間社隅木入春日造、板葺	天和四年（御正体板）	1684	27	8
33	西迎寺		香住区	下浜	入母屋造、下屋庇付、桟瓦葺、向拝一間、銅板葺	昭和三十七年（県資料）	1962		
34	帝釈寺	本堂	香住区	下浜	正面五間、側面五間、宝形造、桟瓦葺	16世紀中期、明治前期大改造		23	6
35	帝釈寺	持仏堂	香住区	下浜	桁行5.6メートル、梁間5.3メートル、入母屋造、桟瓦葺	18世紀中期		24	6
36	帝釈寺	薬師堂	香住区	下浜	切妻造、桟瓦葺	昭和ヵ			
37	お堂		香住区	油良	切妻造、桟瓦葺	19世紀中期			
38	兵主神社	本殿	香住区	九斗	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、板葺	安永四年（棟札写）	1775	11	9
39	兵主神社	お堂	香住区	九斗	切妻造、向拝一間、鉄板葺	19世紀中期			
40	佐受神社	本殿	香住区	米地	一間社流造、銅板葺	明治ヵ			
41	多田神社	本殿	香住区	丹生地	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	天明六年（棟札）	1786	12	10
42	荒神社		香住区	丹生地	一間社流見世棚造、板葺	18世紀後期			
43	幸徳寺	本堂	香住区	丹生地	入母屋造、向拝一間、銅板葺	近代ヵ			
44	幸徳寺	鐘楼	香住区	丹生地	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺	文政十二年（県資料）	1829		
45	若宮神社	本殿	香住区	西下岡	一間社流造、板葺	昭和ヵ			
46	西光寺	本堂	香住区	西下岡	入母屋造、向拝一間、鉄板葺	大正十一年（『奥佐津村誌』）	1922		
47	三柱神社	本殿	香住区	下岡	一間社春日造、板葺	安政三年（神社誌）	1856		
48	地蔵堂		香住区	下岡	正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、桟瓦葺	18世紀前期、19世紀前期改造		10	11
49	愛宕神社	本殿（覆屋）	香住区	下岡	切妻造、妻入、向拝一間、桟瓦葺	近代ヵ			
50	八幡神社	本殿（覆屋）	香住区	下岡	入母屋造、妻入、向拝一間、軒唐破風付、鉄板葺	明治ヵ			
51	竈戸神社	本殿	香住区	上岡	一間社流造、正面軒唐破風付、板葺	大正十年（神社誌）	1921		
52	竈戸神社	籠堂	香住区	上岡	桁行一間、梁間二間、宝形造、鉄板葺	明治ヵ			
53	地蔵堂		香住区	上岡	桁行一間、梁間二間、切妻造、桟瓦葺	19世紀中期			
54	真徳寺	本堂・庫裏	香住区	上岡	入母屋造、鉄板葺	19世紀中期			
55	真徳寺	山門	香住区	上岡	桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺	19世紀中期			
56	兵主神社	本殿	香住区	隼人	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	享保十二年（『兵庫県神社誌』）	1727	08	12
57	観音堂		香住区	隼人	切妻造、向拝一間、桟瓦葺	明治ヵ			
58	不動尊		香住区	隼人	正面一間、側面二間、宝形造、銅板葺	18世紀中期		09	13
59	八柱神社	本殿	香住区	畑	一間社流造、板葺	享保十四年（板札）	1729	07	14
60	美伊神社		香住区	三川	切妻造、向拝一間、鉄板葺	明治ヵ			
61	弥勒寺	庫裏	香住区	三川	入母屋造、鉄板葺	明治ヵ			
62	蔵王大権現閣［寺］		香住区	三川	入母屋造、妻入、向拝一間、軒唐破風付、銅板葺	明治			
63	行者堂		香住区	三川	切妻造、妻入、向拝一間、鉄板葺	19世紀中期			
64	観音堂		香住区	三川	切妻造、妻入、向拝一間、鉄板葺	明治ヵ			
65	八柱神社	本殿	香住区	土生	一間社隅木入春日造、軒唐破風付、板葺	19世紀中期		16	15
66	大倉神社	本殿	香住区	本見塚	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、板葺	享保十四年（棟札）	1729	26	16
67	白山神社	本殿	香住区	本見塚	向唐破風造、柿葺	不明			

一次調査番号	寺社名	建物名	所在地		構造形式	建立年代	同西暦	二次調査番号	第二章掲載番号
68	三柱神社	本殿	香住区	大梶	正面入母屋造、背面切妻造、向拝一間、向唐破風造、桟瓦葺	明治			
69	三柱神社	本殿	香住区	相谷	桁行一間、梁間一間、入母屋造、正面千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	明治			
70	地蔵堂		香住区	相谷	桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺	近代ヵ			
71	稲荷神社	本殿	香住区	相谷	一間社流見世棚造、銅板葺	昭和ヵ			
72	八大荒神	本殿	香住区	相谷	正面入母屋造、背面切妻造、妻入、柿葺	明治ヵ			
73	金比羅神社	本殿	香住区	相谷	正面一間、側面二間、正面入母屋造、背面切妻造、柿葺	明治十五年（『口佐津村誌』）	1882		
74	下の宮神社	左本殿	香住区	相谷	一間社流造、板葺	明治ヵ			
75	下の宮神社	右本殿	香住区	相谷	正面一間、側面二間、正面入母屋造、背面切妻造ヵ、正面軒唐破風付、柿葺	明治ヵ			
76	国主神社	本殿	香住区	奥安木	桁行一間、梁間一間、母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	天保三年（『兵庫県神社誌』）	1832	13	17
77	極楽寺	表門	香住区	奥安木	四脚門、切妻造、桟瓦葺	19世紀中期			
78	極楽寺	本堂	香住区	奥安木	入母屋造、桟瓦葺	昭和ヵ			
79	八坂神社	本殿	香住区	浜安木	桁行一間、梁間一間、入母屋造、妻入、向拝一間、正面軒唐破風付、柿葺	明治ヵ			
80	八坂神社	境内社	香住区	浜安木	一間社流造、柿葺	明治ヵ			
81	大師堂		香住区	浜安木	切妻造、向拝一間、桟瓦葺	明治ヵ			
82	沖野神社	本殿	香住区	訓谷	桁行一間、梁間一間、母屋造、向拝一間、正面千鳥破風、軒唐破風付、銅板葺	明治四十四年（神社誌）	1911		
83	沖野神社	芝居堂	香住区	訓谷	桁行8.9メートル、梁間7.9メートル、切妻造、桟瓦葺、両側面下屋庇付、桟瓦葺	明治二十九年（墨書）	1896	14	18
84	光永寺	山門	香住区	訓谷	四脚門、切妻造、桟瓦葺	明治三十一年（神社誌）	1898		
85	光永寺	本堂	香住区	訓谷	入母屋造、桟瓦葺	明治三十一年（神社誌）	1898		
86	八幡神社	本殿	香住区	無南垣	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺	享保四年（棟札・墨書）	1719	15	19
87	金比羅宮	境内社	香住区	無南垣	一間社流造、鉄板葺	19世紀中期			
88	弁天社		香住区	無南垣	切妻造、桟瓦葺	近代ヵ			
89	長谷寺	山門	香住区	無南垣	一間龍宮門、切妻造、銅板葺	19世紀中期			
90	長谷寺	山門	香住区	無南垣	二重、入母屋造、向拝一間、向唐破風造、桟瓦葺	昭和四十三年（県資料）	1968		
91	丹生神社	本殿	香住区	浦上	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	明治二十九年（神社誌）	1896		
92	森本神社	本殿	香住区	上計	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	明治四十年（神社誌）	1907		
93	八幡神社	本殿	香住区	上計	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、正面千鳥破風、軒唐破風付、柿葺	19世紀中期			
94	地蔵堂		香住区	上計	切妻造、鉄板葺	昭和ヵ			
95	八坂神社	本殿	香住区	上計	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、正面千鳥破風、軒唐破風付、柿葺	昭和ヵ			
96	大放神社	本殿	香住区	沖浦	一間社隅木入春日造、正面軒唐破風付、柿葺	18世紀前期、明治二十九年改修（神社誌）	1734		
97	帰迎寺	本堂	香住区	浦上	入母屋造、向拝一間、桟瓦葺	平成			
98	八幡神社	本殿	香住区	守柄	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、正面千鳥破風、軒唐破風付、柿葺	明治ヵ			
99	薬師堂		香住区	守柄	切妻造、妻入、桟瓦葺、向拝一間、鉄板葺	昭和ヵ			
100	観音堂		香住区	守柄	桁行三間、梁間三間、入母屋造、鉄板葺	19世紀前期ヵ			
101	八阪神社	本殿	香住区	加鹿野	一間社流造、軒唐破風付、板葺	18世紀後期		22	20
102	三柱神社		香住区	三谷	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、軒唐破風付、板葺	明治十六年（神社誌）	1883		
103	法典寺	本堂	香住区	三谷	入母屋造、桟瓦葺	昭和三十八年（県資料）	1963		
104	松尾神社	本殿	香住区	大谷	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、軒唐破風付、板葺	19世紀中期			
105	三柱神社	本殿	香住区	大野	一間社流造、正面軒唐破風付、柿葺	大正十一年（神社誌）	1922		
106	遍照寺	観音堂	香住区	小原	正面三間、側面四間、宝形造、鉄板葺	享保二十一年（棟札）	1736	19	21
107	遍照寺	大師堂	香住区	小原	正面三間、側面三間、宝形造、向拝一間、鉄板葺	19世紀中期		20	21
108	遍照寺	鐘楼	香住区	小原	桁行一間、梁間一間、入母屋造、桟瓦葺	宝永八年（棟札）	1711	21	21
109	椋橋神社	本殿	香住区	小原	桁行一間、梁間一間、向拝一間、軒唐破風付	19世紀中期			
110	三柱神社	本殿	香住区	中野	一間社流造、軒唐破風付	明治ヵ			
111	三柱神社	本殿	香住区	藤	一間社流造、板葺	明治四十三年（神社誌）	1910		
112	薬師堂		香住区	藤	正面一間、側面五間、入母屋造、妻入、桟瓦葺	19世紀中期、明治四十四年修理	1867	18	22
113	三柱神社	本殿	香住区	八原	一間社流造、板葺	18世紀後期、明治二十五年修理		17	23
114	白山神社	本殿	香住区	市午	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺	宝暦五年（棟札）	1755	34	24
115	白仙寺	本堂	香住区	市午	切妻造、下屋庇付、桟瓦葺	近代ヵ			
116	白仙寺	観音堂	香住区	市午	正面三間、側面三間、宝形造、向拝一間、桟瓦葺	明治ヵ			
117	伊伎佐神社	本殿	香住区	浜	正面一間、側面一間、向拝一間（岩壁に取り付く）	貞享二年、近代の改造大	1685		
118	八柱神社	本殿	香住区	西	桁行一間、梁間一間、入母屋造、正面千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	19世紀前期		31	27
119	安養寺	本堂	香住区	西	入母屋造、桟瓦葺	平成			
120	薬師堂		香住区	西	正面三間、側面三間、宝形造、向拝一間、桟瓦葺	近代ヵ			
121	平内神社	本殿	香住区	御崎	一間社流造、柿葺	宝暦十四年（神社誌）	1764		
122	日吉神社	本殿	香住区	御崎	一間社流造、柿葺	19世紀前期			
123	美伊神社	本殿	香住区	御崎	一間社流造、柿葺	18世紀中期		30	28
124	十二社神社	本殿	香住区	鎧	一間社流造、柿葺	延宝四年（棟札）	1676	28	29
125	十二社神社	大放神社	香住区	鎧	一間社流造、流板葺	16世紀後期、18世紀改造		29	29
126	秋葉神社	本殿覆屋	香住区	鎧	切妻造、銅板葺	近代ヵ			
127	八坂神社	本殿	香住区	梶原	桁行二間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺	元禄七年（棟札）	1694	33	25
128	長福寺	山門	香住区	浜	桁行三間、梁間二間、入母屋造、桟瓦葺	大正十五年（彫刻刻銘）	1926	32	26
129	長福寺	本堂	香住区	浜	入母屋造、向拝一間、桟瓦葺	昭和			
130	福西神社	本殿	村岡区	東上	一間社流造、軒唐破風付、柿葺	文化二年（神社誌）	1805		
131	大運寺	本堂	村岡区	東上	桁行22.3メートル、梁間9.3メートル、入母屋造、桟瓦葺、正面一間向拝、桟瓦葺	明和二年（記録）	1765	71	30
132	地蔵堂		村岡区	東上	切妻造、妻入、桟瓦葺	平成			
133	法雲寺	本堂	村岡区	本町	桁行23.2メートル、梁間12.3メートル、入母屋造、向拝一間、桟瓦葺	天保十五年（記録）	1844	65	31
134	黒野神社	本殿	村岡区	川上	桁行三間、梁間三間、入母屋造、千鳥破風付、軒唐破風付、銅板葺	明和二年(棟札)	1765	72	32
135	黒野神社	皇大神社	村岡区	川上	桁行一間、梁間一間、入母屋造、銅板葺	19世紀前期			

一次調査番号	寺社名	建物名	所在地		構造形式	建立年代	同西暦	二次調査番号	第二章掲載番号
136	荒霊神社	本殿	村岡区	川上	切妻造、妻入、土蔵造、向拝一間、桟瓦葺	延享四年（町資料）	1747		
137	厳浄寺	本堂	村岡区	中西	入母屋造、向拝一間、桟瓦葺	平成			
138	厳浄寺	薬師堂	村岡区	中西	正面三間、宝形造、桟瓦葺	19世紀前期ヵ			
139	大師堂		村岡区	新町	入母屋造、妻入、向拝一間、桟瓦葺	昭和ヵ			
140	大黒社		村岡区	西本町	一間社流造	18世紀後期			
141	山神社	本殿	村岡区	水上	切妻造、妻入、鉄板葺	昭和			
142	八坂神社	本殿	村岡区	用野	桁行一間、梁間一間、入母屋造、妻入、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	明治二十五年（神社誌）	1892		
143	二柱神社	本殿	村岡区	鹿田	一間社流造、柿葺	昭和十一年（神社誌）	1936		
144	二柱神社	お堂	村岡区	鹿田	切妻造、妻入、向拝一間、鉄板葺	18世紀前期ヵ、近代の改造大			
145	二柱神社	稲荷神社	村岡区	鹿田	石造、入母屋造				
146	二柱神社	山神社	村岡区	鹿田	一間社流造、板葺	近代			
147	相田神社	旧本殿（左境内社）	村岡区	相田	一間社流造、板葺	18世紀後期		74	33
148	相田神社	脇社（右境内社）	村岡区	相田	一間社流造、板葺				
149	籠堂		村岡区	相田	切妻造、下屋庇付、鉄板葺	近代ヵ			
150	天滿神社	本殿	村岡区	神坂	桁行一間、梁間二間、入母屋造ヵ、向拝一間、軒唐破風付	享和三年（神社誌）	1803		
151	天滿神社	堂	村岡区	神坂	切妻造、鉄板葺	明治ヵ			
152	八幡神社	本殿	村岡区	萩山	桁行五間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、鉄板葺	19世紀中期			
153	郡主神社	本殿	村岡区	板仕野	三間社流造、板葺	応永十五年（記録）、江戸時代の修理度々	1408	73	34
154	瀞川稲荷	本殿	村岡区	板仕野	切妻造、妻入、鉄板葺	昭和ヵ			
155	荒霊神社	本殿	村岡区	板仕野	一間社	昭和ヵ			
156	大糠神社	本殿	村岡区	大糠	一間社流造、柿葺	18世紀前期		60	35
157	大糠神社	観音堂	村岡区	大糠	桁行三間、梁間三間、寄棟造、桟瓦葺	18世紀前期		61	35
158	高井神社	本殿	村岡区	高井	二間社流造、流板葺	享保元年（棟札写）	1716	62	36
159	薬師堂		村岡区	高井	正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、桟瓦葺	享保十二年、寛政十一年改造（棟札）	1727	63	37
160	稲荷神社		村岡区	高井	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、正面千鳥破風、軒唐破風付、柿葺	19世紀中期			
161	若宮神社		村岡区	高井	一間社流見世棚造、鉄板葺	近代ヵ			
162	寺河内神社	堂	村岡区	寺河内	切妻造、桟瓦葺	19世紀前期ヵ			
163	寺河内神社	本殿	村岡区	寺河内	一間社流造、板葺	宝永四年（神社誌）	1707	78	38
164	山神社	本殿	村岡区	寺河内	一間社流見世棚造、板葺	平成			
165	善性寺	本堂	村岡区	寺河内	桁行14.4メートル、梁間10.4メートル、入母屋造、鉄板葺	18世紀後期		88	39
166	善性寺	鐘楼	村岡区	寺河内	桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺	18世紀後期		89	39
167	八坂神社	本殿	村岡区	耀山	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、軒唐破風付	天保十二年（神社誌）	1842		
168	八坂神社	境内社	村岡区	耀山	一間社流造、板葺	19世紀前期			
169	林泉寺	本堂	村岡区	耀山	桟瓦葺	近代ヵ			
170	等余神社	本殿	村岡区	市原	三間社流造、柿葺	18世紀後期		57	40
171	観音堂		村岡区	市原	切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
172	妙見堂		村岡区	寺河内	一間社流見世棚造、板葺、二棟	昭和ヵ			
173	地蔵堂		村岡区	大糠	桁行三間、梁間二間、切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
174	地蔵堂		村岡区	市原	切妻造、鉄板葺	近代ヵ			
175	八幡神社	本殿	村岡区	福岡	桁行三間、梁間三間、入母屋造、向拝一間、正面千鳥破風、軒唐破風付、銅板葺	19世紀前期（神社誌）			
176	八幡神社	拝殿	村岡区	福岡	桁行五間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、割拝殿、銅板葺	19世紀中期			
177	神照寺	本堂	村岡区	福岡	入母屋造、下屋庇付、向拝一間、入母屋造、妻入、桟瓦葺	明治後期（『七美郡誌稿』）			
178	八坂神社	本殿	村岡区	八井谷	一間社流造、板葺	18世紀前期			
179	八坂神社	お堂	村岡区	八井谷	切妻造、鉄板葺	18世紀後期			
180	観音堂		村岡区	八井谷	切妻造、鉄板葺	昭和			
181	八幡神社	本殿	村岡区	大野	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	19世紀前期		52	41
182	荒神社	本殿	村岡区	大野	一間社流造、軒唐破風付、板葺	近代ヵ			
183	熊野皇神社	本殿	村岡区	口大谷	一間社流造、軒唐破風付、銅板葺	明治二十三年（棟札）	1890	49	42
184	熊野皇神社	観音堂	村岡区	口大谷	桁行三間、梁間三間、寄棟造、鉄板葺	17世紀中期、18世紀後期改造		50	42
185	熊野皇神社	籠堂	村岡区	口大谷	桁行三間、梁間二間、切妻造、鉄板葺	18世紀後期		51	42
186	八坂神社	本殿	村岡区	中大谷	一間社流造、板葺	18世紀後期		44	43
187	八坂神社	八幡・荒御霊社	村岡区	中大谷	一間社流造、板葺	18世紀中期		45	43
188	愛宕神社	本殿	村岡区	中大谷	切妻造、鉄板葺	近代ヵ			
189	山神社	本殿	村岡区	中大谷	切妻造、妻入、鉄板葺	近代ヵ			
190	大師堂		村岡区	中大谷	切妻造、鉄板葺	明治ヵ			
191	大田神社	境内社（本殿?）	村岡区	大笹	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、板葺	19世紀中期		47	45
192	大田神社	秋葉神社	村岡区	大笹	一間社流造、板葺	18世紀前期		48	45
193	大山祇神社	本殿	村岡区	大笹	桁行一間、梁間二間、切妻造、板葺	19世紀中期		46	44
194	高坂神社	本殿	村岡区	高坂	一間社流造、板葺	昭和五十九年（町資料）	1984		
195	高坂神社	お堂	村岡区	高坂	二階建、切妻造、桟瓦葺ヵ	近代ヵ			
196	日吉神社	本殿	村岡区	池ヶ平	一間社流造、軒唐破風付、板葺	近代ヵ			
197	皇大神社	本殿	村岡区	和池	一間社隅木入春日造、柿葺	18世紀中期		53	46
198	荒御霊神社	本殿	村岡区	和池	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、板葺	近代ヵ			
199	安養寺	本堂	村岡区	和池	入母屋造、向拝一間、桟瓦葺	明治四年（『七美郡誌稿』）	1871		
200	森脇神社	本殿	村岡区	森脇	一間社流造、軒唐破風付、柿葺	宝暦八年（普請見舞板・墨書）	1758	54	47
201	皇大神社	本殿	村岡区	黒田	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺	18世紀中期		55	48
202	皇大神社	境内社	村岡区	黒田	一間社流見世棚、桟瓦葺	18世紀後期			
203	地蔵堂		村岡区	黒田	切妻造、桟瓦葺	近代ヵ			
204	大師堂		村岡区	黒田	切妻造、鉄板葺	近代ヵ			

一次調査番号	寺社名	建物名	所在地		構造形式	建立年代	同西暦	二次調査番号	第二章掲載番号
205	阿弥陀堂		村岡区	黒田	切妻造、桟瓦葺	近代ヵ			
206	作田井神社	本殿	村岡区	宿	正面一間、側面二間、正面入母屋造、背面切妻造	天保七年（神社誌）	1836		
207	天満威徳神社	本殿	村岡区	日影	桁行一間、梁間一間、入母屋造ヵ、妻入、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	嘉永二年（神社誌）	1849		
208	阿弥陀堂		村岡区	日影	切妻造、鉄板葺	文政三年（『美方郡誌』）	1820		
209	八幡神社	本殿	村岡区	作山	桁行一間、梁間一間、入母屋造、向拝一間、正面千鳥破風、軒唐破風付、柿葺	文政三年（『七美郡誌稿』）	1820		
210	荒霊神社	本殿	村岡区	作山	正面一間、奥行二間、正面入母屋造、背面切妻造、板葺	明治			
211	観音堂		村岡区	宿	桁行三間、梁間二間、切妻造、鉄板葺、向拝一間、鉄板葺	17世紀中期		56	49
212	大師堂		村岡区	大野	切妻造、鉄板葺	平成			
213	稲荷神社	本殿	村岡区	中大谷	一間社流造、鉄板葺	近代ヵ			
214	大師堂		村岡区	作山	切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
215	じんだいさん		村岡区	中大谷	切妻造、流板葺、鉄板覆	19世紀前期ヵ			
216	お堂		村岡区	宿	切妻造、妻入、鉄板葺	19世紀中期			
217	大師堂		村岡区	宿	切妻造、妻入、鉄板葺	昭和			
218	入江神社	本殿	村岡区	入江	一間社流造、板葺	嘉永二年（神社誌）	1849		
219	入江神社	観音堂	村岡区	入江	入母屋造、鉄板葺	19世紀中期			
220	聖観音堂	?	村岡区	入江	宝形造、向拝一間、鉄板葺	近代			
221	皇大神社	本殿	村岡区	和田	一間社流造、柿葺	18世紀前期		58	50
222	観音堂		村岡区	和田	寄棟造、桟瓦葺	昭和ヵ			
223	若宮八幡神社	本殿	村岡区	長板	一間社流造、板葺	嘉永三年（神社誌）	1850		
224	若宮八幡神社	天満神社	村岡区	長板	一間社流造、軒唐破風付、柿葺	17世紀後期		59	51
225	大平神社	本殿	村岡区	熊波	一間社流造、柿葺	18世紀中期		86	52
226	大平神社	お堂	村岡区	熊波	正面一間、背面三間、側面三間、切妻造、妻入、鉄板葺	18世紀前期		87	52
227	大平神社	境内社	村岡区	熊波	一間社流造、柿葺	18世紀後期			
228	日枝神社	本殿	村岡区	柤岡	三間社、切妻造、向拝一間、柿葺	19世紀前期			
229	日枝神社	山神社	村岡区	柤岡	一間社流造、板葺	19世紀中期			
230	日枝神社	山神社	村岡区	柤岡	一間社流見世棚造、板葺	18世紀後期			
231	万福寺	本堂	村岡区	柤岡	宝形造、向拝一間、桟瓦葺	昭和			
232	鎧神社	本殿	村岡区	丸味	一間社流造、柿葺	18世紀後期		64	53
233	鎧神社	籠堂	村岡区	丸味	入母屋造、鉄板葺	18世紀中期			
234	松尾神社	本殿	村岡区	川会	桁行三間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、軒唐破風付、本瓦葺	大正七年（神社誌）	1918		
235	長楽寺	鐘楼	村岡区	川会	桁行一間、梁間一間、入母屋造、銅板葺	17世紀後期ヵ			
236	勢主山神社	本殿	村岡区	高津	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	寛政九年（棟札）	1797	39	55
237	千原神社	本殿	村岡区	高津	一間社流造、正面千鳥破風、軒唐破風付、板葺	19世紀中期			
238	八幡神社	本殿	村岡区	高津	三間社流造、板葺	18世紀前期		38	54
239	長須神社	本殿	村岡区	長須	一間社入母屋造、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	天保十五年（神社誌）	1844		
240	伊曾布神社	本殿	村岡区	味取	一間社入母屋造ヵ、向拝一間、軒唐破風付、柿葺	19世紀中期			
241	八幡神社	本殿	村岡区	味取	一間社流造、柿葺	18世紀後期			
242	天満神社	本殿	村岡区	原	一間社流造、銅板葺	大正九年（神社誌）	1920		
243	薬師堂		村岡区	原	桁行正面一間、桁行背面三間、梁間三間、入母屋造、茅葺（鉄板覆）、側面下屋庇付、鉄板葺	嘉永二年（棟札）	1849	41	57
244	八幡神社	本殿	村岡区	長瀬	一間社流造、柿葺	17世紀後期、明治頃大改修		42	58
245	お堂（阿弥陀堂）		村岡区	長瀬	正面三間、背面四間、側面四間、切妻造、妻入、桟瓦葺	寛政三年（棟札）	1791	43	60
246	地蔵堂		村岡区	長瀬	入母屋造、妻入、桟瓦葺	近代			
247	熊谷神社	本殿	村岡区	山田	一間社春日造、板葺	元禄十七年（鰐口銘）頃	1704	36	62
248	愛宕神社	本殿	村岡区	山田	一間社流造、軒唐破風付、柿葺	19世紀中期			
249	山ノ神	本殿	村岡区	山田	一間社流造、板葺	元文三年（釣鐘銘）頃	1738	35	61
250	観音堂		村岡区	山田	寄棟造、鉄板葺	近代ヵ			
251	辻堂		村岡区	山田	宝形造、鉄板葺	明治ヵ			
252	八坂神社	本殿	村岡区	小城	一間社流造、板葺	19世紀中期			
253	荒霊神社	本殿	村岡区	境	一間社流造、軒唐破風付、柿葺	19世紀前期			
254	八幡神社	本殿	村岡区	和佐父	一間社流造、板葺	19世紀前期			
255	弁財天	弁財天社	村岡区	味取	一間社隅木入春日造、軒唐破風付、柿葺	18世紀中期		40	56
256	八幡神社	本殿	村岡区	長瀬	一間社流見世棚造、板葺、二棟	19世紀中期ヵ			
257	観音堂		村岡区	長瀬	桁行三間、梁間三間、寄棟造、桟瓦葺	寛政五年（喚鐘銘）頃	1793	37	59
258	堂		村岡区	境	切妻造、妻入、桟瓦葺	近代			
259	堂		村岡区	小城	宝形造、鉄板葺	19世紀中期			
260	旧阿弥陀堂		村岡区	長板	切妻造、鉄板葺	昭和			
261	辻堂		村岡区	長板	切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
262	地蔵堂		村岡区	入江	切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
263	八幡神社	本殿	小代区	神場	二間社流造、板葺	享保十六年（神社誌）	1731	97	63
264	八幡神社	堂	小代区	神場	切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
265	地蔵堂		小代区	神場	桁行一間、梁間四間、切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
266	観音堂		小代区	神場	二重、正面入母屋造、背面切妻造、鉄板葺	安政四年（町資料）→取り壊し	1857		
267	荒霊神社	本殿	小代区	広井	一間社流造、柿葺	18世紀前期		76	64
268	荒霊神社	境内社	小代区	広井	正面三間、側面一間、正面入母屋造、背面切妻造、板葺	19世紀中期			
269	観音堂		小代区	広井	切妻造、鉄板葺	文久元年（神社誌）	1861		
270	辻堂		小代区	広井	切妻造、鉄板葺	昭和			
271	薬師堂		小代区	広井	切妻造、鉄板葺	近代ヵ			
272	石地蔵［寺］		小代区	広井	切妻造、鉄板葺	明治			
273	稲田中神社		小代区	水間	一間社流造、軒唐破風付、柿葺	元治元年（神社誌）	1864		

一次調査番号	寺社名	建物名	所在地		構造形式	建立年代	同西暦	二次調査番号	第二章掲載番号
274	荒霊神社	本殿	小代区	水間	一間社流造、流し板葺	文化元年（棟札）	1804	66	65
275	白髪神社	本殿	小代区	水間	一間社流造、鉄板葺	18世紀後期			
276	野間谷神社	本殿	小代区	野間谷	三間社流造、板葺	寛延四年（神社誌）	1744	93	66
277	観音堂		小代区	野間谷	切妻造、鉄板葺	明治ヵ			
278	荒御霊神社	本殿	小代区	実山		寛政四年ヵ（神社誌）→近代	1792		
279	荒御霊神社	境内社	小代区	実山	一間社流造、鉄板葺	18世紀後期			
280	阿弥陀堂		小代区	実山	桁行正面一間、背面三間、側面三間、切妻造、背面下屋庇付、鉄板葺	19世紀前期		82	67
281	熊野神社	本殿	小代区	平野	一間社流造、軒唐破風付、板葺	天保十五年（神社誌）	1844		
282	阿弥陀堂		小代区	平野	宝形造、鉄板葺誌	昭和			
283	光明寺	本堂	小代区	平野	桁行18.0メートル、梁間12.0メートル、入母屋造、向拝一間、銅板葺	天保十三年（寺蔵記録）	1842	79	68
284	光明寺	山門	小代区	平野	桁行一間、梁間二間、二重、入母屋造、銅板葺	19世紀中期		81	68
285	光明寺	弥勒堂	小代区	平野	正面三間、側面二間、入母屋造、妻入、向拝一間、桟瓦葺	19世紀中期		80	68
286	荒霊神社	本殿	小代区	茅野	一間社流造、軒唐破風付、板葺	天保四年（神社誌）	1833		
287	薬師堂		小代区	茅野	切妻造、鉄板葺	近代ヵ			
288	熱田神社	本殿	小代区	新屋	一間社流造、正面千鳥破風、軒唐破風付、板葺	明治二十四年（神社誌）	1891		
289	下宮神社	本殿	小代区	新屋	一間社流造、板葺	明治ヵ			
290	大日堂		小代区	新屋	桁行一間、梁間三間、宝形造、鉄板葺	明治			
291	小代神社	外宮（左社殿）	小代区	秋岡	一間社流造、正面千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺	18世紀後期		95	69
292	小代神社	内宮（右社殿）	小代区	秋岡	一間社流造、正面千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺	18世紀後期		94	69
293	小代神社	観音堂	小代区	秋岡	桁行三間、梁間三間、切妻造、鉄板葺	宝暦三年（棟札）	1753	96	69
294	龍泉寺	本堂	小代区	秋岡	入母屋造、向拝一間、銅板葺	天保十四年（『美方町史』）	1844		
295	龍泉寺	庫裏	小代区	秋岡	切妻造、鉄板葺	近代			
296	阿弥陀堂		小代区	秋岡	桁行一間、梁間三間、入母屋造、鉄板葺	19世紀中期			
297	地蔵堂		小代区	秋岡	桁行一間、梁間二間、切妻造、鉄板葺	明治ヵ			
298	庚申堂		小代区	秋岡	切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
299	荒霊社	本殿	小代区	東垣	一間社切妻造、鉄板葺	享和四年（『美方町史』）	1804		
300	大日堂		小代区	東垣	正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、背面下屋付、鉄板葺	寛政八年(棟札)	1796	75	70
301	大山祇神社	本殿	小代区	久須部	一間社切妻造、鉄板葺	明治三年（棟札）	1870		
302	荒霊神社	本殿	小代区	佐坊	一間社流見世棚造、板葺	明治三十九年（『美方町史』）	1906		
303	阿弥陀堂		小代区	佐坊	二階建、切妻造、妻入、鉄板葺	寛政元年、昭和四十四年改修（『美方町史』）	1789		
304	吉滝神社	本殿	小代区	鍛治屋	正面一間、奥行二間、正面入母屋造、背面切妻造、正面軒唐破風付、柿葺	天明二年（棟札）	1782	92	71
305	荒霊社	本殿	小代区	鍛治屋	一間社、板葺	近代ヵ			
306	八幡神社	本殿	小代区	貫田	一間社春日造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺	文化十二年（棟札）	1815	67	72
307	八幡神社	稲荷社	小代区	貫田	正面一間、側面二間、正面入母屋造、背面切妻造、正面軒唐破風付、板葺	寛政七年（棟札）	1795	68	72
308	八幡神社	薬師堂	小代区	貫田	正面一間、背面四間、側面三間、宝形造、鉄板葺	19世紀中期		69	72
309	多他神社	本殿	小代区	忠宮	三間社流造、軒唐破風付、柿葺	元文三年（神社誌）	1767	70	73
310	多他神社	拝殿	小代区	忠宮	桁行三間、梁間二間、入母屋造、向拝一間、鉄板葺	19世紀中期			
311	多他神社	観音堂	小代区	忠宮	桁行一間、梁間三間、入母屋造、鉄板葺	明治			
312	大山祇神社	境内社（右社殿）	小代区	久須部	一間社流造、鉄板葺	18世紀前期		91	74
313	籠堂		小代区	久須部	切妻造、鉄板葺	近代ヵ			
314	極楽寺	鐘楼	小代区	大谷	桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺	19世紀中期			
315	観音堂		小代区	大谷	桁行一間、梁間四間、宝形造、鉄板葺	明治十四年（『美方町史』）	1881		
316	大師堂		小代区	大谷	桁行一間、梁間一間、入母屋造、土蔵造、向拝一間、鉄板葺	大正六年（『美方町史』）	1917	83	75
317	地蔵堂		小代区	大谷	桁行一間、切妻造、桟瓦葺	近代			
318	薬師堂		小代区	大谷	切妻造、鉄板葺	昭和五十四年（説明板）	1979		
319	安明神社	本殿	小代区	城山	桁行三間、梁間二間、入母屋造、正面千鳥破風、軒唐破風付、銅板葺	明治十年（神社誌）	1877		
320	大師堂		小代区	城山	切妻造、鉄板葺	明治			
321	稲荷神社	本殿	小代区	城山	一間社流造、鉄板葺	19世紀前期			
322	念願寺	本堂	小代区	城山	入母屋造、向拝一間、鉄板葺	昭和四年（『美方町史』）	1929		
323	白山神社	本殿	小代区	神水	三間社流造、正面千鳥破風付、軒唐破風付、板葺	明治三十三年（棟札）	1900	85	77
324	住吉神社	本殿	小代区	神水	一間社流造、軒唐破風付、板葺	明治			
325	観音堂		小代区	神水	正面一間、背面三間、側面四間、宝形造、銅板葺、三方庇付、背面下屋付、鉄板葺	宝暦十三年（棟札）	1763	84	76
326	地蔵堂		小代区	神水	切妻造、鉄板葺				
327	恵比寿神社		小代区	神水	一間社流造、軒唐破風付、板葺	18世紀後期			
328	荒霊神社	本殿	小代区	石寺	一間社流造、柿葺	天明五年（棟札）	1785	77	78
329	観音堂		小代区	石寺	桁行一間、梁間三間、宝形造、鉄板葺	明治二十七年（『美方町史』）	1894		
330	地蔵堂		小代区	石寺	桁行一間、梁間三間、切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
331	荒霊神社	本殿	小代区	猪之谷	一間社流造、板葺				
332	観音堂		小代区	猪之谷	桁行一間、背面三間、梁間三間、切妻造、鉄板葺	宝暦八年（扁額）	1758	98	79
333	地蔵堂		小代区	猪之谷	桁行一間、切妻造、鉄板葺	昭和十五年（『美方町史』）	1940		
334	熱田神社	本殿	小代区	熱田	一間社流造、鉄板葺	文化十三年（『美方町史』）	1816		
335	観音堂		小代区	熱田	桁行一間、梁間三間、宝形造、鉄板葺	天保九年（『美方町史』）	1838		
336	稲荷神社	本殿	小代区	大谷	一間社流造	近代ヵ	2014		
337	地蔵堂		小代区	秋岡	桁行一間、梁間二間、切妻造、鉄板葺	明治ヵ			
338	地蔵堂		小代区	城山	桁行一間、梁間一間、切妻造、鉄板葺	19世紀中期			
339	天王社	本殿	小代区	神水	一間社流造、軒唐破風付、板葺	19世紀中期			

表の建立年代の欄の（ ）は根拠となる資料であり、「神社誌」は『兵庫県神社誌』（兵庫県神職会　昭和十三年）、（県資料）は昭和53・54年度に実施された兵庫県近世社寺建築緊急調査の資料、（町資料）は香美町教育委員会が蒐集した資料である。

第二章　主要な寺社建築

1　二次調査の成果

二次調査は、一次調査の対象から、建立年代・建築様式・保存状態等を考慮して詳細な調査を行うべき建物を選び、実測・復原調査・史料調査などを行うものである。香美町では、構造形式・意匠など独特な特徴を持つ建物が多く、調査対象は79寺社の99棟にのぼった。その一覧は表7・図5（15～17頁）に示すとおりである。本章ではそれらの特徴について詳述する。第一章と内容的に重複する部分があるが、選択した遺構についての詳細な調査成果を踏まえた内容である。

⑴　全体的傾向

寺社の区分と建立時期　神社建築は60棟、寺院建築は19棟、村堂・籠堂は20棟である。

建立年代は表8に示すとおりで、一次調査の傾向とよく合致する。ただし19世紀以降の建立の建物、すなわち幕末以降の建物を二次調査対象に選択するのは、格段の特色を持つものに限られるので、その比率は一次調査に比べて少ない。この中で、18世紀の遺構に質のよい個性豊かな建物が多い事は注目してよい。

表8　二次調査建物　建立年代別棟数

世紀	棟数
15・16世紀	3
17世紀前期	0
17世紀中期	2
17世紀後期	6
18世紀前期	21
18世紀中期	23
18世紀後期	19
19世紀前期	6
19世紀中期	14
19世紀後期	3
20世紀前期	2
計	99

表9　二次調査寺院　建築形式別棟数

形式	棟数
真宗本堂	1
方丈形式本堂	5
本堂（上記二形式以外）	6
庫裏・客殿（方丈形式）	1
門	4
鐘楼	2
村堂・籠堂	20
計	39

表10　二次調査神社本殿形式別棟数

形式	棟数	千鳥破風・軒唐破風
一間社流造	33	千鳥破風付　8
		軒唐破風付　12
二間社流造	2	
三間社流造	7	千鳥破風付　2
		軒唐破風付　3
一間社隅木入春日造	4	
入母屋造	10	千鳥破風・軒唐破風付　9
切妻造	1	
特殊	3	
計	60	

寺院建築　寺院仏堂では、真宗本堂は1棟しか調査対象とならなかった。方丈形式本堂は、宗派は真言・天台・日蓮・曹洞の各宗派にわたるが5棟で、別に方丈形式の客殿が1棟あるので、計6棟となる（表9）。一般の五間堂・三間堂等の仏堂は6棟あり、五間堂は帝釈寺本堂1棟で、他は三間堂である。

鐘楼は2棟で、共に方一間のごく一般的な形式である。門は4棟で、八脚門が2棟、残る2棟はともに一間の二重門である。

神社建築　神社建築は本殿と境内社であり、いずれも神社本殿と言ってよい。その形式別の棟数を示すと、表10の通りとなる。一間社流造が約半数と圧倒的に多い。入母屋造が10棟と比較的多いのも注目される。春日造は4棟ある。形式を問わず、屋根に千鳥破風や軒唐破風を付けるものが多い。

これらの社殿は比較的規模が小さいものが多い。一間社流造と三間社流造の規模を示すと、図3・4のようになる。一間社流造では桁行が1メートル前後の遺構が圧倒的に多い。滋賀県近世社寺建築緊急調査の成果と比較すると、滋賀県では1.8メートル前後が多いと指摘されており[3]、現在調査中の丹波市では1.5メート

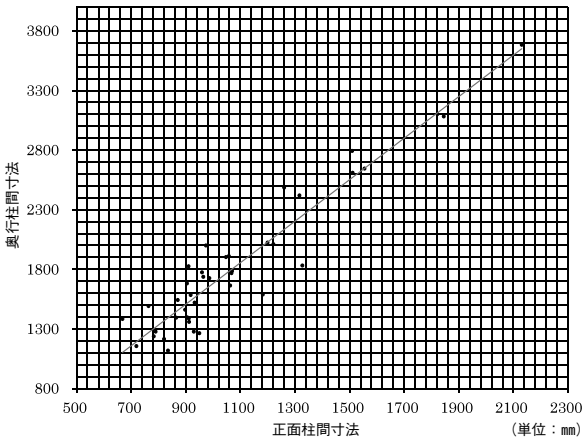


図3　香美町の一間社流造本殿の規模

3　『滋賀県の近世社寺建築』（滋賀県教育委員会　昭和六十一年）

ル前後が多い。最大規模のものを比較すると、滋賀県では桁行3メートル、香美町では2.1メートルである。このように香美町の遺構の規模が小さいことは明らかであろう。

三間社流造も、滋賀県では桁行が2.6～7.6メートルであるが、香美町では1.8～3.6メートルとなり、一間社流造と同じ傾向が見られる。

しかし規模が小さいのに反して、香美町の社殿は装飾が豊富な建物が多い。施主の村人の側から見れば、規模に経費をかけるのか、装飾に経費をかけるのか、地域による差があるのであろう。

「堂」「堂」と分類したものは、神社の境内に立つ建物もあり、村の辻に立つものもあり、その性格も形式も様々である。仏堂と区分するのが適切とは言い難い建物も含まれるが、とりあえずこのように分類した。20棟あり多様な形式を持つ。

⑵　香美町の寺社建築の特色

方丈形式　まず寺院建築は、建築類型ごとの棟数が少ないので特色を述べ難い。その中で6棟調査した方丈形式は、どこの地域でも多く見られる本堂形式であり、香美町内でも特段の特色は挙げられないが、31法雲寺が仏間正面を一間前へ張り出す形式は珍しい。しかしなんと言っても、5大乗寺客殿及び庫裏が圧倒的な規模と質を誇り、単純な六室構成ではなく、左手に上段まで設けた特異な平面構成である点で突出している。加えて襖絵・壁画が応挙一門の作で重要文化財に指定されている。こうした特質を評価されて、県指定文化財に指定されている。

五間堂・三間堂　6帝釈寺本堂が中世後期（16世紀）の部材を多く残している五間堂として貴重である。21遍照寺観音堂は虹梁を多用した架構が見所の上質の三間堂である。5大乗寺観音堂もこれに類する遺構であるが、部材の取替が多いのが惜しまれる。

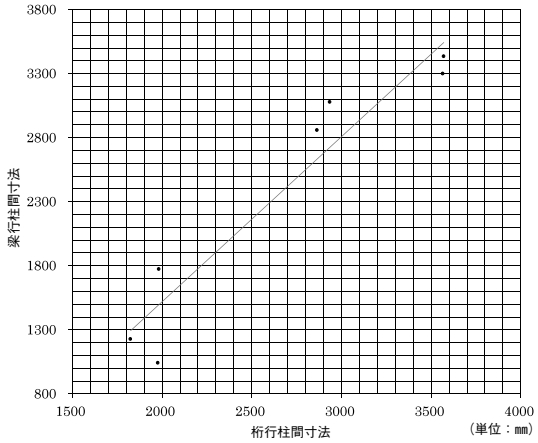


図4　香美町の三間社流造本殿の規模

神社本殿の全般的特色　神社建築は、総じて規模が小さいにもかかわらず、装飾豊かな遺構が多い。屋根に千鳥破風・軒唐破風を付けること、頭貫木鼻を正面・側面の両方向に付けること、妻飾に大きな蟇股を置くこと、三手先以上の複雑な組物を使用すること、支輪・壁・妻飾などに雲や流水文を一面に彫ったり、壁に植物・動物を浮彫にすることなど、類例が皆無とは言えないまでも、多様で珍しい手法を用いている。正面の虹梁形頭貫を蕨火燈形に反り上がらせた手法も極めて特異なものである。さらに円柱と角柱を用いながら一般的な流造とは全く異なる屋根形式を架けた社殿もまた独特の遺構として挙げられる。また、扇垂木を用いる社殿では打越垂木との整合性をとるための多様な形式が見られるのも注目してよい。

これらの特異な遺構は、おそらくは香美町内やその周辺、美方郡・城崎郡辺りの大工の様々な創意・工夫から生まれた装飾性と見ることが妥当であろう。以下に特徴的な形式のいくつかについて、その代表的遺構と共に述べておく。

千鳥破風・軒唐破風付　屋根に千鳥破風・軒唐破風を付けることは一般にも行われることであるが、神社本殿の半数以上に付くのはこの地域の特質であろう。

軒唐破風を正面の柱筋から前のみ輪垂木とするのが通常の形式であるのに対して、一間後方の本体の柱筋まで菖蒲桁・輪垂木を引き込む形式は注目される。12兵主神社本殿・27八柱神社本殿の2棟でのみ見られる。

24白山神社本殿は、菖蒲桁の下に長い持送りの実肘木を付け、両者一体の絵様を施すのが珍しく、手挟も独特の形状をとる個性的作例である。

三手以上の複雑な組物　身舎または本体に三手先以上の複雑な組物を用いる例は5棟ある。7八幡神社本殿の四手先はもっとも複雑な例で、41八幡神社本殿は三手先を組んで、打越垂木に強い照りむくりを付けるのが特異である。51若宮八幡神社本殿は三手先を組み、庇もそれに合わせて連三斗を三段に組み、組物の量塊感が見る者を圧倒する。55勢主山神社本殿は本体の三手先に加えて、腰組も三手先になる。

蕨火燈形の頭貫　流造正面の角柱の虹梁形頭貫を蕨手状に中央で反り上がらせる形式が三例見られる。47森脇神社本殿が規模も大きく上質で、他に56弁財天社・48皇大神社と併せて三例がこれに該当する。地理的には56弁財天社のみやや離れた位置にある。

重要文化財指定建造物では、大野老松天満社旧本殿（大分　長享二年＝1488）・方広寺七尊菩薩堂（静岡　室町中期）・田嶋神社本殿（佐賀　室町前期）が類似しており、中世以来の手法と考えられる。また佐賀県下には近世の類例も少なくない[4]。滋賀県では塩津神社本殿（県指定文化財　元禄七年＝1694）に見られる。しかし香美町の例は蕨火燈の形状が複雑で華やかである。

身舎円柱・庇角柱で流造としない特殊形式　この特殊形式の本殿は、平面を見ると、円柱の身舎の前に角柱の庇を設けている。軸部も円柱は長押や台輪で固め、身舎と庇を繋虹梁で繋ぐので、流造もしくは春日造に見える。しかし、身舎・庇の柱を同高にして、全体に入母屋造もしくは切妻造の屋根を架けている。屋根は流造にも春日造にもならない。従って身舎・庇と表現することも適当でないことになる。

32黒野神社本殿は三間社で入母屋造平入の規模の大きい社殿で、組物も三手先を用いる壮麗な社殿である。71吉滝神社本殿・72八幡神社稲荷社は一間社で、入母屋造妻入の屋根を架けるが、背面は切妻造である。この二棟は大工も同一系統と見られる。25八坂神社本殿は切妻造妻入で、庇と身舎正面二カ所の妻飾は、独特の意匠の蟇股と大瓶束笈形で出色である。44大山祇神社本殿はこれらとは異なり、身舎前面の柱筋に棟を置いて、切妻造平入とする。この類例は丹波市藤代神社境内社（寛文八年＝1668）がある。

25八坂神社本殿に類似する遺構として、出雲大社摂社門神社及びいくつかの境外社、加西市下満願寺町の大歳神社本殿（18世紀後期）・八幡神社本殿（嘉永六年＝1853）がある。ただし加西の例は身舎も角柱である。出雲の例は大社の独自性、加西の例は住吉造に類似した本殿を持つ住吉神社（同市北条町）からの影響が想定される。しかし香美町の場合は、近隣の神社からの直接的な影響を想定することはできない。多様な建築形式についての知識を獲得した大工が考案したものと見ておきたい。

扇垂木の使用　神社本殿に扇垂木を使用する例は五例ある。32黒野神社本殿は向拝がないので特段の問題はない。しかし向拝または庇がある場合に扇垂木を用いると、本体と向拝、あるいは身舎と庇の軒の関係が問題となる。特に打越垂木を扇垂木とすると、向拝の先端での垂木間隔が開きすぎるおそれがあり、縋破風に垂木が当たることにもなる。従って打越垂木は平行とせざるをえず、本体・身舎の垂木のどこかで平行垂木に変更せねばならない。この解決のために、正面の垂木は地垂木・飛檐垂木ともに平行垂木として、残りの面を扇垂木にする方法と、正面の飛檐垂木のみを平行垂木とする方法がある。前者は9兵主神社・17国主神社、後者は15八柱神社と27八柱神社の本殿で採用されている。比較すると興味深い。なお類例として香川県まんのう町の川上神社本殿（天保十年＝1839）があり、ここでは本体地垂木は板軒で飛檐垂木を扇垂木とし、正面側だけは飛檐・打越垂木を平行垂木としている。この類例は香川県内でも散見される[5]。

その他の特徴的な要素　寺社建築では通常、組物を組んで桁を受けるが、8伊勢神社本殿は極めて特異で、腕木と隅木で軒桁を受けて、その上に板軒を載せる極めて特異な形式を用いる。

こうした創意工夫は、どの地域でも見られるものかもしれないが、筆者の調査した範囲で言えば、やはり香美町域の神社本殿の、ということはそれを作った大工、作る事を要請した村人達の意識と創意に他ならないと考える。

個別の技法は、個々の建物によって異なるので、18頁以降に二次調査対象建物のそれぞれの建築形式や特質を記述する。それを参照されたい。兵庫県下の播磨・丹波地域に比しても、一つ一つの建物の独自性が濃厚であることは間違いない。現在調査中の丹波市域の神社本殿の個性も顕著であり、それは別途取りまとめる予定であるが、それに勝るとも劣らない特質を持つのが香美町内の神社本殿と言える。

「堂」「堂」と区分した建物は表11に示すとおりであ

4 『佐賀県の近世社寺建築』（佐賀県教育委員会　昭和六十年）

5 山岸常人「建築様式分析―川上神社本殿―」（『仏教美術論集Ⅰ　様式論』竹林舎　平成二十四年）

る。それらの規模は、17棟が間口三間である。実際は正面の柱を省略することが多く、正面から見ると一間であり、背面には中央に柱が立って四間となっている場合もあるが、凡その目安は三間規模で統一されている。ただし残る3棟はこれらとは異なる。75大師堂は元の奉安殿であり、13不動尊は懸造の特殊な仏堂である。18芝居堂は芝居が主目的で建てられたようで、規模も他より大きい。

17棟について見ると、屋根形式は多様である。これは屋根形式が変更されているためで、古くは多くが茅葺であったようである。

これらは神社境内に立地するものが多いが、一方で村の辻に独立して立つ11地蔵堂のような例も見られる。ただし村の辻に独立する堂も、隣接して恵比寿社や三宝荒神社が立つ70大日堂・76観音堂のような例もあり、これらの堂と神社の繋がりの歴史的な関係は容易に把握しがたい。

また成立過程についても、76観音堂・57薬師堂のように中世の寺院の廃絶を承けて、その古仏を祀ったとされる堂がある。これらは中世寺院を維持する僧団が消滅した後に村の手で継承された事を示す。一方で、そのような伝承や記録がなく、中世以来の村堂の系譜を引くと推定される堂もある。

さらに機能面では、多くは村人が参籠するための施設であるか、過去にそうであった。それは大半の建物に囲炉裏が設けられ、堂内も多くは黒く煤けている事で知られる。一方、11地蔵堂のように葬送の道具を保管する堂も散見され、村の多様な宗教行事の一端を担っていたことも判明する。

18沖野神社芝居堂のように主に芝居の上演に対応した堂もみられる。沖野神社芝居堂は近代に入ってからの建立で、謡の座や楽屋も完備して作られている。近世の建物でも、57薬師堂・72八幡神社薬師堂は伝承や墨書から歌舞伎・芝居の場として使われたことが知られるが、そのために専用の部屋や施設は設けられてはない。

「堂」は、村の中での多様な宗教活動に対応する場として維持されてきた。しかし42熊野皇神社観音堂と籠堂のように、古くは観音堂で複数の機能をまかなっていたものが、ある時に籠堂を建てて、籠もりの機能をそちらに移し、両者間で機能を分化させたという例もある。この点は第三章を参照されたい。

以下に二次調査建物の各個解説を記す。掲載した平面図は規模に応じて1/200・1/150・1/100・1/50のいずれかの縮尺とした。

表11　二次調査対象の「堂」一覧

番号	寺社名	建物名	建立年代	構造形式			厨子		囲炉裏**	内外陣の区分***	立地
				規模★	三方柱間★★	屋根形式	無*	有			
49	観音堂		17世紀中期	三間		切妻造		背面寄り	○		
42	熊野皇神社	観音堂	17世紀中期、18世紀後期改造	三間		寄棟造		背面寄り	○	○	神社境内
37	薬師堂		享保十二年、寛政十一年改造	三間		宝形造		背面寄り	（元有ったヵ）		神社境内
52	大平神社	お堂	18世紀前期	三間		切妻造・妻入		背面寄り	○		神社境内
35	大糠神社	観音堂	18世紀前期	三間		寄棟造		背面寄り	○		神社境内
11	地蔵堂		18世紀前期、19世紀前期改造	三間	開放	宝形造		背面寄り			
69	小代神社	観音堂	宝暦三年	三間		切妻造		背面寄り	○		神社境内
79	観音堂		宝暦八年	三間		切妻造		背面寄り	○		神社隣接
76	観音堂		宝暦十三年	三間	開放	宝形造		背面寄り	○		神社隣接
60	お堂		寛政三年	三間		切妻造・妻入		背面寄り			神社隣接
59	観音堂		寛政五年頃（厨子のみ古い）	三間		寄棟造		背面寄り			
70	大日堂		寛政八年	三間		宝形造		背面寄り	○	○	神社隣接
42	熊野皇神社	籠堂	18世紀後期	三間		切妻造	○		○		神社境内
67	阿弥陀堂		19世紀前期	三間		切妻造		背面寄り	○		神社境内
72	八幡神社	薬師堂	19世紀中期	三間	開放	宝形造		背面寄り	○	○（一時期）	神社境内
22	薬師堂		19世紀中期、明治四十四年修理	三間	外陣開放	入母屋造・妻入		背面寄り	○	○	
57	薬師堂		嘉永二年	三間		入母屋造・茅葺		背面寄り			
13	不動尊		18世紀中期	一間		宝形造		背面寄り			
18	沖野神社	芝居堂	明治二十九年	舞台		切妻造	○				神社境内
75	大師堂		大正六年（当初は奉安殿）	一間		入母屋造		背面寄り			神社境内

★　背面の柱間数で示す
★★復原した場合
*　該当に○
**　有は○、有ったことが推定されるものも含む
***　有は○

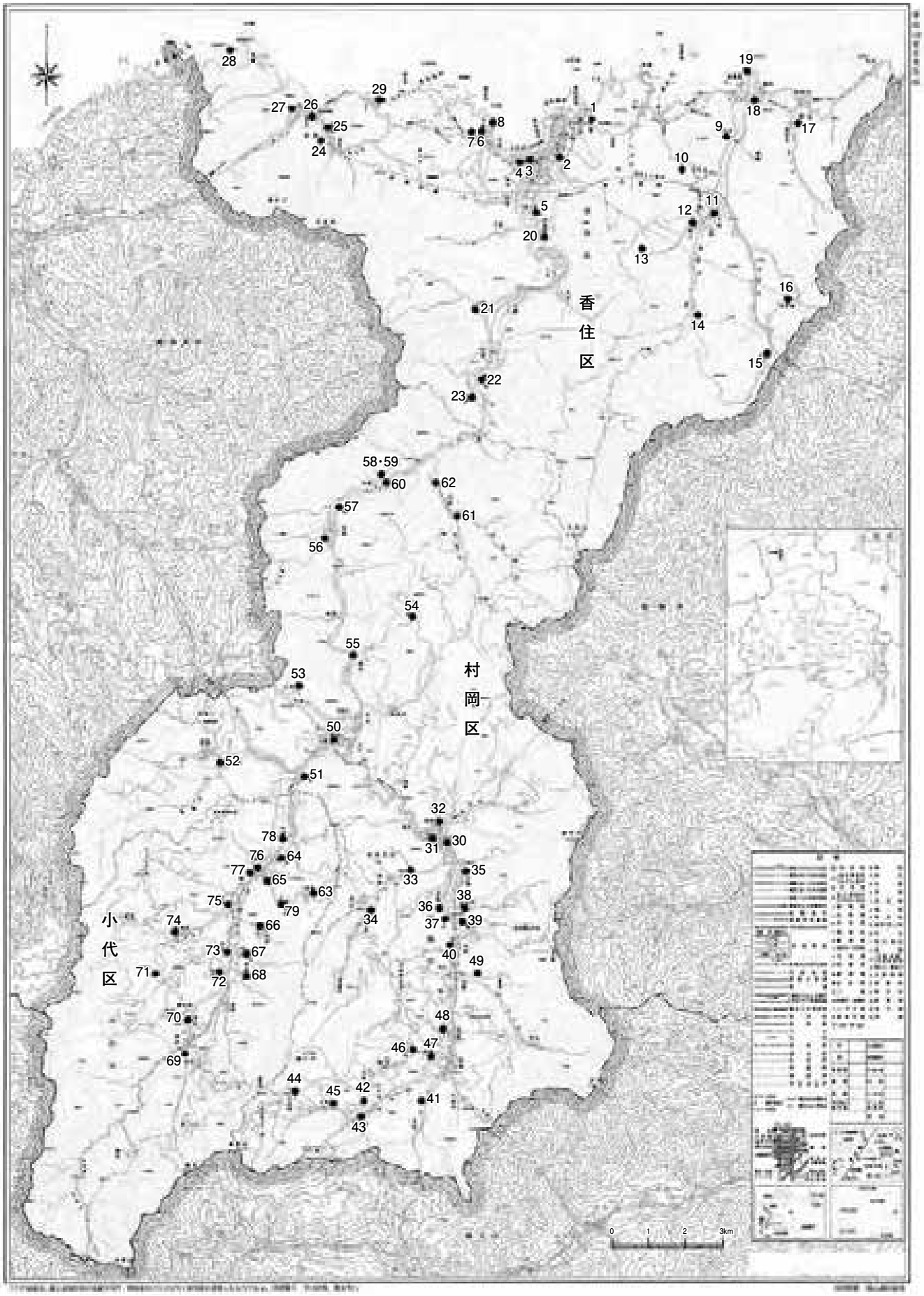


図5　二次調査寺社位置図（数字は表7の番号）

表7　二次調査建物一覧

番号	寺社名	建物名	宗派	所在地		建立年代	同西暦	構造形式
1	米粉神社	本殿		香住区	境	寛政九年（板札）	1797	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、板葺
2	通玄寺	山門	臨済宗南禅寺派	香住区	香住	19世紀中期		桁行一間、梁間一間、二重入母屋造、妻入、桟瓦葺
		薬師堂				元禄六年（寺伝）	1693	正面三間、側面三間、宝形造、桟瓦葺、背面下屋庇付、銅板葺
3	本誓寺	本堂	浄土真宗本願寺派	香住区	西香住	安政二年（鬼瓦銘）	1855	桁行13.3メートル、梁間12.7メートル、入母屋造、向拝一間、側・背面軒下張出付、桟瓦葺
4	天滿神社	本殿		香住区	七日市	文化六年（木札）	1809	三間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、銅板葺
5	大乗寺	山門	高野山真言宗	香住区	森	安政二年（「歴代記」）	1855	桁行三間、梁間二間、八脚門、入母屋造、桟瓦葺
		客殿・庫裏				寛政六年（棟札）	1796	桁行33.0メートル、梁間18.9メートル、入母屋造、銅板葺、背面軒下張出付、背面下屋庇付、式台玄関、正面一間、奥行二間、向唐破風造、銅板葺
		観音堂				正徳二年（棟札）	1712	正面三間、側面五間、宝形造、背面軒下張出付、向拝一間、銅板葺
6	帝釈寺	本堂	高野山真言宗	香住区	下浜	16世紀中期、明治前期大改造		正面五間、側面五間、宝形造、桟瓦葺
		持仏堂				18世紀中期		桁行13.5メートル、梁間9.0メートル、入母屋造、桟瓦葺
7	八幡神社	本殿		香住区	下浜	18世紀後期		桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺
8	伊勢神社	本殿		香住区	下浜	天和四年（御正体板）	1684	一間社隅木入春日造、板葺
9	兵主神社	本殿		香住区	九斗	安永四年（棟札写）	1775	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、板葺
10	多田神社	本殿		香住区	丹生地	天明六年（棟札）	1786	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺
11	地蔵堂			香住区	下岡	18世紀前期		正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、桟瓦葺
12	兵主神社	本殿		香住区	隼人	享保十二年（『兵庫県神社誌』）	1727	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺
13	不動尊	不動尊		香住区	隼人	18世紀中期		正面一間、側面二間、宝形造、銅板葺
14	八柱神社	本殿		香住区	畑	享保十四年（板札）	1729	一間社流造、板葺
15	八柱神社	本殿		香住区	土生	19世紀中期		一間社隅木入春日造、軒唐破風付、板葺
16	大倉神社	本殿		香住区	本見塚	享保十四年（棟札）	1729	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、板葺
17	国主神社	本殿		香住区	奥安木	天保三年（『兵庫県神社誌』）	1832	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺
18	沖野神社	芝居堂		香住区	訓谷	明治二十九年（墨書）	1896	桁行8.9メートル、梁間7.9メートル、切妻造、桟瓦葺、両側面下屋庇付、桟瓦葺
19	八幡神社	本殿		香住区	無南垣	享保四年（棟札・墨書）	1719	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺
20	八阪神社	本殿		香住区	加鹿野	18世紀後期		一間社流造、軒唐破風付、板葺
21	遍照寺	観音堂	高野山真言宗	香住区	小原	享保二十一年（棟札）	1736	正面三間、側面四間、宝形造、鉄板葺
		大師堂				19世紀中期		正面三間、側面三間、宝形造、向拝一間、鉄板葺
		鐘楼				宝永八年（棟札）	1711	桁行一間、梁間一間、入母屋造、桟瓦葺
22	薬師堂			香住区	藤	19世紀中期		正面一間、背面三間、側面五間、入母屋造、妻入、桟瓦葺
23	三柱神社	本殿		香住区	八原	18世紀後期		一間社流造、板葺
24	白山神社	本殿		香住区	市午	宝暦五年（棟札）	1755	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺
25	八坂神社	本殿		香住区	梶原	元禄七年（棟札）	1694	桁行二間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺
26	長福寺	山門	曹洞宗	香住区	浜	大正十五年（彫刻刻銘）	1926	桁行三間、梁間二間、入母屋造、桟瓦葺
27	八柱神社	本殿		香住区	西	19世紀前期		桁行一間、梁間一間、入母屋造、正面千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺
28	美伊神社	本殿		香住区	御崎	18世紀中期		一間社流造、柿葺
29	十二社神社	本殿		香住区	鎧	延宝四年（棟札）	1676	一間社流造、柿葺
		大放神社				16世紀後期、18世紀改造		一間社流造、流板葺
30	大運寺	本堂	日蓮宗	村岡区	東上	明和二年（寺蔵記録）	1765	桁行22.3メートル、梁間9.3メートル、入母屋造、桟瓦葺、向拝一間、桟瓦葺
31	法雲寺	本堂	天台宗	村岡区	本町	天保十五年（『七美郡誌稿』）	1844	桁行23.2メートル、梁間12.3メートル、入母屋造、向拝一間、桟瓦葺
32	黒野神社	本殿		村岡区	川上	明和二年(棟札)	1765	桁行三間、梁間三間、入母屋造、千鳥破風付、軒唐破風付、銅板葺
33	相田神社	旧本殿（左境内社）		村岡区	相田	18世紀後期		一間社流造、板葺
34	郡主神社	本殿		村岡区	板仕野	応永十五年（『兵庫県神社誌』）	1408	三間社流造、板葺
35	大糠神社	本殿		村岡区	大糠	18世紀前期		一間社流造、柿葺
		観音堂				18世紀前期		桁行三間、梁間三間、寄棟造、桟瓦葺
36	高井神社	本殿		村岡区	高井	享保元年（棟札写）	1716	二間社流造、板葺
37	薬師堂			村岡区	高井	享保十二年（棟札）	1727	正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、桟瓦葺
38	寺河内神社	本殿		村岡区	寺河内	宝永四年（『兵庫県神社誌』）	1707	一間社流造、板葺
39	善性寺	本堂	高野山真言宗	村岡区	寺河内	18世紀後期		桁行14.4メートル、梁間10.4メートル、入母屋造、鉄板葺
		鐘楼				18世紀後期		桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺
40	等余神社	本殿		村岡区	市原	18世紀後期		三間社流造、柿葺

番号	寺社名	建物名	宗派	所在地		建立年代	同西暦	構造形式
41	八幡神社	本殿		村岡区	大野	19世紀前期		桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺
42	熊野皇神社	本殿		村岡区	口大谷	明治二十三年（棟札）	1890	一間社流造、軒唐破風付、銅板葺
		観音堂				17世紀中期		桁行三間、梁間三間、寄棟造、鉄板葺
		籠堂				18世紀後期		桁行三間、梁間二間、切妻造、鉄板葺
43	八坂神社	本殿		村岡区	中大谷	18世紀後期		一間社流造、板葺
		八幡・荒御霊社				18世紀中期		一間社流造、板葺
44	大山祇神社	本殿		村岡区	大笹	19世紀中期		桁行一間、梁間二間、切妻造、板葺
45	大田神社	本殿		村岡区	大笹	19世紀中期		桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、板葺
		秋葉神社				18世紀前期		一間社流造、板葺
46	皇大神社	本殿		村岡区	和池	18世紀中期		一間社隅木入春日造、柿葺
47	森脇神社	本殿		村岡区	森脇	宝暦八年（普請見舞板・墨書）	1758	一間社流造、軒唐破風付、柿葺
48	皇大神社	本殿		村岡区	黒田	元文三年（『兵庫県神社誌』）	1738	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺
49	観音堂			村岡区	宿	17世紀中期		桁行三間、梁間二間、切妻造、鉄板葺、向拝一間、鉄板葺
50	皇大神社	本殿		村岡区	和田	宝永四年（『兵庫県神社誌』）	1707	一間社流造、柿葺
51	若宮八幡神社	天満神社		村岡区	長板	17世紀後期		一間社流造、軒唐破風付、柿葺
52	大平神社	本殿		村岡区	熊波	18世紀中期		一間社流造、板葺
		お堂				18世紀前期		正面一間、背面三間、側面三間、切妻造、妻入、鉄板葺
53	鎧神社	本殿		村岡区	丸味	18世紀後期		一間社流造、柿葺
54	八幡神社	本殿		村岡区	高津	18世紀前期		三間社流造、板葺
55	勢主山神社	本殿		村岡区	高津	寛政九年（棟札）	1797	桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺
56	弁財天	弁財天社		村岡区	味取	18世紀中期		一間社隅木入春日造、軒唐破風付、柿葺
57	薬師堂			村岡区	原	嘉永二年（棟札）	1849	桁行正面一間、背面三間、梁間三間、入母屋造、茅葺（鉄板覆）、側面下屋庇付、鉄板葺
58	八幡神社	本殿		村岡区	長瀬	17世紀後期		一間社流造、柿葺
59	観音堂			村岡区	長瀬	寛政五年（喚鐘銘）頃	1793	桁行三間、梁間三間、寄棟造、桟瓦葺
60	お堂（阿弥陀堂）			村岡区	長瀬	寛政三年（棟札）	1791	正面三間、背面四間、側面四間、切妻造、妻入、桟瓦葺
61	山ノ神	本殿		村岡区	山田	元文三年（釣鐘銘）頃	1738	一間社流造、板葺
62	熊谷神社	本殿		村岡区	山田	元禄十七年（鰐口銘）頃	1704	一間社流造、板葺
63	八幡神社	本殿		小代区	神場	享保十六年（『兵庫県神社誌』）	1731	二間社流造、板葺
64	荒霊神社	本殿		小代区	広井	18世紀前期		一間社流造、柿葺
65	荒霊神社	本殿		小代区	水間	文化元年（棟札）	1804	一間社流造、板葺
66	野間谷神社	本殿		小代区	野間谷	寛延四年（『兵庫県神社誌』）	1744	三間社流造、板葺
67	阿弥陀堂			小代区	実山	19世紀前期		桁行正面一間、背面三間、梁間三間、切妻造、背面下屋庇付、鉄板葺
68	光明寺	山門	高野山真言宗	小代区	平野	19世紀中期		桁行一間、梁間二間、二重門、入母屋造、銅板葺
		本堂				天保十三年（寺蔵記録）	1842	桁行18.0メートル、梁間12.0メートル、入母屋造、向拝一間、銅板葺
		弥勒堂				19世紀中期		正面三間、側面二間、入母屋造、妻入、向拝一間、桟瓦葺
69	小代神社	外宮（左社殿）		小代区	秋岡	18世紀後期		一間社流造、正面千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺
		内宮（右社殿）		小代区	秋岡	18世紀後期		一間社流造、正面千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺
		観音堂		小代区	秋岡	宝暦三年（棟札）	1753	桁行三間、梁間三間、切妻造、鉄板葺
70	大日堂			小代区	東垣	寛政八年（棟札）	1796	正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、背面下屋付、鉄板葺
71	吉滝神社	本殿		小代区	鍛冶屋	天明二年（棟札）	1782	正面一間、奥行二間、正面入母屋造、背面切妻造、正面軒唐破風付、柿葺
72	八幡神社	本殿		小代区	貫田	文化十二年（棟札）	1815	一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺
		稲荷社				寛政七年（棟札）	1795	正面一間、側面二間、正面入母屋造、背面切妻造、正面軒唐破風付、板葺
		薬師堂				19世紀中期		正面一間、背面四間、側面三間、宝形造、鉄板葺
73	多他神社	本殿		小代区	忠宮	元文三年（『兵庫県神社誌』）	1738	三間社流造、軒唐破風付、柿葺
74	大山祇神社	境内社（右社殿）		小代区	久須部	18世紀前期		一間社流造、鉄板葺
75	大師堂			小代区	大谷	大正六年（『美方町史』）	1917	桁行一間、梁間一間、入母屋造、土蔵造、向拝一間、鉄板葺
76	観音堂			小代区	神水	宝暦十三年（棟札）	1763	正面一間、背面三間、側面四間、宝形造、銅板葺、三方庇付、背面下屋付、鉄板葺
77	白山神社	本殿		小代区	神水	明治三十三年（棟札）	1900	三間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、板葺
78	荒霊神社	本殿		小代区	石寺	天明五年（棟札）	1785	一間社流造、柿葺
79	観音堂			小代区	猪之谷	宝暦八年（扁額）	1758	桁行正面一間、背面三間、梁間三間、切妻造、鉄板葺

２　各個解説

１　米粉神社　香住区境

本殿　一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、板葺

寛政九年(1797　板札)

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　拳鼻　実肘木　雲紋板支輪　中備蟇股　拳鼻　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束笈形付　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　根肘木　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備彫刻　二軒繁垂木　唐破風妻飾蟇股　三方榑縁　脇障子　刎勾欄　木階五級　浜床　浜縁

米粉神社は香住湾の東端の海を望む丘陵にある。この地域の風・浪の害を避けるために応安六年（1373）に創祀されたと伝える。

本殿は一間社の流造社殿で、正面に千鳥破風・軒唐破風を付けるので屋根形式は複雑である。しかしこの建物を特徴付けるのは、間口1メートルに満たない小社でありながら驚くほどに装飾豊かな点である。

まず庇の虹梁形頭貫、庇の繋海老虹梁、妻飾の虹梁の絵様はいずれも良く発達し、複雑な意匠を持つ。庇正面の虹梁形頭貫上と唐破風の妻には、横に広がった複雑な形状の蟇股を据える。庇柱上には前方と側面の二方向に向けて獅子頭・象鼻の木鼻を付ける。庇の上の組物は大斗だけでなく巻斗・方斗もすべて皿斗付である。身舎の組物は出組であるために支輪が付く。この支輪には雲紋を彫り、極彩色を施し、柱心に入る琵琶板には渦万字の地紋彫りを施す。身舎の組物の拳鼻は上に強く反り上がって牙のような鎬となっている。身舎中備は蟇股で、その上に丸彫の植物形の拳鼻を付ける。妻飾の笈形は妻面いっぱいに広がる蟇股状だが、足は極めて細い。身舎の正面縁と、浜縁正面の縁束間を塞ぐ羽目板に波形の紋様を彫る。肘木は、下端に水平な面のない独特な形状であるのも注目され

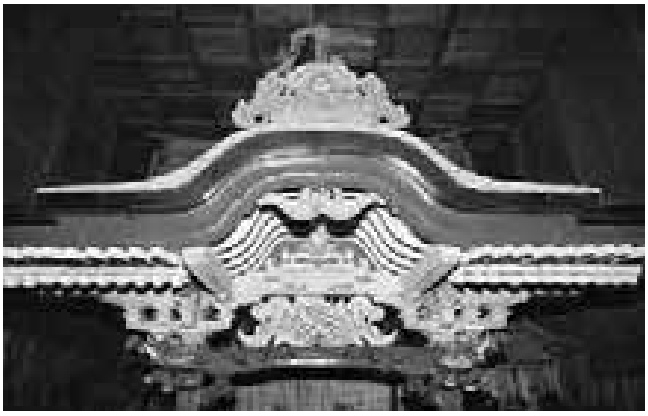


図8　米粉神社本殿庇

図9　米粉神社本殿庇詳細

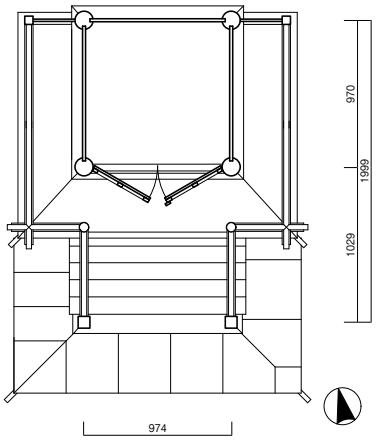


図6　米粉神社本殿平面図

図7　米粉神社本殿全景

図10　米粉神社本殿庇見返し

る。

このように細部意匠に工夫をこらすだけでなく、全面に極彩色を施すのでその意匠がさらに引き立つ。もっとも彩色は近年塗り替えられたものである。

覆屋の壁に寛政五年の奉加板札があり、これが本殿の建立年代を示すとみられる。一部に改造があるものの、18世紀中期から後期の華やかな装飾を持つ時代の特質を遺憾なく発揮した佳作であり、香住区内に多く見られる特質を備えた建物の好例でもある。（山岸）

図11　米粉神社本殿妻飾

図12　米粉神社本殿身舎組物・中備

図13　米粉神社本殿縁・浜縁羽目板の彫刻

2　通玄寺　香住区香住　　臨済宗南禅寺派

山門　桁行一間、梁間一間、二重入母屋造、妻入、桟瓦葺　　19世紀中期

下層　親柱ごひら角柱　楣　冠木　控柱角柱　虹梁形頭貫　木鼻　親柱と控柱間　男梁　腰貫　飛貫　組物なし　中備なし　一軒疎垂木　上層角柱　組物なし　中備なし　妻飾陸梁

薬師堂　正面三間、側面三間、宝形造、桟瓦葺、背面下屋庇付、銅板葺　　元禄六年（1693　寺伝）

円柱　足固貫　腰貫　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　出三斗　実肘木　詰組　二軒繁垂木

通玄寺は臨済宗南禅寺派の寺院である。平安時代の天台宗寺院に始まる古刹と伝えるが、中世に禅宗寺院として復興され、17世紀に現在地で再建された。香住駅より少し東で山陰線にせまる尾根の麓にある。尾根の上には香住神社がある。東西の参道を山に向かって東へ進むと山門があり、正面に本堂、左手に薬師堂がある。

山門は特殊な形式の二重門である。屋根が入母屋造で妻入の門は非常に珍しい。組物などは一切ない。

下層軸部は、親柱がごひら角柱（断面長方形の柱）で、控柱は角柱である。四周は吹放しで、天井は格天井である。下層の屋根は、柱間より外へ伸ばした冠木と男梁の先端に出桁を置いて垂木を支え、軒の出がかなり大きい。上層は四面とも板壁で、上層屋根の垂木には反りがある。昭和三十八年（1963）以前に桑野本（旧城崎郡竹野町）の丸山家から移築したと伝える。建立は幕末であろう。

薬師堂は、方三間の規模で、町内では珍しい禅宗様仏殿である。コンクリートの基礎の上にモルタルで覆った木製礎盤を置き、粽付きの円柱を立てる。組物は

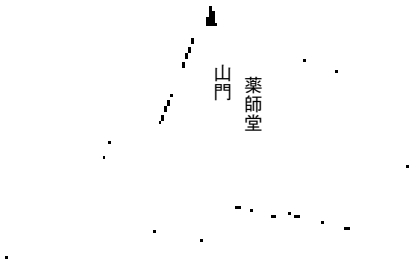


図14　通玄寺配置図

出三斗で、柱間中央の中備位置にも組物を置く。軒は平行垂木で、正式な禅宗様で用いられる扇垂木ではない。

正面と左側面は中央間を出入口、両脇間を火灯窓とする。出入口はガラス戸である。右側面は前二間が出入口で、後方柱間は土壁である。

内部は間仕切りのない一室であるが、前から二間目の柱筋に、背面の柱とそろえて円柱をたて、その後方を内陣、前方を外陣の扱いとする。床は外陣が畳敷、内陣が板敷で、天井は内外陣境で分割されるが、双方とも同じ格天井である。内外陣境は飛貫・虹梁形頭貫でつなぎ、柱上に組物、中備にも組物を置く。内外陣境の柱は、外部に面した側柱も内部の柱も同じ高さで、組物を介して支える桁も同じ高さである。しかし、側柱上には台輪があるのに対し、内部の柱には台輪がない。この台輪分の差を調整するために、内部の柱の組物は大斗下に皿斗を入れ、中備組物は大斗自体を大きく作っている。内外陣境を側柱上と同じ作りとはせずに、虹梁形頭貫としたための工夫である。

図16　通玄寺山門全景

図17　通玄寺山門背面軒

この建物は少なくとも二度の大改修を受けている。一度目は仏壇正面の頭貫絵様が示す18世紀後期ないし19世紀初頭である。

内外陣境の中央間は本柱の内側に脇柱が立ち、本柱の間は板壁だった。頭貫下面全体に板決りがあるので、脇柱間の上部も板壁だった。このことから現在背面下屋に出されている仏壇は、内外陣境より前に置かれて

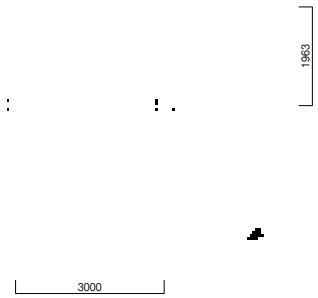


図15　通玄寺山門平面図

図18　通玄寺山門正面見上げ

図19　通玄寺薬師堂全景

いたと推定される。現在の内陣は今よりも七寸ほど高い床がはられていた。外陣は土間だったと推定される。一時期、内外陣境両脇間に床から三尺八寸の高さに框が付いたらしいが、はっきりしない。

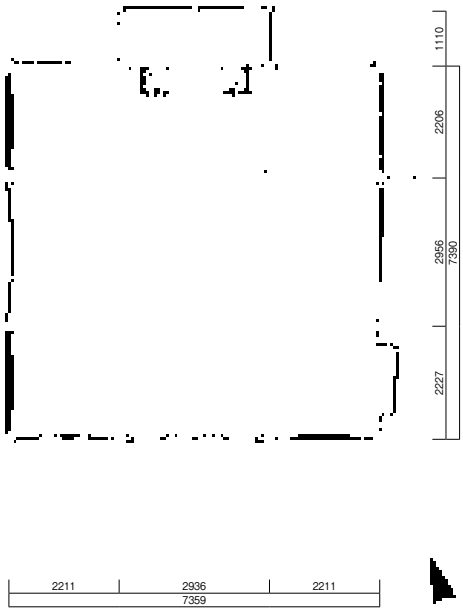


図20　通玄寺薬師堂平面図

二度目の改修は昭和三十八年に行われた。このときコンクリート製の基礎が作られ、桁から上の部材も新しくなった。正面中央間は折戸だったという。

建立年代は様式上17世紀後期とみられ、寺伝では元禄六年（1693）と伝えている。大きな改造を受けてはいるが復元可能であり、建立当初の形態や様式はよく残している。二次調査対象では唯一の禅宗仏殿であり、建立年代も古く、貴重な建物である。

（黒田）

図23　通玄寺薬師堂内外陣境

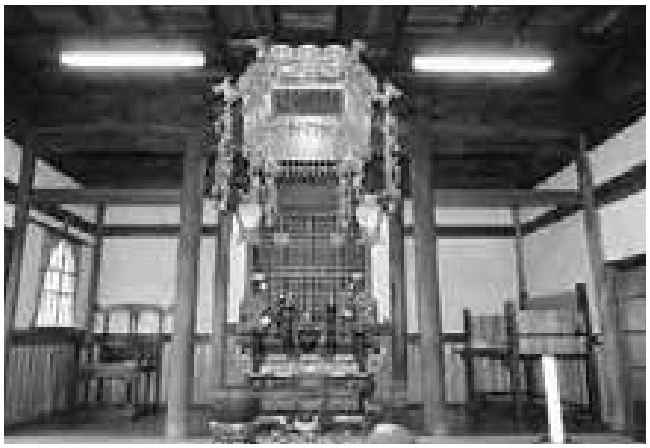


図21　通玄寺薬師堂内部

図24　通玄寺薬師堂隅組物

図22　通玄寺薬師堂内外陣境詳細

図25　通玄寺薬師堂仏壇正面

3　本誓寺　香住区西香住　　浄土真宗本願寺派

本堂　桁行13.3メートル、梁間12.7メートル、入母屋造、向拝一間、側・背面軒下張出付、桟瓦葺

安政二年(1855　鬼瓦銘)

縁通り角柱　虹梁形飛貫　木鼻　絵様肘木　中備蟇股

入側角柱　切目長押　内法長押　虹梁形飛貫　組物なし　中備なし　二軒疎垂木　妻飾二重虹梁大瓶束叉首　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　手挟　中備龍彫刻　一軒疎垂木

本誓寺は香住の町中にある真宗寺院である。

本堂は比較的小規模な真宗本堂である。正面と側面に縁を設け、間口五間、奥行三間の外陣を設ける。外陣には中柱二本を立てて、桁行･梁行に虹梁を架ける。中柱より後方が矢来の内になり、中柱筋から後方は縁通りの柱まで堂内に取り込んで、堂内の間口幅を七間に広げる。後方は奥行二間半の内陣・余間である。内外陣境は内法長押の上に虹梁形飛貫を入れ、柱上には挿肘木で出組組物を組む。

以上のようにごく一般的な真宗本堂の形式をとっているのであるが、真宗寺院の少ない当地域にあっては貴重な遺構となる。

建立年代を示す史料は実見していないが、安政二年の銘を持つ鬼瓦があったと伝え、安政二年の建立として間違いない。昭和五十一年の屋根修理で垂木から上の材料がすべて新しくなっている。(山岸)

図27　本誓寺本堂全景

図28　本誓寺本堂外陣

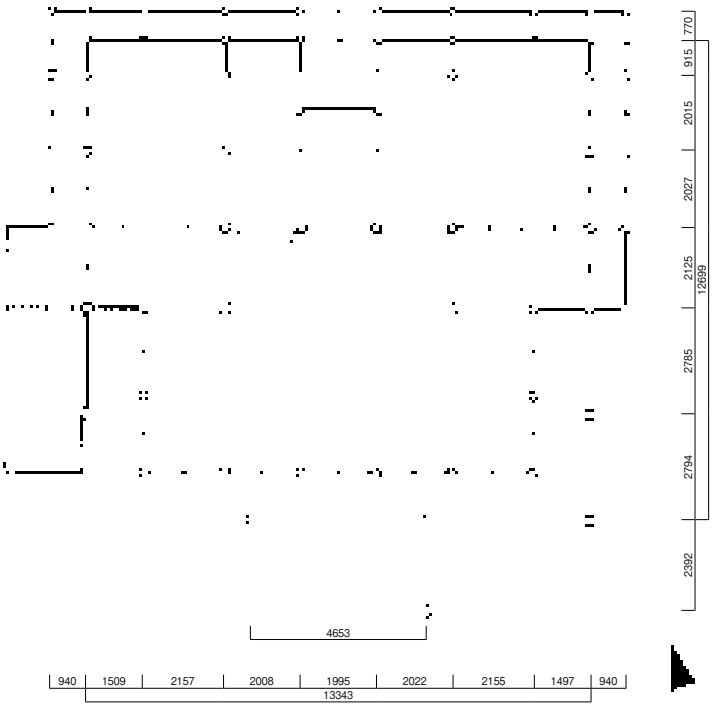


図26　本誓寺本堂平面図

図29　本誓寺本堂向拝見返し

図30　本誓寺本堂側通り

図31　本誓寺本堂外陣見返し

図32　本誓寺本堂内陣

4　天満神社　香住区七日市

本殿　三間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、銅板葺

文化六年（1809　木札）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　拳鼻　実肘木　蛇腹支輪　中備蟇股（正面中央間）　組物（側面）　二軒繁垂木　妻飾二重虹梁大瓶束蟇股　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　繋海老虹梁　手挟　中備龍彫刻（中央間）　二軒繁垂木　三方樽縁　脇障子　刎高欄　木階五級　浜床

天満神社は旧香住町の中心部、七日市の鎮守社である。

本殿は千鳥破風、軒唐破風をつける中規模の三間社流造である。身舎は桁行三間、梁間一間で、正面は板扉である。全体の形態と規模は一般的であるが、細部の意匠には独特なものがある。

まず庇で目立つのは組物で、身舎の斗は通常の形だが、庇では斗がすべて皿斗付になっている。しかも皿斗が通常のものに比べて大きいので、普通の三斗組にみえない。両脇間の実肘木は柱間中央で相接する。中

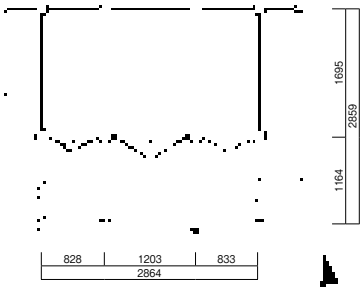


図33　天満神社本殿平面図

図34　天満神社本殿庇正面

央間では、両端の虹梁絵様の若葉が中央でぶつかり、渦状にからみあう。繋海老虹梁の絵様は、通常は渦となる部分に蓮の花を彫刻している。これは仏教色を強く出したもので、後述の本地仏の安置とともにこの本殿の特色である。

次に身舎では、庇と同様、正面の両脇間で実肘木が相接している。身舎の組物は、通常の出組に拳鼻を付けるが、隅の組物だけはほかと形を変えた象鼻風の拳鼻を作る。側面では内法長押と頭貫との間に双斗風の大斗絵様肘木を入れる。これは意図的か否かは判断できないが、通常では頭貫や台輪の上に置いて中備となるものである。内法長押ではこれを受けられないので、壁に取り付けられていると思われる。台輪の上の中備位置には組物を入れる。支輪は板に蛇腹支輪を彫刻したものである。

桁より上の部材が新しく取り替えられているので、屋根全体が新しいと見られる。三組の扉板は古いが、内法長押と扉の上下の框が新しい。脇障子の柱や笠木も新しい。拝殿の屋根で見えないが、庇正面の新しい地垂木の上に古い軒唐破風の妻飾が見えている。

建立年代について、文化六年（1809）の「聖廟造営」と記す木札がある。大工は香住村の嘉七・勘七・助七で、施主は椋橋助右衛門が大書され、同村中と記す。

この本殿にはもうひとつ特筆すべきことがある。三間社流造なので三つの柱間にそれぞれ扉があり、中央間に天満宮、左に川下大明神、右に十一面観音を祀ることである。川下大明神は土地の神であろう。十一面観音は天満天神の本地仏とされるから、この神社では神とその本地仏を併祀しているのである。十一面観音については、天明五年（1785）の再興木札が残されていて、造立の年代が明らかである。再興の文言から、十一面観音はそれ以前からあったのだろう。本殿の造立木札、十一面観音の再興木札ともに大乗寺が関与している。祭祀の面で、神仏分離以前の形態をとどめている点が貴重である。

屋根が全体に新しいのが惜しまれるが、地元の大工が手がけた個性豊かな本殿として高く評価できる。文化的な面でも極めて興味深い本殿である。（黒田）

図35　天満神社本殿全景

図36　天満神社本殿庇見返し

図37　天満神社本殿庇詳細

図38　天満神社本殿身舎

図39　天満神社本殿妻飾

図40　天満神社本殿身舎側面

5　大乗寺　香住区森　　高野山真言宗

山門　桁行三間、梁間二間、八脚門、入母屋造、桟瓦葺
［県指定文化財］　　安政二年（1855「歴代記」）

親柱ごひら角柱　蹴放　頭貫　木鼻　冠木　控柱円柱　虹梁形頭貫　木鼻　梁行に腰貫　飛貫　虹梁形頭貫　木鼻　組物尾垂木付二手先　拳鼻　実肘木　板支輪　中備尾垂木付二手先組物及び蟇股　二軒扇垂木　妻飾木連格子

客殿及び庫裏　桁行33.0メートル、梁間18.9メートル、入母屋造、銅板葺、背面軒下張出付、背面下屋庇付、式台玄関、正面一間、奥行二間、向唐破風造、銅板葺
［建物は県指定文化財、障壁画は国指定重要文化財］
寛政六年（1794　棟札）

角柱　敷居　鴨居　内法長押　二軒疎垂木　妻飾　二重虹梁大瓶束　式台玄関　角柱　腰長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　頭貫と桁の間は彫刻　輪垂木　一軒疎垂木　唐破風妻飾大瓶束笈形

観音堂　正面三間、側面五間、宝形造、背面軒下張出付、向拝一間、銅板葺　　正徳二年（1712　棟札）

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　出三斗　実肘木　中備正面及び側面第一・第二間平三斗　拳鼻　側面第三から第五間蟇股　内法長押上に簑束　二軒繁垂木

大乗寺は香住区森に所在する高野山真言宗の寺院である。丘陵を背にした斜面に山門と客殿及び庫裏がほぼ並行して立ち、北側に観音堂・薬師堂などが立ち並ぶ。中・近世の寺院では本堂の一郭とは別個に子院があり、客殿・庫裏は子院にあるのが一般的であるが、大乗寺の伽藍配置は、子院の中に本堂があるような構成である。

大乗寺は開基を行基と伝えている。確実な史料とし

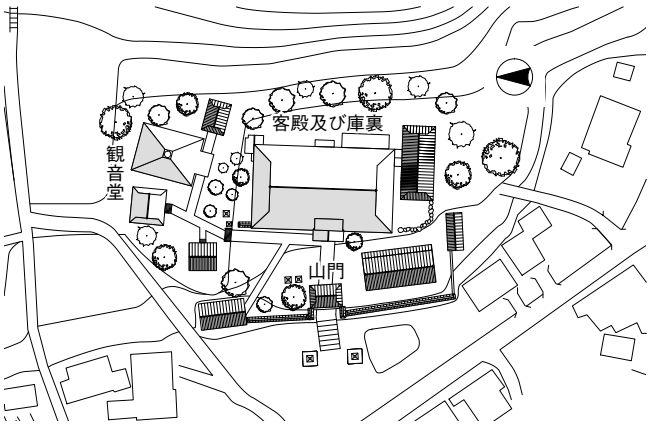


図41　大乗寺配置図

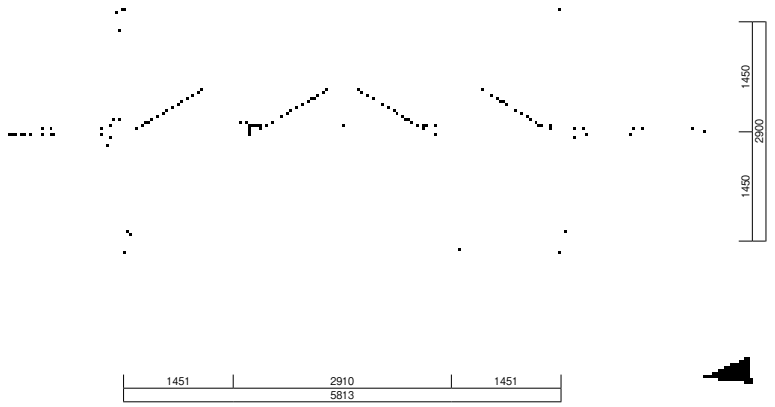


図42　大乗寺山門平面図

図44　大乗寺山門棟通り

図43　大乗寺山門全景

ては、建武元年（1334）に大乗寺に修験の行者が所属していたことを示す文書があること、寺蔵の大般若経に永徳三年（1383）の銘があるものがあること、寺蔵の仏像八躯が平安時代中期の作であること、その内の多聞天立像に永長二年（1097）の開眼の紀年があることが挙げられる。すなわち平安時代以来の歴史を有する古刹である。中世後期には衰微したようであるが、江戸時代に入って、正徳元年（1711）に観音堂が再建され（棟札・「歴代記」[3]）、密英が住職であった時代の寛政六年には客殿・庫裏の再建がなされている。密英の先代密蔵は、寄進を募り、寺領を増やすなど再建の準備を整えたことで、中興と称されている。中興第二世の密英は京都で円山応挙の知遇を得ていたようで[4]、客殿･庫裏再建に際して応挙に襖絵の制作を依頼した。応挙は呉春・芦雪など門弟十三名と共に、天明七年(1787)と、翌八年にあった京都の天明の大火を挟んだ後の寛政七年に描いた。これらの襖絵七十五面は大乗寺客殿及び庫裏の襖として残され[5]、重要文化財に指定されており、また応挙寺の名の由来となっている。

山門は客殿及び庫裏の西側にあり、高い石垣の上に建つ規模の大きな入母屋造､三間三戸の八脚門である。

親柱は角柱を用い、前後の控柱は円柱を用いる。これらの柱を虹梁形頭貫で繋ぎ、両妻ではさらに腰貫と飛貫を通す｡虹梁形頭貫の木鼻は全ての円柱に付ける。虹梁形頭貫の柱際には持ち送りの根肘木を入れる。棟通りでは虹梁形頭貫の代わりに冠木・楣で繋ぎ、両脇間は飛貫も入れて楣との間は板壁を填める。中央間は両開きの、両脇間は片開きの板扉を設ける。

柱上には尾垂木付の二手先組物を組み、拳鼻と実肘木を付ける。支輪は波濤を浮き彫りにした板支輪である。虹梁形頭貫上には両脇間と側面では中備に蟇股を置き、一部は飛龍の彫刻とし、正・背面中央間は二手先組物を置いてさらに鳳凰・麒麟の彫刻を填める。

軒は二軒扇垂木であり、内部は格天井を張る。妻飾は木連格子である。

3　昭和初期にまとめられた歴代住持の年代記であるが、依拠した史料を明示しており信頼度は高い史料と考えられる。
4　「歴代記」には、大乗寺密英が京都で親交のあった若き応挙に、江戸へゆく資金を援助したという話を載せる。
5　近年収蔵庫が新築され、そこに保管されている。客殿及び庫裏には大半が模写を填めている。

木鼻は獏や獅子などの動物、根肘木は波兎や松・猿など、冠木上には龍の丸彫彫刻、虹梁絵様も相当複雑な意匠を深く彫っていて、その題材の多様なこと、豊富なことは例を見ない。

建立年代は「歴代記」密厳上人の項に、風害で大破したものを安政二年に再建したと記している。典拠史料は明確ではないが、門の様式から見て妥当である。また棟通りの龍の彫刻の背面に中井権次正次の刻銘があり、兵庫県北部を中心に活躍した柏原の彫物師が彫刻を作成したことが知られる。正次は文政六年(1823)に生まれたとされており[6]、安政二年建立の記録とも整合する。

美方郡随一の真言宗寺院である大乗寺の正面を飾るにふさわしい豪壮な規模の八脚門である。棟通り中央二本の柱をごひらの角柱とする点は変則的であり、梁行柱間が約四尺八寸であるのに対して、軒の出は約七尺あって、組物に二手先を用いているとはいえ、その軒の出の大きさは顕著なものがある。豊富な彫刻、扇垂木や組物に見られる濃厚な禅宗様の技法など、独特の形式を持つ幕末の遺構として貴重である。

客殿及び庫裏　構造形式　客殿及び庫裏は桁行十六間半、梁間九間半に及ぶきわめて規模の大きな建物で、客殿と庫裏の役割を一棟に納めた入母屋造の建物で、西を正面として、正面南寄りに向唐破風造の式台玄関を設ける。

側周りは六寸角の角柱を腰長押と内法長押で繋ぎ、組物は用いず、中備も置かない簡素な形式である。軒は二軒繁垂木、妻飾は二重虹梁大瓶束で、棟木を受ける大瓶束には笈形を付ける。

平面　南端の間口三間半分は土間と板敷の間で、その北の間口二間半分の前後に十二畳と二十畳の二室の部屋がある。さらに背面側に二室の居室が設けられている。以上が庫裏部分にあたる。残る北半部が庫裏より敷居一段分床高の高い客殿で、基本的には南北一列に四室をとって、前後（東西）に三列を並べる平面構成となっている。実際は二部屋分の一部屋としたり、部屋境を食い違いとして、十一室で構成されている。

ほぼ中央部に「仏間」があり、その北に上段を備えた「山水の間」、その西に「郭子儀の間」、「山水の間」の東に「藤の間」、「仏間」の西に二十五畳もの広さを持つ「孔雀の間」、「仏間」の東（裏）に「鯉の間」、「仏間」の南に「群山露頂の間」、その東に「狗子の間」、庫裏に接する部分に西から「農業の間」「使者の間」「仙人の間」となっている。いずれも襖絵や壁画の題材から名付けられた名称である。西面・北面と東面の一部に

図45　大乗寺山門側・背面

図46　大乗寺山門詳細

図47　大乗寺山門中備飛龍

6　竹内　脩『中井権次について』（私家版）

広縁を設ける。「郭子儀の間」と「山水の間」の上段に付書院を設け、上段西面には床と違い棚も設えている。

庫裏の西端（正面側）と東端（背面側）に二階が設けられていて、西側の二室はやはり襖絵があって、北から「猿の間」「鴨の間」と呼ばれている。

庫裏部分は客殿部分より床高が四寸五分下がる。室内は差鴨居で柱を繋ぎ、西の十二畳半の間は大引天井、東の二十畳の間は棹縁天井を張る。庫裏内部の柱は他より太く、土間境は一尺二寸角、他は九寸角のケヤキ材で、透漆を塗っている。二十畳の間には囲炉裏が設けられ（ただし現在は除去、天井の煙抜きは残る）、土間には竈が設けられている。板敷・土間の部分の上部は天井がなく、梁が組まれてその上には和小屋が組まれている。板の間と畳の間の境を画する差鴨居の板の間側の棚に一間社春日造、軒唐破風付きの社殿を置き、吉野蔵王権現を祀る。

客殿部分は角柱を内法長押で繋ぎ、「山水の間」「郭子儀の間」「孔雀の間」「農業の間」は蟻壁長押も打つ。天井は「仏間」が中央部二重折上の格天井、「山水の間」が格天井で「山水の間」の上段は折上小組格天井、その他は棹縁天井である。「仏間」と「孔雀の間」の間、「孔雀の間」と「郭子儀の間」の間、「郭子儀の間」と「山水の間」の間、「農業の間」と「使者の間」の間はケヤキの板に植物や獅子、波濤などの透かし彫りを施した欄間を設けている。

広縁は化粧屋根裏で、「孔雀の間」から「山水の間」にかけての部分では側柱と入側柱を海老虹梁で繋いでいる。

西側二階は角柱を薄鴨居で繋ぐだけで、内法長押は用いず、天井も棹縁天井として（「鴨の間」は折上）、「鴨の間」には吊床を設け、簡潔な作りである。西面と南面に縁を設け、雨戸だけで閉じる。二階の部屋からの眺望を意識した構えである。東側の二階はあくまでも日常の用に供する内向きの部屋である

<u>式台玄関</u>　客殿部分の正面南端に式台玄関が付く。庫裏には正面側の入り口と南側の勝手口がある。式台玄関は、角柱を、側面では内法長押・頭貫で繋ぎ、正面では虹梁形頭貫だけで繋いで、柱上には皿斗付大斗に三斗を枠肘木に組み、桁と正面の虹梁を受ける。組物には実肘木を付け、二種の拳鼻を付けたりと、装飾が

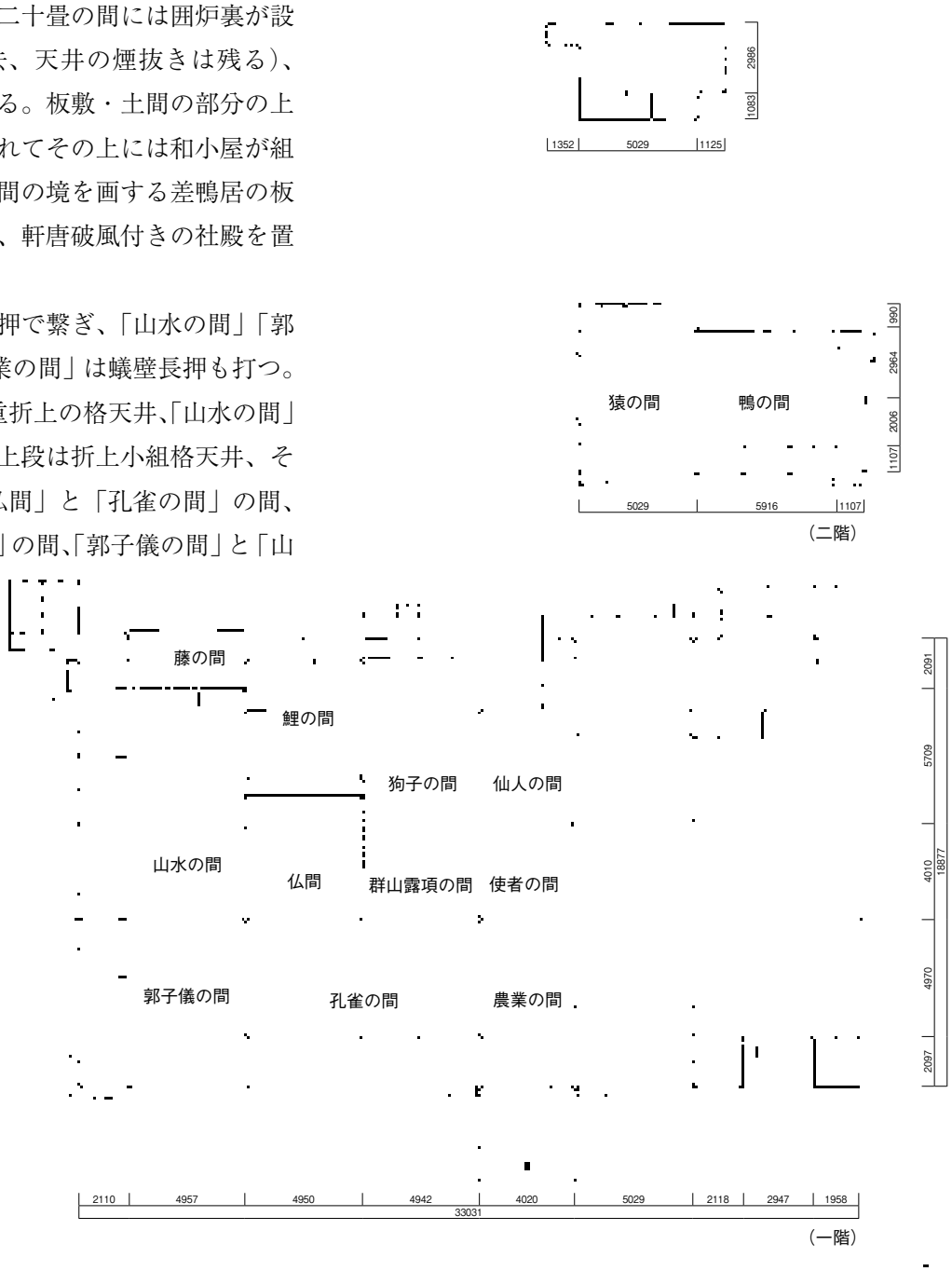


図48　大乗寺客殿及び庫裏平面図（縮尺1：300）

相当に目立つ。正面の虹梁の上には大瓶束・笈形を置いて、輪垂木の棟木を受けている。正面側頭貫と桁の間は文政六年の中井権次正貞の銘が入った狛犬彫刻、両側面は飛龍の彫刻で飾る。奥の欄間には中井権治（ママ）正貞と門人二人の墨書がある。

建立年代　建立時の棟札が残り、密英が住職の時代の寛政六年に建てられ、大工棟梁は森村の大工青山常吉であった事が知られる。彼は豊岡の彦四郎重賢の弟子であり、重賢は後見を務めた。棟札にはその他多数の職人の居住地と名前も記録されている。

建物の形式や風蝕から、この棟札を現在の客殿及び庫裏の建立時のものと考えてよい。

改造　大乗寺には客殿及び庫裏の平面を描く絵図が所蔵されている（図49）。作成時期を示す紀年はないが、密英の筆と推定されている[7]。

この絵図は、現状とも概ね一致するが、庫裏部分の背後に突出部があった点は、現状と大きく異なる。南面の間口が十五間半あると図示しているので、庫裏の部分が現状よりおよそ五間半分、東方に広かったことになる。また絵図の客殿部分では「藤の間」がなく、「鯉の間」の背面（東面）が「狗子の間」と同じ柱筋までしかなかったこと、「郭子儀の間」に付書院がなかったことなども現状と異なる。

「歴代記」密英上人の項に、建立後五十年前後の頃、東側の山が崩れ、突出部が倒壊したとしている。庫裏背面の二部屋とその二階には、柱の補入や取り替えがあった痕跡が残る。なお、庫裏の土間や板敷には多数の竈が設けられていたことも絵図に記載するが、今は土間に一基しか置かれていない。

玄関の欄間彫刻には文政六年（1823）新調の銘があり、欄間彫刻はこのときの制作らしいが、同じ欄間に

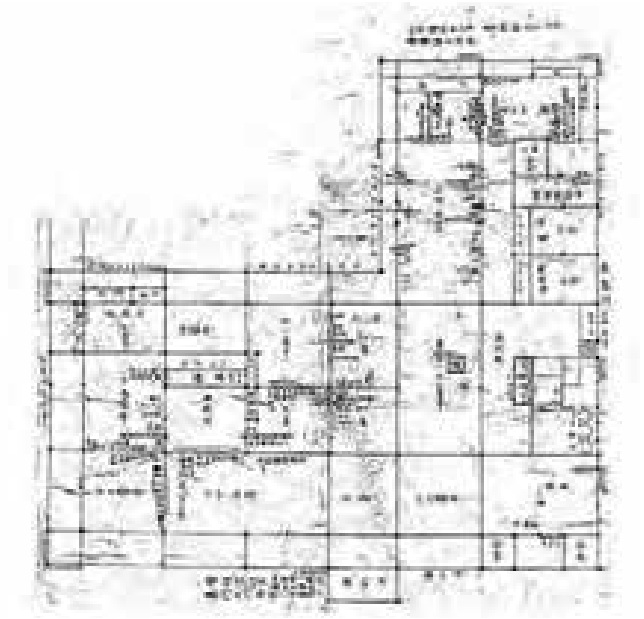


図49　大乗寺客殿及び庫裏の古図

図50　大乗寺客殿及び庫裏全景

図51　大乗寺客殿及び庫裏玄関

図52　大乗寺客殿及び庫裏玄関見返し

7　河野元昭「大乗寺円山派関係文書」（『國華』九四五号　國華社　昭和47年）

塡る障子の枠には寛政六年の銘があるので、欄間の形態は変わっていないとみられる。玄関の柱には埋木があるが、理由は判然としない。

客殿については絵図通りであったことを示す痕跡が建物にはなく、絵図は計画図と考えられる。

特徴　一般的に寺院の客殿は、二室を三列ならべた六室の中央奥に仏間を作る方丈形式を基本とする。玄関は方丈部分には付設せず、一列ずれた位置につけるのが定型で、玄関から奥は外部空間（庭、明かり取りなど）になったり、部屋にしたりする。大乗寺の場合は玄関の奥に三室を連ねている。すなわち客殿部分の全体構成は、仏間の左右の室とそれらの正面側が方丈形式に相当し、その背面側（東側）の諸室と庫裏側の三室が加えられたものとして理解できる。ただし、部屋境は

図53　大乗寺客殿及び庫裏土間

図54　大乗寺客殿及び庫裏土間小屋組

図55　大乗寺客殿及び庫裏　庫裏部分の部屋

図56　大乗寺客殿及び庫裏孔雀の間から仏間

図57　大乗寺客殿及び庫裏山水の間

図58　大乗寺客殿及び庫裏鯉の間

食い違ったり、二室を一室とするなど柔軟に計画されている。仏間の上手（北）に座敷が来るのも定型だが、「山水の間」は上段をもつ最高級の書院造で、通常はこれほど格の高い形式にはしない。仏間正面とその右を一室とする構成もこの建物の特徴で、孔雀の絵画で飾られた最も豪華な室である。「農業の間」、「使者の間」、「仙人の間」が客殿の南端で、玄関を含めたこの一列は方丈形式部分と庫裏の中間帯となっている。

客殿・庫裏の類型については、高野山の子院において別棟型と一体型とがあり、別棟型の方が寺格の高い子院に多いという指摘がある[8]。別棟型は客殿と庫裏を別棟として間に玄関を挟む。客殿の棟に対して庫裏の棟を直角に置き、奥行の深い庫裏を作ることを可能にする。大乗寺では客殿と庫裏は一体であるが、庫裏は客殿の奥行きを越えて後方に張り出していて、平面的には別棟型の性格を持つと考えられる。上段をもつ書院、仏間正面の二間続きの室（「孔雀の間」）も格の高い子院の客殿に見られる形態である。また、伽藍構

図62　大乗寺客殿及び庫裏二階鴨の間

図59　大乗寺客殿及び庫裏仙人の間

図63　大乗寺客殿及び庫裏二階猿の間

図60　大乗寺客殿及び庫裏板の間の蔵王権現厨子

図61　大乗寺客殿及び庫裏広縁

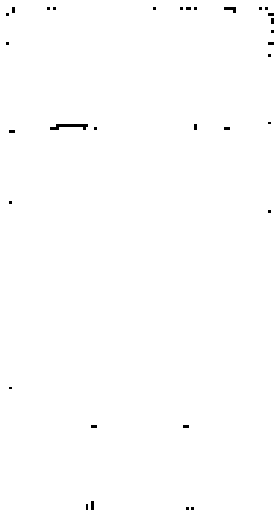


図64　大乗寺観音堂略平面図

8　藤川昌樹「高野山の山内空間と建築」（『高野山と密教文化』小学館スクエア、平成18年）

成はこれ以前の配置を踏襲したのかもしれないが、配置に加えて客殿の作りの豪華さ、格の高さから考えると、大乗寺の江戸後期の復興では、客殿・庫裏を寺の中心的存在とする意図があったと思われる。豪華な客殿障壁画は、大乗寺そのものを飾ったともいえる。資金については、棟札に惣旦那として七ケ村が記されている。客殿・庫裏は歴代住持と地元住民の悲願の結晶といえよう。

客殿及び庫裏は、式台玄関部分を除いて全体に建築部材に装飾的な要素が少ない。その豪壮なことは県内でも匹敵するもののない規模であるが、建築形式はきわめて簡素である。しかし、客殿部分は、下手と上手、表と裏といった部屋の性格に応じて、床高・内法材・天井などに変化を付け、著名絵師によって建立と同時

図65　大乗寺観音堂全景

図66　大乗寺観音堂向拝見返し

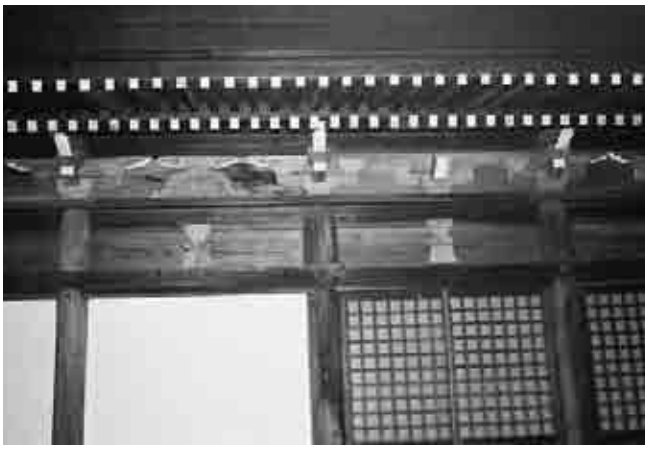


図67　大乗寺観音堂側通り

図68　大乗寺観音堂外陣

図69　大乗寺観音堂外陣隅見上げ

図70　大乗寺観音堂内陣

に描かれて使われてきた襖絵や壁画が一体となって残されてきたことはきわめて貴重である。庫裏後方が失われたことは惜しまれるが、それでもなお第一級の客殿・庫裏の威容を示してあまりある建築である。兵庫県下の代表的な客殿・庫裏一体の建物として、歴史上重要な遺構である。（黒田・山岸）

観音堂は本堂の北側にある比較的規模の大きな三間堂である。奥行は五間あって、前から二間目には内部に柱を立て、内法長押・虹梁二段を通して、内法上は板壁で閉じて、前を外陣、後方を内陣と区分している。

外陣には奥行に二本の虹梁を入れ、側面の前から二本目の柱上には手挟を入れる。内外陣境の内法長押上の板壁には水波に馬や鳥の浮彫の彫刻を施し、その上の二段の虹梁の間には大きな蟇股を据えて、相当派手に飾っている。ただし内外陣境の柱筋に建具の入っていた形跡はない。

内陣も奥行は二間で、外陣同様に二本の虹梁を入れて天井を受けている。内陣背面の柱筋も内法長押と二段の虹梁を入れて壁で閉じている。内外陣境のような派手な彫刻装飾はない。この内陣の後方一間と軒下張出部は位牌壇となっている。

極めて興味深い架構と意匠を持った仏堂であり、虹梁絵様の意匠も流麗・闊達で18世紀の意欲的な意匠を示している。三間堂でこれほどに工夫をこらした仏堂はそう多くはあるまい。ただし、近年の修理によって、軒から上、側柱の約半数、内法長押・頭貫、内部の多くの虹梁が取り替えられ、価値を減じている。（山岸）

参考文献

1　佐々木丞平・佐々木正子編著『至宝　大乗寺』（国書刊行会　平成15年）

2　『日本歴史地名大系第二九巻Ⅰ　兵庫県の地名』（平凡社　平成11年）

3　『國華』第九四五号　特輯　大乗寺の絵画（國華社　昭和47年）［収録論文：河野元昭「大乗寺と円山派作家」、山川　武「円山応挙についての二三の問題」、河野元昭「大乗寺円山派関係文書」、河野元昭「応挙年譜」］

6　帝釈寺　香住区下浜　　高野山真言宗

本堂　正面五間、側面五間、宝形造、桟瓦葺　16世紀中期、明治前期改造

円柱　切目長押　内法長押　内法貫　正面および側面第一間大斗絵様肘木　その他舟肘木　中備なし　一軒疎垂木木舞裏　四方切目縁

持仏堂　桁行13.5メートル、梁間9.0メートル、入母屋造、桟瓦葺　18世紀中期

角柱　足固貫　内法長押　飛貫二段　舟肘木　中備なし　二軒疎垂木　妻飾木連格子

帝釈寺は香住湾西部の下浜の集落にある。天文十七年（1548）の紀年のある縁起によれば、大宝二年（702）に法相宗僧道照が中興し、降って天文年中、覚善が因幡国守の外護を受けて復興したと伝える。本尊帝釈天倚像は正安三年（1301）の造立、脇侍聖観音立像は平安時代後期の作とされるなど、中世以前の仏像を多く残し、但馬国大田文を伝えることでも知られる。

本堂は大規模な五間堂である。この規模であれば入母屋造の屋根を架けるのが一般的だが、この本堂では

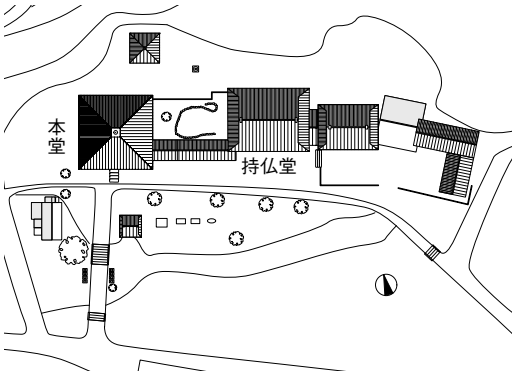


図71　帝釈寺配置図

図72　帝釈寺本堂全景

宝形造としている。軒反りも強く、雄渾な屋根形状をしている。

平面は、前から二間目に柱が一間毎に立ちこれを無目敷居・内法長押で繋いでいる。従ってこの柱列より

図73　帝釈寺本堂背面

図74　帝釈寺本堂外陣

図75　帝釈寺本堂正面

図76　帝釈寺本堂内陣

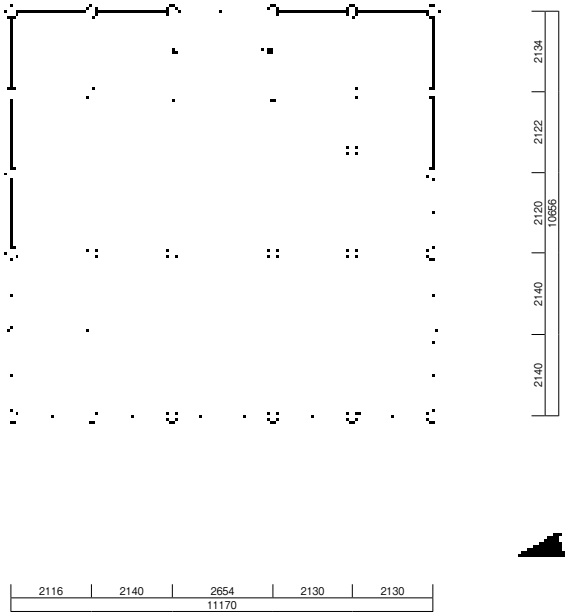


図77　帝釈寺本堂平面図

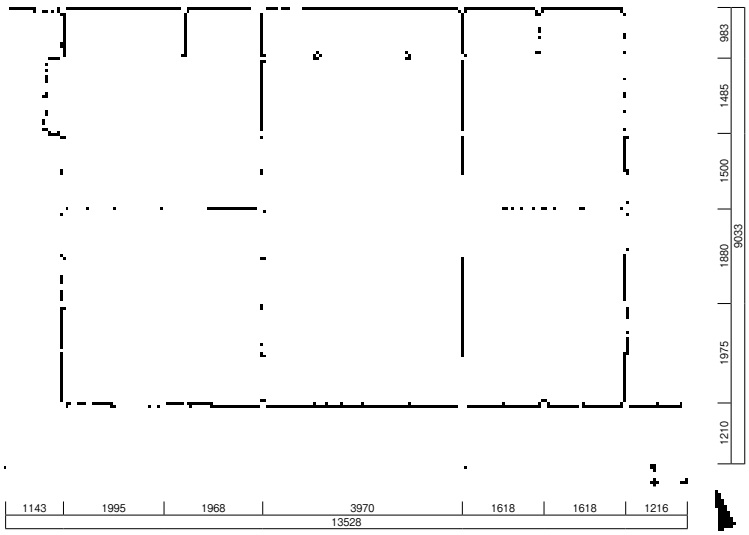


図78　帝釈寺持仏堂平面図

前の二間が外陣、その後方が内陣となる。内陣では側・背面の三方に入側柱が立ち、背面中央入側柱の後方に須弥壇を設け厨子を据える。すなわち中世仏堂形式であることが明らかである。

外陣は格天井が張られる。内外陣境寄りの間口三間、奥行一間分の格間が大きく部材も古く、残りはごく新しいものである。内陣は古い格天井である。

外陣入隅の柱は複雑な絵様を施した虹梁で側柱と繋いでおり、正面中央二本の柱上の組物には大仰な拳鼻を付けている。

柱は床下まで円形に加工しており、舟肘木の形状も良く、長押等の部材の木柄が大きい事などから、建立は中世に遡ることが明らかである。ただしさほど古くは遡らず、天文年間の復興を本堂の建立時期に宛てる

図79　帝釈寺持仏堂全景

図80　帝釈寺持仏堂室中

図81　帝釈寺持仏堂左奥の部屋

図82　帝釈寺持仏堂正面

図83　帝釈寺持仏堂仏間正面

図84　帝釈寺持仏堂仏間・厨子

のが妥当であろう。

多くの改造の痕跡が残されている。復原すると内外陣境は本来中敷居が入って、建具で仕切られていたであろう。また内陣入側柱筋（背面と側面）は板壁で閉じられ、三間通しの須弥壇が設けられていた。外陣の虹梁・絵様肘木・拳鼻はおそらく明治になってから補われたものであろう。

軒付は二重で布裏甲の上の切裏甲は極めて厚い板を用いるのが注目される。

町内では唯一の中世の五間堂の遺構として貴重である。（山岸）

持仏堂は本堂の東にあり、渡り廊下でつながっている。平面は三室を前後二列ならべる方丈形式で、正面と側面に縁がまわる。

中央奥が仏間で、床は他の部屋より一段高い板敷とし、天井は棹縁天井である。正面部屋境から二間奥に円柱を二本立てて三間に割り、中央間に厨子を置き、両脇間も仏壇とする。仏壇前の柱筋は虹梁形頭貫でつなぐ。左右の奥の間は双方とも床を備えた部屋であるが、左奥の部屋には付書院があり、右奥の部屋には平書院を設ける。

仏間正面の建具ははずされているが、その他の室境は襖とし、縁側に面する側は障子である。天井はすべて棹縁天井である。正面側の室の部屋境は上部を竹の節欄間とする。

縁に面する側は正面側面ともすべて一間ごとに柱が立ち、古風である。舟肘木の形状もよい。

仏間の天井は中古で、もとの天井は今より低かった。正面側面の縁側には繋虹梁があった痕跡がある。この仏間の改造は祈祷札から明治九年と推定される。仏壇前の構えも同時期かとみられる。

屋根はもと茅葺だったが、戦後に桟瓦葺にした。小屋組は、梁までは古く、束から上は新しくなっている。縁側の柱もこのとき取り替えられたとみられる。

建立年代に関する史料は発見できなかったが、一間ごとの柱の立ち方、舟肘木の形状から18世紀中期の建立と推定する。あるいは前期に遡る可能性もある。この建物は、改造はあるが、方丈形式の典型的な形態をしめしていることが貴重である。5大乗寺客殿及び庫裏を考える上でも重要な遺構である。（黒田）

7　八幡神社　香住区下浜

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺　　18世紀後期

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　尾垂木付四手先　拳鼻　実肘木　中備蟇股上に組物　二軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　千鳥破風妻飾虹梁大瓶束　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　根肘木　連三斗　実肘木　手挟　中備蟇股　一軒繁垂木　軒唐破風妻飾蟇股　四方切目縁　刎高欄　木階五級　浜床　浜縁

八幡神社は下浜の鎮守社である。

本殿は桁行一間、梁間一間の入母屋造本殿である。正面は黒漆塗の桟唐戸で、上部羽目板に眼象を彫る。

この本殿の最大の特徴は、四手先の組物である。中備は蟇股だが、その上に柱上と同じ組物を組む。組物同士は四手目を除いて全て通肘木でつながっている。軒では通肘木が一段ずつ迫り出し、さらに各組物からは三段の尾垂木が出て、彫刻ではなく、建築的細部だけで軒が華麗に飾られている。四手目は実肘木で丸桁を支え、三手目から四手目に菊水紋を彫出した板支輪をはめる。組物が四手も出た上に二軒なので、軒の出が非常に大きく、規模の割に雄大な屋根となっている。隅木に独特の繰形を施す点も出色である。

向拝も趣向を凝らしている。組物は連三斗だが、全ての斗が皿斗付きである。木鼻付き虹梁形頭貫は通常の形で下に持ち送りをつける。手挟は雲紋の丸彫りである。垂木は内側では上方にむくりを付け、軒先に向けて反りを付ける。ここは棒垂木の二軒とするのが一般的だが、一軒として桁から軒先まで洗練された反りをつけている。

彫刻類は向拝の頭貫木鼻と中備の控えめな動植物彫刻にすぎない。彩色は正面桟唐戸だけである。

建立年代に関する史料はなく、様式上18世紀後期の建立と推定する。保存状態はよく、ほぼ完存している。

この本殿は神社本殿ではあまり用いない四手先組物を組み、そのため大きい屋根がかかる。細部は具象的な彫刻をあまり使わず建築的手法だけで、極めて華麗な本殿を実現している。優秀な腕を持つ大工の作である。（黒田）

図85　八幡神社本殿全景

図87　八幡神社本殿組物

図86　八幡神社本殿向拝見返し

図88　八幡神社本殿隅木

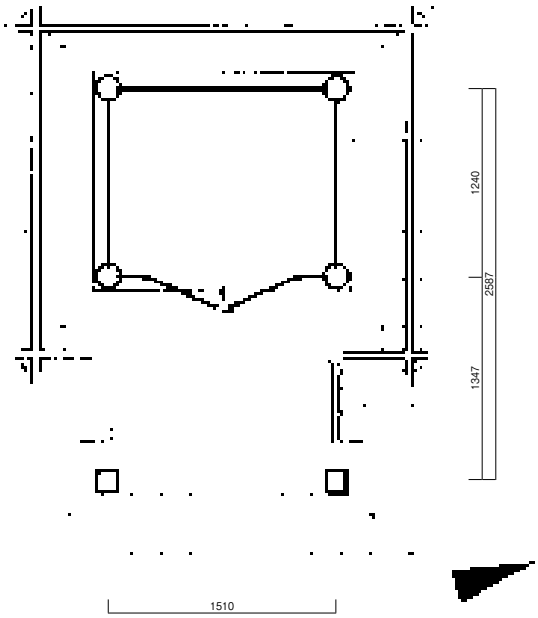


図89　八幡神社本殿平面図

図90　八幡神社本殿本体部

8　伊勢神社　香住区下浜

本殿　一間社隅木入春日造、板葺

天和四年（御正体板　1684）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　板軒　正面妻飾大瓶束笈形　背面妻飾陸梁大瓶束　庇角柱　切目長押　虹梁形頭貫　木鼻　根肘木　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　板軒　三方切目縁　刎勾欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

伊勢神社は香住湾の西に張り出した岬の先端部に所在する。沿革は不詳である。

本殿は小規模な隅木入春日造であるが、随所に独特の技法や意匠が用いられている。

その最大の特徴は、身舎の軒を支承する技法である。屋根は板軒で垂木がなく、板の片方は身舎の桁で支えるだけなので、軒先近くに出桁を回して支えざるを得ない。この出桁を支えるために、身舎正面では隅木を腕木とし、身舎背面では背面妻の梁を腕木状に延ばしている。これら腕木の先端には繰形を付けている。腕木のせいを大きくとるために、身舎の桁もせいの高い材を用いている。

庇の組物のうち、象鼻の上に載って肘木を支える斗は上面が亀腹状になった特異な形状である。海老虹梁の絵様や一部の木鼻・実肘木の絵様は墨で描くだけで彫刻を施していない。脇障子の彫刻は日輪で、これは伊勢神社である故であろう。身舎正面の破風は大きく、棟押さえよりも上に突きだし、身舎正面の隅棟にも棟押さえをおいてこれが角のように飛び出している。

以上のように、独特の形状と意匠を持つ特異な春日造社殿として、注目に値する建物である。

棟札が棟木に打ち付けられて現存するがこれには年号は見あたらず、御正体を付けた板に「天和四年三月十一日上屋新造立」との文言があり、建立年代が確定する。（山岸）

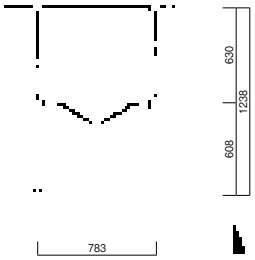


図92　伊勢神社本殿平面図

図93　伊勢神社本殿庇詳細

図91　伊勢神社本殿全景

図94　伊勢神社本殿軒

図95　伊勢神社本殿庇見返し

図96　伊勢神社本殿身舎

図97　伊勢神社本殿背面妻飾

9　兵主神社　香住区九斗

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、板葺　安永四年(1775　棟札写)

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　尾垂木付二手先　拳鼻　実肘木　詰組　二軒地垂木　扇垂木　飛檐垂木平行垂木　妻飾板張り　千鳥破風妻飾板張り　向拝角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫木鼻　三斗枠肘木　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾雲紋板　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜縁

兵主神社は九斗の鎮守社で、江戸時代には三宝荒神宮といった。

本殿は神社本殿の中では比較的類例の少ない入母屋造本殿である。本体は方一間で、正面に板扉を設ける。

この本殿の大きな特徴は軒の構成である。すなわち地垂木を扇垂木とし、飛檐垂木を平行垂木としている。両方を同一形式とするのが通常で、この形は皆無ではないが非常に珍しい。向拝は飛檐垂木を打ち越すので、打越垂木は通常の平行垂木となる。このような手法は、隅木入春日造で扇垂木とする土生の15八柱神社本殿と比較すると非常に面白い。

さて、扇垂木は禅宗様の手法なので、本体の円柱の粽、木鼻付き頭貫、木鼻付き台輪、組物も禅宗様である。組物が尾垂木をもつのは一般的だが、尾垂木が強く反り、一手目の上段の肘木が一手横に広がるのは本格的な禅宗様である。そこまで正規に様式を理解した上で、飛檐垂木を和様の平行垂木とする点が、この大工独自の発想であろう。向拝の軒唐破風では、菖蒲桁・化粧棟木を大きく反らせて、これも禅宗様の気分を表

図98　兵主神社本殿正面

現している。

足元から軒先の裏甲までは精緻な仕事であるが、屋根は一転して簡素である。葺材は横板の板葺で、本屋根と千鳥破風の妻飾は単に板を張るだけで、屋根はあるいは未完成かと思われる。このような扱いも15八柱神社と似ている。おそらく覆屋が当初からあることと、見えない部分は簡素化するという考えからかもしれない。

保存状況は良好でほぼ完存する。建立年代について『兵庫県神社誌』は享保六年（1721）の本殿再建棟札、安政三年（1856）本殿造立棟札をあげる。神社からは安永四年（1775）の棟札を書き起こした資料を提供して頂いた。両者をくらべると『神社誌』があげる享保六年のものと神社提供の安永四年のものの願主、日付の書き方、別当の名前が一致する。『神社誌』のものは抜粋なので確実ではなく、また安永の棟札の現物を実見していないが、これらは同一のものである可能性が高く、安永四年が正しいと判断した。これは本殿の様式的判断とも一致する。

なお、境内には籠堂と、やや離れて観音堂がある。籠堂は切妻造、トタン葺の簡素な建築である。板敷で奥にごく簡略な仏壇と中央に囲炉裏を切っている。昭和五十年頃まで祭の前の晩に青年が泊った。観音堂は桁行三間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺である。左一間を仕切って側面側に開放し、地蔵・十王・脱衣婆を祀る。右二間には葬儀道具を収納する。簡素ながら村の民俗行事に関わる建物として紹介しておく。（黒田）

図99　兵主神社本殿全景

図100　兵主神社本殿背面軒

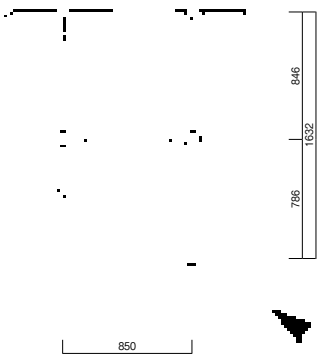


図102　兵主神社本殿平面図

図101　兵主神社本殿向拝正面詳細

図103　兵主神社本殿向拝見返し

10　多田神社　香住区丹生地

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺　天明六年（1786　棟札）

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　二手先　拳鼻　実肘木　雲彫刻支輪　詰組　二軒繁垂木　妻飾板　千鳥破風妻飾木連格子　向拝角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　根肘木　三斗枠肘木　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木　唐破風妻飾彫刻板　三方切目縁　刎勾欄　木階五級　浜床　浜縁

多田神社は佐津川の左岸の山間にある。古くは楯縫神社と称し、慶長九年(1604)には多田妙見社と称した。

本殿は小規模な一間社であるが、組物を二手先とするために軒の出が大きく、千鳥破風付の入母屋造の屋根とも相俟って、屋根の量塊感が目立つ建物である。

彩色を施さない白木の建物であるために彫刻の装飾が目立ちにくいが、向拝の柱上には前と横の二方向に獅子と象の木鼻を付け、虹梁形頭貫上には柱間いっぱいの雲龍の彫刻、唐破風妻飾に雲紋の彫刻を据え、腰組に拳鼻付の平三斗を組むなど装飾は豊かである。

細部では台輪の幅が頭貫の幅に比し大きいこと、向拝肘木の形状は1米粉神社本殿と共通した独特なものである点などが注目される。

棟札が所蔵されていて建立年代が明確であり、建てた大工も佃村の金右衛門他二名と知られる。（山岸）

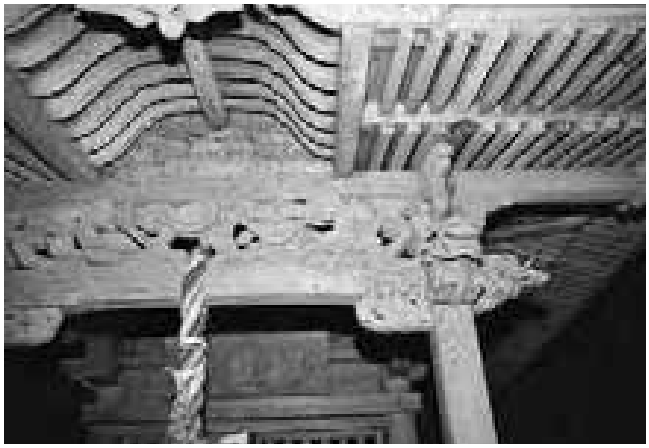


図106　多田神社本殿向拝

図107　多田神社本殿向拝見返し

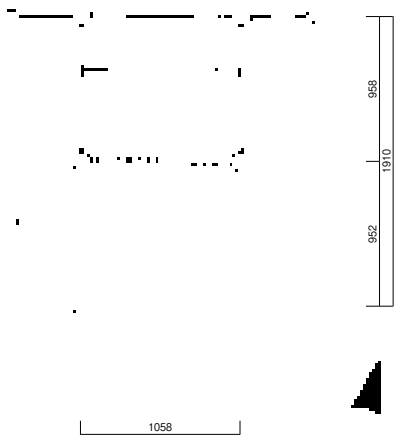


図104　多田神社本殿平面図

図105　多田神社本殿全景

図108　多田神社本殿背面

11　地蔵堂　香住区下岡

地蔵堂　正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、桟瓦葺　18世紀前期

角柱　足固貫　虹梁形飛貫　木鼻　舟肘木（正面はなし）
中備なし　一軒疎垂木

地蔵堂は下岡の辻に立つ堂で、中央奥の厨子に石仏の六地蔵を祀る。方三間の堂で、正面は飛貫を入れて中央二本の柱を省略する。右側面、背面、左側面の後方柱間は板壁で、そのほかは開放である。正面側の四分の一間ほどを土間として、右に寄せて踏石をおく。床は板敷で天井は竿縁天井である。

奥の中央間の柱の手前に円柱をたて、後方の柱との間を厨子とする。厨子の両側面は板壁とし、正面は格子の扉である。厨子正面柱間には腰に框をいれ、上部は木鼻付虹梁形頭貫で固める。組物は三斗枠肘木で、中備は正面に束を置く。厨子の左間は物入れである。

右側面前方二間の壁は後補である。後方柱間は柱に直接に壁貫を取り付けているが、前方二間では柱に板を打ち付けて、それに貫を取付けている。従って、右側面も前方二間が開放であった可能性が高く、左右対称の形だったことになる。内陣右の物入も中古である。また、正面の虹梁形飛貫も建立後の補入で19世紀の様式である。建立年代を示す史料は発見していないが、厨子廻りの様式から18世紀前期の建立と推定される。

内陣左の物入れには葬儀の輿が収納されている。本尊が六地蔵であるから、この堂は葬儀に使用された可能性が高い。少なくとも供養は行なわれたであろう。辻に建つこと、壁がなく開放であること、炉がないことなど、この型の堂の典型的なものであり、しかも建立年代が古い点で、重要な堂である。（黒田）

図109　地蔵堂全景

図110　地蔵堂内部

図111　地蔵堂厨子

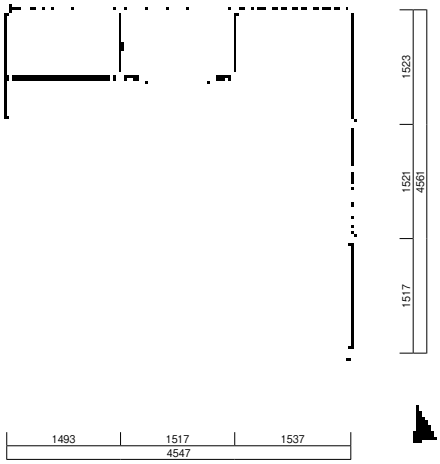


図112　地蔵堂平面図

12　兵主神社　香住区隼人

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺

享保十二年（1727　『兵庫県神社誌』）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　二手先　拳鼻　実肘木　雲紋板支輪　中備組物及び蟇股　二軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束笈形　千鳥破風妻飾木連格子　向拝角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備彫刻　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾力士彫刻　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

兵主神社は隼人の鎮守社で、もと三宝荒神社といった。

本殿は正面一間、側面一間の入母屋造で、屋根上に千鳥破風をつけ、正面には一間の向拝をつける。向拝の屋根には軒唐破風をつける。本体の中央よりやや後ろよりに板扉を設けて、後方を内陣とし、前方を外陣とする。内陣扉は左右二組なので二柱の神を祀ると思われる。本体正面も板扉で、こちらは一組である。

この建物の特徴としてはまず入母屋造本殿であることがあげられる。一般的に流造が最も数多い本殿形式だが、香美町では、入母屋造は比較的多い。

次に向拝の軒唐破風の輪垂木が本体正面まで引き込まれている点が珍しい。通常は軒唐破風は向拝柱筋までのものが圧倒的に多く、その場合、向拝桁より正面側の菖蒲桁が、桁の背面側に伸びて手挟となるが、この建物では内側の菖蒲桁は奥の建物本体まで伸び、菖蒲桁と組物との間に手挟を入れる。菖蒲桁に載る茨垂木はヴォールト状に奥に続く。向拝柱筋では妻飾に力士彫刻を飾り、本体桁上では耳の付いたような板蟇股を飾る。力士は背面からも見え、背中と尻の褌が省略せず作られているのが微笑ましい。

本体正面の台輪から垂木までの構成もなかなか見事である。組物は二手先で、正面中央にも組物を置くのは、内陣が二間になっていることと対応したものだろう。中央の組物と柱上の組物との間には蟇股を置く。一手目から二手目に板支輪をつけて雲紋を浮彫するのはよくあるが、ここでは向かって右間に日輪、左間に三日月を表す。これもあまり類のない意匠で、日月は宗教画にしばしば見られる。正面の縁下には羽目板をいれて草花を浮彫りする。これも近辺の神社で時折見

図115　兵主神社本殿向拝詳細

図113　兵主神社配置図

図114　兵主神社本殿全景

図116　兵主神社本殿正面

られるが、一般的には珍しい手法である。

以上のように、組物は二手先を組み、軒唐破風を引込み、向拝と本体に海老虹梁をいれるなど、建築構成は凝ったものだが、細部はそれほど華美に走らず、おさえた意匠である。

正面縁束と背面脇障子柱下部に明治三十九年（1906）に縁周りを修理した墨書がある。それ以外の保存は良好である。建立年代に関する確証は得られないが、『兵庫県神社誌』には享保十二年（1727）の再建で、大工は上岡村中井傳九郎藤原宗継としている。なんらかのよるべき史料があったと思われる。様式的にもこの年代で合うと考えられる。（黒田）

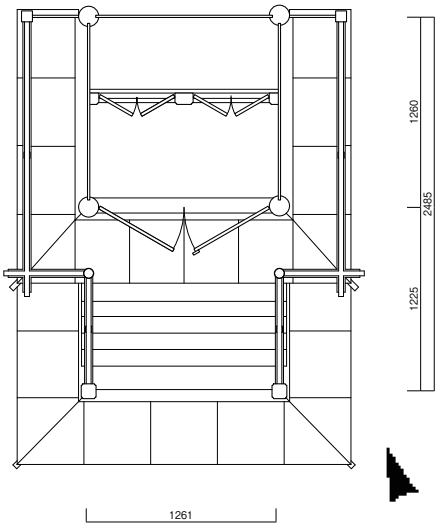


図117　兵主神社本殿平面図

図122　兵主神社本殿縁

図118　兵主神社本殿向拝詳細

図120　兵主神社本殿本体部

図119　兵主神社本殿向拝見返し

図121　兵主神社本殿本体部正面

13　不動尊　香住区隼人

不動尊　正面一間、側面二間、宝形造、銅板葺

18世紀中期

円柱　切目長押　虹梁形頭貫　木鼻　出三斗　実肘木　中備蟇股（正面のみ）　一軒繁垂木　三方切目縁　三方刎高欄

不動尊は隼人の集落から山中にわけ入った岩窟に作られた堂である。規模は小さいが、急斜面に作られているので懸造になっている。堂の正面は柱間の広い一間として建具は入れず、側面は二間のうち正面側を広く取って開放とし、後方は狭い柱間で板壁とする。背面は格子戸はめ殺しで、岩壁に面しているが、本尊らしきものは確認できない。すぐ横に滝があるので、おそらく滝での修行に関連する建物だろう。

正面側の方一間は吹き放しで、虹梁形頭貫で四方を固める、天井は竿縁天井である。この正面と側面に縁がまわり、腰組で縁を受ける。正面方一間の虹梁形頭貫は部分によって渦の方向を変え、木鼻も四ヶ所とも異なる。側面後方の虹梁形頭貫は短いもので、両端の袖切を入八双に作る。組物の肘木には笹繰がある。

このように、小さいながらも凝った細工が施された建物である。背面側の柱、桁から上全体、天井、縁の大部分は新材に取り替えられているが、その他の柱、虹梁形頭貫、組物、腰組、縁葛は当初材なので、全体の原形は保たれているだろう。

建立年代は不明であるが、様式から18世紀中期の建立と推定する。町内には類例のない建物で、修理は大きいが原形は保たれている。建物としても貴重だが、修験道に関連する建物と推定されるので、この地の宗教文化の一端を知る上でも重要である。（黒田）

図125　不動尊遠景

図126　不動尊詳細

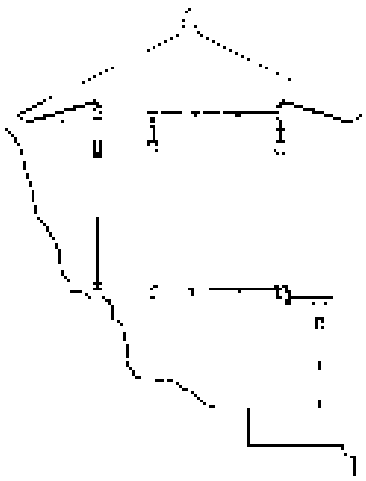


図124　不動尊断面図

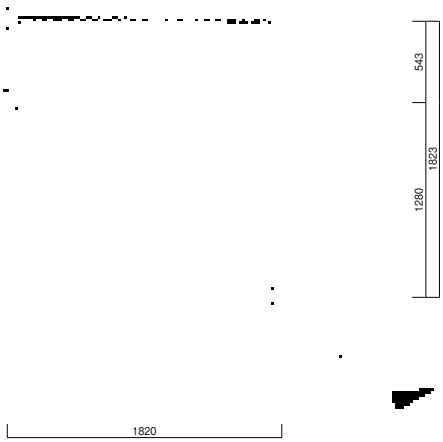


図123　不動尊平面図

図127　不動尊全景

14　八柱神社　香住区畑

本殿　一間社流造、板葺　　享保十四年(1729　板札)

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束笈形　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　手挟　連三斗　実肘木　中備龍彫刻　二軒繁垂木　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

八柱神社は畑の鎮守社である。この地は平家の落人伝説がある。享保十四年の木札には「謹請八大荒神社」と書かれ、また小松家の氏神と記している。

本殿は一間社流造で、長い薄板を屋根勾配の方向に葺く流し板葺である。身舎内部は中央付近に板扉を設けて前後に分かち、後方を内陣とし、前方を外陣とする。外陣正面は引違いの格子戸である。

特徴は、押さえ気味の意匠ではあるが、独特の個性が見られる点である。まず、組物の肘木の成が低く、笹繰りを施し、横に広がる形に仕上げている。この左右の広がりの基調は、庇では頭貫のせいが低いこと、木鼻の象の鼻が長く延びていること、雲龍の彫刻が頭貫の上一杯にひろがっていること、身舎では組物が全て連三斗になっていること、側面中備の蟇股と妻飾の笈形の形状などに共通する意匠である。側面の蟇股と手挟はこの時期にしては古風な輪郭を見せる一方で、正面の蟇股は雲紋彫刻の板蟇股となっていて時代相応な意匠である。

早くから覆屋があったらしく、保存状態はよい。背面の垂木が切断されていて、一軒か二軒か不明である。その他は縁から茅負まで当初材と思われる。

建立年代は享保十四年の木札がそれを示している。様式的にも合致する。(黒田)

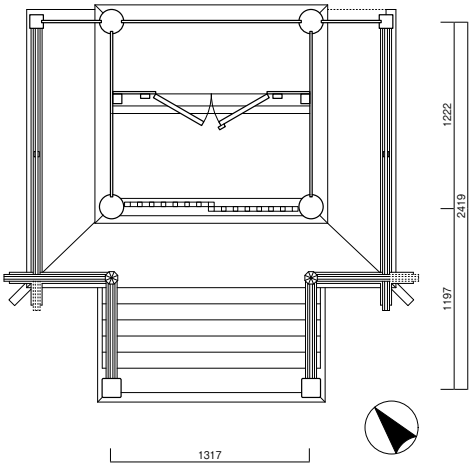


図128　八柱神社本殿平面図

図129　八柱神社本殿全景

図130　八柱神社本殿庇正面

図131　八柱神社本殿庇詳細

図132　八柱神社本殿庇見返し

図133　八柱神社本殿身舎

図134　八柱神社本殿妻飾

15　八柱神社　香住区土生

本殿　一間社隅木入春日造、軒唐破風付、板葺

19世紀中期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　尾垂木付二手先　拳鼻　実肘木　詰組　二軒扇垂木（正面二軒平行垂木）　妻飾板張り　背面陸梁束　庇角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備鶴彫刻　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾板張り　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

八柱神社は、聞取りによれば、土生地区の氏神で、もとは八大荒神社といった。

本殿は隅木入春日造で、板葺である。身舎正面に桟唐戸を設ける。

この本殿の大きな特徴は、軒が二軒の扇垂木であることである。一般に春日造では身舎の屋根が切妻造であるから扇垂木が用いられることはない。この本殿で扇垂木が用いられるのは、隅木入春日造なので、梁・桁と45度方向の隅木がある点にある。しかし、隅木入春日造であっても扇垂木とする本殿はほとんどない。扇垂木とした場合、背面が切妻造となるので納まりがつかないこと、庇では垂木が身舎から延長されるので、身舎で適当な垂木間隔であっても庇軒先にいたると開きすぎになることなどの不都合が起こるのである。そのようなことから、この本殿の側面では後方ほど平行に近づけ、背面で垂木が破風と平行になるように納め、正面側では、扇垂木とせず平行垂木としている。このような手法は、入母屋造本殿で地垂木を扇垂木、飛檐垂木を平行垂木とする九斗の9兵主神社本殿と比較すると大変興味深い。兵主神社の本殿から影響を受けつつ、独自の形態を主張しようとしたのではないだろう

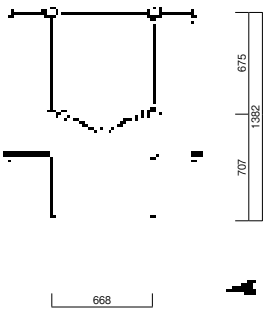


図135　八柱神社本殿平面図

か。九斗の兵主神社の場合も禅宗様の様式を濃厚に示していたが、ここでも同様に、柱に粽をつけ、尾垂木は強く反らせ、身舎一手目の上段の肘木が横に広がるなどの特色を持つ。

背面の軒の出は小さく、傍軒は板で覆い、妻飾も束を立てるだけでまったく装飾性はない。屋根は板葺で未完成にみえ、妻飾の板を張るだけである。このような扱いも九斗の兵主神社と似ている。覆屋がおそらく当初からあることと、見えない部分は簡素化するという考えかもしれない。

庇では、組物の斗が全て皿斗付となる。手挟は雲の彫刻と化して立体的である。

保存状況はよく、ほぼ当初の状態をとどめている。建立年代に関する確証はなく、様式から19世紀中期の建立と推定する。軒の構成に大きな特徴をもつ個性的な本殿である。

なお、境内には地蔵堂があり、葬儀の輿が保管されている。神社には似つかわしくないもので、昔は丘陵の一段下のもっとはなれた位置にあったという。このような堂の存在も九斗の兵主神社と類似する。（黒田）

図136　八柱神社本殿全景

図137　八柱神社本殿庇正面

図139　八柱神社本殿軒

図138　八柱神社本殿庇見返し

図140　八柱神社本殿身舎

16　大倉神社　香住区本見塚

本殿　一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、板葺

享保十四年（1729　棟札）

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　出組　拳鼻　実肘木　彫刻板支輪　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束笈形　庇角柱　切目長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備彫刻　二軒繁垂木　唐破風妻飾彫刻板　三方切目縁　擬宝珠勾欄　木階五級　浜床　浜縁

大倉神社は香美町東部の土生川上流の豊岡市境に近い山中に立地する。本見塚は豊岡から鳥取へ至る但馬浜街道の通る地であった。当社は聖武天皇の神亀五年（728）の創立と伝えている。

今は廃村になっている集落にあるため、**本殿**は傷みも大きいが、細部意匠に独自のものを持つ上質な建物である。

まず庇では、虹梁形頭貫の絵様が中央で接するくらいよく発達している。庇唐破風の妻飾は大きな花形の彫刻で例を見ない。身舎では組物を出組とするため支輪が入るが、これは板支輪で全面に波濤を浮き彫りする。中備の蟇股上の斗が異常に小さい。妻飾の大瓶束は結綿部分の細まり方が極端で、一方笈形は殆ど蟇股と見まがう形状をとる。台輪の木鼻は極端に先が尖っている。

このように随所に独特な意匠を持った佳作であって、多数残存する棟札の内の、享保十四年のものがこの本殿の建立を示すものと考えられる。携わった大工は上岡村の中井伝九良と森村の青山嘉七である。青山は大乗寺客殿の大工と同姓であって、一族であろう。（山岸）

図143　大倉神社本殿庇詳細

図144　大倉神社本殿妻飾

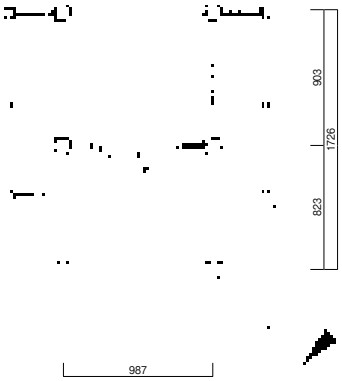


図141　大倉神社本殿平面図

図142　大倉神社本殿全景

図145　大倉神社本殿庇見返し

17　国主神社　香住区奥安木

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺

天保三年（1832 『兵庫県神社誌』）

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　尾垂木付二手先　拳鼻　実肘木　波彫刻支輪　詰組　二軒地垂木扇垂木　飛檐垂木平行垂木　妻飾虹梁大瓶束　千鳥破風妻飾虹梁大瓶束　向拝角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　根肘木　連三斗　拳鼻　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備彫刻　二軒繁垂木　唐破風妻飾彫刻板　三方切目縁　刎勾欄　木階五級　浜床　浜縁

国主神社は香美町の東端近くにある。崇神天皇の時代に創祀され、大宝四年（704）には郡司が祀ったと伝える。

本殿は10多田神社とほぼ同じ規模の小社で、多田神社と同様二手先の組物を用いて、軒の出を大きく、屋根を豪華に見せる。

装飾の付け方も多田神社に似ており、向拝の柱上に木鼻を二方向に据え、虹梁形頭貫を籠彫りの根肘木で受ける。向拝正面の中備や唐破風の妻飾も一面に広がる彫刻で埋める。

しかし国主神社では向拝の組物を三斗枠肘木組の上に連三斗を組んでいて相当複雑になり、見返しでは手挟が二個ずつ、計四個並ぶことになる。

なにより興味深いのは、本体部の軒で、地垂木が扇垂木、飛檐垂木は平行垂木となっている点で、このことにより打越垂木は不都合なく平行垂木とする事ができている。

腰組も、縁束に台輪を載せ、隅の組物には二段に拳鼻を組み、中備は雲紋を彫る大きな蟇股を据え、通肘木の上には巻斗を密に並べること、本体正面の扉小脇板に丸彫の彫刻を填め込むなど、個性がきわ立つ。

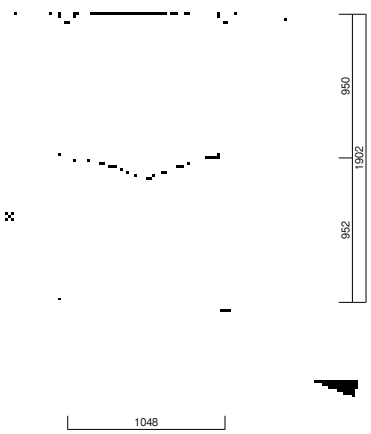


図146　国主神社本殿平面図

図147　国主神社本殿全景

図148　国主神社本殿向拝

図149　国主神社本殿本体部及び腰組

図150　国主神社本殿軒

建立年代を示す史料を実見はできなかったが、『兵庫県神社誌』には天保三年の棟札釈文を抄録しており、これを建立年代と認めてよい。（山岸）

図151　国主神社本殿向拝詳細

図152　国主神社本殿本体正面

図153　国主神社本殿本体部組物

18　沖野神社　香住区訓谷

芝居堂　桁行8.9メートル、梁間7.9メートル、切妻造、桟瓦葺、両側面下屋庇付、桟瓦葺

明治二十九年（1896　墨書）

角柱　足固貫　虹梁形飛貫　一軒疎垂木　妻飾束立

沖野神社は日本海に面した訓谷の集落にある。訓谷の氏神で、十月の祭礼に奉納される三番叟は江戸中期以来の伝統を伝えている。

芝居堂は沖野神社境内の広場にたつ。舞台の正面9メートルを、虹梁形飛貫を入れて柱を省略する。県内の農村歌舞伎舞台と同じ形態である。舞台には天井をはらず、内部に柱の無い舞台の屋根をささえる巧妙な梁組がみえる。右側面の下屋は前寄りに付いていて、中二階が謡などの座になる。左側面の下屋は後ろ寄りに付き、楽屋として使われていた。

そこここに役者の書いた墨書がある。壁は下見板張りだが、当初の形態かどうかはわからない。古材も交えて建てたらしい。

若干荒れてはいるが、この種の建築物として保存状

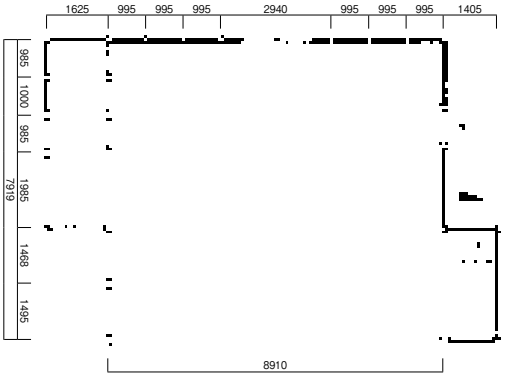


図154　沖野神社芝居堂平面図

図155　沖野神社芝居堂全景

態は良好である。建立年代は梁の墨書により、明治二十九年で、大工は沼田源太郎と黒崎兼造である。今も十月一日に村芝居が行われる生きた芝居堂として重要である。(黒田)

図156　沖野神社芝居堂内部

図157　沖野神社芝居堂小屋組

図158　沖野神社芝居堂小屋組

19　八幡神社　香住区無南垣

本殿　一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺

享保四年（1719　棟札・墨書）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　二手先　実肘木　拳鼻　雲彫刻支輪　詰組　詰組組物の間に蟇股　妻飾二重虹梁大瓶束笈形　一軒繁垂木　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形飛貫　木鼻　連三斗　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　唐破風妻飾蟇股　三方切目縁　刎高欄　木階五級　浜床　浜縁

八幡神社は香美町東部の佐津海岸、海に突出した岬の島山中腹に位置する。文永七年（1270）に石清水八幡から勧請し、その後、応安元年（1368）・天文二十四年（1555）などに社殿造営があった（『兵庫県神社誌』に棟札釈文所収）。

現在の**本殿**は中規模の一間社流造社殿である。身舎に尾垂木の付かない二手先組物を組んで、支輪には雲紋を彫る。全体に構造形式は複雑である。庇の柱上に各二方向に木鼻を付けるのは香住区内の社殿にしばしばみられるが、その正面向きの木鼻は狐か狼のようで、地方色を示す。興味深いのは身舎側面の板壁で、向かって右方は鹿、左方は象を浮彫にしていて、類例を見ない。

装飾は豊富であるが、絵様は端正で十八世紀前期の質の高い遺構である。棟札が現存するほか、はずされ

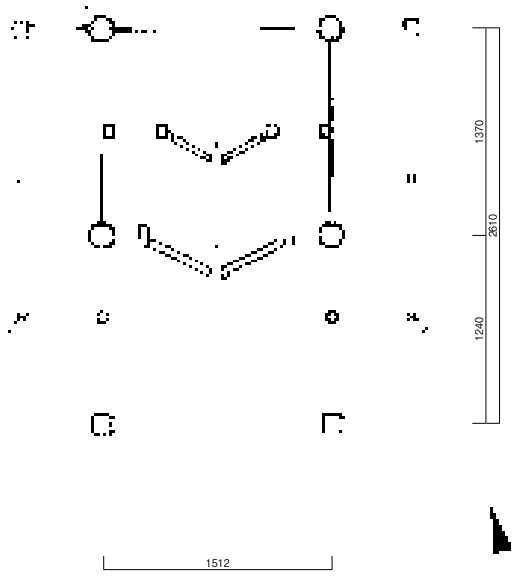


図159　八幡神社本殿平面図

た蟇股に墨書があって、享保四年の建立、大工は出石町の青山新左衛門、蟇股の作者は出石の福富権四郎である。

なお扉や勾欄の部材が中古材であり、内陣正面の扉は、元は今より前にあった痕跡が残る。（山岸）

図162　八幡神社本殿庇見返し

図160　八幡神社本殿庇詳細

図163　八幡神社本殿妻飾

図161　八幡神社本殿全景

図164　八幡神社本殿身舎左側面

図165　八幡神社本殿身舎右側面

20　八阪神社　香住区加鹿野

本殿　一間社流造、軒唐破風付、板葺　　18世紀後期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　実肘木　板支輪　中備蟇束　一軒繁垂木　妻飾虹梁蟇股　庇角柱　切目長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　軒唐破風　妻飾板に大根浮彫　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階四級　浜床　浜縁

八阪神社は矢田川が蛇行する左岸の加鹿野村にあり、古くは牛頭天王社と言った。

本殿は小規模な一間社流造社殿である。身舎正面に板扉を設ける。規模、形式ともに一般的であるが、細部意匠に類例の少ない特色がある。

まず身舎組物は、出組で肘木に笹繰を施している。庇組物は斗にすべて皿斗が付く。このような凝った組物の割には、支輪は板支輪で、蛇腹を墨で描くだけである。庇の虹梁形頭貫の見返しの絵様、実肘木の絵様も同様に墨で描き、垂木も墨で塗られており、これは珍しい彩色であるが、当初からかどうかはわからない。

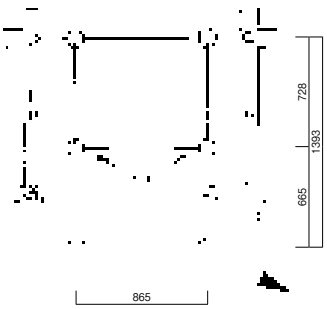


図166　八阪神社本殿平面図

身舎の妻飾の蟇股の中に鶴の彫刻を入れるのは、八原の23三柱神社本殿に類似する。正面の軒唐破風の妻飾は板に大根を浮彫りにしたものであり、庇中備の蟇股は日輪で、めでたい感じがよく出ている。木階の登高欄は一枚板で作り、菊水紋を彫る。

屋根は横板葺で、軒唐破風の屋根の前面は唐破風形に仕上げた板にこけら葺に見せかけた彫刻を施したものである。その後方は茨垂木が露出している。おそらく、当初から覆屋に入っていたとおもわれ、雨仕舞に配慮せず屋根を葺いている。

建立年代はよるべき史料がないが、様式的に18世紀後期の建立と思われる。大工は板に彫刻したり墨を用いたりしているので、建築以外の技術で建物を飾ることにも相応の自信があったのだろう。地方色が濃厚で、得難い味わいがある。保存状態はよい。（黒田）

図167　八阪神社本殿全景

図169　八阪神社本殿庇見返し

図168　八阪神社本殿庇

図170　八阪神社本殿妻飾

21　遍照寺　香住区小原　　高野山真言宗

観音堂　正面三間、側面四間、宝形造、鉄板葺

享保二十一年(1736　棟札)

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　出三斗　実肘木　詰組　内法長押上中備簑束　二軒繁垂木　四方切目縁

大師堂　正面三間、側面三間、宝形造、向拝一間、鉄板葺　19世紀中期

角柱　切目長押　内法長押　虹梁形頭貫　木鼻　台輪　木鼻　出組　実肘木　詰組　二軒繁垂木　四方切目縁　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　根肘木　三斗枠肘木　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木

鐘楼　桁行一間、梁間一間、入母屋造、桟瓦葺

宝永八年（1711　棟札）

角柱　腰貫　飛貫　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　二軒吹寄垂木　妻飾虹梁大瓶束　笈形

遍照寺は矢田川中流域の小原の集落にある真言宗寺院である。行基の開創と伝えるが、確実なところでは弘治三年（1557）の「但馬国にしかた日記」に院家の名が見える。寛文四年（1664）と宝暦年中（1751～64)に火災に遭っている。椋橋神社の別当寺であった。

境内の最も奥に椋橋神社があり、その参道沿いに東に観音堂、西に大師堂があり、南に住坊がある。いかにも椋橋神社の別当寺らしい伽藍配置である。

観音堂は本堂に相当する仏堂と考えられる。香美町内では稀な本格的な三間堂であって、規模も大きい。

図171　遍照寺配置図

奥行は四間あって、正方形平面ではないが、宝形造の屋根を載せる。

内部には側通りと柱筋を揃えて四本の柱を立てて、前の一間通りを外陣、後方三間分を内陣とする中世仏堂形式である。内外陣境は内法長押を通し、その上は筬欄間・板壁で仕切られている。

内部の四本の柱を虹梁で繋ぎ、外陣は海老虹梁、内陣は通常の虹梁で側柱と繋いで、側一間通りは化粧屋根裏、四本の柱内部（側通りの柱間で数えれば間口一間奥行二間）は格天井を張っている。従って禅宗様仏殿風の架構が組まれていることになる。

組物は出三斗ではあるが詰組になっているので、これもいちおうは禅宗様仏殿の構えをとっている。

細部ではすべての側柱に頭貫木鼻が付けられること、

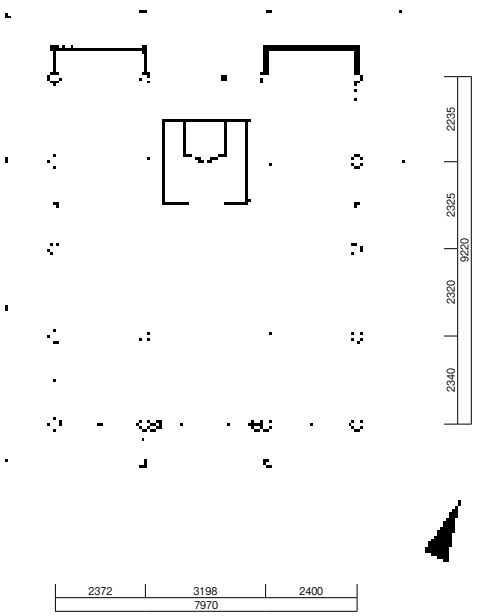


図172　遍照寺観音堂平面図

図173　遍照寺観音堂全景

頭貫の下、内法長押の上にも中備を付けることは独特である。内部四本の柱の上の組物はせいの高い皿斗を二段重ねた独特の組物であり、この四本の柱を繋ぐ虹梁中央にも同様の大斗を使った三斗が据えられている。

内外陣境には各柱間の虹梁下に大きな蟇股を据えて内陣正面を飾っている。

正面中央間と内外陣境各間には、無目鴨居の下に蔀吊金具の痕跡が残り、かつては内外陣は蔀で仕切られていたことが知られる。

頭貫の多くが取り替えられ、正側面の垂木も近年取り替えられている。元は茅葺だと伝えており、屋根葺材を変更した時に相当の修理が行われたものとみられる。

内陣内部の二本の柱の後方に須弥壇を設けて、その上に厨子が載せられている。正面一間、側面一間、入母屋造妻入、正面軒唐破風付、木瓦葺である。二手先組物を組んで、支輪に水波文を彫り、唐破風の妻飾には龍の顔を置く。脇障子の笠木は先端を蕨手とするなど、装飾豊富な上質の建物である。

以上のように、観音堂は禅宗様仏殿の構造を基調としながら随所に工夫をこらした意匠をちりばめた質の高い建物で、それは厨子に至るまで貫徹した特質である。中世仏堂形式の平面構成を持った本格的な三間堂としての価値が高く、縦横に架かる虹梁は圧巻である。ただし部材の取替の多いのが惜しまれる。

大師堂は観音堂に比べるとやや規模の小さい三間堂である。角柱を使って、内部には柱を一切立てない。背面寄りに須弥壇を据えて、入母屋造妻入の厨子を安置する。内部は一面に折上小組格天井を張っている。詰組を用い、頭貫は虹梁形として軒先は華やかである

図174　遍照寺観音堂外陣

図175　遍照寺観音堂正面

図176　遍照寺観音堂内外陣境

図177　遍照寺観音堂内陣

図178　遍照寺観音堂内陣・厨子

が、正面は中央間の柱間寸法を広くとり、両脇間が狭くなるため、両脇間の詰組は近接する反面、中央間は組物の数を増やすのではなく、間隙に獅子の彫刻を埋めている。隅での台輪の出が頭貫木鼻より短く、異例の納まりとなっている。

向拝廻りも彫刻装飾が豊富で、とりわけ向拝側が水平に伸びる海老虹梁は特異である。向拝中備の龍彫刻は柏原の彫物師中井丈五郎橘正次の作である。

内部では側面第三間と背面の両脇間の全部で四間の壁面には腰長押を打って供物棚とし、壁に真言八祖を描く。真言系寺院にしばしばみられる設えである。

大師堂の建立年代を示す史料は見いだせなかったが、様式からみて幕末の建立であろう。時代相応の装飾を持った佳作である。（山岸）

図179　遍照寺観音堂内陣架構

図180　遍照寺観音堂厨子詳細

図181　遍照寺大師堂全景

図182　遍照寺大師堂背面

図183　遍照寺大師堂内部

図184　遍照寺大師堂内部壁面

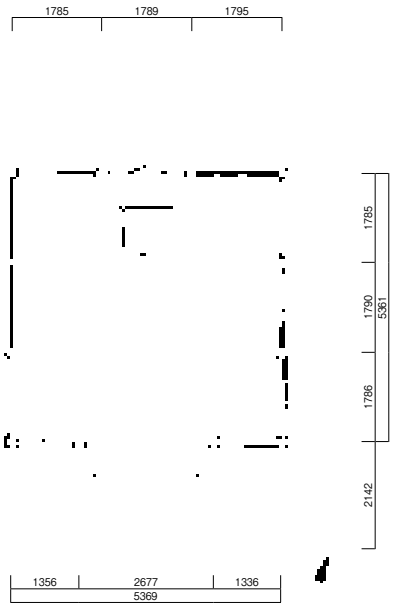


図185　遍照寺大師堂平面図

鐘楼は、方一間、吹放しで、四本の柱は内転びのある、一般的な形式を持っている。細部意匠に特色がある。もっとも目立つのは垂木で、狭い間隔の二本組の垂木と一本の垂木を交互に配るいわゆる吹寄せの配置で、数少ない凝った配列方法である。飛貫と頭貫の間には波紋様を浮彫りした板を填め、その上の台輪と桁の間には雲紋を浮彫りした板を填める。鐘楼内部は格天井をはる。

保存状態は良好で、柱から垂木上の化粧裏板まで当初材が残り、裏甲から上は新しくなっている。基壇も基本的には古いもので、最上部の延石と礎石が新しい。建立年代は棟札によって明らかで、宝永八年（1711）、大工は出石住の藤原朝臣鳥羽源四郎である。建立年代が古く、上質の鐘楼である。（黒田）

図186　遍照寺大師堂向拝

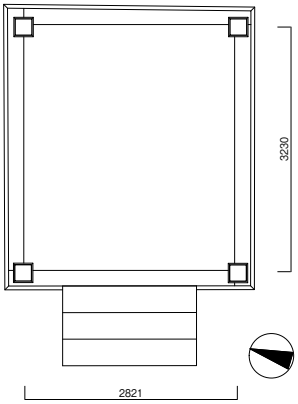


図188　遍照寺鐘楼平面図

図189　遍照寺鐘楼全景

図187　遍照寺大師堂厨子

図190　遍照寺鐘楼詳細

22　薬師堂　香住区藤

薬師堂　正面一間、背面三間、側面五間、入母屋造、妻入、桟瓦葺　19世紀中期

角柱　足固貫　飛貫　組物なし　中備なし　一軒疎垂木　妻飾板壁

藤の薬師堂は矢田川中流の右岸にある。沿革は不詳である。

薬師堂は入母屋造妻入の簡素な村堂である。奥行五間の内、正面一間通りのみを吹き放ちとして、後方は三方を板壁、正面のみ引き分けの格子戸で閉じた閉鎖的なお堂である。内部は吹き放ち部分も含めて一面に格天井を張っている。

背面に張り出し部を設けて、厨子を設え、中にさらに小さな厨子を納める。厨子正面の二本の角柱間に木鼻付の虹梁形頭貫を入れるものの、柱上に組物は組まない。

ところで、側面第一間・第二間には内法貫が入れられ、前から二本目の柱は管柱である。また前から二間目の柱筋に梁行に虹梁形飛貫が入れられている。このことから、当初は前二間分が吹き放ちであり、管柱は当初はなく、虹梁形飛貫の通りで外陣と内陣が緩やかに区切られていたものとみられる。現在の吹き放ち部分は内部より床を一段低くしているが、当初は内部と同じ床高で納めた框の枘穴も残っている。内部には元は囲炉裏が組まれていたことが、床下の石組から判明する。

以上のように当初は比較的開放的なお堂であったこ

図191　薬師堂全景

図192　薬師堂側面

図193　薬師堂正面吹き放ち部分

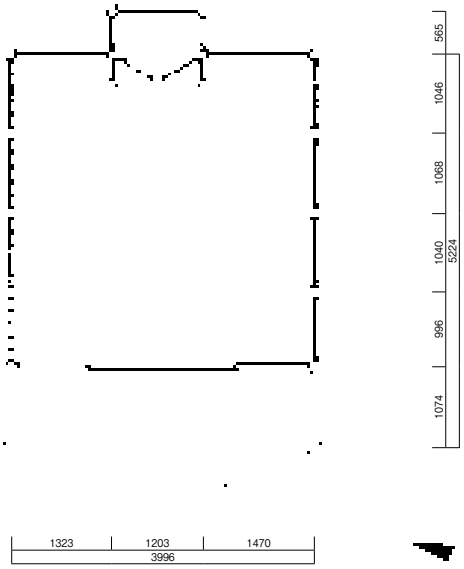


図194　薬師堂平面図

とが分かる。明治四十四年（1867）の修理棟札があるが、これは桁から上を修理したものらしく、建立は幕末まで遡ると考えられる。（山岸）

図195　薬師堂内部見返し

図196　薬師堂厨子

図197　薬師堂床下の囲炉裏の石組

23　三柱神社　香住区八原

本殿　一間社流造、板葺　　18世紀後期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　拳鼻　実肘木　彫刻板支輪　中備蟇股　二軒繁垂木　妻飾虹梁蟇股　庇角柱　切目長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜縁

三柱神社は矢田川中流域の八原の集落にある。

本殿は小規模な一間社流造で、勾配方向に長い板を葺く流し板葺である。流し板の継ぎ目に目板を打つ。身舎正面は桟唐戸である。

構造形式は一般的であるが、細部に強い個性がある。身舎組物は出組で、肘木にはすべて笹繰があり、拳鼻は抽象的な象鼻で面白い。最も目につくのは妻飾で、大虹梁の上の妻面いっぱいに大きな蟇股を入れる。向かって左は両翼を頭の上で円形に丸めた鶴、左は笹にみえるが、脇障子の彫刻を参照すると竹と判断できる。板支輪に水鳥の彫刻を立体的に彫り出している。左脇障子は松竹に鶴亀、右脇障子は鯉の滝登りである。中備の蟇股の輪郭はわりに古風で、植物彫刻が内部におさまっている。妻飾の大胆さに比較すると大人しい意匠である。

切目長押・敷居・鴨居・内法長押・壁・扉・縁周りと庇の垂木より上が後補材で、取替が著しいが、当初の形と意匠は保たれている。個性的な本殿である。建立年代は確証がないが、様式的に18世紀後期の建立と推定する。

妻の大きな蟇股、虹梁絵様の若葉が二股に分かれる意匠など、20八阪神社と同じ大工の手になる作と考えられる。（黒田）

図198　三柱神社本殿全景

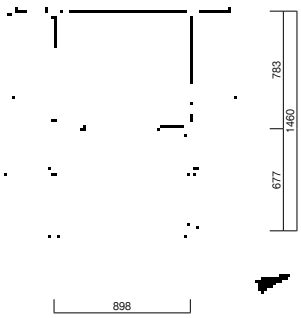


図199　三柱神社本殿平面図

図200　三柱神社本殿庇

図201　三柱神社本殿庇見返し

図202　三柱神社本殿妻飾

24　白山神社　香住区市午

本殿　一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺

宝暦五年（1755　棟札）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　拳鼻　実肘木　板支輪　中備蟇股　拳鼻　二軒繁垂木　妻飾大瓶束笈形　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　手狭中備彫刻　二軒繁垂木　唐破風妻飾彫刻　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

白山神社は、市午集落の西側の山裾に位置する。明和五年（1768）に現社地へ移転するまでは、海見山の麓にあったという。

本殿は、小規模な一間社流造で、土台の上に建つ。

身舎は正面に板扉を設け、側背面は板壁を入れる。板壁には左右に柳・山、背面に笹を描く。内部は前後に二室に分け、室境に板扉を入れる。身舎の柱は円柱で、切目長押･内法長押を廻し、頂部に台輪を載せる。内法長押より上の小壁や琵琶板はいずれも波や唐草の彫刻で飾り、通肘木・虹梁間に入れた板支輪には瑞雲

図203　白山神社本殿全景

図204　白山神社本殿唐破風妻詳細

を描く。妻飾は虹梁を壁面から一手分先に出し、せいの高い大ぶりな笈形付の大瓶束を載せる。屋根の正面には千鳥破風を付ける。

庇は軒唐破風を付け、軒桁に架けた菖蒲桁の下端をそれと同じ長さの長大な実肘木で受ける。実肘木に彫られた絵様は菖蒲桁にまで延び、両者を一体的に扱っている点が特徴である。軒唐破風の菖蒲桁の尻は独特な形状の手挟とする。庇柱の中備に豪華な椿の彫刻を柱間いっぱいに入れ、かつ軒唐破風の妻飾にも牡丹の彫刻を配し、正面を飾る。身舎柱と庇柱は海老虹梁でつなぎ、身舎側は木鼻状に繰形を施した根肘木で受ける。木階の登高欄は繰形を施したこの地域独特の板高欄である。

軸部・組物・垂木などには赤色の塗装が残っており、彩色を施し豪華に仕上げた時期のあったことがわかる。

建立年代は、棟札から宝暦五年（1755）であると考えられる。虹梁形頭貫や妻面虹梁などの絵様は、いずれも建立年代の割に発達している印象を受けるが、やや似た意匠を持つ梶原の25八坂神社の建立年代が元禄七年（1694）であることをふまえるならば、発達した意匠がこの地域の特徴であるとすることができよう。地域的な特徴をよく残す遺構として貴重である。

（登谷）

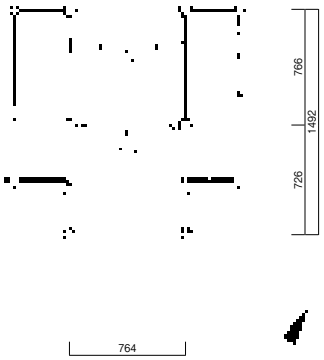


図207　白山神社本殿平面図

図208　白山神社本殿身舎

図205　白山神社本殿身舎

図209　白山神社本殿庇見返し

図206　白山神社本殿縁廻り

図210　白山神社本殿妻飾

25　八坂神社　香住区梶原

本殿　桁行二間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺

元禄七年(1694　棟札)

後方一間四方円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　三斗枠肘木　実肘木　中備平三斗　拳鼻　実肘木　前方角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　正面妻飾虹梁蟇股　背面陸梁束　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

八坂神社は梶原の鎮守社である。

本殿は極めて特異な形式を持っている。平面的な構成は一間社流造ないし春日造と同一で、円柱の身舎と角柱の庇からなるような形をとっているが、屋根は身舎と庇の区別なく、全体に奥行きの深い切妻造妻入の屋根をかけた点が大きな特徴である。後方一間四方の内陣は、円柱を切目長押･内法長押･頭貫･台輪で固め、組物を置くという通常の構成である。三方に縁を回し、脇障子を立てるのも通常形態である。しかし、内陣正面の上部は妻飾を設け、虹梁大瓶束笈形で飾る。内陣は奥行中央付近に扉を設けて後方を神座とする。

前方は角柱を虹梁形頭貫で繋ぎ、組物を組み、円柱との間は海老虹梁で繋いで、通常の庇の構成だが、ここでも正面上部に大きな蟇股の妻飾が設けられる。切妻造の傍軒の構成がそのまま身舎正面まで伸びている形とも見ることができる。

細部でも特徴がある。木鼻は上に伸び上る古風な形態である。虹梁絵様は若葉が非常に発達して横によく延び、後述の建立年代にしては進歩的な形態である。木階の高欄は上端に繰形を施した板である。縁の正面両脇間の羽目板にはオモダカ、脇障子には桐を浮彫する。全体に紅色の彩色を施し、紋様・絵様や、内陣の台輪と桁の間の羽目板は墨塗りである。身舎の板扉には墨で桟唐戸の桟を描く。

飛檐垂木は当初材のようだが、化粧裏板・木負・茅負・正面破風板が新しく、屋根も新しい。この修理は平成十四年に行われた。その他の部分の保存状態は良好である。建立年代は､棟札により元禄七年(1694)で、大工は浜坂村の藤原森上源太夫である。

切妻造妻入は珍しい形態である。筆者の知る範囲では、丹波市、加西市に若干の類例がある。文献上では元禄十二年の『神道名目類聚抄』に皇子造（春日造）について、入母屋造妻入社殿の図があるので、なんら

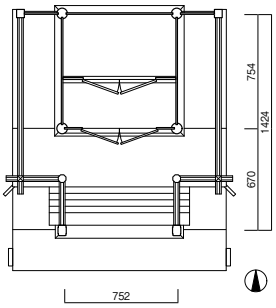


図211　八坂神社本殿平面図

図212　八坂神社本殿全景

図213　八坂神社本殿側面

図214　八坂神社本殿見返し

かの関連があるのかも知れない。建立年代が古い割には意匠も先進的なもので、この時期の地域の大工の技術と個性をうかがうことのできる傑作のひとつである。（黒田）

図215　八坂神社本殿正面妻飾

図216　八坂神社本殿円柱部正面妻飾

図217　八坂神社本殿側面

26　長福寺　香住区浜　　曹洞宗

山門　桁行三間、梁間二間、入母屋造、桟瓦葺

大正十五年（1926　彫刻刻銘）

親柱円柱　虹梁形頭貫　冠木　三斗枠肘木　控柱筋と虹梁形頭貫・飛貫・腰貫で繋ぐ　控柱円柱　虹梁形頭貫　木鼻　出組　拳鼻　実肘木　中備彫刻　二軒扇垂木　妻飾虹梁束

長福寺は余部駅にほどちかい山陰本線の南方の山麓に所在する曹洞宗寺院である。

山門は八脚門で、棟通りの柱筋に冠木がある。柱はすべて円柱で親柱と控柱の区別はない。柱間はすべて吹放しで、扉の構えもない。

柱はすべて桁行方向、梁間方向の虹梁形頭貫でつなぎ、両側面のみ腰貫・飛貫をいれる。控柱の組物は出組で、柱上の組物が横に広がる禅宗様の形である。組物の間は中備というよりは彫刻を充填する。彫刻は正面中央間が龍、両脇間は波涛、背面中央間は飛龍、両脇間は雲である。頭貫の下には彫刻を施した持送りをいれる。控柱上の頭貫木鼻はすべて動物彫刻である。

親柱筋側面は（頭貫）木鼻がなく、冠木の先端が突き出す。控柱と親柱をつなぐ虹梁形頭貫は親柱の頂部にかかり、上の冠木と噛み合う。親柱筋も虹梁形頭貫でつなぐが、上記の控柱とつなぐ頭貫より下方におさまる。冠木の上に二手出る組物を置くが、手先方向の格縁を支えるだけである。天井は格天井、垂木は二軒扇垂木である。

建立年代は、聞き取りによると大正十五年である。龍彫刻にも「彫刻師／香住一日市／本多正一／大正十五年」の銘があり、別の個所には施主の名前もある。平成十二年に屋根葺替を行った。保存状況はよい。

これほど重厚な門は珍しく、香住の5大乗寺山門とよく似ているから、それを参考にしたと推定される。飛龍などの彫刻も共通点が多い。大乗寺では親柱がごひらの角柱であり、扉構えもあって、八脚門の形式を残しているが、この門では親柱・控柱の差異は少なくなり、棟下の冠木が形式を示すだけとなっている。大乗寺山門は型を乗り超えようとする傾向があったが、近代になってもなお同じ方向に進んだといえる。彫刻の質も高く、近代和風建築の門として注目すべき力作である。（黒田）

図218　長福寺山門全景

図219　長福寺山門側面

図220　長福寺山門隅詳細

図221　長福寺山門中央間詳細

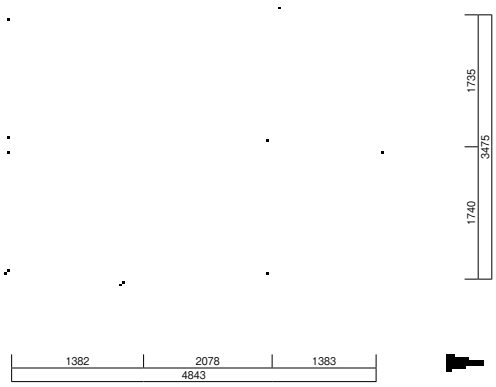


図222　長福寺山門平面図

図223　長福寺山門棟通り組物

27　八柱神社　香住区西

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、正面千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺　　19世紀前期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め尾垂木付三手先　拳鼻　実肘木　中備尾垂木付三手先組物および蟇股　拳鼻　実肘木　二軒扇垂木（正面のみ平行垂木）　妻飾板覆　向拝角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾獅噛神　三方切目縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

八柱神社は余部集落の西の山裾に位置する。「出石封内明細帳」には若宮神社とある（『兵庫県の地名』）。境内の南東に立つ鳥居をくぐり石段を登るとお堂と手水舎があり、さらに石段を上ると正面に本殿、左手に稲荷社が立つ。以前はこのお堂で祭礼や正月に参詣者を迎えていたというが、現在は使用されていない。

本殿は入母屋造、平入の社殿で、規模は方一間で、正面に一間の向拝を付ける。本体は切石の亀腹の上に建つ。本体の円柱は木製礎盤の上にのり、切目長押、内法長押をまわす。

身舎の正面と側面に切目縁をまわす。柱間装置は、正面に桟唐戸を設け、側面・背面に一枚板の板壁を入れる。身舎の垂木は二軒で、正面は平行垂木、側背面は扇垂木である。

組物は、尾垂木と拳鼻をもつ三手先を詰組とする。組物の間には蟇股を入れ、三段の壁付通肘木と一手目の通肘木の上に隙間なく巻斗を並べる。この組物の並べ方は、村岡の55勢主山神社本殿と共通する。また、縁下では、縁葛を平三斗で受け、四隅の組物のうち縁の外側に出る部分を拳鼻とする。

向拝の組物の斗は皿斗付きである。中備には、組物の間いっぱいに龍の彫刻を入れる。軒唐破風は向拝柱筋で終わるのではなく、本体部まで作られていて、本

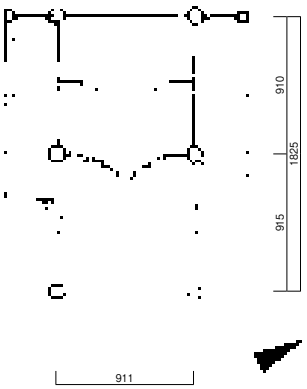


図224　八柱神社本殿平面図

図225　八柱神社本殿全景

図226　八柱神社本殿向拝詳細

図227　八柱神社本殿向拝見返し

体の丸桁を虹梁形として彫刻を置いている。

絵様の様式からみて、建立年代は19世紀前期と推定される。天保六年(1835)の屋根葺替と明治二十九年(1896)の修理棟札が残るが、大きな改造はみられない。

規模はそれほど大きくないが、本体の三手先組物やその並べ方は手が込んでいる。造作も丁寧で、保存状態も良い。19世紀前期の装飾的な造形が確認できる上質な本殿である。(岸)

図228　八柱神社本殿本体部

図229　八柱神社本殿本体部正面

図230　八柱神社本殿本体部組物

28　美伊神社　香住区御崎

本殿　一間社流造、柿葺　　18世紀中期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　組物なし　中備なし　一軒吹寄垂木　妻飾虹梁大瓶束　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　繋海老虹梁　三斗枠肘木　実肘木　一軒疎垂木　正面のみ榑縁　木階五級

御崎は日本海に面した集落で、平内・日吉・美伊の三社の神社がある。前二社は集落近くにあるが、美伊神社は集落のある尾根から、西の尾根を一つ越えた二つ目の尾根にある。この立地の理由はわからないが、平家の落人伝説と関係するのかもしれない。

本殿は小規模な一間社流造で、正面は板扉である。木階は庇柱の中程に付き、その下は吹き放しなので、見世棚造風である。

細部の特徴としてはまず、庇には組物を組むのに対し、身舎に組物がないのが珍しい。身舎柱には禅宗様風の粽をつけ、頭貫の上で桁と梁を組んでいる。

軒は疎垂木であるが、柱上では垂木の間隔を狭くして、吹寄せ垂木となっている。これは柱上で梁の鼻先を手挟むためである。正面中央でも吹寄せとしている。

虹梁絵様の若葉は横に長く流れる傾向があり、庇虹梁、妻飾虹梁ともに中央付近にまで若葉が伸びている。

身舎正面の内法長押と頭貫の間の羽目板に、牡丹唐草を浮彫して、胡粉と墨で彩色を施すのも珍しい。庇の蟇股には、梵字で阿弥陀三尊が彫られている。

棟は本格的な作りの箱棟で、全体を黒く塗り、側板に朱で破魔矢の文様を入れる。矢は中央から両端に矢尻が向くように鏑矢と雁股矢が配置されている。棟の上には千木・堅魚木を置く。千木も足元に

図231　美伊神社本殿全景

反りをもち、下端に猪目を飾る。

保存状態は良好で、ほぼ完存する。建立年代は様式的に18世紀中期と推定する。

以上のように、大工は細部に力をおきつつ、身舎の組物のない個性的な本殿を作ろうとしたのであろうか。（黒田）

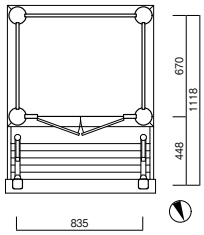


図232　美伊神社本殿平面図

図233　美伊神社本殿庇見返し

図234　美伊神社本殿妻飾

図235　美伊神社本殿屋根

29　十二社神社　香住区鎧

本殿　一間社流造、柿葺　　延宝四年（1676　棟札）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　庇角柱　切目長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木　三方切目縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

大放神社　一間社流造、板葺［香美町指定文化財］

16世紀後期、18世紀改造

身舎円柱　切目長押　正面のみ内法長押　大斗肘木　中備なし　妻飾陸梁束　板軒　庇円柱　腰貫　頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋虹梁　中備蟇股　板軒　三方榑縁　高欄なし　木階五級　浜床

十二社神社は、鎧集落の北側、港の東側の山裾に位置する。本殿は覆屋に入り、隣接する別棟の覆屋に大放神社本殿が置かれる。

本殿は中規模の一間社流造である。正側面に縁を廻し、正面には五級の木階と浜縁を備える。登高欄は、地覆の上に繰形を施した板を載せる、この地域に特徴的な形式をとる。

身舎は正面に引き違いの格子戸を入れ、側背面は板壁とする。内部は前後に二室に分け、室境には中央と左右に板扉を設ける。柱は円柱で、縁下まで円形に加工する。表面は著しく風蝕しており、建立年代の古さを窺わせる。柱頂は頭貫でつなぎ、絵様を彫らない木鼻を付ける。さらに、実肘木にも絵様はなく、この建物の特徴となっている。

庇は角柱で、頂部を虹梁形頭貫でつなぎ、柱に挿した持送で受ける。虹梁の端部は表面に独特な模様を彫

図236　十二社神社本殿庇詳細

った象鼻とする。柱・組物ともよく風蝕している。

建立年代は、棟札から延宝四年（1676）であることがわかる。妻の虹梁は袖切眉の曲線が単純であり、かつ絵様も細い線で正円に彫られていることがその裏付けとなる。また、部材は、風蝕差や絵様の形式から少なくとも三時期に分けることができ、建立以降、二度の大規模な改造・修理のあったことがわかる。一度目は軒桁より上部を取り替えるとともに、庇廻りでは虹梁形頭貫の持送、獅子を彫った木鼻を加えている。さらに、庇柱・脇障子柱には架木・平桁の痕跡があり、高欄もそのときに取り替えたと考えられる。改造の時期は、木鼻や板高欄の絵様から18世紀後期であろう。２度目は、棟木や垂木の取り替えである。改修の時期は部材の風蝕差から近代と推測される。

町内の本殿のなかでは建立年代が古く、この地域の本殿の歴史を考える上で、貴重な遺構である。（登谷）

大放神社は本殿に向かって右手に立つ境内社である。古くは大宝天王社と呼ばれ、昔から漁民が尊崇してきた神社といわれている。

建物は小規模な一間社で、土台の上に柱を立てる。身舎も庇もともに円柱を使い、縁も縁束を立てず、挿肘木状の隅叉首と根太で支えるなど、変則的である。

全体には古風な部材が目立つが、おおむね三時期分が混在していると考えられる。庇の頭貫・木鼻、組物、繋虹梁、身舎内法長押、身舎内部の幣

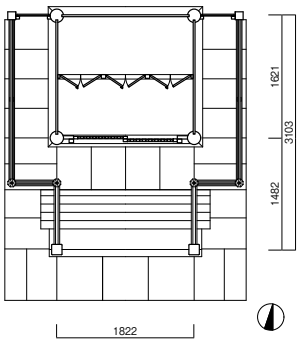


図238　十二社神社本殿平面図

図237　十二社神社配置図

図239　十二社神社本殿正面

図240　十二社神社本殿側面

図241　十二社神社本殿妻飾

図242　十二社神社本殿繋海老虹梁

軸構は最も古い部材である。庇の肘木は幅で1.1/10の面をとり、繋虹梁もそれに準ずる面の大きさである。大斗のせいも高く、幅に対するせいの比率は0.85である。頭貫木鼻の形状も近世的なものとは全く異なり、中世の折衷様に見られる意匠である。

身舎の組物・柱・切目長押・妻飾なども古風であるが、最も古い部材に倣って造られた二次的な部材のようである。身舎の桁には面取があるが、これは擬古的な補修材と見られる。

部材の取替が多い事もあって、判断は難しいが、当初材は中世末期、16世紀後期頃まで遡ると考えられる。

町内で3棟の中世の建物の内の1棟であり、貴重である。なお、正面以外の内法長押や、左側面の切目長押などが欠失していて、傷みは著しい。（山岸）

図244　十二社神社大放神社全景

図245　十二社神社大放神社側面

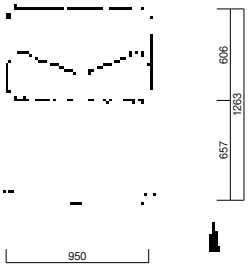


図243　十二社神社大放神社平面図

図246　十二社神社大放神社屋根

図247　十二社神社大放神社庇詳細

図248　十二社神社大放神社庇見返し

30　大運寺　村岡区東上　　日蓮宗

本堂　桁行22.3メートル、梁間9.3メートル、入母屋造、桟瓦葺、向拝一間、桟瓦葺

明和二年(1765　寺蔵記録)

角柱　敷居　鴨居　飛貫　桁二段　組物なし　一軒疎垂木　妻飾板張り　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　繋海老虹梁　連三斗　実肘木　中備蟇股　一軒疎垂木

大雲寺は日蓮宗寺院で、村岡市街地の南西部にある尾白山の麓に位置する。

本堂は三室が前後二列にならぶ方丈形式で、向かって左の庫裏部分も含めて一体の屋根におさまっている。調査したのは方丈形式部分のみである。

方丈形式の六室の正面と右側面には縁が廻る。中央列奥が仏間で、板間に追い廻し(正面と両側面)に畳を敷く。正面側の室中と仏間の境には虹梁形飛貫を渡し、上部を三間に割って、彫刻欄間を入れる。中央は飛天、右は唐獅子牡丹、左は鳳凰で、框には施主の名前がある。仏間正面の部屋境から二間奥の中央に円柱を立て、その奥を仏壇とし、両脇間を位牌壇などとする。仏壇正面には簡素な壇を設けている。円柱には三斗枠肘木の組物を置き、中央間、両脇間ともに虹梁形頭貫でつなぐ。中備は蟇股である。虹梁形頭貫の下の柱際には菊花を籠彫りにした持送りをつける。仏間の天井は折上格天井で、仏壇正面組物の上に折上部分にそった手挟状の持送りを入れる。仏間とその正面側の大間は虹梁形飛貫で画されるが、建具はなく一体的である。

正面側の三室は、互いに二本溝の敷居・鴨居で仕切られ、鴨居上は繊細な松葉菱紋様の欄間とし、三室とも棹縁天井を張る。右奥の間は背面側に床と棚、その右側面に付書院を備え、棹縁天井を張る。

外部では仏間正面に向拝をつけ、側柱筋に桟唐戸を吊る。向拝柱と側柱は海老虹梁でつなぎ、向拝屋根は本屋根より一段下に別屋根で設けている。

向拝屋根が取りつく桁はせいの高い桁で、正面・側面・背面とまわる。現在の屋根は、この一段上に束で支えた桁に垂木をかけ、桟瓦葺とする。本来は茅葺で、上の桁に茅葺きの急勾配の垂木をかけ、下の桁に緩勾配の瓦葺下屋の垂木をかけたと思われる。

図249　大運寺本堂全景

図250　大運寺本堂向拝

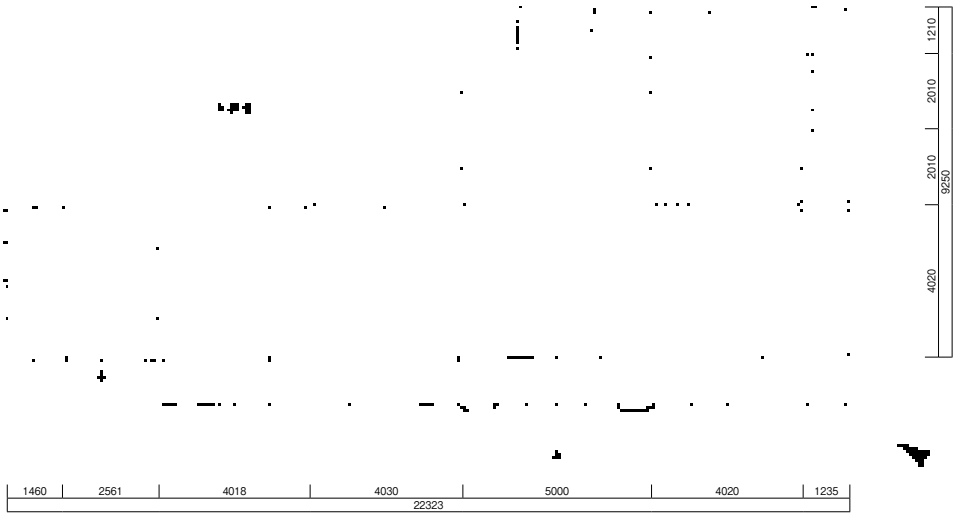


図251　大運寺本堂平面図

屋根の改造、側周り建具の変更があるが、室内の保存状態はよい。史料は確認していないが、建立年代は寺伝の明和二年（1765）と考えられる。一般的な方丈形式を用いた数少ない日蓮宗本堂として重要な建物である。（黒田）

図252　大運寺本堂室中

図253　大運寺本堂仏間正面の虹梁

図254　大運寺本堂内陣詳細

31　法雲寺　村岡区本町　天台宗

本堂　桁行23.2メートル、梁間12.3メートル、入母屋造、向拝一間、桟瓦葺　天保十五年（1844　『七美郡誌稿』）

角柱　敷居　鴨居　飛貫　正面中央間のみ虹梁形飛貫　組物なし　中備なし　妻飾漆喰壁　一軒疎垂木　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木

法雲寺は、村岡の市街地の南西部、昆陽川と湯舟川の合流点近くにある。古くは臨済宗、日蓮宗であって、山名氏が村岡藩主として城下町を建設した際に、菩提寺と定め、元禄四年（1691）天台宗に転じた。村岡山名氏関係の什宝を伝える。

本堂は大規模な建物であり、庫裏と兼用となっている。庫裏部分は調査を行っていないので、本堂部分について報告する。

西端に玄関があり、そのすぐ東側には式台があり、その奥に三室が並ぶ。その東側には、前後に二列に、各三室ずつの部屋が並ぶ。中央の奥が仏間であり、東端の奥は床構えを持つ座敷である。すなわち方丈形式

図255　法雲寺本堂全景

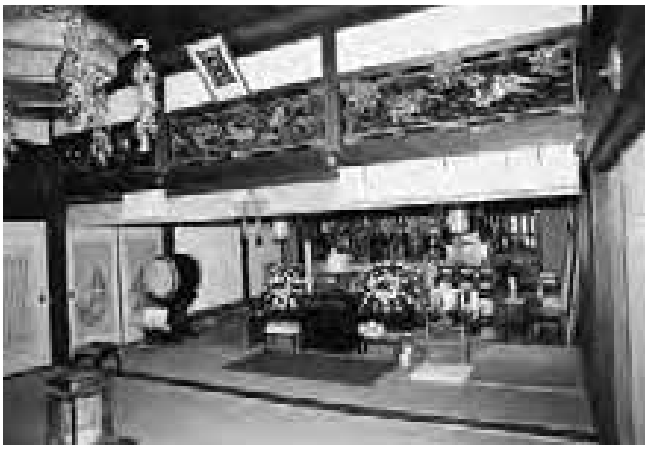


図256　法雲寺本堂空中から仏間

の平面の西端にさらに三室の部屋が付いた形になっている。

式台を上がったすぐの部屋と、二列六室の内の北側（正面側）の三室、東奥の座敷は、内法長押を回した上質の構えとなっている。

この本堂で興味深いのは仏間の前一間の通りで内法長押・鴨居を通して、ここが仏間の正面となっている事で、すなわち仏間の前だけ、二列の部屋境の柱筋より部屋境が張り出している点である。ただし張り出した一間通りは畳敷きで他の部屋と床高が同じで、その奥の床が一段高くなった板敷の間となっている。

この部分には改造が行われた可能性があるが、その変遷は明確には把握できなかった。しかし方丈形式としてはやや異例の構成である。

建具なども古くはないが襖絵等に優れたものがある。『七美郡誌稿』に天保十五年の建立と記されており、その根拠史料は実見していないが、様式的には認められよう。大規模な方丈形式の仏堂として重要である。(山岸)

図257　法雲寺本堂向拝

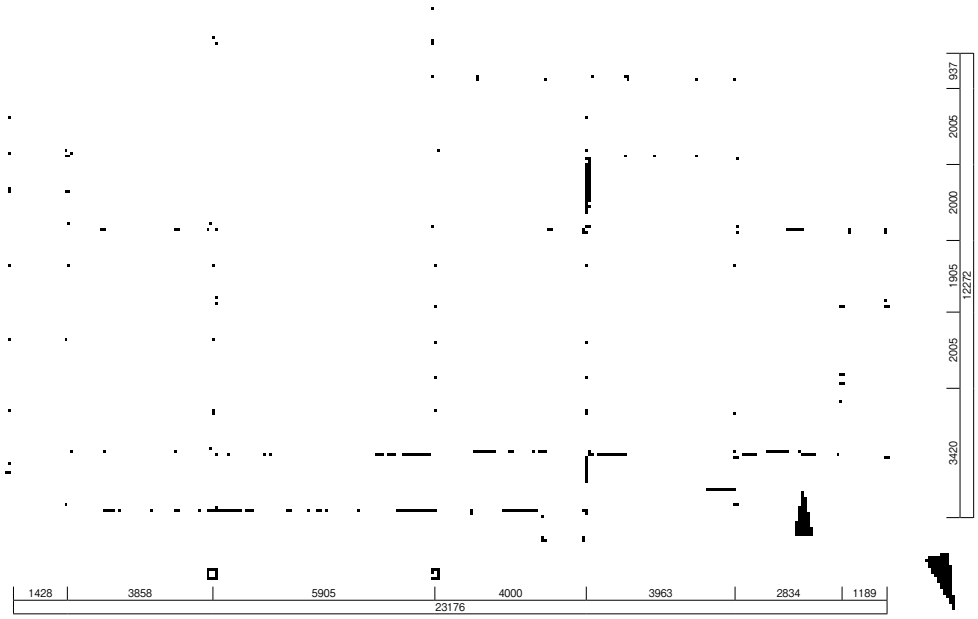


図258　法雲寺本堂平面図

図259　法雲寺本堂室中見返し

図260　法雲寺本堂仏間細部

32　黒野神社　村岡区川上

本殿　桁行三間、梁間三間、入母屋造、千鳥破風付、軒唐破風付、銅板葺　　明和二年（1765 『兵庫県神社誌』）

後方二間通り円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪　木鼻　正面角柱　虹梁形頭貫　木鼻　繋虹梁　組物尾垂木付三手先　拳鼻　実肘木　中備蟇股　二軒扇垂木　妻飾虹梁大瓶束笈形　千鳥破風妻飾虹梁大瓶束笈形　軒唐破風妻飾龍彫刻　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜縁

黒野神社は村岡の市街地の東方にある、延喜式内社に比定される神社である。江戸時代には領主山名氏の崇敬を受けた。『兵庫県神社誌』によると、現在の社殿も明和二年（1765）に山名豊貴とその家中、町屋194軒の寄付によってできたもので、棟札には伊津岐大明神と書かれている。

本殿は当町内きっての大規模本殿であり、かつ通常の神社本殿形式の枠におさまらない独特の形式の社殿である。

奥行三間の平面の内、後方の二間が円柱で作られ、長押・台輪等で繋がれ、また壁や扉で閉じられ、前方の一間通りが角柱で、吹き放ちとなっている。従って組物より下を見る限り、三間社流造と変わるところがない。あるいは円柱を用いる桁行三間、梁間二間を本体とみて、角柱の部分を向拝と見ることもできる。

しかし組物は角柱・円柱の区別無く同じ三手先の組物を組み、全体に一体の入母屋造の屋根を架けている。同じ趣向の本殿に25八坂神社、72八幡神社稲荷社等があるが、それらと形式は大きく異なる。

円柱で囲われた内部の中央の柱筋より少し後方に、三間に割った各柱間に幣軸構えの板扉を設けて、後方を内陣、前方を外陣としている。外陣の天井は棹縁天井である。外陣正面の建具は中央間が引違戸、両脇間は嵌め殺し戸である。これらの戸は桟唐戸風で、両脇間では彫刻を張り付け、中央間では花菱の格子を張り付ける。

前方角柱の吹放し部分は、側面の縁と一体の床を張っているが、中央間では角柱より内側に入り込んで木階を設ける。両脇間では角柱より外側にまで床をはる。天井は格天井である。

組物から上は禅宗様で、組物は尾垂木付の三手先で

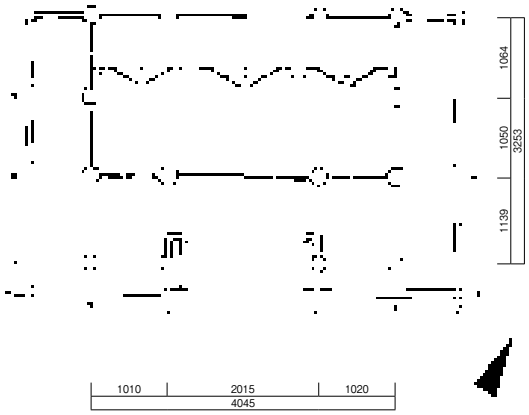


図262　黒野神社本殿平面図

図261　黒野神社配置図

図263　黒野神社本殿全景

横方向にも広がり、軒は扇垂木である。組物が横に広がるので軒は組物で埋まり詰組のようにみえるが、柱間には中備の蟇股を入れている。本体では円柱に粽を付け、木鼻付頭貫、木鼻付台輪とするのも禅宗様にしたがっている。

縁には腰組をつける。木鼻・持送り・中備の彫刻は豊富で上質である。

保存状態はよい。建立年代については、『兵庫県神社誌』に明和二年（1765）の棟札が掲げられていて、様式的にみても妥当である。

神社本殿としての規模が大きいこと、構造・彫刻が上質であることに加えて、ひとつの屋根の下に身舎と庇、あるいは本体と向拝とを一体的に作るという発想から生み出された優作である。（黒田）

図264　黒野神社本殿吹き放ち部分

図265　黒野神社本殿正面軒

図266　黒野神社本殿側面

図267　黒野神社本殿正面見上げ

図268　黒野神社本殿吹き放ち部見上げ

33　相田神社　村岡区相田

旧本殿（左境内社）　一間社流造、板葺　　18世紀後期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁妻壁板に渦紋浮彫り　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　浜床　浜縁

相田神社は村岡の集落の西方、湯舟川支流の谷入川沿いにある。『兵庫県神社誌』には永禄十二年（1569）以来の社殿造営を記録している。

この**旧本殿**は本殿の左にあるもので、もとの本殿と伝えている。小規模な一間社流造で、屋根は勾配の緩い板葺である。全体として際立った特徴はないが、地域の建物を考える上で興味深い点がある。

意匠的に目立つのは妻飾で、虹梁の上は単に板張りとして、板に一面の渦状文様を浮彫りにする。水紋なのか、雲紋なのか判断できない珍しい意匠であるが、黒田の48皇大神社本殿に同工のものがある。皇大神社本殿も一間社流造で、その妻飾は板に三つの渦を浮彫りにしたものである。両社は距離にして10キロメートルも離れておらず、このような特異な意匠が独立したものとは思えない。建立年代は、様式的には皇大神社が先と見られるので、相田神社が真似たのであろう。

その他には強い特色はないが、手堅くまとめられた作である。保存状態も良好である。建立年代は様式的に18世紀後期とみられる。（黒田）

図270　相田神社旧本殿全景

図271　相田神社旧本殿庇

図272　相田神社旧本殿妻飾

図269　相田神社配置図

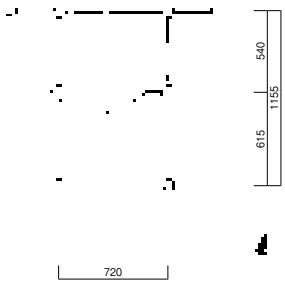


図273　相田神社旧本殿平面図

34　郡主神社　村岡区板仕野

本殿　三間社流造、板葺　［県指定文化財］

応永十五年（1408　『兵庫県神社誌』）

身舎円柱　切目長押　内法長押　出三斗　背面平三斗　通実肘木　中備蟇股　背面撥束　一軒繁垂木　妻飾虹梁　大瓶束　庇角柱　腰長押　虹梁形頭貫　出三斗　通実肘木　両端繋虹梁　中央間繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床

『兵庫県の地名』によれば天文十九年（1550）に郡主神社に奉納された梵鐘の銘文に一宮郡主大明神とあるという。郡主神社は七美郡の一宮と伝えるが、実状は弘安八年（1285）の但馬国太田文にみえる荘園、長講堂領七美庄の荘園鎮守社であろう。小代の73多他神社が小代庄で一宮と呼ばれたのと同様である。現在の境内地は狭小で、一宮あるいは荘園鎮守社に似つかわしくない。『兵庫県神社誌』が引く明治十二年調査記には、字大平から移したとある。同書によれば昭和戦前期の氏子は100戸で通常の村落鎮守社であり、現在にいたっている。

本殿は町内では規模の大きな三間社流造である。身舎は奥行が一間で、内部は奥行のほぼ中央を内外陣境とし、正面の柱に合わせて三間に分ち、各柱間に幣軸構の板扉を設けて後方を内陣、前方を外陣とする。内外陣境の構成は、下から切目長押・半長押・内法長押があって、小壁・天井廻縁となっているが、外陣側からは柱があるのかどうかは分からない。床は板敷、天井は鏡天井である。外陣正面の建具は格子戸で、中央間は引違い、両脇間は嵌め殺しである。

身舎の組物は、正面は出三斗、背面では平三斗、四隅では連三斗として変化をつける。桁下には引き通しの実肘木を置く。中備は正面と両側面は蟇股で、背面は間斗束である。両側面の蟇股は破損している。正面に残る蟇股の形態は室町時代の特色をよく示し、内部には流麗な植物紋の彫刻が施されており、左右対称で時代を表している。植物紋の中央には円相があり、内部に梵字がある。中央間のものはキリークで阿弥陀如来である。左右のものは見にくいが、サ・サクで、観音・勢至にとみられるので、全体で阿弥陀三尊であろう。

庇の両端は細くて水平の繋梁であるのに対して、中央間を海老虹梁とするのは珍しい。海老虹梁の形態は、身舎側が極端に太く近世では見られない形である。細い繋虹梁も古風である。全体に朱塗が残っている。

垂木、桁は反り増しがなく、中古材である。高欄の架木・平桁、庇の左側二つの組物、左の頭貫と繋梁・蟇股も材料は新しい。特に庇正面の最も目立つ位置の蟇股が、本体の格調の高さに比べてやや俗な意匠なのが惜しまれる。とはいえ、室町時代の本殿としては部材の残りはよい。

図275　郡主神社本殿側面

図274　郡主神社本殿正面

図276　郡主神社本殿庇

建立年代は『兵庫県神社誌』が引く「郡中支配棟札写」に、応永十五年（1408）の造営で、大工は藤原兼正とある。二次史料なので確証はないが、様式的にも妥当な年代である。町内の神社本殿は一間社が圧倒的に多い中で、当本殿は本格的な三間社で、しかも室町時代の優秀な意匠を持つ点で、特筆に値する重要な本殿である。

この本殿でもうひとつ特筆すべきことは、床下が黒く煤けていることである。類例としては、兵庫県豊岡市但東町の日出神社本殿（室町後期）、京都府福知山市の島田神社本殿（文亀二年1502）があり、いずれも中世の三間社流造本殿である。島田神社では床下で焚火の跡が確認されており、日出神社では正月に籠りが行なわれたという伝承がある。郡主神社では聞取りができなかったが、移築される前の古い時代の痕跡である。（161頁参照）。（黒田）

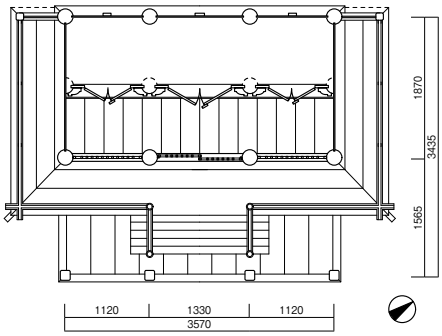


図277　郡主神社本殿平面図

図280　郡主神社本殿外陣

図278　郡主神社本殿背面

図281　郡主神社本殿身舎蟇股

図279　郡主神社本殿妻飾

図282　郡主神社本殿床下

35　大糠神社　村岡区大糠

本殿　一間社流造、柿葺

18世紀前期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　庇角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　手挟　中備蟇股　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

観音堂　桁行三間、梁間三間、寄棟造、桟瓦葺

18世紀前期

円柱　足固貫　内法貫　木鼻　舟肘木　中備なし　二軒繁垂木

大糠神社は大糠集落の鎮守社で、『兵庫県神社誌』によると江戸時代は三宝荒神社であった。湯舟川中流の右岸にあり、南北に通る山陰道の東に接する山麓にあって、道沿いに観音堂、すぐ山手に神社本殿が立つ。

本殿は小規模の一間社流造である。身舎内部は板扉で前後に分けて、後方を内陣とし前方を外陣とする。外陣正面は格子の扉である。

形式、細部とも簡素な部類の標準的なもので、大きな特徴はみられない。この本殿の全体的な作り方のなかでみると、庇正面の頭貫の動物木鼻が建築部材と比較して大きく、かつ垢抜けしない独特の表情をもっている。正面側に出る動物の顔は海老虹梁の木鼻で、実際には一材ではなく懸鼻になっている。猪の頭部と前足で、表情は左右が阿吽になっており、目を怒らしている。左右に出るのは象の頭部でこれも阿吽になっており、顎が分厚く、鼻が薄くてひらひらしている。猪も象も表情はほほえましいもので、専門の彫師の作ではないのかもしれない。

総欅作りで、やや木太くがっしりした印象である。色あせているが、蟇股には彩色があり、全体の要所に朱と墨が入っていて、色合いが美しい社殿だった。

早くから覆屋に入っていたと思われ、保存状態は良好である。建立年代は『兵庫県神社誌』によると宝永二年（1705）に社殿を再建し、享保七年（1722）に再修したと書かれている。様式的にはいずれも妥当で、十八世紀前期の建立と考えられる。大きな特徴はないものの、町内には個性が強い神社本殿が多い中で、古い部類に属する標準的な形の本殿として重要である。（黒田）

観音堂はお堂とも呼ばれ、供えた米を粥にすると乳の出がよくなるとして乳神様として信仰され、また正月には、村中で観音に供える餅を搗いている。

観音堂は簡素な三間堂である。組物は古風な舟肘木を載せるのみで、正面中央間のみ引き分けの板戸が入り、その他はすべて横桟を入れて縦板壁を打って閉鎖

図283　大糠神社境内

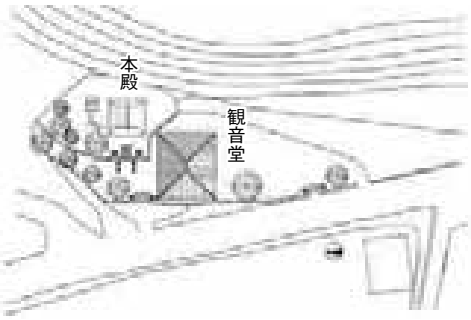


図284　大糠神社配置図

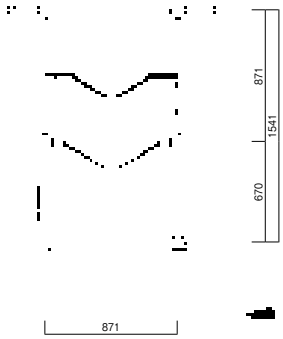


図285　大糠神社本殿平面図

図286　大糠神社本殿全景

する。戸を入ってすぐの位置に囲炉裏を設け、天井は張らず野物の小屋組を見せている。

後方に寄せて二本の円柱を立てて、背面中央二本の柱と繋いで、厨子を設ける。この部分も舟肘木を載せるのみで虹梁などは用いない。

小屋組は前後に三間分の長さの二本の大梁を架け、その上に三本の桁行の梁を載せる。三本の桁行梁は柱筋には載らない。

図287　大糠神社本殿庇

図288　大糠神社本殿庇見返し

図289　大糠神社本殿妻飾

柱には板決りがあって、柱の一部は当初の位置から動いているものもあるが、本来は横板壁で閉じられていたようである。また平成元年に改修するまでは茅葺であった。

この建物は建築的には簡素であるが、厨子廻りを中

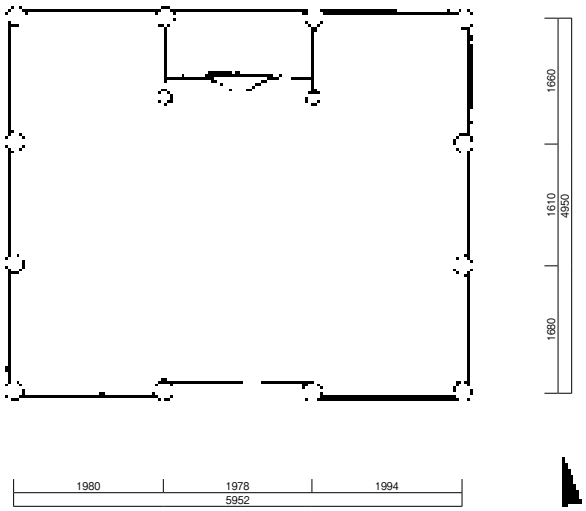


図290　大糠神社観音堂平面図

図291　大糠神社観音堂全景

図292　大糠神社観音堂内部

心に堂内に多数の墨書がのこされている点が極めて貴重である。詳細は164頁に報告するが、廻国・六十六部などの文言、享保・元文等の年号、奥州・上総・下総・武蔵・大坂等の地名から、日本全国から廻国の僧俗が観音堂の前の山陰道を往還し、観音堂で通夜していたことが知られる。伯耆・出雲などの霊場への廻国者が頻繁に行き交っていた様相は、今の静かな山里の村堂の姿からは想像しがたいが、近世に賑わっていた様相を知ることのできる貴重な史料である。（山岸）

図293　大糠神社観音堂厨子

図294　大糠神社観音堂内部見返し

図295　大糠神社観音堂小屋組

36　高井神社　村岡区高井

本殿　二間社流造、板葺

享保元年（1716 『兵庫県神社誌』）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木組　実肘木　中備なし　妻飾虹梁蟇股　一軒繁垂木　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　木階五級　浜床　浜縁

高井神社は香美町の南部、湯舟川の中流部にある。元亀三年（1572）に伯耆大山から勧請したと伝え、古くは大山神社と称した。

本殿は規模の大きい流造社殿である。庇は桁行一間であるが、身舎は正面・背面ともに二間に割っているので、一応二間社となる。しかしそれにしては通常の規模の一間社の間口を二間に割っているために、身舎の桁行柱間は狭い。

形式・意匠は複雑ではなく装飾は少ない。正統的な作である。妻飾は虹梁蟇股として、蟇股には卍を彫り

図296　高井神社本殿全景

図297　高井神社本殿庇見返し

出す。また、木柄の大きい点も特徴として挙げられよう。肘木の繰りが直線的になっている一方で、面取りを施し、新旧の技法が混在している。

『兵庫県神社誌』には享保十五年（1730）の再建との記録と、享保元年造立棟札を掲げており、若干の差があるがその頃の建立とみておきたい。なお本殿覆屋の彫刻には柏原の中井正次の刻銘がある。（山岸）

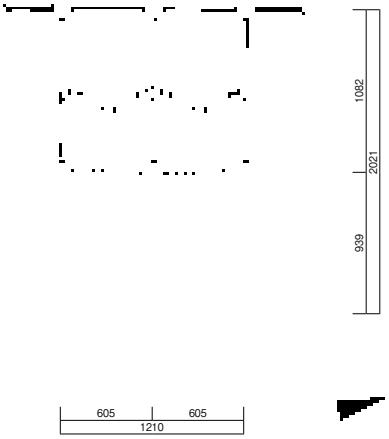


図298　高井神社本殿平面図

37　薬師堂　村岡区高井

薬師堂　正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、桟瓦葺　　享保十二年（1727　棟札）

角柱　足固貫　内法貫　正面のみ虹梁形内法貫　組物なし　中備なし　一軒繁垂木

薬師堂は高井神社のやや南、稲荷神社に近接して所在する。沿革は不詳である。

規模の大きな三間堂とみてよいが、正面のみは中二本の柱を省略して一間としている。内部は一室で棹縁天井を張る。背面に寄せて三間ひき通しの須弥壇を設け、中央だけは40センチメートルほど前に角柱を立てて須弥壇を張り出す。

正面の虹梁は後補であって、当初は三間になるよう柱が立っていたことが、柱頂部が残存することや、足固貫に柱当たりの仕口があることから判明する。また須弥壇前の角柱は本来はもう30センチメートルほど前に立っていたことが梁下面の枘穴から判明する。前後に二本架かる梁の上に、間口方向にも二本の梁が架か

図299　高井神社本殿妻飾

図301　薬師堂全景

図300　高井神社本殿背面

図302　薬師堂正面虹梁形内法貫

っていた仕口が残る。屋根は当初は茅葺で、腕木で出桁を受ける構造であった。今の桟瓦葺に変更した際、小屋組を大きく改造していると推定される。

須弥壇中央の禅宗様の須弥壇の上に置かれた厨子は、正面・側面とも一間の入母屋造妻入、板葺で、正面に軒唐破風を付ける。円柱を切目長押・腰長押・内法長押、頭貫・木鼻、留めに納めた台輪で繋ぎ、尾垂木付の二手先、詰組の組物で二軒の軒を支える。妻飾虹梁や頭貫木鼻には独特の浮彫と幅広の彫り込みを組み合わせた絵様を彫る。質の高い建物である。

現存する棟札から、薬師堂は享保十二年に建立され、厨子は寛政十一年（1799）に造られている。厨子造立と並行して、柱を抜き虹梁を入れ、須弥壇廻りにも手を入れたようである。大糠の観音堂ほどではないが、この建物にも墨書が残されている。

大規模な村堂の一例である。（山岸）

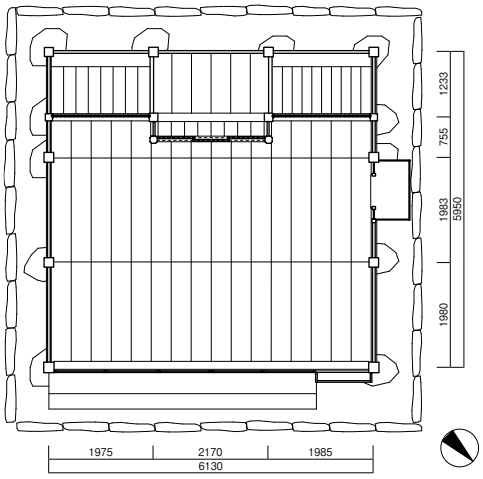


図303　薬師堂平面図

図306　薬師堂厨子

図304　薬師堂側・背面軒

図307　薬師堂厨子詳細

図305　薬師堂須弥壇

図308　薬師堂内部

38　寺河内神社　村岡区寺河内

本殿　一間社流造、板葺

宝永四年（1707　『兵庫県神社誌』）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　繋海老虹梁　二軒繁垂木　正面切目縁　木階五級　浜床

寺河内神社は寺河内集落の鎮守社である。

本殿は一間社流造である。この本殿の縁は正面にしかなく、浜縁もない。木階の下端は庇柱の腰の高さに取り付く。身舎内部は奥行中央に板扉を設け、後方を内陣とし、前方を外陣とする。外陣正面は格子の扉である。見世棚造に近い簡略な形式であることがこの本殿の特徴のひとつであるが、それとは裏腹な凝った細部意匠が見られる点は興味深い。

まず、木鼻の渦が円形に近く巻込みが強い点と桁に反りがある点は、様式的には中世風で、この地域の古風な様式を示す。妻飾の大瓶束の結綿が、葉脈をもつ葉となって張り付いているのは近世風で、これと類似した意匠は降懸魚にも使われている。大瓶束の木鼻には、先端から渦に向かって曲線の絵様があるのも中世風で、その曲線と渦の内側は胡粉塗り、外側を朱塗りとし、渦と輪郭には墨をいれる。現在認められる塗装はその程度であるが、相当華麗な色彩に仕上がっていたのである。

向かって右側面の頭貫と内法長押の間の小壁の上端と両脇には額縁を取り付けた痕跡がある。柱と頭貫がつくる上隅には額縁の茨も認められ、その内側には彩色が残る。左側面ではこの痕跡はヤリガンナで削りとられている。内法長押より下は、右側面では柱際に寄せの痕跡が見られるが、小壁とは連続しない。左側面では、柱際ももっと幅広の額縁状の痕跡がある。

保存状態は良好であるが、大きく二時期の部材がある。創建時の材質は柱が檜で、頭貫･妻飾虹梁･大瓶束･庇虹梁形頭貫・海老虹梁などが欅、その他に松、杉などである。中古に身舎正面柱の足元を残して上部を欅とし、庇柱も入れ替えたとみられる。前述した身舎側面の改修は中古のものである。

様式的に古風な部分があるが、建立は18世紀前期で、

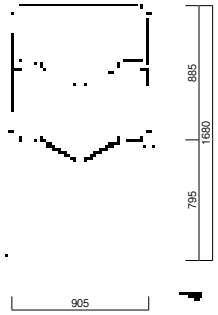


図309　寺河内神社本殿平面図

図310　寺河内神社本殿全景

図311　寺河内神社本殿庇詳細

図312　寺河内神社本殿庇

中古の改造は18世紀後期と推定される。『兵庫県神社誌』は永禄九年（1566）と宝永四年（1707）・安永四年（1775）の再建ないし修理を記す。これを現本殿に即して解釈すると、永禄建立の本殿の様式などをよく真似た本殿が宝永四年に再建され、その後安永四年に改修が行なわれたと判断される。形式的には簡略ながら豊かな歴史を秘めた建築である。（黒田）

図313　寺河内神社本殿妻飾

図314　寺河内神社本殿身舎頭貫木鼻

図315　寺河内神社本殿板壁の加工痕

39　善性寺　村岡区寺河内　　高野山真言宗

本堂　桁行14.4メートル、梁間10.4メートル、入母屋造、鉄板葺　　18世紀後期

角柱　足固　内法長押　組物なし　中備なし　一軒疎垂木　妻飾漆喰壁

鐘楼　桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺　　18世紀後期

円柱　腰貫　飛貫　大斗絵様肘木　中備飛貫上に間斗束・蟇股　妻飾虹梁大瓶束　一軒半繁垂木

善性寺は寺河内の集落の南はずれの高台にある。七美郡少領日下部弘道の開基と伝え、幾度かの火災の後、寛政年中（1789～1801）に再興された。古い寺地は別の場所にあったようである。全盛期には檀家が750戸もあったと伝える。

本堂は二列六室の部屋を持つ方丈形式の建物である。正面と向かって右側面に広縁を設け、柱筋に海老虹梁を架ける。各部屋は内法長押をめぐらせて、部屋

図316　善性寺本堂全景

図317　善性寺本堂室中・仏間

境には欄間を入れ、丁寧な作りである。

仏間の後方に寄せて仏壇を設けて、その上に厨子を造り付ける。仏壇の正面柱筋には大虹梁を入れる。

聞き取りに拠れば戸袋に寛政の銘があったと伝えており、内陣の虹梁の絵様もその時期のものとみて良い。寺伝のとおり寛政年間の建立であろう。

図318　善性寺配置図

図319　善性寺本堂広縁

図320　善性寺本堂仏間

仏間側面の柱には改造の痕跡もあるが、概ね大きな改造は天井から上に限られる。

古写真によれば、元は茅葺であった。化粧垂木がすっかり新しいのは、この屋根形式の変更の際の改造による。この時に天井も新しくしている。

鐘楼は、内転びを持つ四本の柱からなる一般的な形式の鐘楼である。ただし他と異なるのは、頭貫を用い

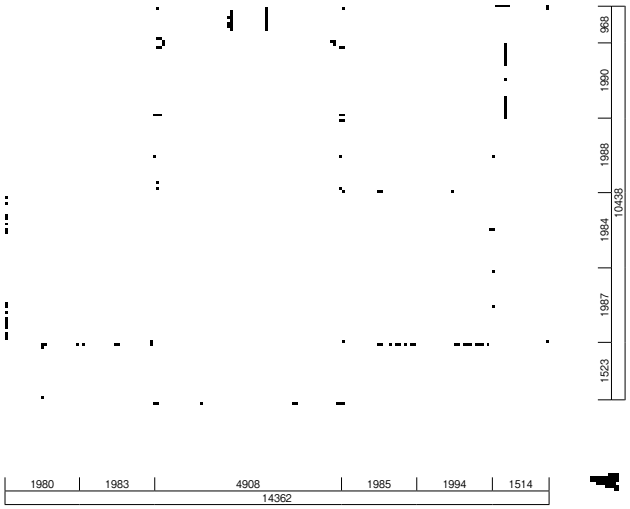


図321　善性寺本堂平面図

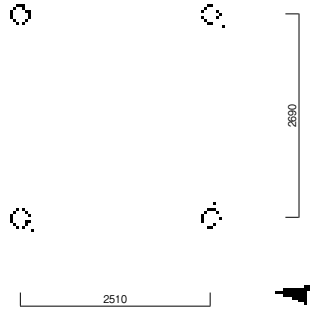


図322　善性寺鐘楼平面図

図323　善性寺鐘楼全景

ない点で、このため、飛貫と桁・梁の間が大きく開くことになる。妻側では大きな蟇股を、平側では人の立ち姿にも似た間斗束を入れている。大斗肘木の組物の肘木は絵様肘木として、蝮羽側と柱間側で絵様に差を付けるのも興味深い。

定型的な中にも独自の形式と意匠を持った鐘楼である。建立年代を示す史料を得られなかったが、本堂と同じ18世紀後期の作であろう。（山岸）

図324　善性寺鐘楼内部

図325　善性寺鐘楼妻飾

図326　善性寺鐘楼組物詳細

40　等余神社　村岡区市原

本殿　三間社流造、柿葺　　18世紀後期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　大斗絵様肘木　中備なし　妻飾虹梁大瓶束　一軒繁垂木　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備なし　二軒繁垂木　正面切目縁　木階五級　登高欄

等余神社は湯舟川の西岸にある。同名の延喜式内社に比定され、貞観年中（859～877）の勧請と伝える。市原・燿山・高井・寺河内・大糠・福西の六箇村の氏神であった。これらは中世の七美庄にあたる。

本殿は、この地域では珍しい三間社流造の社殿である。ただし一般的なものとは異なり、縁を正面にだけ設けて、脇障子は付けず、浜床・浜縁もない、やや簡略な形式をとっている。この地域の多くの社殿に比して、装飾も殆どなく、組物も身舎は大斗肘木と簡略である。

身舎正面には中央間二枚引き違い、両脇間一枚嵌め殺しの戸が入っていたこと、柱の足下が切断され、改

図327　等余神社本殿正面

図328　等余神社本殿庇組物

造が小さくないことが窺われる。

式内社との関連はともかく、複数の村に奉祭されていたことから、中世の荘園の鎮守の伝統をひく可能性があり、しかもそのことが三間社という規模と対応していると推測され、注目される。(山岸)

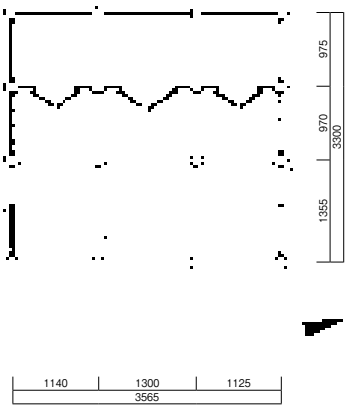


図329　等余神社本殿平面図

図330　等余神社本殿庇

図331　等余神社本殿妻飾

41　八幡神社　村岡区大野

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺　　19世紀前期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　尾垂木付三手先　拳鼻　実肘木　詰組　二軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束笈形　千鳥破風妻飾虹梁大瓶束笈形　向拝角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木繋海老虹梁　手挟　中備龍彫刻　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾力士彫刻　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階五級浜床　浜縁

八幡神社は香美町の最南端、湯舟川の支流大野川の左岸に位置する。大野村の鎮守社で、別宮村の八幡神社から分霊を勧請したものという。

本殿は桁行一間、梁間一間の入母屋造本殿で、向拝一間をつけ、本体に千鳥破風、向拝に軒唐破風をつける。内部は一室で、正面に板扉を開く。縁には腰組をつける。

この本殿は、彫刻類ではなく建築的な細部意匠に力を入れた作である。まず、一間社の規模の本殿では珍しい三手先組物を組み、尾垂木を二段に出す。方一間で詰組とするから、軒は極めて複雑である。一手目の壁付の肘木は横方向に長く広がる。一手目は小天井、二手目は流水紋の板支輪、三手目は雲紋の板支輪とする。組物の繰りの曲線は固く、長方形断面の尾垂木にも強い反りはない。

注目すべきは正面向拝の構成である。本体が三手先なので桁が高くなり、それに対応して向拝でも連三斗の組物を二段に組む。それでも足りないので、本体からの打越垂木をＳ字状に湾曲させて高低差を調整している。手挟もこの打越垂木に合わせた形である。向拝の軒桁は両端でせいを増し、先端に繰形を施し、絵様をつける。せいを増すのは中世的技法で、この時期には一般的には使わない。軒桁の先端に装飾を施すのは時代を問わず珍しい。桁の成を増すのは本体の軒桁でも行われていて、これによって軒反りの曲率が全体に及び、いわゆる総反りの軒になっている。

軒の出が大きいのに対応して､縁幅を広く取るので、脇障子の幅が普通よりも広くなる。縁板は全体が二枚ないし三枚の板なので、正面でみれば榑縁になる。向拝正面の虹梁絵様は、立体的に彫刻したものを張り付

けている。向拝軒唐破風妻飾は力士が棟を担いでおり、ユーモラスである。一方で、ほぼ目に触れることのない本体屋根の妻飾は簡素な形式である。

縁高欄の架木が新しい以外はよく保存されている。建立年代に関する確証はなく、19世紀前期の建立と推定する。建築的細部に精力を投入した独特の味わいがある江戸時代後期の力作である。（黒田）

図332　八幡神社本殿全景

図333　八幡神社本殿向拝詳細

図334　八幡神社本殿向拝見返し

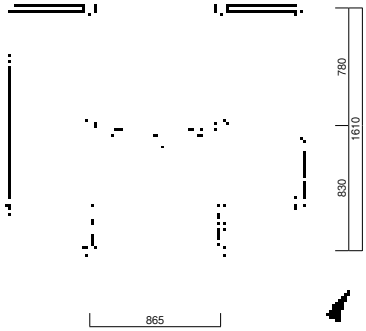


図335　八幡神社本殿平面図

図336　八幡神社本殿側面

図337　八幡神社本殿本体部軒

42　熊野皇神社　村岡区口大谷

本殿　一間社流造、軒唐破風付、銅板葺

明治二十三年（1890　棟札）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　尾垂木付二手先　拳鼻　実肘木　蛇腹支輪　詰組　二軒繁垂木　妻飾二重虹梁獅噛神彫刻　庇角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　拳鼻　繋海老虹梁　手挟　実肘木　中備龍彫刻　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾　麒麟彫刻　三方切目縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

観音堂　桁行三間、梁間三間、寄棟造、鉄板葺

17世紀中期

角柱　足固　内法長押　舟肘木　中備なし　軒天井

籠堂　桁行三間、梁間二間、切妻造、鉄板葺

18世紀後期

角柱　足固　鴨居　飛貫

熊野皇神社は香美町最南端、ハチ北高原に近い口大谷村の鎮守社である。社蔵の明治二十三年の棟札では、口大谷村、中大谷村の二つの集落で本殿を再建している。中大谷村は口大谷村の支村であったという。境内は二段の平坦地からなる。北の上段に本殿があり、南の下段は中央をあけて東に観音堂、西に籠堂がある。

本殿は規模の大きい一間社流造で、正面には軒唐破風をつける。身舎の内部は中央付近に板扉を設けて前後に分かち、後方を内陣、前方を外陣とする。外陣正面は桟唐戸である。

一般的に流造では身舎と庇の屋根の幅が同一であるが、この本殿では庇の幅を片側で垂木三枝分狭めているのが、形式上の特徴である。

次に、正面を豊かに飾っていることが特徴である。庇の組物は三斗の上に連三斗を積んでおり、すぐ横の菖蒲桁下の組物と一体化している。このため通常よりも頭貫と桁の間隔が広くなるので、大きい彫刻を入れることができる。このように準備された位置に中井権

図338　熊野皇神社配置図

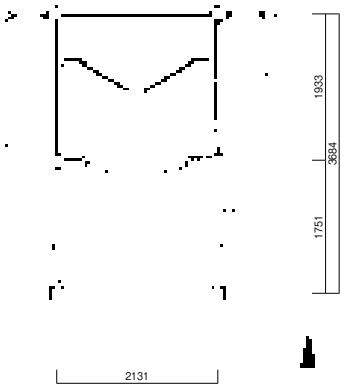


図339　熊野皇神社本殿平面図

図341　熊野皇神社本殿全景

図340　熊野皇神社境内

図342　熊野皇神社本殿正面

次橘正貞作の龍彫刻を入れている。手挟は柱上と菖蒲桁位置とにつけるので、左右で合計四つの手挟がならぶ。手挟の形状は雲紋を丸彫りした力強いものである。軒唐破風妻飾に麒麟、兎毛通に鳳凰の彫刻を飾る。

身舎の頭貫木鼻はくり抜きの形をとどめながら、具象的な植物彫刻としている。妻飾も豪華であるが、最上部で虹梁を噛む獅噛神彫刻が目につく。

図343　熊野皇神社本殿庇見返し

図344　熊野皇神社本殿身舎背面

図345　熊野皇神社本殿妻飾

保存状態は非常によい。建立年代は明治二十三年(1890)、大工は藤原勇兵衛と棟札にある。嘉永二年(1849) 再建の本殿が明治十九年の暴風雨で倒木により破壊されたため、旧社の寸尺で建てたと記されている。技術も様式も江戸時代のものだが、全体から細部にいたるまで力強さがあり、明治時代の作風を感じさせる建物である。中井正貞銘（正貞は安政二年没）の

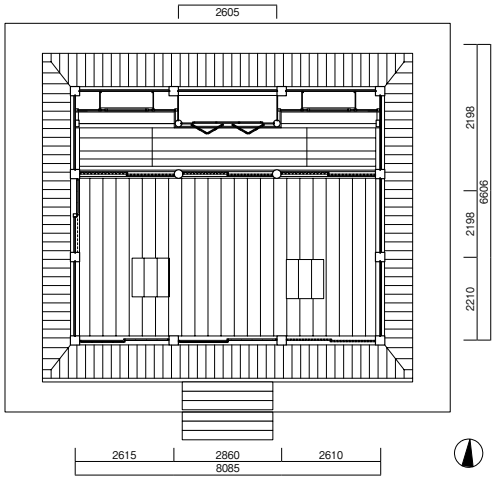


図346　熊野皇神社観音堂平面図

図347　熊野皇神社観音堂全景

図348　熊野皇神社観音堂内部

龍彫刻は模刻であろうか。

観音堂は正面三間、側面三間で、宝形造に近い短い棟の寄棟造である。正面は三間とも引違戸、左側面中央間は片引戸で、それ以外は板壁である。内部は後方一間通りを内陣とし、前方の二間を外陣とする。内外陣境は三間とも腰高の敷居に引違い格子戸である。外陣は一室で、一面の猿頬天井をはる。内陣の後方半分を三間とも仏壇とし、中央に観音、両脇間に毘沙門・不動を祀る。内外陣境があるので、いわば中世仏堂形式であるが、内陣は法会ができるほど広くはない。

この堂の建立年代は不明で、様式的にみて17世紀中期に建立され、18世紀後期に大きな改造を行ったと考えられる。当初は、正面中央間以外はすべて壁で閉ざされた極めて閉鎖的な形だった。内部は後方中央の間だけを囲って内陣兼仏壇とし、それ以外は一室だった。18世紀後期に内外陣境の建具を設置し、内陣三間の仏壇、外陣正面三間の建具、側面中央間の出入り口を新設した。改造の根拠は以下のとおりである。堂の左側面中央間、正面の両脇間には壁貫の跡があるから、当初は壁であった。正面中央間以外はすべて板壁となる。内外陣境は中央間が円柱で、木鼻付き虹梁形頭貫でつなぎ、上に三斗枠肘木を置き、両脇間には虹梁形飛貫をいれる。以上が当初の部分で、三間共通の高敷居、引違い格子戸、内法長押は後補である。中央間の円柱は二本とも後方の柱と頭貫で繋いでいたが、頭貫は切断された。後方に残る頭貫の下面には板決りがある。中央間の柱の内陣側には一尺一寸高い位置に床板跡がある。また正面の高敷居とほぼ同じ位置に古い框跡がある。復元すると内陣中央間は一段高い床で、両脇は板壁だった。柱に板決りはないが、釘跡があるので、壁際は釘で止めたと推定される。両脇間と外陣との間に建具はなかったと思われる。

小屋組は梁まで古く、束より上は近代のものである。もとは茅葺だっただろう。改修で新設された内外陣境の高敷居・建具・内法長押、内陣三間の仏壇は朱塗りが施されている。この新設部分は煤けていないが、古い部分は真っ黒にすすけている。現状では確認できないが、煤の多さは囲炉裏の存在を確実に物語っている。

以上を総合すると、18世紀の改造まで内部で焚火を行っていたが、以後は長時間の焚火は行わなくなった。

図350　熊野皇神社観音堂内外陣境

図351　熊野皇神社観音堂内陣仏壇細部

図349　熊野皇神社観音堂内陣

図352　熊野皇神社籠堂内部

つまり、それまで籠堂だった堂を立派に改装して、籠りは現在の籠堂で行うようになったと推定される。なお、明治三十一年にも修理が行われた銘板がある。

籠堂は正面三間、側面二間で切妻造の建物である。正面三間は開放で、ほか三面は板壁である。天井はなく、床は板張りで右脇間に囲炉裏がある。正面の右脇柱間には鴨居・敷居跡と壁の貫跡がある。左脇間にも敷居・鴨居跡がある。

内部は梁まで黒く煤けているが、束から上は新しく、煤けていない。柱は当初材で、改造が繰り返されている。前述のように観音堂で籠りが行われていたが、18世紀後期の改修以後は行われていないようなので、その頃、籠堂が建てられたと推定される。昭和四十年代まで、正月に口大谷の小中学生が餅をもって集まり、一晩籠ったと伝えている。また、興味深いのはこの堂には仏壇・本尊がないことである。観音堂との関係の推定が正しいとすれば、籠堂には籠りの機能だけが移されたこととなり、籠堂に仏堂の機能が必要ないこととなる。この点は重要なので151頁で論ずる。（黒田）

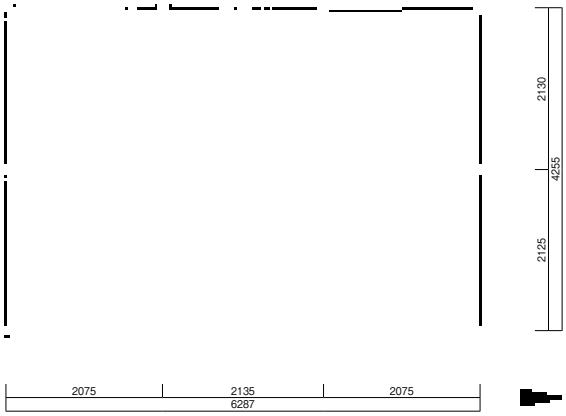


図353　熊野皇神社籠堂平面図

図354　熊野皇神社籠堂全景

43　八坂神社　村岡区中大谷

本殿　一間社流造、板葺　　18世紀後期

身舎円柱　切目長押　半長押　内法長押　頭貫　木鼻　出組　拳鼻　実肘木　雲彫刻支輪　中備蟇股　妻飾虹梁　蟇股　二軒繁垂木　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

八幡・荒御霊社　一間社流造、板葺　　18世紀中期

身舎円柱　切目長押　内法長押　内法貫　木鼻　組物なし　中備なし　妻飾虹梁束　繁垂木　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　正面切目縁　木階五級　浜床 浜縁

湯舟川の上流、大谷川の最奥部、香美町の南端に位置するのが八坂神社である。覆屋は二部屋に分けて、それぞれに社殿が立つ。向かって右が本殿、左が八幡・荒御霊社である。寛文年中に勧請されたとされている。

本殿は向かって右側にある小規模な流造の一間社である。構造形式は複雑ではなく、町内では比較的簡素

図355　八坂神社境内

図356　八坂神社本殿庇

な社殿ではあるが、板支輪の雲の彫刻と、妻飾蟇股全面に雲紋の彫られた意匠は独特で目をひく。また妻飾の虹梁絵様も装飾化が進んでいる。妻飾の虹梁の胴張りの強さ、錫杖彫りの意匠も独特である。縁は縁葛を水貫からつくりだした根肘木で承け、水貫・縁葛間は絵様をくり抜いた板で塞ぐ。

18世紀中期から後期の意匠を用い、個性豊かな装飾・技法で建てられた佳作である。『七美郡誌稿』には正徳五年（1715）建立とあるが、そこまで遡る可能性も否定はできない。

図357　八坂神社本殿身舎

図358　八坂神社本殿妻飾

図359　八坂神社本殿全景

図360　八坂神社配置図

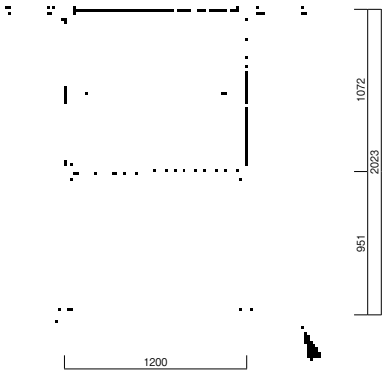


図361　八坂神社本殿平面図

図362　八坂神社八幡・御霊神社全景

図363　八坂神社八幡・御霊神社庇景

八幡・荒御霊社は本殿よりさらに小規模な一間社である。構造形式も簡素で、身舎は組物を用いず、内法長押上の通常は頭貫位置に入る貫も、飛貫となっている。妻飾は虹梁に撥束を建てるだけの素っ気ないものである。縁も身舎正面に設けるだけである。しかし庇は連三斗を組んで、一般的な形式となっている。肘木に比して、斗が大きいのが目立つ。なお背面の軒は切断されている。

絵様からみて18世紀中期の建立とみられる。（山岸）

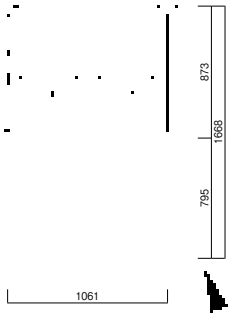


図364　八坂神社八幡・御霊神社平面図

図365　八坂神社八幡・御霊神社庇

図366　八坂神社八幡・御霊神社妻飾

44　大山祇神社　村岡区大笹

本殿　桁行一間、梁間二間、切妻造、板葺

19世紀中期

後方方一間円柱　腰長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　三斗枠肘木　実肘木　中備なし　前方角柱　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備なし　妻飾束　一軒繁垂木　木階三級　浜床

大山祇神社は、大谷川の最上流、ハチ北高原スキー場の一郭の県指定天然記念物大笹ザゼンソウ群落の傍に立つ。沿革は不詳である。

本殿は小規模な社殿で、極めて興味深い形式を採っている。平面形式をみれば、四本の円柱の前に角柱二本を立てる。軸部も、円柱は頭貫・台輪で繋ぎ、円柱と角柱の間に狭い縁と木階を設ける。つまり以上の点では流造社殿と差がない。しかし屋根は、前の円柱筋に棟を置いて、切妻造の屋根を架けている。棟束下の桁の木鼻は繰形を施している。縁・木階の上部は鏡天

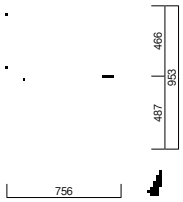


図367　大山祇神社本殿平面図

図368　大山祇神社本殿全景

井を張って塞いでいる。

平面形式では流造風なのに、屋根は全く角柱・円柱を区別せず一体の屋根を架ける手法は、入母屋造の32黒野神社本殿、入母屋造妻入の72八幡神社稲荷社、切妻造妻入の25八坂神社本殿と、差はありつつも香美町内に散見される独特の神社本殿である。

建立年代を示す史料は見いだせないが、様式的には幕末の19世紀中期であろう。（山岸）

図369　大山祇神社本殿正面詳細

図370　大山祇神社本殿側面

図371　大山祇神社本殿妻飾

45　大田神社　村岡区大笹

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、板葺　19世紀中期

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　拳鼻　実肘木　雲彫刻支輪　詰組　妻飾板　二軒繁垂木　向拝角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木　唐破風妻飾虹梁邪鬼　三方切目縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

秋葉神社　一間社流造、板葺　18世紀前期

身舎円柱　切目長押　内法長押　飛貫　木鼻　組物なし　中備正面蟇股　妻飾簑束　一軒繁垂木　庇角柱　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　正面榑縁　木階五級　浜床　浜縁

大田神社は大谷川最上流部の大笹に所在する。大笹は14世紀中期に永富某が開発した村で、大田神社は永正元年（1504）に勧請されたと伝える。覆屋の中に二殿が並ぶ。

向かって左の**本殿**は規模の大きい入母屋造の社殿である。本体の平面は奥行が間口の六割程度と、横長の平面を持つ。組物は出組で、支輪に雲の彫刻を彫ること、向拝の柱にそれぞれ二方向に木鼻を付けることなどは香美町内ではしばしばみられる。

全体に木柄が大きく虹梁や木鼻の絵様には渦を多用している。肘木の曲線部が角張っており、身舎の隅行の一手目の肘木の先を細めるなど、特殊な細部意匠が用いられている。

向拝中備の龍彫刻は、刻銘から柏原の彫物師中井正貞が彫ったことが知られる。

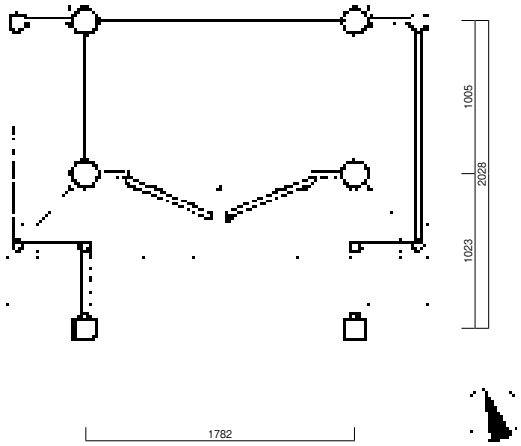


図372　大田神社本殿平面図

図373　大田神社配置図

図374　大田神社本殿正面

図375　大田神社本殿側面

図376　大田神社本殿向拝詳細

図377　大田神社本殿向拝

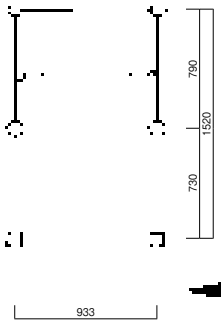


図378　大田神社秋葉神社平面図

図379　大田神社秋葉神社全景

図380　大田神社秋葉神社庇

建立年代は、意匠からみて幕末で、中井正貞の没する安政二年（1855）以前である。

向かって左の**秋葉神社**は小規模な流造の一間社である。庇柱上は連三斗を組んで、一般的な形式であるが、身舎は組物を組まず、柱を桁まで延ばして、内法長押上の貫が飛貫となる形式の社殿で、同様の形式は43八坂神社八幡・荒御霊社にも見られる。

絵様からみて18世紀前期の建立であろう。（山岸）

図381　大田神社秋葉神社庇詳細

図382　大田神社秋葉神社身舎

図383　大田神社秋葉神社妻飾

46　皇大神社　村岡区和池

本殿　一間社隅木入春日造、柿葺　　18世紀中期

身舎円柱　切目半長押　腰長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　二軒繁垂木　妻飾虹梁　蟇股　背面束立て　庇角柱　切目半長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　三方縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

『兵庫県神社誌』によれば、皇大神社は和池の鎮守社で、紀伊の熊野から分霊を勧請したという。明治三年（1870）に火災があってその後再建されたとされる。

本殿は規模の大きな一間社隅木入春日造である。庇の幅は、片側で垂木二支分ずつ狭めている。身舎の奥行中央に板扉を設けて後方を内陣とし、前方を外陣とする。外陣正面は引違いの格子戸である。

調査では火災の有無は確認できなかったが、明治期とみられる部材が多いことは確かである。身舎では、柱と頭貫から下がほぼ明治材とみられる。かろうじて脇障子羽目板、背面の内法長押、足固貫、根太に古材がある。組物から上は古材が多い。庇では頭貫・海老虹梁・組物より上が古材である。これらの点から上部に古材が残っており、柱はすべて新しいとしても、本殿全体の形態は建立当初を踏襲したものとみてよい。

そうすると、この地域では数少ない春日造であることが特色のひとつである。土生の15八柱神社が同形式の隅木入春日造だが、扇垂木の特異な形式で、建立年代も19世紀とみられる。それに対して、この本殿は標準的な形態で、建立年代も古い。

細部では、蟇股彫刻が人物の具象的なものである。庇正面は龍に乗り、冠を付けた男性で、中国説話の張

図384　皇大神社本殿全景

良である。身舎正面は笛を吹きながら空中を舞う飛天である。その他は猿、脇障子に鶴などとなっている。組物は肘木の下角が直角に近い固い形態である。

建立年代を明らかにする史料は発見できなかったが、様式上18世紀中期の建立とみられる。被災は前記のように明治三年とされるが、明治二十五年の寄付名板があるので、この頃に現在の形に大修理されたと推定する。取替材が多いことが惜しまれるが、当初形態が明らかで、装飾細部がよく残っており、彫刻の主題も面白い社殿である。（黒田）

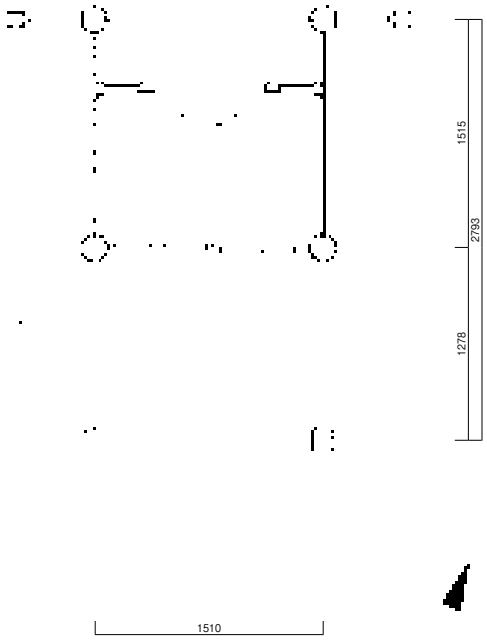


図385　皇大神社本殿平面図

図387　皇大神社本殿身舎

図388　皇大神社本殿背面

図386　皇大神社本殿庇見返し

図389　皇大神社本殿千鳥破風

47　森脇神社　村岡区森脇

本殿　一間社流造、軒唐破風付、柿葺

宝暦八年（1758　普請見舞板･本殿腰組琵琶板墨書）

身舎円柱　切目長押　腰長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　拳鼻　実肘木　雲彫刻支輪　詰組　妻飾虹梁大瓶束　二軒繁垂木　庇角柱　切目長押　腰長押　蕨花燈形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備なし　二軒繁垂木　唐破風妻飾大斗絵様肘木　拳鼻　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階三級　浜床　浜縁

森脇神社は、香美町の南端近く、いくつかの川が合流して湯舟川となる辺りの西方に位置する。当社は古くは一宮大明神と称した。

本殿は覆屋に納められた規模の大きな一間社である。構造形式からみれば、香美町内の神社本殿と大きな差異はないが、意匠的には傑出した特色を持っている。香美町内でも出色の意匠を持った社殿である。

まず庇の頭貫を両側から蕨手をつきあわせたような、火燈窓の曲線形の形状としている点が極めて特異である。しかもこの蕨手の頭貫の下に植物のような絵様が丸彫りで付けられている。重要文化財指定建造物の中でも大野老松天満社旧本殿（大分　長享二年＝1488）・方広寺七尊菩薩堂（静岡　室町中期）・田嶋神社本殿（佐賀　室町前期）のように頭貫を折り上げる例があり、総福寺鎮守天満宮本殿（大阪　天正四年＝1576）では二本の庇柱それぞれに頭貫位置に龍の彫刻を置いて､頭貫としては途切れた形になるものがある。しかし、森脇神社の形状は類例としては隣接する48皇大神社と56弁財天に見られるだけである。

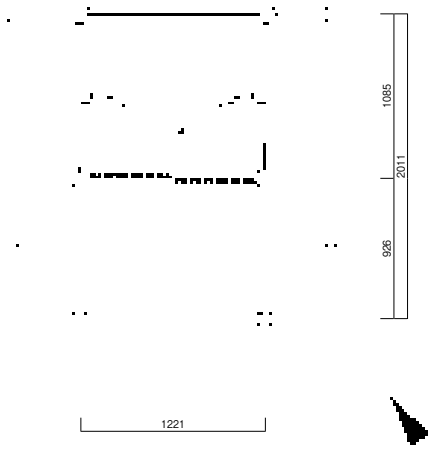


図390　森脇神社本殿平面図

また身舎中備の組物は、出組の手先に絵様肘木を置きさらに斗・実肘木を重ねた独特の形状である。

この他、支輪に雲彫刻を彫り、組物間の琵琶板には波濤の丸彫彫刻を填め込む、妻飾の大瓶束の足下の結綿部分は極端に細く、縁束の飛貫と縁葛の間は蓮池の地紋彫りを施し、縁葛は絵様のある根肘木で受け、庇の手挟は柱筋と菖蒲桁位置の二種､計四枚入れるなど、

図391　森脇神社本殿全景

図392　森脇神社本殿庇詳細

図393　森脇神社本殿庇

独特の装飾が枚挙にいとまがない。

材料の質もよく、全体に彩色が施されて華麗な社殿である。

墨書が多数のこされ、宝暦八年に出石の角岡平八が建てたことが判明する。香美町内でも突出した個性を持つ傑作である。（山岸）

図394　森脇神社本殿庇見返し

図395　森脇神社本殿妻飾

図396　森脇神社本殿腰組

48　皇大神社　村岡区黒田

本殿　一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺

元文三年（1738『兵庫県神社誌』）

身舎円柱　切目半長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠　肘木　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁板張　千鳥破風妻飾板張　庇角柱　切目半長押　腰長押　蕨火燈形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　手挟　中備なし　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾板張に絵様　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

皇大神社は黒田の集落の鎮守社である。『兵庫県神社誌』によれば、当社はもと尾上明神と称したが、明治三年（1870）に皇大神社と改称し、村社に列した。

本殿は一間社流造で正面に千鳥破風をつけ、庇には軒唐破風をつける。身舎の内部は板扉で前後に分けて、後方を内陣とし前方を外陣とする。身舎正面は格子戸嵌め殺しである。

この本殿の特徴は、庇の頭貫の形態である。通常は虹梁形の頭貫であるが、この本殿では反転曲線を組み合わせたもので、この形は蕨火燈と呼ばれ、珍しいものである。頭貫が中央で盛り上がるので中備はない。頭貫の下の内側に持ち送りを付ける。また、隣接する庇の組物の肘木を伸ばして、柱間側では頭貫に当て、蟇羽側では拳鼻状に繰形を付ける。これも類例を見ない形である。

妻飾にも特徴がある。身舎と軒唐破風の妻飾は板張りで、身舎妻飾は板に雲紋を全体に浅く彫り、軒唐破風では下の頭貫の蕨火燈形に調子を合わせた単純な唐草紋を入れる。

手挟も単純な曲線状の輪郭に植物紋風の薄彫を施す

図397　皇大神社本殿全景

だけである。中備の蟇股、脇障子、頭貫木鼻は通常形態で作られ、庇では頭貫木鼻を象鼻、手前にでる木鼻を獏とする。

長押、庇と身舎の桁、棟木、身舎と千鳥破風の破風板、裏甲に墨を塗る。きらびやかではないが、引き締まった印象を出している。

保存状態は良好で、早くから覆屋があったと推定される。様式は古風で、建立年代は18世紀前半とみられる。『兵庫県神社誌』のいう元文三年（1738）は妥当な年代であるが、史料は確認できなかった。蕨火燈の頭貫はかなり特異なもので、近隣の47森脇神社本殿にももっと華やかな蕨火燈がある。森脇神社本殿は宝暦八年（1758）の建立で、さらに複雑にした形態である。調査者の知見の範囲では滋賀県湖東地域の江戸時代の神社本殿に類例がある。当町の神社建築の中で強い個性を持つ作である。（黒田）

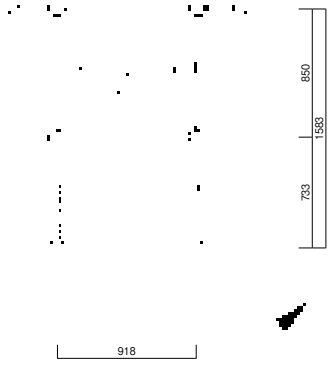


図398　皇大神社本殿平面図

図399　皇大神社本殿側面

図401　皇大神社本殿妻飾

図400　皇大神社本殿庇詳細

図402　皇大神社本殿庇

49　観音堂　村岡区宿

観音堂　桁行三間、梁間二間、切妻造、鉄板葺、向拝一間、鉄板葺　　17世紀中期

円柱と角柱が混在　足固　内法長押　中央間出三斗　実肘木　その他舟肘木　中備束　一軒疎垂木　妻飾束立　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　中備蟇股　繋海老虹梁　一軒疎垂木

観音堂は湯舟川支流の作山川の北岸にある。

観音堂は現状では正面三間、側面二間の規模である。この堂の背面側には礎石が二列残っているので、もとは奥行四間の建物が改造により縮小された建物である。正面中央間は両開きの格子扉、両脇間は片引き格子戸である。両側面・背面の柱間にはトタン板を張るが、壁貫が残っており、もとは三方とも板壁だった。

柱は正面中央間と、背面中央間の右側、堂内の仏壇前の柱が円柱で、そのほかは角柱である。中央間の柱上には正面・背面ともに三斗枠肘木をおき、それ以外の柱上は舟肘木である。

正面中央間には虹梁形頭貫を入れ、虹梁下に向かい合うように象鼻を付け、背面中央間の頭貫の木鼻として象鼻をつける。内部の梁行に二丁の大虹梁がかかり、その中央部で大虹梁の上を桁行の虹梁が繋いでいる。これらの梁には17世紀中期の洗練された虹梁絵様が施されている。虹梁上には束を立てて天井桁を組んで猿頬天井を張る。

二丁の大虹梁下の後方寄りに円柱をいれて、相互の間に腰板・腰框・扉を作り、背面の柱との間に板壁をはって厨子とする。これらは後補で、板壁に安永七年（1778）の「宿村願主」云々の墨書がある。

現状の梁組には大きな改造はなく、本来の建物の単純に後方の二間が失われ、残された前方現存部分は元の堂の外陣に相当するだろう。

虹梁の組み方、絵様、向拝の作りなど村堂とは思えない立派な意匠である。建立年代は、様式的に17世紀中期と推定する。堂内に残された蟇股に元禄十六年（1703）の墨書があるが、そこまで降らない。

現存部分は町内の村堂の一般的な形に近い。左後方の床下に囲炉裏の石組みが残っており、建物内部はよく煤けている。この堂では、秋祭りに際して氏神の作田井神社から御神体を移し、所帯主が一晩籠るという。いわば神社の御旅所になる堂であり、極めて興味深い。作田井神社は日影村内の字作田井にある。別の村から神が神幸する理由は、宿が応安年間（1368～75）に日影村から分村したが、神社は移動しなかったからと伝えている。（黒田）

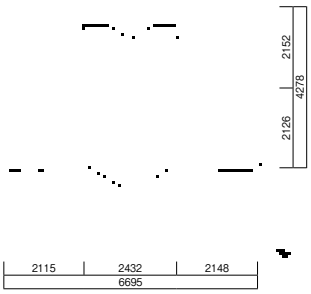


図403　観音堂平面図

図404　観音堂全景

図405　観音堂向拝見返し

50　皇大神社　村岡区和田

本殿　一間社流造、柿葺

宝永四年（1707 『兵庫県神社誌』）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　出組　実肘木　板支輪　中備蟇股　妻飾虹梁大瓶束　一軒繁垂木　庇角柱　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方榑縁　擬宝珠高欄　木階五級　浜床　浜縁

皇大神社は香美町の中央部、矢田川と湯舟川の合流する地にある。当社の所在する和田村で山陰道が西へ向かい、香住へ至る道と分岐する位置に当たる。皇大神社は弘安年中（1278～88）の勧請と伝える。

本殿は小規模な一間社である。浜縁の上に土台を組んで柱を立てる珍しい工法をとっている。全体には特別変わった形式や意匠を用いず、オーソドックスな社殿といってよい。

細部では、板支輪は彫刻をせず彩色で雲紋を描くこと、妻飾の虹梁の袖切が長いことなどに個性がみられる。

様式的には18世紀前期の建立と考えられる。『兵庫

図406　観音堂内部

図407　観音堂正面中央間詳細

図408　観音堂内部架構

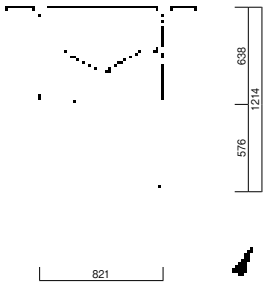


図409　皇大神社本殿平面図

図410　皇大神社本殿庇

県神社誌』には宝永四年に社殿再建とあり、根拠は明確でないがおそらくその時の社殿が現本殿と考えて差し支えない。（山岸）

図411　皇大神社本殿全景

図412　皇大神社本殿妻飾

図413　皇大神社本殿土台

51　若宮八幡神社　村岡区長板

天満神社　一間社流造、軒唐破風付、柿葺

17世紀後期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三手先　拳鼻　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾二重虹梁大瓶束　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　繋海老虹梁　手挟　中備蟇股　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾花肘木　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

若宮八幡神社は長板の鎮守社で、天満神社はその境内社である。聞き取りによると、天満神社は長板を含む上射添の数ヶ村が護持する神社で、字天神元から移築したという。

天満神社は一間社流造で、正面に軒唐破風を付ける。身舎は奥行中央に板扉を設けて後方を内陣、前方を外陣とする。外陣正面は引違い格子戸である。

この本殿は組物が特異で、身舎・庇ともに柱上に三段に積み上げたせいの高い組物を組んで、組物のヴォリュームが大きい点に特徴がある。身舎の組物は三手先で、尾垂木は用いず、すべての肘木に絵様・繰形をつける。整然と積み上げ、隅の量塊が軒を持ち出している感じである。肘木の絵様はすべて同じではなく、三手目だけ渦の形を変え、三手目の斗にもすべて拳鼻をつける。壁付きの二段目の肘木は幅を広げて五斗を並べる。二段の通肘木に対応して、支輪も二段で装飾のない板支輪である。妻面は組物で大きく持ち出されているので、蟇羽の出は小さくしており、枝外垂木は三枝である。

庇の組物は身舎とは異なり、大斗から横方向と正面

図414　若宮八幡神社天満神社正・側面

側に肘木を延ばして三段積み上げる。柱上と軒唐破風菖蒲桁下に大斗があり、正面手前には二列の組物が出る。これらの肘木も身舎と同様、絵様繰形を施す。前へ出る三段目の先端の斗は地垂木先端より前に出るが、これも通常ではみられない形である。飛檐垂木はごく短い。庇の螻羽側へは頭貫木鼻の象の頭の上から持送り状に肘木が広がり、長い実肘木を介して桁を支持する。菖蒲桁間へも肘木が伸びて、蟇股と桁の間の隙間を組物が埋める。結果的に頭貫と桁の間全体に組物による面が作られている。

軒唐破風は極端に高く反り上がり、その妻飾は蟇股を逆さにしたような類例のない形状の飾りを工夫している。

浜縁の部材が取り替えられている以外、保存状態は良好である。ただし切石の土台は、昭和七年（1932）の陰刻がある。特異な意匠がめだつ半面、蟇股の形や彫刻、虹梁絵様などは古風で端正なものであることから、建立年代は、意外に古く、17世紀後期の建立と推定する。建立年代が古い上に強い個性が現れた建物である。

なおこの天神社には重要な行事が伝わっている。それは天神の開帳で、七年目毎に各村の代表が集って天神の木像を開帳し、法会を営むという。神仏分離以前はこういうことは各地であったと思われるが、今は稀で、昔ながらの行事を残していることは極めて貴重である。（黒田）

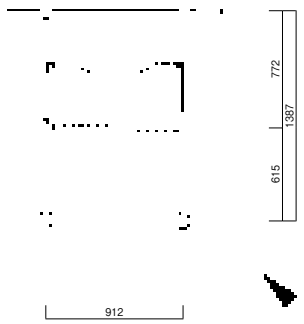


図415　若宮八幡神社天満神社平面図

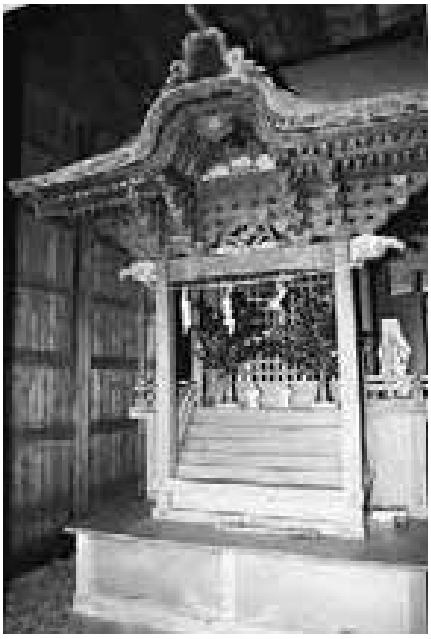


図416　若宮八幡神社天満神社全景

図417　若宮八幡神社天満神社庇見返し

図418　若宮八幡神社天満神社妻飾

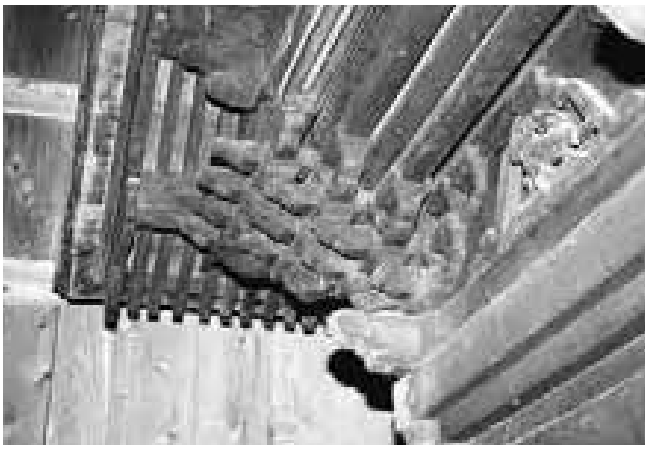


図419　若宮八幡神社天満神社身舎組物

52　大平神社　村岡区熊波

本殿　一間社流造、板葺　　18世紀中期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　中備蟇股　二軒繁垂木　妻飾二重虹梁大瓶束　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　中備龍彫刻　繋海老虹梁　二軒繁垂木　三方切目縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

お堂　正面一間、背面三間、側面三間、切妻造、妻入鉄板葺　　18世紀前期

角柱　足固　虹梁形飛貫　舟肘木（隅のみ）　中備なし　一軒疎垂木　妻飾板張り

大平神社は熊波集落の鎮守社である。北側に山を控えた南斜面の高台にある。東から石段を上がると平坦な庭の西奥に堂があり、その北の一段上に本殿がある。

本殿は、比較的規模の大きい一間社流造である。身舎の内部は奥行中央付近に板扉を設け、後方を内陣とし、前方を外陣とする。外陣の正面は引違いの格子戸である。

標準的な作りの本殿である。組物の肘木には笹繰をとり、せいをやや小さめにして、下端の反りも小さいので、水平に伸びる直線的な形態で力強い。この水平方向に伸びる感じは、蟇股・実肘木・絵様の袖切・庇の虹梁形頭貫木鼻の象鼻の形状などに共通してみられるものであり、この本殿の意匠的な特徴である。

浜縁以外は土台から裏甲まで、当初材がほぼ完存する。『兵庫県神社誌』は元禄十五年（1702）の再建棟札を掲げる。同書が引く『七美神社考』は元禄十五年、享保十九年（1734）、安政四年（1857）の再建を記している。この中で様式的に近いのは享保十九年である。保存状態が極めてよく、江戸時代中期の意匠的特質をよく示す本殿である。

お堂は本殿の手前、東側にある。方三間の規模で、正面は虹梁形飛貫をいれて中央間の柱を省略する。正面は全体が開放、両側面第一間、左側面第二間が引違戸である。背面は三間とも板壁である。内部の右側中

図422　大平神社本殿庇見返し

図423　大平神社本殿身舎

図424　大平神社本殿妻飾

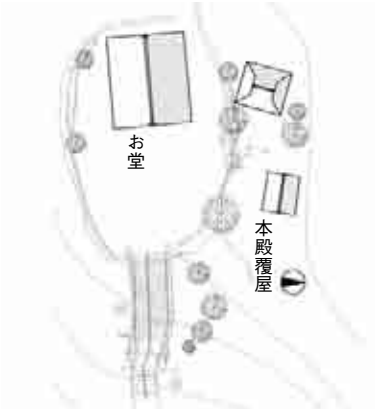


図420　大平神社本殿配置図

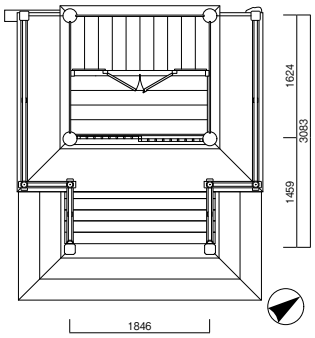


図421　大平神社本殿平面図

程に炉がある。天井はなく、小屋組をみせている。

内部には、背面の側柱中央間に柱筋をそろえて約１メートル手前の位置に円柱二本を立て、側柱との間に板壁をはり、厨子を形成する。その正面は格子戸である。厨子正面の柱は、腰框・虹梁形飛貫でつなぎ、柱上に三斗枠肘木をおく。厨子の右の柱間にも簡易な仏壇を作るが、これは中古のものである。

この堂は改造が多い。両側面第一間は現状は建具が入るが、貫の枘穴があるので、もとは壁だった。正面の虹梁形飛貫の下に二本溝の鴨居がある。敷居はないが、もとは建具で閉鎖できた。しかし、この飛貫自体が後補材なので、改修以前の形は不明である。正面の当初形式については次のように推定する。正面以外では左側面中央間が引違戸である。もし正面が開放なら、この戸は意味がない。また、この堂は冬の夜の籠りに使用された。従って正面も建具が入っていたのであろう。当初材の正面の柱には壁の痕跡はない。

屋根は、現状は切妻造妻入の鉄板葺だが、35年ほど前までは茅葺だったという。垂木・母屋・床は新しい材である。

建立年代は、様式的に18世紀前期と推定する。正面の虹梁形飛貫の様式は19世紀のものである。明治十年（1877）の修理棟札があるから、この時に挿入されたものだろう。聞取りによれば大晦日から元日にかけてと、秋祭りの宵宮に籠りが行われた。閉鎖的な堂で、梁がよく煤け、現在も炉があることは伝承を裏付ける。

閉鎖的な堂の古い事例として重要である。また、明治十年の修理棟札には毘沙門天・阿弥陀如来・不動明王と記され、現在もその組合せの本尊を祀っている。この組合せも面白いが、神仏習合の信仰形態を残していて貴重である。（黒田）

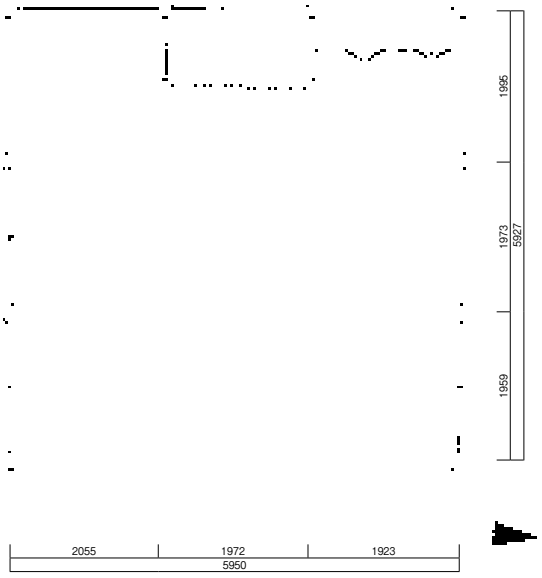


図425　大平神社お堂平面図

図426　大平神社お堂全景

図427　大平神社お堂内部見返し

図428　大平神社お堂内部

53　鎧神社　村岡区丸味

本殿　一間社流造、柿葺　　18世紀後期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　妻飾虹梁蟇股　二軒繁垂木　庇角柱　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方切目縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床

鎧神社は香美町中央部、丸味川上流の丸味にあり、ここは山陰道が通っていた。鎧神社はこの地域の15世紀後期の領主であった板倉兵庫を祀ったと伝える。

本殿は中規模の一間社である。本殿に装飾を多く付けるこの地域にあって、この建物は極めて簡潔な、端正な作品である。意匠面では、肘木が禅宗様であるのは珍しい。

身舎四面の中備蟇股と妻飾蟇股には、足の部分に刻銘があって、寄進者名が知られる。このような刻銘も珍しい。

虹梁絵様は18世紀前期の端正な意匠であるが、頭貫木鼻はやや勢いのない太めの絵様となっていて、18世紀後期の建立かと考えられる。ただし『兵庫県神社誌』には正徳二年（1712）の棟札があると記しているので、そこまで遡る可能性もある。（山岸）

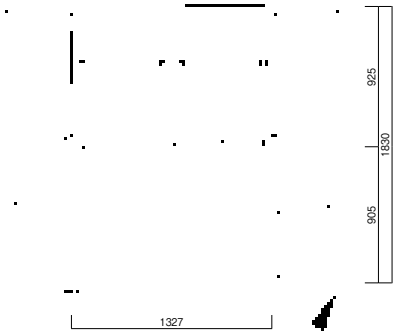


図429　鎧神社本殿平面図

図430　鎧神社本殿全景

図431　鎧神社本殿庇見返し

図432　鎧神社本殿庇詳細

図433　鎧神社本殿妻飾

54　八幡神社　村岡区高津

本殿　三間社流造、板葺　　18世紀前期

身舎角柱　腰長押　内法長押　組物なし　中備なし　妻飾陸梁束　正面繁垂木　背面板軒　庇角柱　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　大斗絵様肘木　中備なし　二軒繁垂木　正面切目縁　木階一級

八幡神社は香美町中央部、矢田川右岸の標高六百メートルほどの宮神の集落にある。高津村の鎮守は勢主山神社であるので、高津の中の村でこの八幡神社を守るのはたった四軒の家だという。

本殿は変則的な小規模三間社である。身舎は桁行三間だが梁間は一間で、庇は身舎とは柱筋を揃えず一間しかない。このため繋ぎの海老虹梁は庇側では庇柱上には来ず、桁とかみあうことになる。

身舎は正面中央間にのみ扉があって、その他は板壁で閉じられている。組物は庇柱上だけであり、すべての柱はクリ材の角柱となっている。いかにも山深い土地に造られた、地方色の濃厚な建物である。

なお、庇柱には框の埋木があるので、木階は中古のもので、当初とは形式が変わっている。（山岸）

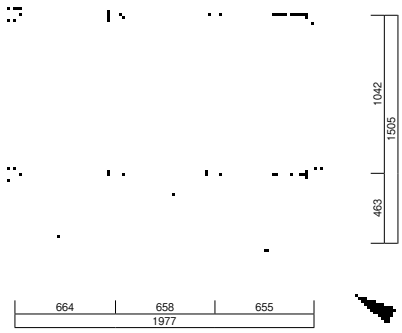


図434　八幡神社本殿平面図

図436　八幡神社本殿妻飾

図435　八幡神社本殿正面

図437　八幡神社本殿庇見返し

55　勢主山神社　村岡区高津

本殿　桁行一間、梁間一間、入母屋造、千鳥破風付、向拝一間、軒唐破風付、柿葺

寛政九年（1797　棟札）

円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　尾垂木付三手先　拳鼻　実肘木　詰組　二軒繁垂木　妻飾　虹梁大瓶束　向拝角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾獅噛神　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

勢主山神社は高津地区のほぼ中央に位置する。高津集落の氏神であり、明治以前は妙見社と呼ばれていた（『兵庫県神社誌』）。境内の東側の山裾に覆屋に入った本殿があり、本殿から石段を降りた敷地に石段を挟んで北側にお堂、南側に稲荷神や山の神を合祀した四軒宮がある。

本殿は、入母屋造、平入の社殿で、規模は方一間、正面に一間の向拝を付ける。

身舎は正面に桟唐戸を入れ、正面と側面に切目縁をまわす。組物は、尾垂木・拳鼻をもつ三手先で、詰組とする。二段の壁付通肘木ならびに一手目・二手目の通肘木の上に巻斗を隙間なく並べる。この組物の形式は、香住区の27八柱神社本殿と共通する。向拝の組物にはせいの高い皿斗を用いる。中備には、雲に囲まれた龍の彫刻を入れる。身舎の縁下ならびに向拝の腰長押下の小壁には亀甲形の透かし彫りを施す。

この本殿の特徴は、身舎の縁の腰組の構造である。二重の木製基壇の上に切目長押・内法長押・台輪をまわし、側面では台輪上に三手先組物を並べ、縁を支える。一方、背面側は、台輪の上に大斗を載せ、その上に四段の壁付通肘木を入れ、この通肘木上に隙間なく巻斗を並べる。四段目の通肘木の両端と中央に拳鼻を出す。側面の腰組の派手さも特筆すべきであるが、このような背面側の意匠・構造は当地域でも他に例をみない。

建立年代は、棟札から寛政九年（1797）、大工は高津の下垣清左衛門義忠と判明する。

向拝の虹梁に持送りがあったが、欠失している。その事を除けば当初の姿をよく残している。

規模はそれほど大きくないが、造作も丁寧であり、組物や腰組の意匠・構造は極めて独特である。保存状態もよく、当地域の神社本殿の意匠・技術の特性を知る上で大変貴重な遺構である。（岸）

図440　勢主山神社本殿向拝

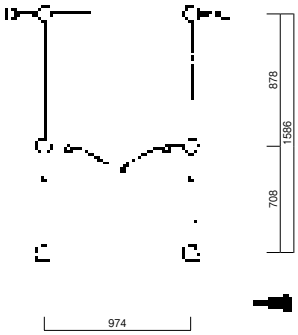


図438　勢主山神社本殿平面図

図439　勢主山神社本殿全景

図441　勢主山神社本殿本体部

図442　勢主山神社本殿向拝詳細

図443　勢主山神社本殿本体部正面

図444　勢主山神社本殿背面

56　弁財天　村岡区味取

弁財天社　一間社隅木入春日造、軒唐破風付、柿葺

18世紀中期

身舎円柱　切目長押　腰長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備なし　正面妻飾虹梁　背面妻飾陸梁束　二軒繁垂木　庇角柱　切目長押　腰長押　蕨火燈形頭貫　木鼻　根肘木　連三斗　実肘木　海老虹梁　中備なし　二軒繁垂木　唐破風妻飾花肘木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階三級　浜床　浜縁

弁財天は香美町中央部の矢田川西岸にある。沿革は未詳である。

弁財天社は小規模な隅木入り春日造社殿であるが、極めて特異な興味深い意匠を持っている建物である。

それは庇の虹梁形頭貫を、蕨火燈と呼ばれる蕨手をつきあわせたような独特な形状にしている点である。これは47森脇神社、48皇大神社にも見られた意匠である。

蕨手の下には若葉状の鰭も付いている点は森脇神社と酷似しているが、他の点では差異もあって、弁財天社独特の点も多々見られる。

まず庇の背面には森脇神社のように手挟は用いていない。身舎は中備を用いないが、そのかわりに、組物間の小壁全面に浮彫の彫刻で埋め尽くされている。身舎の大斗はすべて皿斗付である。菖蒲桁には反りを付けている。

図445　弁財天社全景

47森脇神社と極めて類似した意匠を持つ独特の社殿として注目される。森脇神社と同じ頃の建立であろう。（山岸）

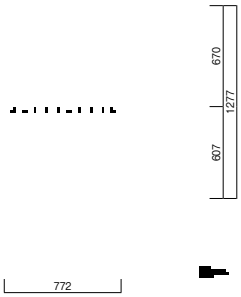


図446　弁財天社平面図

図447　弁財天社庇詳細

図448　弁財天社庇

図450　弁財天社妻飾

図449　弁財天社身舎正面

図451　弁財天社見返し

57　薬師堂　村岡区原

薬師堂　桁行正面一間、背面三間、梁間三間、入母屋造、茅葺（鉄板覆）、側面下屋庇付、鉄板葺

嘉永二年（1849　棟札）

角柱　地覆　足固　飛貫　正面のみ虹梁形飛貫　大斗絵様肘木　実肘木　中備なし

原村は香美町中央部の矢田川東岸の段丘上にあり、中世末には「とうかく寺」「東仙寺」等の寺があった、薬師堂との関係は不明である。

薬師堂は方三間の規模を持ち、鉄板で覆われながらも茅葺の屋根を残す珍しい事例である。この種の村堂では組物も使わない例が多いが、薬師堂では大斗に十字に組んだ絵様肘木を載せ、桁と梁鼻を受けている。梁鼻はせがいとなって、出桁を受ける。

内部は一室で、棹縁天井を張る。正面の中央二本の柱は後補材で、本来は柱を省いて一間としていた。この正面中央間と、側面第一間にだけ建具が入り、他は板壁で閉じている。かつてはこの薬師堂で芝居を演じており、芝居の際には建具をはずして使用したという。

背面に寄せて二本の円柱を立てて厨子を構える。円柱は木鼻付きの虹梁形頭貫で繋ぎ、柱上には三斗を組む。厨子の中に薬師・地蔵・観音を祀る。

小屋組は、桁行・梁行ともに柱筋に野梁を架け、その上に束を立てて貫で固めている。側面の下屋は六十年くらい前に増設されたと伝えている。

茅葺の村堂の姿を留める点が貴重である。棟札によれば美方郡辺地村の大工が建てている。前身堂の棟札もあり、享保九年に村岡の大工が建てていた。（山岸）

図453　薬師堂全景

図454　薬師堂正面虹梁形飛貫

図452　薬師堂平面図

図455　薬師堂内部

図456　薬師堂小屋組

58　八幡神社　村岡区長瀬

本殿　一間社流造、柿葺　　17世紀後期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　中備蟇股　妻飾虹梁斗束　一軒繁垂木　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

八幡神社は香美町中央部の矢田川沿いにある。沿革は不詳である。

本殿は小規模な一間社である。香住区内のように彫刻の装飾を多用することなく、端正にまとめ上げられている。庇や妻飾の虹梁絵様は渦と若葉が近接し、極めて古風に見える。しかし、絵様の彫りの幅は比較的広く、その点は新しさが感じられる。また庇の肘木は面取と笹繰があり、身舎にはない点も古風な原則に則っている。

『兵庫県神社誌』には慶長二年の棟札の釈文を抄録している。本殿の建立年代はそこまで遡らず、17世紀後期の作と考えられる。ただし庇の柱、長押・扉・板壁・縁周り・軒・屋根などすべて新しい材料で取り替えられている。明治頃に大修理をしているらしい点が惜しまれる。（山岸）

図458　八幡神社本殿全景

図459　八幡神社本殿妻飾

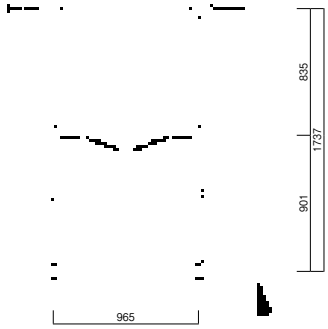


図457　八幡神社本殿平面図

図460　八幡神社本殿庇見返し

図461　八幡神社本殿身舎背面

59　観音堂　村岡区長瀬

観音堂　桁行三間、梁間三間、寄棟造、桟瓦葺

寛政五年（1793　喚鐘銘）頃

角柱　足固　腰貫　内法貫　組物なし　中備なし　一軒疎垂木

観音堂は、長瀬の東で、矢田川と山田川の合流付近に位置する。現在では､僧侶も神主も関与しておらず、参詣も近隣の二軒のみだという。

観音堂は方三間の寄棟造の建物であるが、平成十四年に大きく改築されている。厨子正面の軸部、蟇股の斗より下にのみ当初部材が残るので、厨子部分について記す。

厨子は円柱を腰貫・虹梁形頭貫で繋ぎ、正面に格子戸を設ける。虹梁形頭貫には小さな渦と大きな若葉の絵様を施し、袖切部分に猪目を付ける。

組物は連三斗である。中備の蟇股は内部にリスとアケビを彫刻し、脚に葉の彫刻を付ける。

このお堂にある喚鐘には寛政五年（1793）の銘がある。絵様の様式からみて厨子の建立年代も寛政頃とみて妥当である。平成度の改築以前の建物も現在とほぼ同様の方三間の平面形式であったと伝えられるが、厨子の部材に風蝕がみられることから、正面の中央間は開放であった可能性がある。

厨子は、装飾豊饒で立派である。改造が大きいが、集落の信仰形態を考える上で重要な遺構である。（岸）

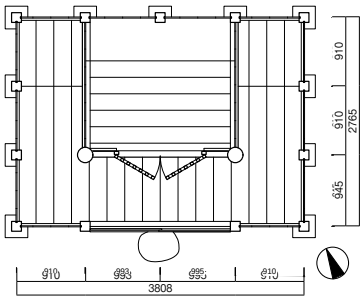


図462　観音堂平面図

図463　観音堂全景

図464　観音堂内部

図465　観音堂厨子正面

図466　観音堂厨子詳細

60　お堂（阿弥陀堂）　村岡区長瀬

お堂　正面三間、背面四間、側面四間、切妻造、妻入、桟瓦葺　　寛政三年（1791　棟札）

角柱　足固　飛貫　正面のみ虹梁形飛貫　木鼻　組物なし　中備なし　妻飾縦板壁　一軒半繁垂木

長瀬の集落のはずれにあるお堂で、沿革は不詳ある。

お堂は比較的規模の大きな建物で、基本的には正面三間、奥行三間で、側面では第三間の中央に、背面では中央間の中央に間柱を立てて、ともに四間となっている。正面の中央二本の柱は向拝状の庇を付けるために近年補入されたもので、本来は柱を省略して一間の構えになっている。

内部は板敷で、天井は張らず、小屋組を見せている。正面から二間目に二本の円柱を立てて、背面中央の二本とで方一間の厨子を設ける。厨子は向唐破風造になっている。厨子には阿弥陀・不動・毘沙門の三尊を祀る。

建物本体は組物も用いず簡素な形式であるが、厨子の円柱は木鼻付きの虹梁形頭貫で繋ぎ、三斗を組んで、中備には蟇股を置き、唐破風妻飾は虹梁蟇股である。蟇股に花肘木を組み、蟇股内部には雲紋を彫る。つまり厨子だけは相当に華やかに飾っていることになる。屋根は正面には唐破風を据えているが、その奥は切妻造の板葺で垂木も用いていない。なお肘木の繰りが直線である。

厨子の両脇間は扉を設けて物入れとしている。

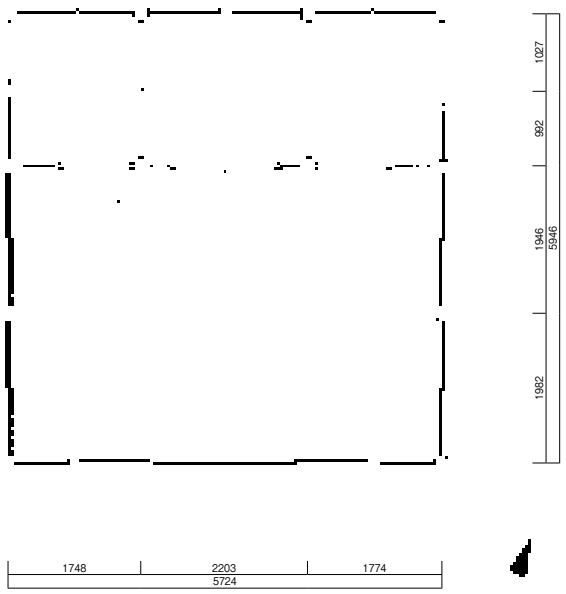


図467　お堂平面図

小屋の梁組は当初材であるが、束・母屋桁・野地板はすべて新しく、また柱の上に桁を組んだ上に短い束を立てて桁を再度載せているので、屋根は近年すっかり改造されたものであることになる。つまり切妻造妻入が本来の屋根形式かは確認できない。

棟札が現存して建立年代が明確で、小代平野村の大田安次が大工であった。建立当初から阿弥陀堂と呼ば

図468　お堂全景

図469　お堂背面

図470　お堂正面虹梁形飛貫

れていたことも知られる。（山岸）

図471　お堂内部

図472　お堂厨子

図473　お堂厨子詳細

61　山ノ神　村岡区山田

本殿　一間社流造、板葺　元文三年（1738　釣鐘銘）頃

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備正面大斗絵様肘木、側面蟇股　二軒繁垂木　妻飾蟇股　庇角柱　切目長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜縁

山の神は、山田川沿いに広がる集落の南の山裾に位置する。この地域では、慶長年間から宝暦三年（1753）まで鉄山が開かれていた。山の神を祀る当社は、鉄山にかかわる人々の信仰を広く集めたという。

本殿は、小規模な一間社流造で土台の上に立つ。正側面に縁を廻し、正面には五級の木階と浜縁を備える。登高欄は、繰形を施した板高欄である。

身舎は正面に嵌め殺しの格子を入れ、側背面を板壁とする。内部は前後に二室に分け、室境に板扉を設ける。柱は円柱で、切目長押・内法長押・頭貫でつなぎ、やや大ぶりな木鼻を付ける。中備は正面を双斗風の大斗絵様肘木としており特徴的である。側面には蟇股を入れる。妻飾は虹梁の上に大きな蟇股を載せて、中備

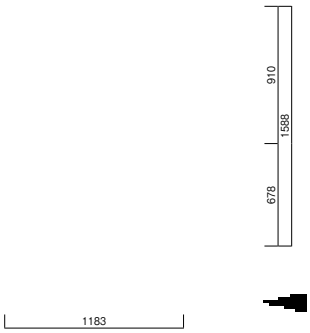


図474　山ノ神本殿平面図

図475　山ノ神本殿全景

の蟇股とともに妻面を豪華に飾る。

庇は角柱で、虹梁形頭貫でつなぐ。中備には二頭の龍が絡み合った精緻な彫刻を入れる。部分的に塗料が残っており、彩色が施されていたことがわかる。

建立年代は不明だが、本殿の螻羽に元文三年（1738）銘の釣鐘が吊されていることから、その頃の建立と考えておきたい。

簡素な形式だが、中備の龍の彫刻、妻面の蟇股を重ねた豪華な構成に、意匠上の大きな特徴がある。さらに、身舎虹梁や海老虹梁の袖切部分、庇の中備や大斗などには彩色が残存しており、社殿の各所に彩色が施されていた時期のあったことがわかる。鉄山の操業という地域の歴史を示す遺構として大変貴重である。（登谷）

図476　山ノ神本殿庇正面

図477　山ノ神本殿庇

図478　山ノ神本殿身舎

図479　山ノ神本殿妻飾

62　熊谷神社　村岡区山田

本殿　一間社流造、板葺

元禄十七年（1704　鰐口銘）頃

身舎円柱　切目半長押　腰長押　内法長押　頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　中備蟇股　二軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束笈形　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床

熊谷神社は山田の鎮守社である。

本殿は、規模の大きい一間社流造である。身舎の正面は嵌め殺しの格子戸で、その内部は板扉で前後に分かち、後方を内陣、前方を外陣とする（内部実測せず）。

構造形式はごく一般的で、特徴的な点と言えば、妻飾は張りのある形の大瓶束に三斗枠肘木を乗せ、笈形も蟇股に似た形態である点である。これらに比べると庇正面の龍彫刻の形は違和感がある。

妻飾の虹梁、海老虹梁ともに絵様の彫りが繊細な点、袖切の形態が二筆と単純な点、渦・若葉とも単純な形態で、若葉が渦に近接している点など、建立年代の古さが表れている。身舎の頭貫木鼻・蟇股も古風である。

身舎正面の羽目板、庇の桁の正面側は墨が塗られているが、後者の裏面は朱塗りなので、墨塗りは後補である。組物にも朱が残り、全体に朱塗りだっただろう。

近代に入っての修理で内法長押・切目半長押・高欄・土台が取り替えられており、もとは木階の両側に浜縁があった痕跡がある。庇の龍彫刻も後のものであろう。

建立年代に関する史料は失われている。神仏分離の際、取調官が来る前に棟札を川に捨てたという。様式的には17世紀後期の建立と推定する。元禄十七年の紀年の「御宝前当村氏子中」と刻まれた鰐口が伝わっている。その頃の建立とみて良い。

建立年代が古く、町内では個性的な神社本殿が多い中で、標準的な形態と細部をもち、当町の神社本殿の変遷を考えるうえで重要な作である。（黒田）

図481　熊谷神社本殿全景

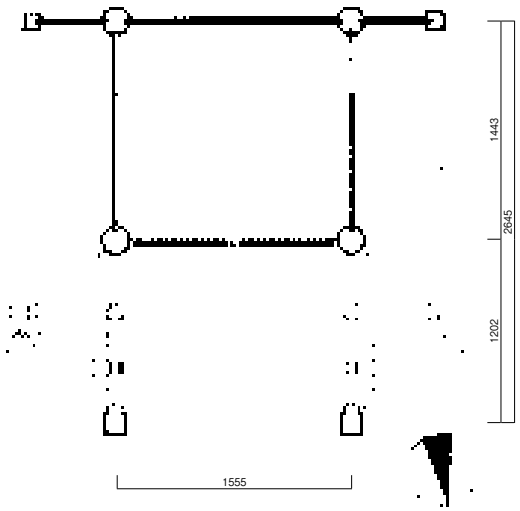


図480　熊谷神社本殿平面図

図482　熊谷神社本殿庇見返し

図483　熊谷神社本殿妻飾

63　八幡神社　小代区神場

本殿　二間社流造、板葺

享保十六年（1731 『兵庫県神社誌』）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　出三斗　実肘木　中備蟇股（正面のみ）　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　繋海老虹梁　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

八幡神社は神場の鎮守社である。北に集落を望む北西斜面に立地する。神社は珍しい北正面の配置で、北から参道をあがると、左手（東）に堂があり、さらに石段をあがると本殿にいたる。

本殿は二間社流造で、屋根は緩い勾配の板葺である。二間社流造は類例の少ない形式である。仏堂・神社本殿などは、正面柱間数を奇数として中央に柱が来るのを避ける事が多い。神社本殿では偶数の信仰対象を安置する場合、偶数柱間数となることがある。この本殿は身舎の桁行が二間で正面中央に柱が立ち、それぞれの柱間に板扉を設ける。庇では柱は中央の柱を省略して一間の扱いである。神が二柱であることを示唆するが、『兵庫県神社誌』には江戸時代には三宝荒神社と称し、明治以後八幡神社と改称したとあって、なぜ二間社なのかは判然としない。

本殿の構造形式は一般的で、組物も簡素である。意匠面での特徴としては、庇の虹梁形頭貫の絵様の渦が三重に巻込む木瓜形であることが特異である。中世には巻込みが多い事例があるが、江戸時代では稀である。蟇股の輪郭も特徴的なもので、本来なら巻上がる形の足元の部位が円になってしまっている。また本来は頂部に斗があって、直接かまたは実肘木を介して桁を受けるが、身舎では斗の含みの鬢太を作らず、庇では斗が薄い板状の実肘木となってしまっている。

保存状態は非常によい。『兵庫県神社誌』には享保十六年、寛政三年、嘉永三年の再建棟札があることを記し、さらに明治三年に社殿を再建したと書いている（『美方町史』も同様）。様式的には建立年代は享保十六年が妥当である。

本殿に向かう石段を上がる直前に堂がある。桁行正

図484　八幡神社本殿全景

図485　八幡神社本殿正・側面

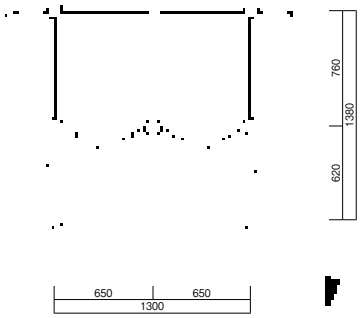


図486　八幡神社本殿平面図

図487　八幡神社本殿身舎正面

面一間、背面三間、梁間三間、切妻造、トタン葺で、正面は開放、両側面と奥壁は板壁である。背面中央に後方に張出して仏壇を作り、中に厨子を置く。

正面は虹梁形飛貫の下に鴨居があり、その間は小壁である。鴨居の溝から、両脇が嵌め殺しで、中央は引分けの戸が入っていたと考えられる。

内部の中央やや左寄りに囲炉裏がある。内部は梁と束まで黒く煤け、桁・垂木は新材である。柱上部に腕木が取り付いた痕跡があり、もとはせがい桁があり、茅葺だったと推定される。

様式から幕末に建てられたと考えられる。神社付属の堂の一例である。(黒田)

図490　八幡神社本殿妻飾

図488　八幡神社本殿庇詳細

図491　八幡神社堂全景

図489　八幡神社本殿庇

図492　八幡神社堂内部

図493　八幡神社堂厨子

64　荒霊神社　小代区広井

本殿　一間社流造、柿葺　　18世紀前期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　中備蟇股　妻飾虹梁大瓶束　一軒繁垂木　庇角柱　切目長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

広井の荒霊神社は香美町西南部、矢田川の右岸に所在する。この地域は13世紀以降、下司や地頭として広井氏一族が支配し、荒霊神社は弘安年中に広井氏が広峯神社を勧請したと伝える。広井氏の氏神が元禄年間に村の神社となった。元は八大荒神と称したが、明治に現在の名に改めた。

本殿は小規模な一間社で、装飾的な部分が少なく、正統的な端正な社殿ということができる。虹梁絵様は渦が小さく、若葉も近接していて、極めて古風な意匠を持っている。庇虹梁形頭貫裏面や海老虹梁には絵様を彫らず、実肘木にも絵様を彫らず、見え掛かりに重点を置いて加工している。

身舎正面の板扉は中古の改造になるもので、敷居・鴨居に二本溝の残るところから引き違いの格子戸だったと考えられる。

建立年代を示す史料は見いだせず、様式的には17世紀まで遡るのではと疑わせる。一方、『兵庫県神社誌』には天保十四年（1843）再興の棟札釈文を載せる。風蝕などからみて、そこまで降るとは考えがたく、18世紀前期の建立とみておく。しかしその場合、天保の再興の内容が問題となる。他の社殿を移築して現在の本殿としたなどの可能性を考えねばならない。（山岸）

図495　荒霊神社本殿正面

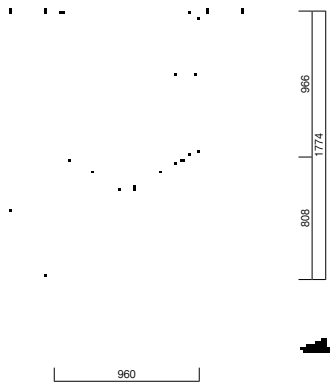


図494　荒霊神社本殿平面図

図496　荒霊神社本殿庇

図497　荒霊神社本殿妻飾

65　荒霊神社　小代区水間

本殿　一間社流造、板葺

文化元年（1804　棟札）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　庇角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方縛縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

荒魂神社は文化元年（1804）の棟札によると、三宝大荒神社といい、この村の氏子中によって建てられている。

本殿は中規模の一間社流造で、屋根は勾配方向の長い板で葺く流し板葺である。規模、形式、細部とも簡素ながら標準的な建物で、格段の特色はない。

様式的には渦と若葉の絵様は細くて古風で、一見18世紀の建物にみえる。しかし、妻飾の虹梁絵様が崩れている点や、部材の風蝕から、棟札の記す文化元年に建立されたことは確かである。

図499　荒霊神社本殿庇

正面扉と縁下正面両脇の羽目板に眼象を浮彫りにしている。組物の下端曲線は円弧状で禅宗様の形である。身舎の蟇股は全体に雲紋が彫刻されている。

保存状態は良好でほぼ完存している。建立年代は上記のように文化元年で、大工は大谷村の藤原朝臣中村治平である。遷宮導師は光明寺の龍宝がつとめている。近隣の貫田の72八幡神社も文化十二年に本殿を建立し、同じく光明寺の龍宝が遷宮導師であった。規模もほぼ同じであるが、八幡神社は当社より派手な意匠で、同時期の本殿がそれぞれ個性を持つことを示す好例である。（黒田）

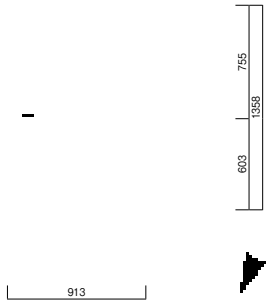


図498　荒霊神社本殿平面図

図500　荒霊神社本殿全景

図501　荒霊神社本殿妻飾

図502　荒霊神社本殿身舎

66　野間谷神社　小代区野間谷

本殿　三間社流造、板葺

寛延四年（1744　『兵庫県神社誌』）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　平三斗　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　庇角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　中備蟇股　繋海老虹梁　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級

野間谷神社は野間谷の鎮守社である。

本殿は比較的規模の小さい三間社流造で、板葺である。身舎正面は柱間三間であるが、庇では中央二本の柱を立てず、一間としている。身舎正面は三間とも板扉である。木階は身舎正面とおなじ幅である。柱は木製土台に立つ。

目を引く大きな特徴はないが、細部で以下のような特徴を持っている。頭貫木鼻は隅だけではなく、正面の柱上にはすべてつける。妻飾の虹梁はほぼ直材で、わずかに両端に繰りがある。大瓶束もほぼ直材で、直接に棟木を噛んでいる。蟇股は輪郭を同じ太さとして、足先を少し跳ね上げる。肘木は、木口曲線が滑らかで禅宗様風だが、円弧ではない。虹梁絵様の渦の位置を中央に寄せて、若葉を伸ばすのも特徴で、妻飾では若葉の先端が大瓶束の結綿にまで届いている。庇の虹梁形頭貫では、若葉の先端からさらに若葉を派生させて、三間分の長大な頭貫を飾っている。

この本殿では垂木の配り方に特徴があり、身舎の中二本の柱では、柱心に垂木心を揃えるが、両端の柱筋では柱を手挟むように垂木を配る。

彩色はほとんど剥落しているが、木口･眉などに朱、絵様に墨が残っている。

図504　野間谷神社本殿全景

屋根材は、長い流し板葺で木口が風蝕しているが、板表面は風食していないので、別に葺材があったのではなかろうか。

保存状況は非常によい。建立年代は、『兵庫県神社誌』に寛延四年（1744）と文政十年（1827）の再建棟札が掲載されている。様式的には前者の年代が妥当で、後者は修理であろう。村落鎮守社では一間社が普通であるから、三間社である点は注目すべきである。寛延四

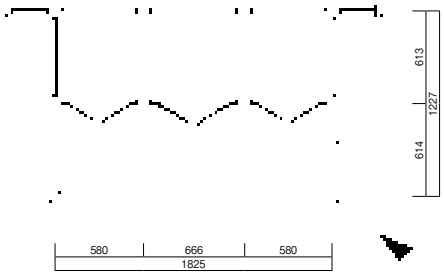


図503　野間谷神社本殿平面図

図505　野間谷神社本殿妻飾

図506　野間谷神社本殿側面

年の棟札には、三宝荒神・地蔵権現・山王権現と書かれており、神仏が混在して祀られていた。神仏分離以前の祭祀の状況がわかる興味深い事例である。（黒田）

図507　野間谷神社本殿庇

図508　野間谷神社本殿身舎

67　阿弥陀堂　小代区実山

阿弥陀堂　桁行正面一間、背面三間、梁間三間、切妻造、背面下屋庇付、鉄板葺　　19世紀前期

角柱　足固　鴨居　虹梁形飛貫　木鼻　組物なし　中備なし　一軒疎垂木　妻飾束組

阿弥陀堂は香美町西南部、矢田川の上流の東岸にあり、荒御霊神社の境内に立っている。

阿弥陀堂は方三間堂であり、正面だけは虹梁を入れて柱を省略し、一間の構えとしている。正面は板戸で、他は板壁で閉鎖されている。

内部は一室で、背面に軒下に張出部を造って、厨子や物入としている。天井は張らず、小屋組を見せ、板敷の床の中央部に囲炉裏を設ける。

背面中央間と向かって右脇間は虹梁形飛貫を入れて、厨子の正面を飾るが、組物は用いない。

図509　阿弥陀堂全景

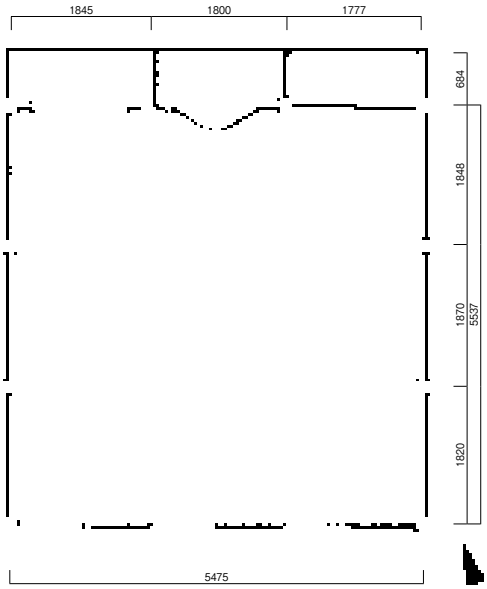


図510　阿弥陀堂平面図

極めて簡素な村堂の一例である。建立年代を示す史料はないが、境内の鳥居が文化十二年（1815）に造られており（刻銘）、その頃に阿弥陀堂も建てられたと考えられる。（山岸）

図511　阿弥陀堂正面虹梁形飛貫

図512　阿弥陀堂内部

図513　阿弥陀堂小屋組

68　光明寺　小代区平野　　高野山真言宗

山門　桁行一間、梁間二間、二重門、入母屋造、銅板葺　19世紀中期

下層　親柱円柱　蹴放　楣　冠木　控柱角柱　虹梁形頭貫　木鼻　梁行に前一間は頭貫　後ろ一間は腰貫　飛貫　梁行に台輪留め　三斗枠肘木組　実肘木　中備蟇股　上層角柱　頭貫　木鼻　出三斗　実肘木　中備輪違い繋ぎ彫刻　一軒扇垂木　妻飾板壁

本堂　桁行18.0メートル、梁間12.0メートル、入母屋造、向拝一間、銅板葺　　天保十三年（1842　寺蔵記録）

角柱　腰長押　内法長押　飛貫二段　舟肘木　中備なし　一軒疎垂木　木舞裏　妻飾木連格子　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備獅子彫刻　一軒吹寄疎垂木　木舞裏

弥勒堂　正面三間、側面二間、入母屋造、妻入、向拝一間、桟瓦葺　19世紀中期

角柱　切目長押　内法長押　正面中央間・側面第一間虹梁形飛貫　絵様肘木　中備虹梁上のみ蟇股　一軒疎垂木　向拝角柱　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　手挟　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木

光明寺は香美町西南部、矢田川の上流の東岸にある。貞和年中（1345～50）に夢想疎石が野間谷（平野より北）に開いた善福寺があったが、天正の兵火にかかり、寛永十八年（1641）には無住となった。正保二年（1645）に板仕野（旧村岡町内）の長福寺の応教を迎えて寺を中興した。その際、この地にあった景雲寺の寺地を利用し、寺名を光明寺としたようである。谷筋に添った高台に石垣を組んで境内地を確保し、山門を入ると庫裏・本堂が一列に立ち並び、左手奥に弥勒堂がある。

山門はせいの高い二重門で、上層には鐘を吊る。四脚門の屋根に上層を載せた形式と見ることができる。

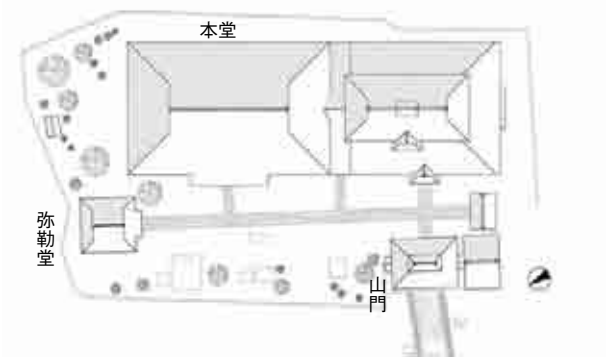


図514　光明寺配置図

下層は四脚門とは言え、一風変わった形式が見られる。それは梁行に台輪を入れる点で、これが男梁の代用となっているのであろう。前後で貫を入れる位置を変えるのも興味深い。梁・桁の先端で出桁を受けるのも特異であるが、この出桁は後補材のようである。

上層はさらに特異で、組物は二手の手先を出し、壁付と一手目に拳鼻風の絵様肘木を付けるが、桁は柱心に載るので、形式としてはあくまで出三斗ということになる。軒は下層と形式を変えて扇垂木とする。

一方で木鼻・虹梁絵様・蟇股などは正面を派手に、背面はやや簡素にと、意匠を変えている。

下層正面の蟇股に「豊岡住　秋塚冶助広貞」と刻銘があり、弥勒堂と同じ彫刻師である。

このように工夫のこらされた興味深い建物である。建立年代を示す史料は見いだせなかったが、『美方町史』は文政九年（1826）に村が寺共々全焼し、天保年間に造営が行われたと記しており、様式的にみてもその頃の建立と見られる。

本堂は大規模な茅葺の堂で、現在は銅板で覆われている。二列六室の部屋と正面と左側面に広縁を設けた

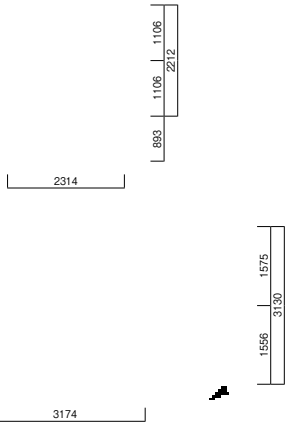


図515　光明寺山門平面図

図518　光明寺山門下層内部

図516　光明寺山門正面全景

図519　光明寺本堂上層

図517　光明寺山門背面全景

図520　光明寺本堂下層細部

平面形式である。中央の奥が内陣、左手奥が床構えを持つ座敷であって、通例の平面構成だが、内陣と座敷の間に一間幅の小部屋があることと、右手奥の部屋にも吊床を設けているのが珍しい。

堂内は、部屋境は内法長押を入れ、天井近くにもう一段、蟻壁長押を入れて柱を繋いでいる。

図521　光明寺本堂全景

図524　光明寺本堂前列室

図522　光明寺本堂向拝

図525　光明寺本堂広縁隅架構

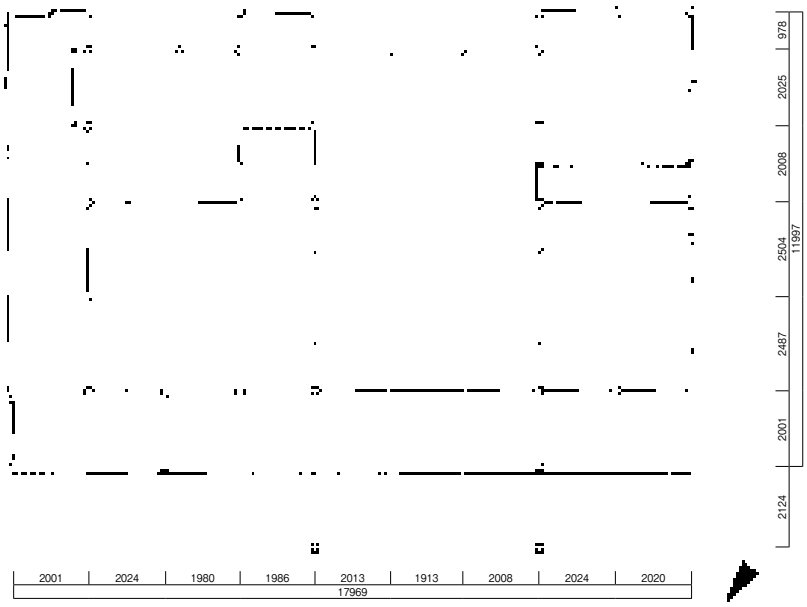


図523　光明寺本堂平面図

図526　光明寺本堂広縁

内陣の背面寄りを三間に分け、須弥壇を設ける。三間の内、両脇間は根肘木で受けた虹梁形頭貫を入れ、中央間は火頭形の枠を組んでいる。

正面広縁の隅の部分で、隅木を柱ではなく正面入側桁で受け、さらに隅木中程を側面入側桁でも受けている構造は珍しい。

柱は一部で一間毎に立て、190ミリメートル角（六寸三分角）と太い。また室内の木部は弁柄を混ぜたような透漆で塗られている。

極めて上質の方丈形式本堂であり、改造も少なく幕末の一つの典型と言える。向拝の中備に「彫物師　丹州柏原町住人　中井権次橘正員」との刻銘があり、山門・弥勒堂とは彫物師が異なっている。

弥勒堂は奥行きの長い妻入の仏堂である。正背面は中央間を広くとり、側面は第一間を極端に広くとった変則的な柱配置の建物である。その広い柱間に虹梁形

図527　光明寺本堂仏間

図528　光明寺本堂仏間須弥壇

図529　光明寺本堂仏間左手

図530　光明寺弥勒堂全景

図531　光明寺弥勒堂側面

図532　光明寺弥勒堂向拝見返し

飛貫を入れており、中備蟇股共々部材が大きく、虹梁絵様も相当複雑な意匠を彫り込んでいる。

内部は一室で、背面に寄せて円柱の来迎柱二本を立て、その前に須弥壇を設けている。奥行の柱間の狭い第二間部分に須弥壇は納まってしまう。来迎柱に揃えて両側面の柱筋の内法長押上に角束を立てて、来迎柱間とその両脇には虹梁を入れる。来迎柱上には三斗を組むが、大斗下の皿斗は円盤状、つまり礎盤状で特異である。一面に格天井をはり、格間に草花の絵を描き飾る。

向拝の中備彫刻の背面に山門と同じ「彫工師豊岡住　秋塚冶助広貞」の刻銘がある。幕末期の質の良い建物である。建立年代は他の二棟と同様の天保年間頃であろう。（山岸）

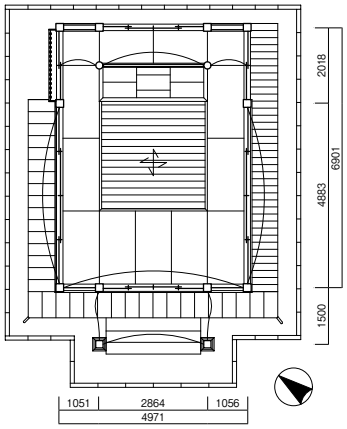


図533　光明寺弥勒堂平面図

図534　光明寺弥勒堂内部

図535　光明寺弥勒堂来迎柱廻り

69　小代神社　小代区秋岡

内宮（右社殿）　一間社流造、正面千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺　18世紀後期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　尾垂木付　二手先　実肘木　板支輪　中備蟇股　背面間斗束　二軒繁垂木　妻飾陸梁蟇股　庇角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　手挟　中備虎彫刻　軒唐破風妻飾鳳凰彫刻　千鳥破風妻飾板張　三方榑縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

外宮（左社殿）　一間社流造、正面千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺　18世紀後期

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　尾垂木付　二手先　実肘木　板支輪　中備蟇股　背面間斗束　二軒繁垂木　妻飾陸梁蟇股　庇角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　手挟　中備虎彫刻　軒唐破風妻飾龍彫刻　千鳥破風妻飾板張　三方榑縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

観音堂　桁行三間、梁間三間、切妻造、鉄板葺　宝暦三年（1753　棟札）

角柱　足固貫　中央間虹梁形飛貫　両脇間腰貫二段　飛貫　頭貫　組物なし　中備なし　一軒疎垂木　妻飾束立

小代神社は秋岡の鎮守社である。江戸時代は神明宮であったが、明治になって式内社に比定され、小代神社となった。神社は小高い山の山頂に近い平坦地にある。本殿は南面し、手前に幣殿・拝殿がある。本殿のある段から西へ下りたところに鐘楼と観音堂がある。

本殿は二棟で、細部の彫刻が異なる以外は同形同大の社殿を左右に並べる。向かって右の社殿が伊勢内宮、左が外宮である。両者はほぼ同じ形式・規模なので、

図536　小代神社配置図

右社殿すなわち内宮について述べ、異なる点を後に述べる。

一間社流造で、屋根の正面に千鳥破風をつけ、軒には軒唐破風をつける。屋根上には棟の両端と千鳥破風の前端に千木があり、甍覆は先端が長くつきだしている。この千木は置千木ではない本式のもので、屋根内部から障泥板を突き抜けて設置される。障泥板の上には甍覆が置かれ、その上に千木と接して堅魚木が置か

図537　小代神社外宮・内宮

図538　小代神社内宮庇正面

図539　小代神社内宮全景

図540　小代神社内宮庇

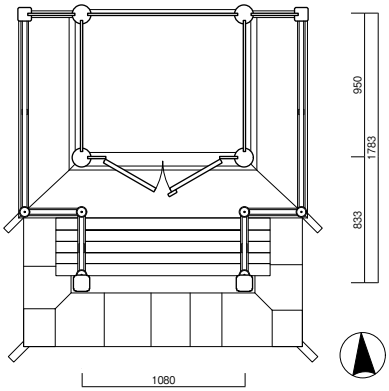


図541　小代神社内宮平面図

図542　小代神社内宮側面

図543　小代神社内宮妻飾

れる。これらは伊勢神宮の形式を模したものだが、甍覆は断面長方形の角材であり、鰹魚木は太さが一定の丸太で作っていて、伊勢神宮のものよりは簡略である。千木は伊勢では内宮が内削ぎといって先端を水平に切り、外宮では外削といって先端を垂直に切るが、ここでは両宮とも外削ぎとしている。

規模の割に柱などが太い。組物は尾垂木付きの二手先で、複雑で格の高い作りである。壁付と一手先目は通肘木を通し、壁付では斗を並べる。支輪は装飾のない板支輪である。

妻面の梁は虹梁形ではなく、その陸梁の上に渦を雲状に飾った板蟇股を載せて妻飾とするのも簡略である。

側面に比べて正面には目を引く彫刻がある。庇の虹梁形頭貫の上にある中備は虎を丸彫りしたもので、口を開いた阿形の虎である。その上の軒唐破風中備は唐破風の形に押し込められた鳳凰で、口を閉じているから吽形であろう。虹梁形頭貫の木鼻は龍の頭で右が阿、左が吽となっている。軒唐破風の屋根上では木製の鬼瓦で瓦の輪郭より大きい鬼面を取り付けたようで、口を開いた阿形である。

外宮では正面の彫刻類が異なっている。虹梁形頭貫上の中備は同じく虎で、こちらは吽形である。軒唐破風には龍がはまり、こちらは阿形で、左足で玉をにぎる。虹梁形頭貫の木鼻は獅子の上半身で右が阿形、左が吽形である。屋根上の鬼は吽形である。

保存状況は極めて良好で、ほぼ完存する。建立年代については『兵庫県神社誌』が元和元年（1615）・享保十三年（1728）・安永年間の再建を記す。この中では安永の再建が様式的判断に近い。建立年代は18世紀後期ないし19世紀前期であろう。

この本殿は、神社本殿として通常の形式である流造を使用して伊勢信仰を表現した建物である。全体構成として同形同大の建物を並べること、千木と堅魚木をあげ、特に千木は神宮で使われる本式のものであることは、神宮の建築をよく知った上で作られたことを示している。地方における伊勢信仰の実態を示す建物として重要である。

本殿のある高い位置からみると、左下の平坦地に鐘楼と観音堂がある。**観音堂**は方三間の切妻造の簡素な

図546　小代神社外宮側面

図544　小代神社外宮全景

図545　小代神社外宮庇

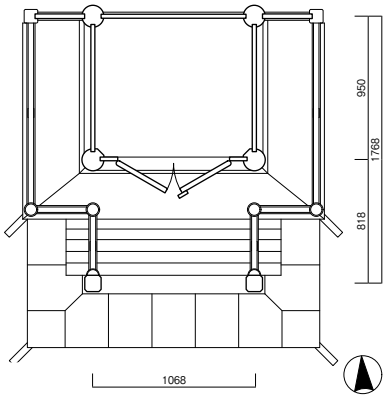


図547　小代神社外宮平面図

建物である。正面中央間は開放で、ほかは板壁で閉鎖する。内部は一室で、背面中央の壁に寄せて切妻造妻入の厨子を安置する。厨子のすぐ前に間柱を立てて組んだ鴨居があり、これを内外陣境とした時期がある。内陣には天井も張ったらしいが、中古のものである。

小屋組は梁までは古いが、小屋束より上は新しい。

棟札が現存し、宝暦三年（1753）に建立され、大工は武衛門であった。施主は庄屋・年寄・惣村中で、神主吉左衛門と記されているのも興味深い。

堂内は梁までは真っ黒に煤けていて、この堂で籠りが行われたことを示唆する。『兵庫県神社誌』には籠堂の記述がある。正月四日に厄除け祭として、氏子中の15歳までの少年が参籠し、籠堂の中に五尺四方のロ（囲炉裏だろう）を新たに作り、火踏みの行事を行うと書かれている。現状では囲炉裏はないが、床下にそれらしき痕跡はある。現在は雪が多いため正月の籠りはなく、秋祭りに神社に籠るという（151頁参照）。（黒田）

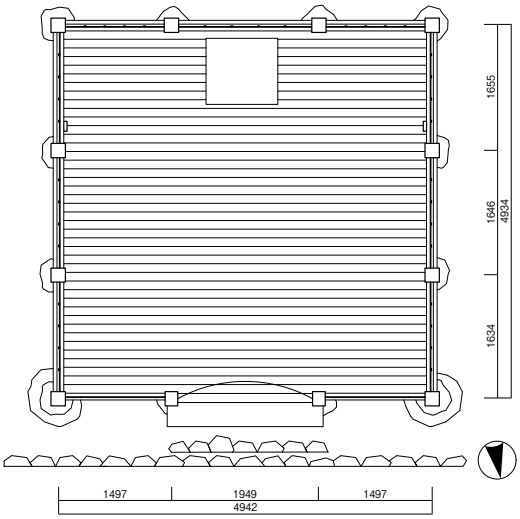


図548　小代神社観音堂平面図

図549　小代神社観音堂全景

図550　小代神社観音堂背面

図551　小代神社観音堂内部

図552　小代神社観音堂小屋組

70　大日堂　小代区東垣

大日堂　正面一間、背面三間、側面三間、宝形造、背面下屋付、鉄板葺　　寛政八年（1796　棟札）

角柱　足固　鴨居　虹梁形飛貫　木鼻　組物なし　中備なし　一軒疎垂木

大日堂は矢田川の最上流部の山間に位置する。東垣の村は永正年中（1504～21）に城山城主田公氏の一族山本信胤の支配する地であり、天正五年（1577）に羽柴秀長に攻められた際は、この地の山本右兵衛房胤が小代一揆を結んで羽柴と戦ったと伝える。近隣の堂や祠の仏像を明治四十年代に合祀している。牛の守護仏として崇敬を集め、美方郡東部からの参詣が多かった。

大日堂は三宝荒神社と並んで、道沿いに立つ大規模な村堂である。三間堂相当であるが、正面は柱を略して間口は一間、奥行は第一間の柱間が広く、後方二間は狭い。柱間の広い前一間通りを外陣として、引違格子戸で仕切り、後方二間を内陣とする。内陣の背面に寄せて須弥壇を設け、厨子を作る。

外陣の周り三方は虹梁形飛貫を入れて、開放的に使えるようにしている。これに対し内陣側はすべて板壁で閉鎖されている。外陣は格天井、内陣は棹縁天井を張る。外陣左方には囲炉裏を設ける。組物を用いず、内部には架構を見せないので簡素で平板な空間を作り上げている。

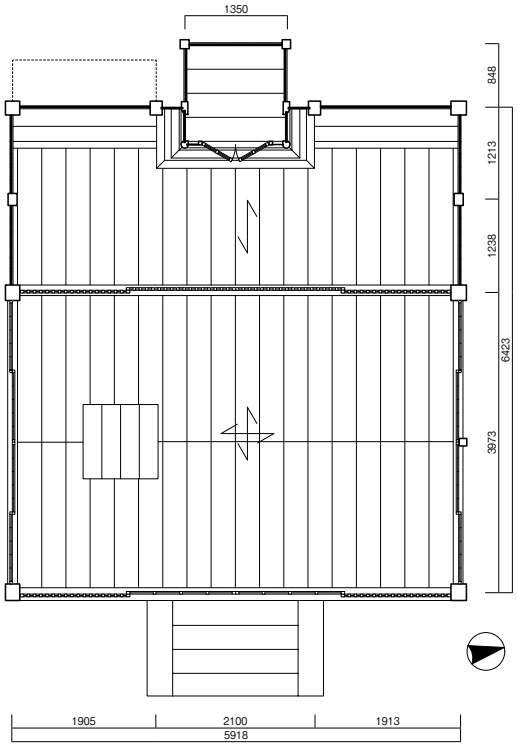


図553　大日堂平面図

角柱の外面には腕木が残るか、その枘穴が残っており、枘の上には水平な板決りがある。本来は屋根が茅葺で、出桁を腕木で受け、軒小天井を張っていたと考えられる。

これに比し、内陣に設けられた厨子は相当に質が高い。須弥壇は海老の腰の付いた禅宗様である。厨子は

図554　大日堂全景

図555　大日堂正面虹梁形飛貫

図556　大日堂内部

正面一間、側面一間、寄棟造、正面軒唐破風付、柿葺である。円柱を切目長押・虹梁形頭貫で繋ぎ、頭貫には象鼻･獅子頭を付け、組物は拳鼻付の出組の詰組で、支輪には雲の彫刻を彫り、唐破風妻飾は虹梁の上に一面に水波･雲を彫った板を置く。正面に桟唐戸を吊り、その扉板には大きな浮彫の模様を彫り出す。欅材を用いた上質な厨子である。

棟札が所蔵されて、大日堂は寛政八年に、厨子は大工棟梁太田忠右衛門光往の手で文化七年（1810）に作られたことが判明する。（山岸）

図557　大日堂厨子

図558　大日堂内陣

71　吉滝神社　小代区鍛冶屋

本殿　正面一間、奥行二間、正面入母屋造、背面切妻造、正面軒唐破風付、柿葺　　天明二年（1782　棟札）

後方一間四方円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　拳鼻　実肘木　板支輪　中備組物　二軒繁垂木　前方角柱　虹梁形頭貫　出組　拳鼻　実肘木　彫刻板支輪　円柱と繋虹梁で繋ぐ　中備組物　二軒繁垂木　唐破風妻飾雲紋彫刻板　三方切目縁　木階三級　浜床

吉滝神社は矢田川支流の久須部川上流にある。清冽な川の水源近くに、高さ28mの吉滝が岩盤の上から流れ落ちる。その岩盤の奥、滝の裏側に当たる洞窟に吉滝神社がある。古くは吉滝大権現と称し、仏像を祀っていたが、明治二年（1869）にご神体を祀り吉滝神社と称するようになった。東垣・鍛冶屋の氏神である。

本殿はきわめて特異な形式の本殿である。平面的に見るならば、四本の円柱の前に二本の角柱が立つのであるから、一間社流造や一間社春日造と何ら変わることはない。軸部も円柱は内法長押・台輪で繋ぎ、角柱はそれがない。しかし屋根は全体を一体の入母屋造妻入の屋根で覆っている。桁が同じ高さで回るから、角柱では台輪のない分の組物の高さを補うために皿斗を付けている。前一間四方は格天井を張っている。

このような特異な形式は25八坂神社、72八幡神社稲荷社でも見られたが、きわめて孤立的な形式である。

このほか細部での特徴としては、組物にあたかも中国の斜栱のように、斜めに肘木を出す組物を用いる点が興味深い。正面では菖蒲桁を受ける肘木を支える役割だと理解すれば不自然ではないが、やはり特異な技法ということができる。

正面の虹梁形頭貫、正面の支輪、唐破風の板壁に雲

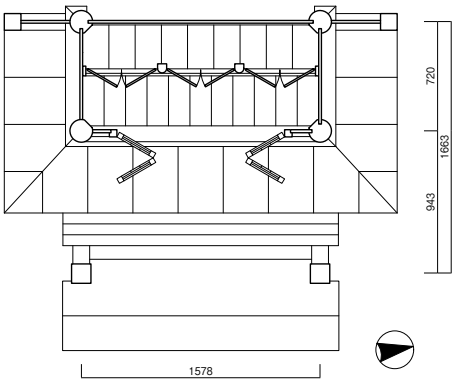


図559　吉滝神社本殿平面図

紋が共通して用いられ、白木のこの建物を華やかに飾っている。これらの意匠と比較して、唐破風の虹梁絵様、角柱と円柱を繋ぐ虹梁の絵様はいささか意匠が異なり、特に後者は材質も異なって、修理時の補入かとも考えられるが、現状では決め手はない。

ごく近年の修理があるほかは、湿気の多いこの場所にありながらよく保存されてきている。棟札が現存し、天明二年の建立が確認され、大工として大谷村中村杢右衛門・実山村太田治八・太谷村中村惣右衛門・平野村太田半八の四名に加えて、小工茅野村の村尾弁右衛門秀政の名があるが、72八幡神社稲荷社の大工は平野村の太田忠右衛門である。本殿の形式が大工太田の創意工夫なのか、その背景が知りたいところである。

いずれにせよ、きわめて特異な形式で、かつ意匠的にも優れた社殿として、注目に値する。(山岸)

図560　吉滝と吉滝神社本殿

図561　吉滝神社本殿全景

図563　吉滝神社本殿円柱部正面

図564　吉滝神社本殿側面

図562　吉滝神社本殿正面

図565　吉滝神社本殿側面組物

72　八幡神社　小代区貫田

本殿　一間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、柿葺

文化十二年（1815　棟札）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　出組　拳鼻　実肘木　雲紋板支輪　中備組物　二軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束笈形　千鳥破風妻飾懸魚のみ　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　手挟　繋海老虹梁　中備龍彫刻　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾雲紋板　三方榑縁　擬宝珠高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

稲荷社　正面一間、側面二間、正面入母屋造、背面切妻造、正面軒唐破風付、板葺

寛政七年（1795　棟札）

後方一間四方円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪留め　三斗枠肘木　実肘木　中備なし　前方角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　台輪留め　三斗枠肘木　実肘木　中備なし　二軒繁垂木　妻飾正面板張り　背面板張　軒唐破風妻飾板に蟇股風の浮彫　三方榑縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

薬師堂　正面一間、背面四間、側面三間、宝形造、鉄板葺

19世紀中期

角柱　足固　鴨居　虹梁形飛貫　組物なし　中備なし　一軒疎垂木

八幡神社は、文化十二年（1815）の棟札には八幡大菩薩と書かれている。願主は「惣村中」で、棟札裏には「小代庄貫田村」とある。当社は貫田の鎮守社である。神社は南から西に山を負う台地にあり、集落はその北から東に展開する。このため当社はかなり珍しい北向きの神社となっている。南の奥の中央に本殿、その東に稲荷社、そこから南へ一段下りた東に薬師堂がある。

本殿は小規模な一間社流造で、千鳥破風、軒唐破風をつける。規模、形式、細部意匠ともごく一般的だが、細部まで緻密に作られている。

彫刻は正面庇の龍彫刻、庇の頭貫木鼻の獅子と獏、脇障子いずれも上質であるが、龍彫刻は上下に隙間があって、大工とは別の彫師の手になった可能性がある。正面の兎毛通しは丸彫の牡丹、その奥の妻飾は板に雲紋を施したもので、上記の彫刻類とはやや趣が異なり、これは大工のものだろう。軒唐破風正面中央の軒付けに亀甲紋を施して朱を入れるのは例をみない。

身舎と庇の桁は直材だが、先端の下端を肘木風に削る。桁そのものに反りや増しがあれば、中世風の技法になるが、下端の繰りだけがあるのは珍しい。

図567　八幡神社境内

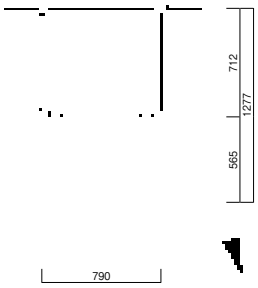


図568　八幡神社本殿平面図

図570　八幡神社本殿全景

図566　八幡神社配置図

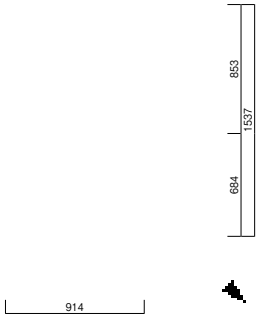


図569　八幡神社稲荷社平面図

絵様の彫りが全体に浅く、特に身舎妻飾の虹梁絵様は形が単純で古風にみえる。

保存状態は良好である。建立年代は棟札により文化十二年で、大工は平野村の太田忠右衛門光往である。平野は貫田のすぐ隣村である。近隣の水間の65荒霊神社は文化元年に本殿を建立し、同じく光明寺の龍宝が遷宮導師であった。規模も大体同じであるが、荒魂神社本殿は当社より地味な意匠である。この建立年代にしては虹梁絵様の彫りが浅く、単純な絵様を使うことがあって古風に見える点は両社に共通している。

稲荷社はかなり珍しい形式の本殿である。平面で見ると後方の方一間が円柱を用いた本体で、その三方に

図571　八幡神社本殿庇正面

図572　八幡神社本殿庇見返し

図573　八幡神社本殿妻飾

図574　八幡神社稲荷社全景

図575　八幡神社稲荷社正面詳細

図576　八幡神社稲荷社側面

縁を、正面に木階をつける。その前側に角柱を立て、本体とつないで階隠を作る。ここまでは一般的な流造や春日造と同一の平面形式であるが、異なるのは屋根のかけ方である。本体と階隠とを区別することなく奥行方向に桁を通し、ひとつの屋根をかけて、正面は入母屋造妻入、背面は切妻造とする。背面の作りは妻飾などをみても省略して作られている。

一間社流造などの通常社殿と異なる点は、屋根を一連とした点であり、このことによって、組物・台輪・頭貫の高さが円柱と角柱で同一となる。頭貫は後方の方一間では通常の絵様なしの直材で、角柱との繋ぎの頭貫は虹梁形とする。

保存状態は良好である。建立年代は棟札により寛政七年（1795）で、大工は平野村の太田忠右衛門である。この大工は当社の本殿と同一人だろう。願主は「氏子中」となっていて、本殿の惣村中とは少し異なる表現である。どちらも願主として田村太良左衛門が第一に記されていて、そのあとに庄屋・年寄と続く。田村太良左衛門は地元の有徳人だったのだろう。

この本殿は定まった形式名称がない珍しい形式である。しかし類例がないわけではなく、丹波市・加西市に若干見られ、出雲大社と住吉大社の境内社に妻入本殿の簡略形として用いられる形式も考慮する必要があるだろう（13頁参照）。この本殿は神社本殿形式を考える上での重要な遺構である。

薬師堂は、本殿などが建つ段の手前の広場の左手にある。比較的規模の大きい方三間の堂だが、正面は柱を省略して一間とする。正面は開放、側面、背面は板壁である。

内部は、奥一間通りを仕切って中央に厨子を置き、両脇は物入れとする。この仕切りは、厨子の前方に背面中央の柱間より広い柱間で二本の角柱を立て、虹梁形飛貫でつなぎ、頂部は両脇の側柱を結ぶ飛貫に納める。この飛貫はちょうど奥行方向の梁の下端にあたる。小屋は、奥行き方向に二丁の梁をかけ、その上に間口

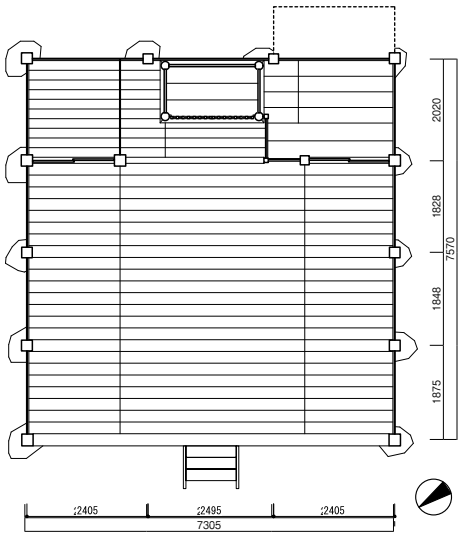


図577　八幡神社薬師堂平面図

図578　八幡神社薬師堂全景

図579　八幡神社薬師堂内部

図580　八幡神社薬師堂内部見返し

方向の梁二丁をかける。梁の上に束を立てて屋根を形成している。

両側面の板壁は比較的新しく、本来は三方吹放しだった可能性がある。床下には囲炉裏があり、梁が煤けているが、現状では床板でふさがれている。梁までは古材だが、束から上は新しい材で、束は煤けていない。建立年代は不明で、様式上19世紀中期の建立と推定する。厨子周辺の柱に大阪・播磨の役者の墨書があり、歌舞伎舞台としても使用されていた。

厨子は方一間で、向唐破風造の屋根をかけ、正面を格子の扉とする。柱は円柱で、組物は三斗枠肘木、中備は蟇股である。正面の虹梁の絵様は古風で、建立年代は17世紀後期と推定する。年代の古い貴重な厨子である。

この堂は改造が大きいが、囲炉裏を備え、歌舞伎舞台として使われたことが分かる点が重要である。また、古い厨子の存在から、この堂自体は新しいが、前身堂があったことが推定される。（黒田）

図581　八幡神社薬師堂厨子正面

図582　八幡神社薬師堂厨子側面

73　多他神社　小代区忠宮

本殿　三間社流造、軒唐破風付、柿葺

元文三年（1738 『兵庫県神社誌』）

身舎円柱　切目半長押　腰長押　内法長押　頭貫　木鼻　出組　拳鼻　実肘木　唐草紋板支輪　中備蟇股　二軒繁垂木　妻飾二重虹梁蟇股　庇角柱　切目半長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　手挟　中備蟇股　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾大斗絵様肘木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

今回の調査で棟札は実見できなかったが、『兵庫県神社誌』には寛文三年（1663）建立、元文三年（1738）造立、文化十二年（1818）修復の棟札を掲げている。社名は寛文・元文のものが一宮大明神、文化のものは多他一宮大明神社である。寛文棟札は本願主として神水村・茅野村・秋岡村・鍛冶屋村の庄屋の名があり、その外は略されている。神水は小代の北部であり、他は南部なので、神社の造立には小代庄全体が関わったと推定される。小代庄は皇室領で建久二年（1191）の長講堂領目録にみえる。天正五年（1577）には地域の在地領主が一揆を結んで羽柴秀長の侵攻に抵抗した。当地の強い結束はこのあとの検地のあり方（十石単位の検地）にまで影響したといわれる（『兵庫県の地名』）。一宮は小代庄第一の宮つまり荘園鎮守社であることを示している。当社は在地領主の結束の要となる神社であり、その伝統は江戸時代まで続いていたことがわかる。また、延喜式の多他神社にも比定されている。

本殿は三間社流造で、軒付は板を積む。身舎は桁行三間、梁間二間で、内部の棟通りに柱を立てる。身舎内部の柱は床下にはなく、床上だけの柱である。各柱間に板扉を設け、奥を内陣、手前を外陣とする。

内外陣境は、腰長押・内法長押・頭貫で固め、柱上

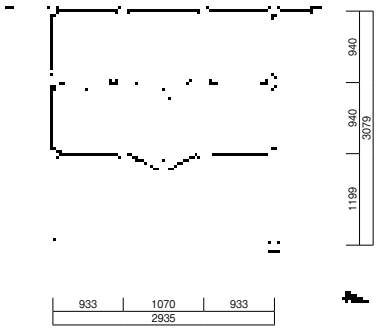


図583　多他神社本殿平面図

に三斗枠肘木を置く。頭貫は梁行方向にもすべての柱をつなぐ。天井は棹縁天井である。扉構えは、腰長押上の敷居・鴨居に藁座を打って扉を吊り、柱際に小脇板をはめるだけの簡素な形式である。外陣正面は中央間両開きの格子扉、両脇間は格子戸嵌め殺しである。

庇は中の二本の柱は省略して一間とする。木階は三間通しである。中央間の柱筋には虹梁形頭貫の上に三斗枠肘木の組物を置いて、軒唐破風の菖蒲桁を受ける。これらの組物の中間には蟇股を飾る。このようにして正面は見通しのよい広々した庇となっている。この広さに対応して虹梁形頭貫の絵様の若葉は身舎中央柱筋にあたる菖蒲桁下まで展開している。妻飾では下の大虹梁と上の虹梁の間の板壁に青海波紋様の格子を付けるという珍しい装飾がある。また、身舎組物の背後の板支輪に施されたやや単調な唐草文様も珍しい。

保存状態は非常に良好である。建立年代は前述のとおり、『兵庫県神社誌』に掲げる史料と様式的判断を合わせて元文三年（1738）と推定する。この本殿は香美町では数少ない三間社である。多くが一間社であるのに対して、当社の三間社という規模は広範囲の地縁共同体宗教施設としての荘園鎮守社の伝統に由来するだろう。規模だけにとどまらず、意匠も上記のように特徴的な要素をいくつも持つ優れた遺構である。（黒田）

図586　多他神社本殿庇

図584　多他神社本殿正面

図587　多他神社本殿身舎詳細

図585　多他神社本殿庇詳細

図588　多他神社本殿妻飾

74　大山祇神社　小代区久須部

境内社（右社殿）　一間社流造、鉄板葺　　18世紀前期

身舎円柱　切目半　長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗　枠肘木　実肘木　中備蟇股　一軒繁垂木　妻飾虹梁大瓶束　庇角柱　切目長押　虹梁形頭貫　木鼻　連三斗　実肘木　繋海老虹梁　中備蟇股　一軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜縁

大山祇神社は久須部川の中流にある。社蔵記録には正慶年間（1332～34）の創祀と伝える。久須部は大谷村の分村と伝え、城山村にあった安明神社から勧請したとも伝える。また慶長年間に村内に鉱山を発見し、その金山守護のための神だとも言われている。

境内社は本殿の向かって右手にある小社で、簡易な覆屋に覆われている。小規模な一間社流造で、木製土台に立つ。構造形式はごく一般的なものであるが、細部では独特の意匠がいくつか使われている。

まず、庇の頭貫木鼻は獅子と象を前方と側面方向に付けるが、いささかユーモラスな表情をしている。庇の組物は禅宗様の肘木繰りであるが、両側面側（蟇羽側）は実肘木風の繰形を付ける。

身舎では、梁行柱間が小さいために妻の大きさが小さい。そこに太い虹梁と大瓶束を組み、大瓶束には大きな木鼻を付けて、狭い妻を埋めている。垂木は墨で着色する。

小社ながら地域的特色の現れた社殿である。（山岸）

図591　大山祇神社境内社庇詳細

図592　大山祇神社境内社妻飾

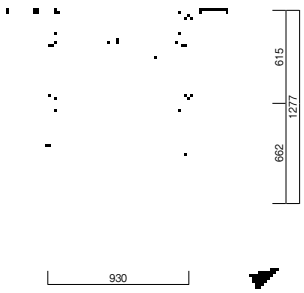


図589　大山祇神社境内社平面図

図590　大山祇神社境内社全景

図593　大山祇神社境内社庇見返し

75　大師堂　小代区大谷

大師堂　桁行一間、梁間一間、入母屋造、土蔵造、向拝一間、鉄板葺　　大正六年（1917 『美方町史』）

大師堂は香美町西南部の矢田川中流域、もと小代村役場のあった場所にあり、もともと観音堂の境内である。元は大正六年に建てられた小代小学校の奉安殿であったが､昭和十三年（1938）に建て替えられたので、旧奉安殿は大谷大師講の手で現在地に移築されて、大師堂となったものである。

大師堂は方五尺ほどの小堂である。内部の柱の上に隅行に腕木を出して出桁を受け、一軒疎垂木の軒を受ける。

漆喰壁の腰から下は下見板張である。正面の出桁を支えるように二本の柱を立て、向拝の柱とは海老虹梁で繋いでいる。向拝柱には木鼻付の虹梁形飛貫を入れるが、組物は組んでいない。

内部は各辺二間となるように角柱を立てて、後方一間分が厨子となっている。

近代の奉安殿の遺構として貴重である。（山岸）

図595　大師堂全景

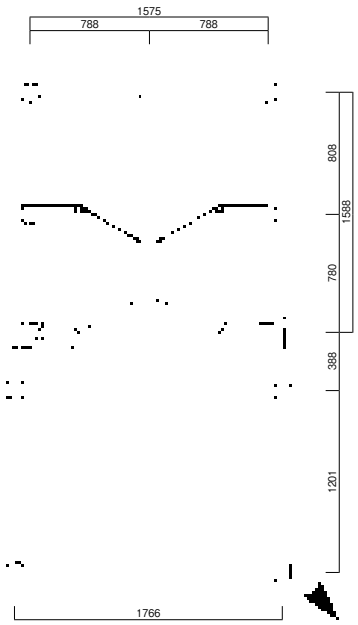


図594　大師堂平面図

図597　大師堂内部

図596　大師堂軒

図598　大師堂向拝

76　観音堂　小代区神水

観音堂　正面一間、背面三間、側面四間、宝形造、銅板葺、三方庇付、背面下屋付、鉄板葺

宝暦十三年(1763　棟札)

角柱　足固　鴨居　梁形飛貫　組物なし　一軒疎垂木

村の辻に単独で立つ堂である。

観音堂は矢田川中流の西岸にある。『美方町史』によれば、観音堂の仏像群は、大照山麓にあった天福寺が、天正五年（1577）の兵火で焼失し、その古仏を以て草庵が再建された。しかし元和四年（1618）に廃寺となり、古仏を安置したのが今の観音堂の前身だと伝えている。

観音堂は、規模の大きな宝形造の建物である。正面は飛貫で中央二本の柱を省略して一間となっているが、背面では三間である。側面の柱間は後方の一間だけがほかの半分ほどである。つまり方三間の堂の後方に仏壇など半間が付け足された形となっている。

背面から一間目の中央間だけは円柱を立てて、腰に框を入れ、虹梁形飛貫、木鼻付の頭貫で固める。柱上には平三斗実肘木をおく。この中央間が主要な仏壇である。

この堂は、近年大きな改修工事を受けている。正面と側面の第一・第二間は、本来は吹放しであった。後端の一間通りは、中央間が当初からの仏壇で、右仏壇は中古のもの、左仏壇は近年造られたものである。天井・壁・建具・床・屋根・下屋庇などみな近年のものである。屋根はおそらくもとは茅葺で、下屋庇の軒桁と頬杖は、もともと同様のものがあって軒を支えていた。中央に炉があるが、近年のものである。もとはなかったかのかも知れない。

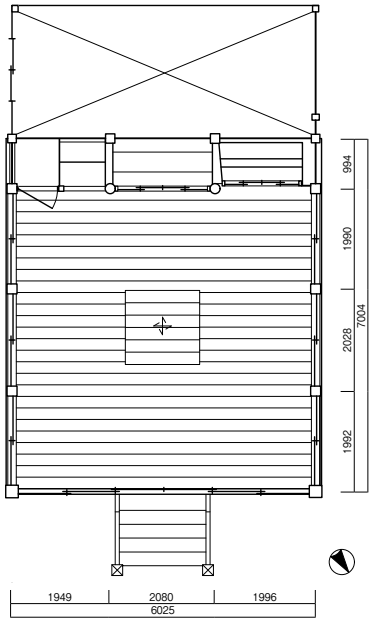


図599　観音堂平面図

図600　観音堂全景

図601　観音堂正面虹梁形飛貫

図602　観音堂内部

建立年代については、宝暦十三年（1763）の棟札がある。様式的には非常に古風で17世紀に遡ると見まごうが、宝暦の建物とみてよい。道を挟んで、六地蔵・墓地・恵比寿大黒社があり、この周辺は村の公的な場である。棟札には「当邑堂願主」二十五人の名が記されている。この二十五人はすべて誰々子という文字を上に冠しており、観音堂が墓地の近くにある点から死者供養を行うための堂として建設されたと推定される。この建物は観音堂と称されているが、『美方町史』は本尊を勢至・大日・聖観音・薬師と記す。現在はこれより多くの仏像があり、観音・勢至があることと、上記建物の性格から、本尊は阿弥陀如来の可能性がある。このように建設の事情が推定できる村堂として重要である。（黒田）

図603　観音堂内部見返し

図604　観音堂仏壇細部

77　白山神社　小代区神水

本殿　三間社流造、千鳥破風付、軒唐破風付、板葺

明治三十三年（1900　棟札）

身舎円柱　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　台輪（井桁に組む）　出組　拳鼻　中備なし　二軒繁垂木　陸梁大瓶束笈形　千鳥破風妻飾虹梁蟇股　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木（二段に組む）　実肘木　中備彫刻　繋海老虹梁　二軒繁垂木　軒唐破風妻飾彫刻板　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

白山神社は76観音堂の近隣にある。古くは白山権現と呼ばれていたが、明治以降は神祇官から神鏡を勧請して白山神社となった。建保二年（1214）に山本四郎家行が朝来郡から白山権現を勧請したとも伝える。

本殿は三間社流造で、屋根の正面中央に千鳥破風をつけ、庇には軒唐破風をつける。身舎正面は三間とも桟唐戸である。木階は身舎正面とおなじ幅である。

三間社は町内では数少なく、荘園鎮守社に起源を持つ神社に多い。明和五年（1768）の白山大権現社遷宮棟札には「神水村惣氏子中」とあるから、江戸時代には神水村の鎮守社だった。

この本殿は細部に特徴がある。まず、身舎の組物が出組であるが、手先は三斗とはせず通肘木として、その上に斗を均等に並べ、さらにその上の実肘木も通実肘木としている。その上に桁・梁を受けている。一風変わった組物である。台輪が井桁組となるのも例がない。妻飾の梁は、通常は虹梁となるが、下に通実肘木が通っているから、虹梁形にはならず、陸梁としている。その上に立つ大瓶束もそれに対応した結綿のない単純な形である。笈形は全面に雲紋を彫る。

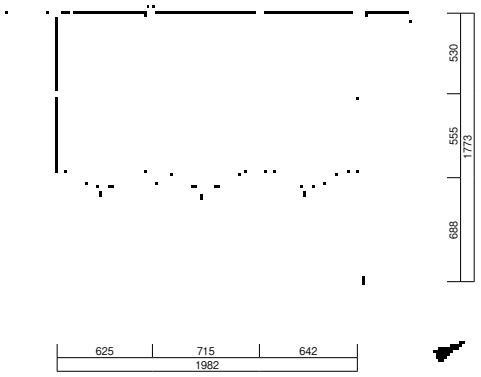


図605　白山神社本殿平面図

庇の組物も身舎に対応して、三斗枠肘木を二段重ねる珍しい形である。上段の肘木は身舎のように通肘木とはせず、絵様繰形を施した絵様肘木とする。組物が二段重ねられた結果、虹梁形頭貫と桁との間隔が通常より広くなり、中備はせいの高い彫刻で飾っている。中央間は波と雲龍、両脇間は波濤である。中央間の虹梁形頭貫の下には持送りがあったが欠失している。

図606　白山神社本殿全景

図607　白山神社本殿身舎正面

図608　白山神社本殿妻飾

図609　白山神社本殿千鳥破風・軒唐破風

図610　白山神社本殿庇正面

図611　白山神社本殿側面

肘木の下端は通常は円弧状の曲線とするが、ここでは身舎・庇とも直線で仕上げている。加えて身舎の頭貫木鼻の絵様も簡略である。

千鳥破風と軒唐破風は強く前に傾いている。

保存状態はよいが、何回かの修理がみとめられる。まず全体は白木であるが、身舎正面桟唐戸は桟を漆塗りとし、庇中央間の龍彫刻、軒唐破風の兎毛通、菖蒲桁の鼻隠の懸魚には彩色が認められる。これらは他と材質や仕上げが異なるもので、古い部材であろう。逆に身舎と庇の桁は相当新しい時期に取り替えた部材である。したがって少なくとも三時期の部材があることになる。『兵庫県神社誌』は、元禄元年（1688）に神水字白山瀧から現在地に移築し、天保十二年（1841）、安政五年（1858）に再建したとする。神社には明和五年（1768）の遷宮棟札、明治三十三年（1900）の社殿造建棟札がある。ここでは、部分的に残る古い材は明和のものであり、全体としては明治三十三年のものとみておく。桁はその後の修理で取り替えたのであろう。（黒田）

図612　白山神社本殿背面

78　荒霊神社　小代区石寺

本殿　一間社流造、柿葺　　天明五年（1785　棟札）

身舎円柱（背面は角柱）　切目長押　内法長押　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　妻飾虹梁蟇股　一軒繁垂木　庇角柱　切目長押　腰長押　虹梁形頭貫　木鼻　三斗枠肘木組　実肘木　海老虹梁　中備蟇股　二軒繁垂木　三方切目縁　刎高欄　脇障子　木階五級　浜床　浜縁

石寺は香美町西南部に当たる矢田川流域にある集落で、享禄年中(1528～32)に南に隣接する神水村の住人が開いた村と伝える。荒霊神社はその際、姫路の広峯神社を勧請したとされている。当初は石の祠であったが、天文九年(1540)の山崩れにさいしても霊代は楠に留まり、近世になって社殿を建て、石堂社･三宝荒神･御霊社などと呼ばれたが､明治になって社号を改めた。

本殿は小規模な流造社殿で、特別に装飾的な要素は目立つ建物ではないが、個性的な点が多々みられる。

まず庇の組物を一般的な連三斗とせず三斗を枠肘木組として、その肘木には絵様繰形を施す。また庇柱上

図613　荒霊神社本殿全景

図614　荒霊神社本殿庇詳細

には正面と側面の二方向に木鼻を付けるが、これは香美町内ではしばしばみられる形式である。庇虹梁形頭貫の下にある持送りの根肘木、身舎正面の蟇股には雲形の彫刻を施す。最も目をひくのが身舎・庇のいずれの大斗にもせいの高い皿斗を付けることである。このように小社ながら独自の意匠が凝らされた建物として興味深い。

棟札が現存し、天明五年に同じ矢田川の谷筋の平野村と長板村の大工が棟梁を務めて建てられたことが知られる。（山岸）

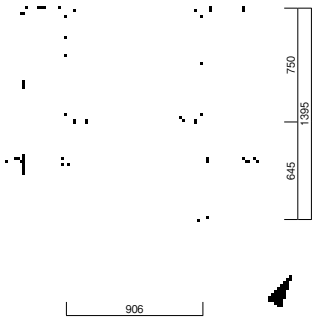


図615　荒霊神社本殿平面図

図616　荒霊神社本殿庇

図617　荒霊神社本殿妻飾

79　観音堂　小代区猪之谷

観音堂　桁行正面一間、背面三間、梁間三間、切妻造、鉄板葺　　宝暦八年（1758　扁額）

角柱　足固　鴨居　虹梁形飛貫　一軒疎垂木　妻飾束立

観音堂は矢田川中流の水間集落の南西、猪之谷集落の西にある。

観音堂は方三間の規模で、正面では柱を省略して一間とする。内部は一室で、板敷、棹縁天井である。

背面中央間に後方に張り出して仏壇を作る。仏壇前面の柱は円柱で、虹梁形飛貫でつなぎ、上に台輪をのせ、平三斗の組物をおく。中備は蟇股である。

この堂は近隣の分限者であった井口久三郎が宝暦八年（1758）に建立したものと伝え、同年の銘のある扁額も所蔵する。一方『美方町史』には延享四年（1747）に再建したと記している。確たる建立年代を示すものではないが、18世紀中期の建立は様式的にみて妥当で

図618　観音堂全景

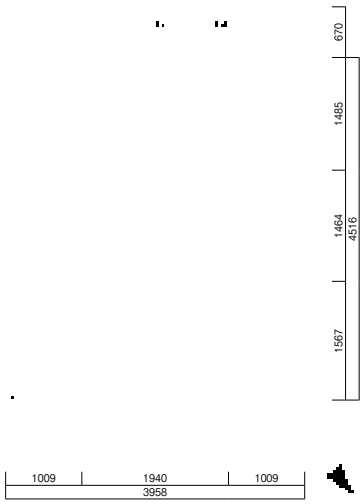


図619　観音堂平面図

ある。その後、明治二十三年（1890）に修理したらしく、寄付銘板があり、新築大工前田文七の名前がある。この時はおそらく仏壇を作ったと思われる。堂の右側面は柱がなく、板壁となっているが、これは蚕の室を作ったためという。当初は柱が立っていた。屋根は桁、母屋などが明治のものと思われ、垂木より上は近年のものである。

この堂は、村人が盆踊りや数珠繰りを行う村堂であるが、発端は個人の寄進によるものだった。香美町における村堂の一例として取り上げた。（黒田）

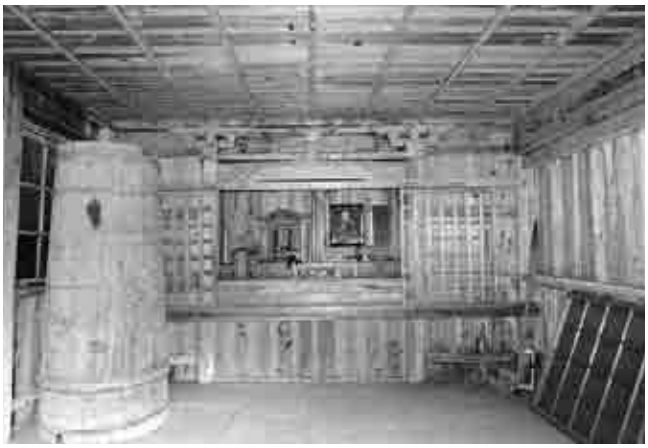


図620　観音堂内部

図621　観音堂仏壇詳細

図622　観音堂正面虹梁形飛貫

図623　観音堂内部側面

図624　観音堂仏壇内部

第三章　寺社建築の特質

1　村堂と籠りの場

はじめに

筆者は今まで、県内の様々な地域で寺社建造物の悉皆調査を行ってきた[1]。そのなかで香美町は村堂がたくさん建てられ、現存する地域である。このことは県内だけでなく、全国的にみても特記できることと思う。

また、村堂の用途として籠りが行なわれたこともこの地の特質として極めて重要である。中でも注目すべきは、神社本殿との関係や中世と近世の籠りの実態が垣間見えることである。早く昭和三十六年に日出神社（豊岡市）の本殿床下が著しく煤けていることが報告されたが、今回の調査で郡主神社本殿の床下も同様であることが判明した。日出神社では子供の籠りの伝承が報告されたが、郡主神社では一切不明だった。しかし、香美町には豊富な籠りと籠堂の事例がある。史料的限界から、おぼろげではあるが中世の神社における籠りの実態をある程度推測することができた。

このような事情を踏まえて香美町の村堂・籠堂の特質を描き出すために、第一項では村堂の分類整理を行った。第二項では、籠りとその場の考察を行なった。

1　村堂の概念と分類

⑴　村堂の分類

一般的に村堂というのは、末寺や道場のような仏教宗派の拠点ではなく、共同体としての村ないし一部の住民によって維持管理される仏堂である。寺院名はなく、観音堂などの本尊名を冠するか、あるいは単にお堂と呼ばれることが多い。基本的に寺僧も常住しない。村堂は、たとえば時代劇では農民が一揆の相談をしたり、旅人や浪人が寝泊まりする堂として出てくる。もちろん旅人が泊まることもあるが、無法状態ではなく村堂は村の管理下にあり[2]、ここでもみるように決まった使用法があった。村堂の社会的な意味について、筆者は広義と狭義の二種類を想定している。狭義の村堂は、仏事だけでなく地縁共同体の行事に使用するために、法人としての村が維持管理する堂である。広義の村堂は、先述のような寺僧が常住しない雑多な堂全般である。両者は明確に区分できるわけではないが、建設と維持管理の主体は建物の性格を規定すると筆者は考える。以下、村堂は広義で用い、狭義を強調するときは村管理の堂とする。堂という場合は、単なる建物に近い意味で使用する。

香美町の村堂の建築には形態的に大きな違いはない。種類については、村管理の堂とそれ以外の堂、辻堂、籠堂、神社境内仏堂など、考えられる種類がほとんどある。辻堂、境内仏堂は立地を表し、籠堂は使われ方を表している。しかし、境内仏堂では籠りが行われるというように、これらの概念で村堂の意義を整理できるわけではない。以下では、村堂を建物の側から整理し、村堂の意義とどのように関連するのかを考える。

香美町の調査を通じて、村堂には内部で焚火をするための囲炉裏があり、小屋裏が真っ黒に煤けているものが多いことが注目された。これは兵庫県南部、中部では見られない特徴であり、北部に位置する香美町の気候と習俗に関係がある。囲炉裏は祭りや正月に籠るためのものであることは、すぐに聞取ることができた。祭と正月の籠りは全国的なもので、家や神社内の施設に籠ることが知られている。香美町のように村堂を籠りの場とし、かつ今も濃密な分布がみられることは珍しいと思われる。村の行事として行う祭りおよび正月行事は村の基本をなす行事であるから、籠りの場となる村堂は村にとって重要な意味をもつ。香美町の村堂のあり方は多様だが、この点に注目してその性格を把握したい。

村堂の性格を建築の面からとらえるために規模、意匠、設備などの建築形態や立地を踏まえたうえで、行

1　姫路市・加西市・揖保川町は市史に記載、伊丹市・西脇市・黒田庄町・太子町・神河町は建造物調査報告書を教育委員会から出版した。現在は丹波市でも調査を実施中である。

2　藤木久志「村の惣堂・村の惣物」（『月刊百科』308　平凡社　昭和53年）

拙稿「中世地縁共同体宗教施設の輪郭」（『中世的空間と儀礼（シリーズ都市・建築・歴史３）』東京大学出版会　平成18年）

事などとの関連を考える。香美町の村堂の規模は方三間程度で、側柱は角柱、内部は後方の中央柱間の手前を囲って厨子をつくる。厨子の柱は円柱が一般的である。建物全体が壁や建具で囲われた閉鎖的な型と、少なくとも正面が吹放ちの開放的な型、およびその中間的な型がある。意匠は概して簡素である。設備としては、囲炉裏があるものとないものがある。香美町の気候は寒冷なので、正月の籠りには焚火が必要とされ、囲炉裏と閉鎖的な建築形態が必要である。立地は街道沿いや村中の辻にある辻堂、山中の堂、墓地近くの堂など様々なものがある。

現状で村堂と村との関連を考えるために分類整理するなら、大きな区分として神社境内にある堂と単立の堂という区分が有意義と思われる。明治時代以後、神社と仏堂の関係は変化した可能性が高い。しかし、神社と村との関係は、調査した神社においては江戸時代からそれほど変化していないと推定される。したがって、以下のような立地および建築形態の分類を通して、村堂の性格を考えることとする。

・神社境内にあるものと単立のもの
・囲炉裏があるものとないもの
・閉鎖的なものと開放的なもの

このような項目で二次調査の建物を中心に整理すると表12のようになる。

⑵　神社境内の堂

神社境内の仏堂は、二次調査対象8棟に対象外1棟を加えた表13である。香美町における神社境内の堂は、囲炉裏があり、閉鎖的な形で、籠りに使う堂が多い。それらは簡素な形で建設年代も新しい建物が多数を占める。一方で、数は少ないが立派な仏堂もある。このことにはどのような事情が考えられるだろうか。神社境内に仏堂があることは、江戸時代以前は当然のことで、多くは祭神の本地仏を祀り、本地堂と呼ばれた。明治時代になって神仏分離、廃仏毀釈が行われ、都市部の神社では境内仏堂は姿を消したが、村ではなお残っている場合がある。

香美町の神社境内仏堂の使用法は次のようなものである。第一は祭礼の前日や正月の籠り、第二は村の宮

表12　二次調査の香美町の村堂

	各個解説	建物名	区	小字	規模	属性（立地）	本尊	年代	西暦	開放性	囲炉裏	その他
〔1〕	42	熊野皇神社　観音堂	村岡区	口大谷	3×3	神社	観音、不動、毘沙門	17世紀中期		閉鎖	ありか？	
〔2〕	49	観音堂	村岡区	宿	3(3)×2	単立(神社関連)	観音	17世紀中期		閉鎖	あり	もと奥行4間
〔3〕	37	薬師堂	村岡区	高井	1(3)×3	神社あるが、単立か	薬師	享保12年	1727	閉鎖	なし	高井神社には別に籠堂あり
〔4〕	35	大糠神社　観音堂(籠堂)	村岡区	大糠	3(3)×3	神社	大日、左右に観音	18世紀前期		閉鎖	あり	籠りに使用。旅人の墨書多数。
〔5〕	52	大平神社　お堂	村岡区	熊波	1(3)×3	神社		18世紀前期		閉鎖	あり	籠りに使用
〔6〕	13	不動尊	香住区	隼人	1(1)×2	単立（山中）	観音	18世紀中期		開放	なし	
〔7〕	11	地蔵堂	香住区	下岡	1(3)×3	単立（辻堂）	六地蔵	18世紀前期		開放	なし	葬儀道具あり
〔8〕	69	小代神社　観音堂	小代区	秋岡	3(3)×3	神社	観音	宝暦3年	1753	閉鎖	今なし(煤ける)	正月4日に少年が籠った
〔9〕	79	観音堂	小代区	猪之谷	1(3)×3	単立	観音	宝暦8年	1758	閉鎖	なし	個人寄進の村堂
〔10〕	76	観音堂	小代区	神水	1(3)×4	単立（辻堂）		宝暦13年	1763	開放	あり(新しい)	願主25人は親の供養か。近くに墓地
〔11〕	42	熊野皇神社　籠堂	村岡区	口大谷	3(3)×2	神社	なし	18世紀後期		半解放	あり	正月に小中学生が籠る
〔12〕	60	阿弥陀堂	村岡区	長瀬	1(4)×4	単立	阿弥陀、不動、毘沙門	寛政3年	1791	もと開放	なし	葬儀道具あり。盆行事。芝居
〔13〕	59	観音堂	村岡区	長瀬	3(4)×3	単立	観音	寛政5年	1793	閉鎖	なし	小規模な堂
〔14〕	70	大日堂	小代区	東垣	1(3)×2	神社あるが、単立か	大日	寛政8年	1796	外陣解放	あり	
〔15〕	67	阿弥陀堂	小代区	実山	1(3)×3	単立	阿弥陀	19世紀前期		もと開放	あり	境内の白髭神社は移転。
〔16〕	57	薬師堂	村岡区	原	1(3)×3	単立	薬師、観音、地蔵	嘉永2年	1849	閉鎖	なし	葬儀道具あり。盆行事。芝居
〔17〕	72	八幡神社薬師堂	小代区	貫田	1(3)×4	神社	薬師	19世紀中期		正面開放	あり	歌舞伎舞台も上演した。舞台風。
〔18〕	63	八幡神社　堂	小代区	神場	1(3)×3	神社	観音	19世紀中期		閉鎖	あり	(二次調査外)
〔19〕	18	沖野神社芝居堂	香住区	訓谷	1(7)×6	神社	なし	明治29年	1896	開放	なし	
〔20〕	22	薬師堂	香住区	藤	1(3)×5	単立	薬師	明治44年	1911	半解放	あり	葬儀道具あり

表13　神社境内の村堂

	各個解説	建物名	区	小字	規模	属性（立地）	本尊	年代	西暦	開放性	囲炉裏	その他
〔1〕	42	熊野皇神社　観音堂	村岡区	口大谷	3(3)×3	神社	観音、不動、毘沙門	17世紀中期		閉鎖	ありか(煤ける)	
〔2〕	49	観音堂	村岡区	宿	3(3)×2	単立(神社関連)	観音	17世紀中期		閉鎖	あり	もと奥行4間
〔4〕	35	大糠神社　観音堂(籠堂)	村岡区	大糠	3(3)×3	神社	大日、左右に観音	18世紀前期		閉鎖	あり	籠りに使用。旅人の墨書多数。
〔5〕	52	大平神社　お堂	村岡区	熊波	1(3)×3	神社		18世紀前期		閉鎖	あり	籠りに使用
〔8〕	69	小代神社　観音堂	小代区	秋岡	3(3)×3	神社	観音	宝暦3年	1753	半閉鎖	今なし(煤ける)	正月4日に少年が籠った
〔11〕	42	熊野皇神社　籠堂	村岡区	口大谷	3(3)×2	神社	なし	18世紀後期		半閉鎖	あり	正月に小中学生が籠る
〔17〕	72	八幡神社　堂	小代区	貫田	1(3)×4	神社	薬師	19世紀中期		正面開放	あり	歌舞伎舞台も上演した。舞台風。
〔18〕	63	八幡神社　堂	小代区	神場	1(3)×3	神社	観音	19世紀中期		閉鎖	あり	(二次調査外)
〔19〕	18	沖野神社芝居堂	香住区	訓谷	1(7)×6	神社	なし	明治29年	1896	開放	なし	

規模は正面柱間（背面柱間）×側面柱間

座行事、第三に舞台がある。そして第四に、現状では明瞭ではないが、本尊に対する一般的な信仰とそれに伴う祈願や法会を主目的とする仏堂が考えられる。第一は香美町ないし周辺地域の特徴といえるもので、『兵庫県神社誌』や民俗調査報告書には籠堂という名称がみえる。第一と第二は不可分のもので、籠りは村の行事として行なわれている。第三の舞台は芝居を上演するもので、二次調査で二件ある。第四は江戸時代の一般的な境内仏堂の目的として想定されるが、神社における仏事は明治以後衰退したから、その実態を確認するのは困難である。しかし、本尊への信仰に重点があるとするなら、それは寺院と同じであるから仏堂の作りも無関係ではないだろう。このことはc項で再び述べる。つまり、第一、第二のような村の行事に重点がある場合は立派な仏堂を建設する動機が希薄であるが、信仰に重点がある場合は造作や意匠も本格的な寺院建築に近づくと推定される。

a. 籠堂

神社境内の堂として二次調査に取り上げた堂では、籠りが行われたことが確実な堂が4棟ある。〔4〕大糠神社観音堂、〔5〕大平神社の堂、〔8〕小代神社観音堂、〔11〕熊野皇神社籠堂である。〔1〕熊野皇神社観音堂も各個解説42に書いたように、籠りが行われていたと推定される。籠りの時期としては神社の祭礼と正月があり、正月は特に寒く、焚火が必要だから囲炉裏が作られる。囲炉裏が確認できないものが2棟あるが、堂内が激しく煤けていることはすべてに共通する。舞台を兼ねる〔17〕貫田八幡神社の薬師堂以外はほぼ閉鎖型である。小代神社観音堂、熊野皇神社籠堂は、正面中央間が閉鎖できないが、籠りが行われたことは確実である。したがって、神社境内の堂は籠堂であることが多く、基本形は閉鎖型で囲炉裏があると要約できる。

次に正面の柱の省略については、18世紀以前に建てられた6棟のうち、大平神社の堂を除く5棟は柱を省略せず正面三間である。大平神社の堂と19世紀の2棟は、中柱を省略して正面一間である。正面の柱を省略せず、三間とするのが古い形といえる。

個別の堂の特徴としては、以下のようなことがある。

小代神社観音堂（宝暦三年 1753）には、現在囲炉裏はないが、梁は真っ黒に煤けている。昭和戦前期の行事を記す『兵庫県神社誌』[3]には、籠堂で新しくロ（炉であろう）を作り、少年が火渡りを行うと書かれている。籠堂は観音堂であろう。

熊野皇神社籠堂には仏壇も本尊もない。これは籠り専用の建物であって仏堂ではないのである。

b. 宮座行事に使用する堂

〔4〕大糠神社観音堂が該当する。大糠神社では、元旦に観音堂で盃事ののち、公会堂で餅つきと新年会があり、三日に餅を観音堂に上げて頭渡しを行う。これは筆者の知る範囲では滋賀県の湖北・湖南の正月行事であるオコナイと類似性の高い行事である[4]。滋賀のオコナイを参照すると、大糠の新年会は、滋賀では座に着座して飲食するシュウシと呼ばれる行事に相当する。滋賀では、シュウシと頭渡しは一体のもので、堂で行う型と民家で行う型がある[5]。現在、大糠では餅つきと新年会を公民館で行うが、『兵庫県神社誌』に餅つきは旧御頭の家で行うと書かれている。従って新年会ももとは旧頭屋の家、つまり民家で行ったであろう。本来、大糠では着座飲食の行事の場は民家と推定され、頭渡しは今と変らず堂で行うという行事形態で堂が使用されてきただろう。

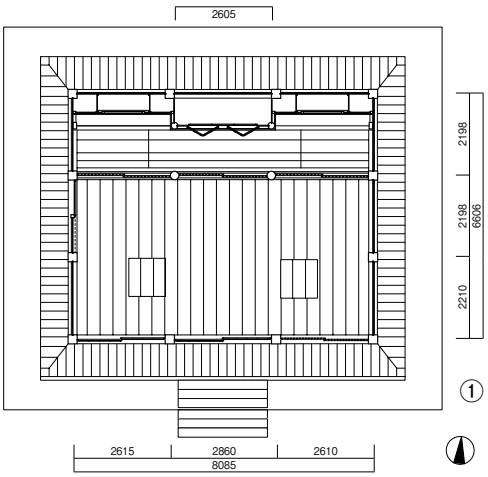
c. 本格的な仏堂

〔1〕熊野皇神社観音堂（17世紀中期）は、18世紀中期に内陣を拡大して、現状のように後方一間を内陣、前方二間を外陣とする中世仏堂形式とし、開口部も増やしたと推定され、新しい部材は煤けていない。このことから、堂内が煤ける行事が行われていたのは改修以前であることがわかるので、籠堂が建てられる以前は観音堂に籠ったと推定した（各個解説42参照）。籠堂は簡素なもので、仏壇もなく、籠りの用途に限定された建物である。一方、観音堂には新しく内外陣境を設け、周囲を改造してそれまでなかった内陣を作った。仏堂形式は内部が一室の堂から中世仏堂形式となった。内陣は非常に狭いが、法会も不可能ではない。つまり、村落行事の場と仏事の場が分離され、仏事の場が建築的に充実した。結果から見ると、観音堂では仏

3 『兵庫県神社誌』（兵庫県神職会　昭和13年）
4 中沢成晃『近江の宮座とオコナイ』（岩田書院　平成7年）
5 拙稿「滋賀県湖北地方のオコナイとその建築－祭礼建築論の試み－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』98集　平成15年）

Ⅰ．神社関連の村堂

図625 〔1〕熊野皇神社観音堂

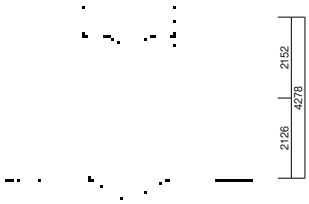


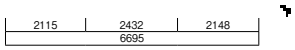
① 平面図

② 全景

③ 内部

図626 〔2〕宿の観音堂



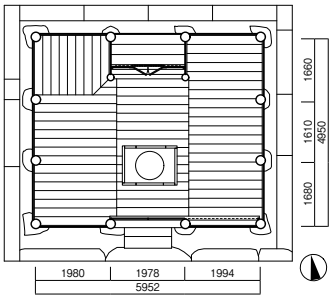


① 平面図

② 全景

③ 内部

図627 〔4〕大糠神社観音堂

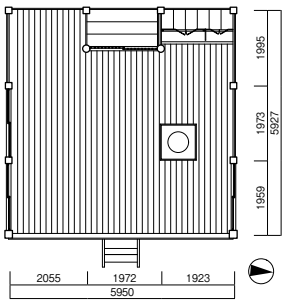


① 平面図

② 全景

③ 内部

図628 〔5〕大平神社　堂

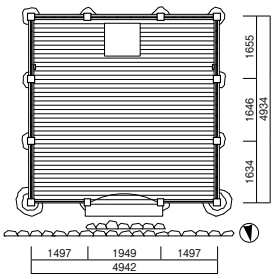


① 平面図

② 全景

③ 内部

図629 〔8〕小代神社観音堂

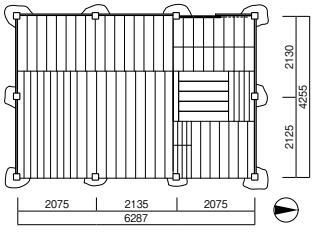


① 平面図

② 全景

② 全景

図630 〔11〕熊野皇神社籠堂

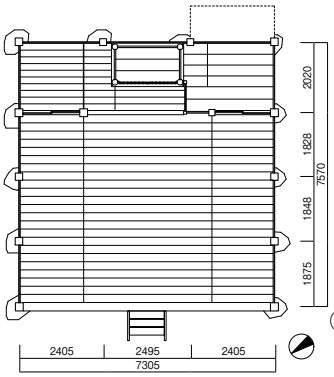


① 平面図

② 全景

③ 内部

図631 〔17〕貫田の八幡神社薬師堂



① 平面図

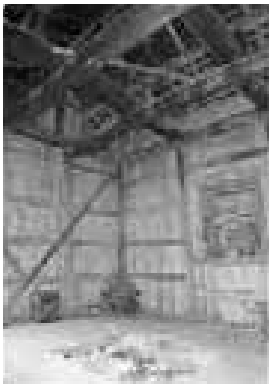
② 全景

③ 内部

図632 〔18〕神場の八幡神社 堂

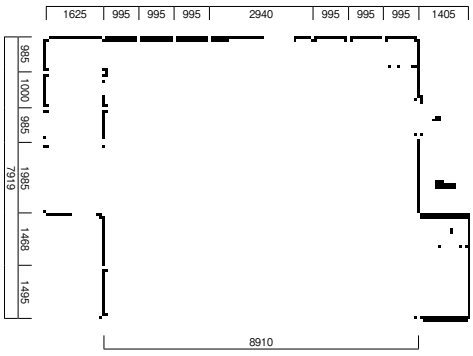
① 全景

② 近景



③ 内部

図633 〔19〕沖野神社芝居堂



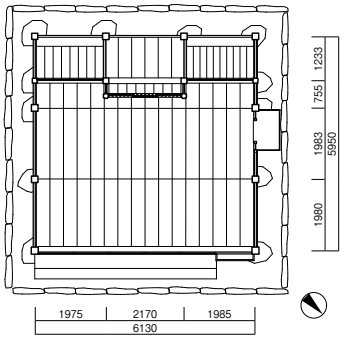
① 平面図

② 全景

③ 内部

Ⅱ. 単立の村堂

図634 〔3〕高井の薬師堂

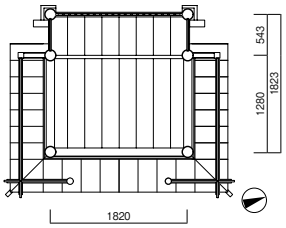


① 平面図

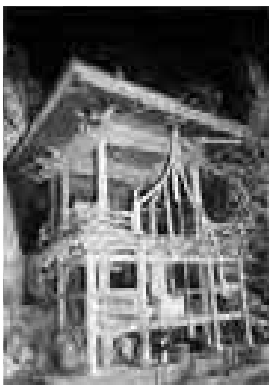
② 全景

③ 内部

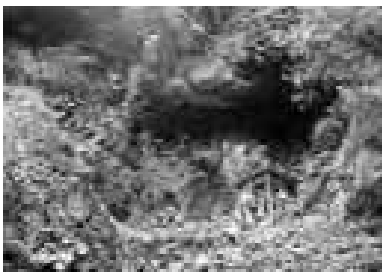
図635 〔6〕隼人の不動尊



① 平面図

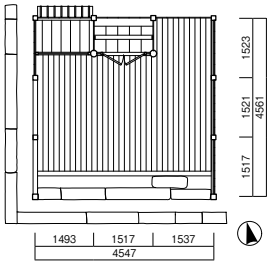


② 全景



③ 遠景

図636 〔7〕下岡の地蔵堂

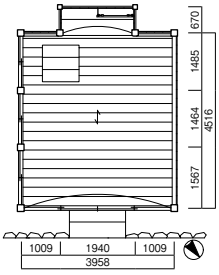


① 平面図

② 全景

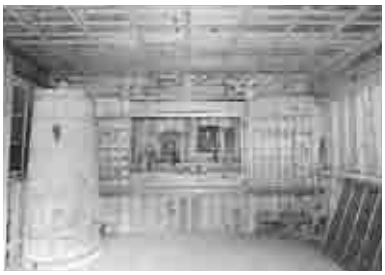
③ 葬儀道具

図637 〔9〕猪之谷の観音堂



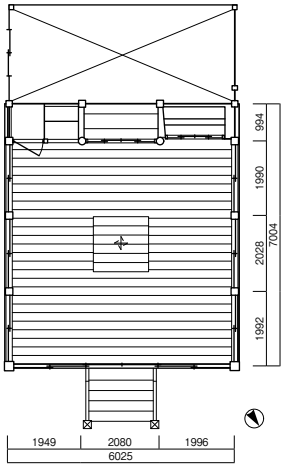
① 平面図

② 全景



③ 内部

図638 〔10〕神水の堂

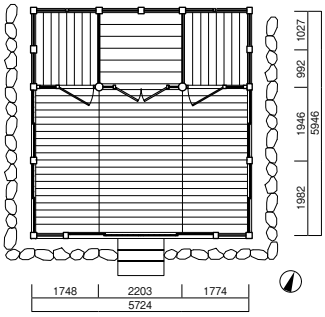


① 平面図

② 全景

③ 内部

図639 〔12〕長瀬の阿弥陀堂

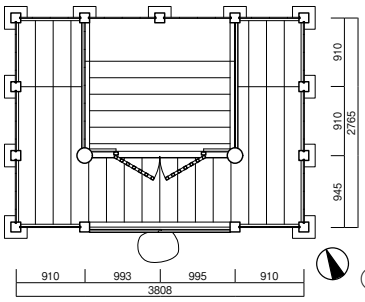


① 平面図

② 全景

③ 内部厨子

図640 〔13〕長瀬の観音堂

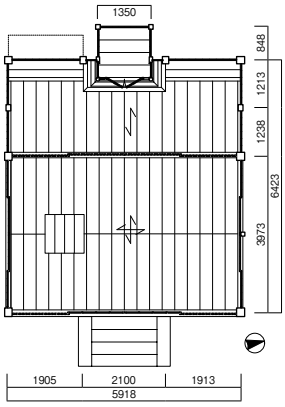


① 平面図

② 全景

③ 内部

図641 〔14〕東垣の大日堂

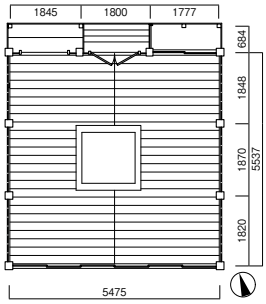


① 平面図

② 全景

③ 内部

図642 〔15〕実山の阿弥陀堂

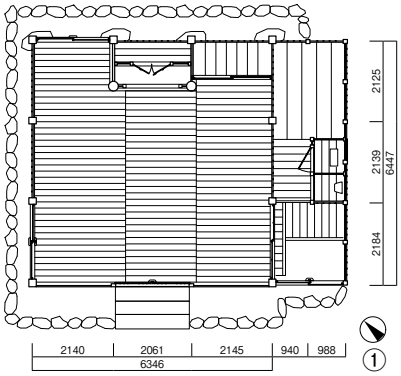


① 平面図

② 全景

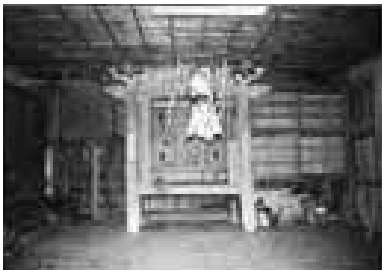
③ 内部

図643 〔16〕原の薬師堂



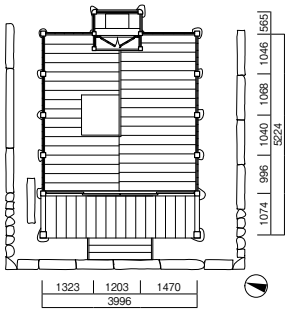
① 平面図

② 全景



③ 内部

図644 〔20〕藤の薬師堂



① 平面図

② 全景

③ 内部

教の信仰とそれにともなう祈願、法会の場を充実させたといえる。

〔2〕宿の観音堂ももとは本格的な仏堂だった。この堂には、祭礼のときに村の鎮守社の神霊が移座するので、お旅所の性格をもつといえる。宿の集落は中世に日影村から分村したが、氏神である作田井神社をそこに残したという。秋祭りでは、作田井神社から神をこの堂に移して所帯主が一晩籠る。したがって籠堂の性格をもつが、意匠は優秀であり、もとは今の倍の規模の本格的仏堂だったという点から、堂の性格として、信仰とそれに伴う祈願や法会にも重点があったと考えられ、熊野皇神社観音堂と類似している。建物の規模を半分に縮小する大きな改造が行われた点が残念だが、注目すべき堂である。

d．舞台

〔19〕沖野神社芝居堂は純粋な舞台である。〔17〕貫田八幡神社の堂は本尊を安置しているが、歌舞伎舞台として使用したという。

以上の堂は村管理の堂としてその性格を規定できる。

⑶　単立の堂

a. 集落内の堂

神社境内にない単立の堂は、集落内にある堂8棟と山中の堂1棟が二次調査対象で、表14に示した。集落内の単立の堂の形態は、閉鎖型が3棟、開放ないし半解放型が5棟である。閉鎖型のものには囲炉裏がなく、開放型のものに囲炉裏がある点がおもしろい。真冬に籠ることは意図していないだろう。

〔7〕下岡の地蔵堂、〔12〕長瀬の阿弥陀堂、〔16〕原の薬師堂、〔20〕藤の薬師堂には葬儀道具が備えられている。原と長瀬では盆行事も行われている。〔10〕神水の堂の願主は誰々の子と記載される25人で、堂の近くに墓地があるから、死者供養が大きな目的の堂であろう。〔9〕猪之谷の観音堂は個人の寄進による堂で、村の住人はここで盆踊り、数珠繰り（ひゃくまんびょう）などを行う。これに対して、神社境内の堂には個人や有志の建てた堂はないと思われる。

のちにみるように単立の堂でも籠りは行われるが、開放型が多く、囲炉裏も必須ではない。これは籠りを目的とする神社境内仏堂に比べて、単立の堂では死者供養などほかの目的があって、籠りの比重が低いからだろう。そして、これらの堂には、個人ないし任意の集団が建設したものが含まれている。そのような堂の管理は少なくとも当初は村の管理ではなかっただろう。

b. 山中の堂

これは〔6〕隼人の不動尊である。由緒がよくわからないが、山中の岩窟にある点で修験に関連があると思われ、信仰に重点があるといえる。

⑷　諸国の参詣人が泊まる堂

旅人などの自由な宿泊場所は村堂には限らないから、ここでの分類を越えた使用法である。しかし、そういう使われ方は、村堂のあり方として重要な事項なので、ここではそのような事例をあげておく。

諸国の旅人が堂を訪れたことは落書でわかる。落書がたくさんあるのは山陰道沿いの〔4〕大糠神社観音堂である。古いものは享保四年（1719）で上野国からきている。旅人の性格がわかる中では六十六部廻国行者が多い。〔2〕宿の観音堂にも武州江戸の六十六部が書いた板がある。『但馬海岸』[6]には香住の七日市天満神社境内の建物に普段はお遍路さんが寝るという記述がある。

表14　単立の村堂

	各個解説	建物名	区	小字	規模	属性（立地）	本尊	年代	西暦	開放性	囲炉裏	その他
〔3〕	37	薬師堂	村岡区	高井	1(3)×3	神社あるが、単立か	薬師	享保12年	1727	閉鎖	なし	高井神社には別に籠堂あり
〔6〕	13	不動尊	香住区	隼人	1(1)×2	単立（山中）	不動	18世紀中期		開放	なし	
〔7〕	11	地蔵堂	香住区	下岡	1(3)×3	単立（辻堂）	六地蔵	18世紀前期		開放	なし	葬儀道具あり
〔9〕	79	観音堂	小代区	猪之谷	1(3)×3	単立	観音	宝暦8年	1758	閉鎖	なし	個人寄進の村堂
〔10〕	76	観音堂	小代区	神水	1(3)×4	単立（辻堂）		宝暦13年	1763	開放	あり（新しい）	願主25人は親の供養か。近くに墓地
〔12〕	60	阿弥陀堂	村岡区	長瀬	1(4)×4	単立	阿弥陀、不動、毘沙門	寛政3年	1791	もと開放	なし	葬儀道具あり。盆行事。芝居
〔13〕	59	観音堂	村岡区	長瀬	3(4)×3	単立	観音	寛政5年	1793	閉鎖	なし	小規模な堂
〔14〕	70	大日堂	小代区	東垣	1(3)×2	神社あるが、単立か	大日	寛政8年	1796	外陣解放	あり	
〔15〕	67	阿弥陀堂	小代区	実山	1(3)×3	単立	阿弥陀	19世紀前期		もと開放	あり	境内の白髭神社は移転。
〔16〕	57	薬師堂	村岡区	原	1(3)×3	単立	薬師、観音、地蔵	嘉永2年	1849	閉鎖	なし	葬儀道具あり。盆行事。芝居
〔20〕	22	薬師堂	香住区	藤	1(3)×5	単立	薬師	明治44年	1911	半解放	あり	葬儀道具あり

規模は正面柱間（背面柱間）×側面柱間

6 『但馬海岸　但馬海岸地区民俗資料緊急調査報告書』（兵庫県教育委員会　昭和49年）130頁

⑸　まとめ

単立の堂、および諸国の旅人が泊まる堂は全国的に見られるものである。これに対して、神社内の籠堂がこれほどたくさんある地域は筆者の知見ではほかにない。このあり方は、かつて全国にあったが香美町だけ濃密に残ったのか、香美町の特色なのかは今後の検討課題である。

２　神社本殿での籠りと籠堂

⑴　郡主神社本殿・日出神社本殿・島田神社本殿

前項で、香美町では神社での籠りに使用される堂が多いことを指摘し、それは現在では香美町の特色といってよいことを述べた。しかし、神社における籠りは、お堂には限らないことが調査を通じて判明した。

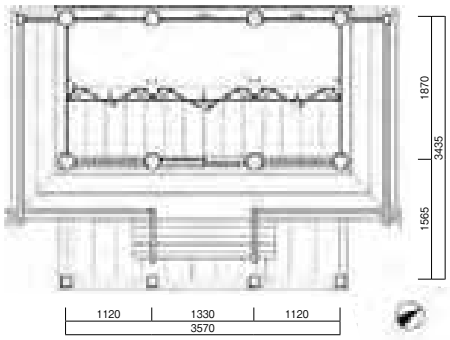
村岡区板仕野の郡主神社本殿（県指定文化財　各個解説34）は、応永十五年（1408）の棟札写しが知られる香美町唯一の本格的な中世神社建築である。年代が古いことに加えて、筆者がとくに注目するのは床下の材が著しく煤けていることである。これが本殿床下の意図的な使用によるものであれば、今までほぼ知られていない神社本殿の意味と使用法を示すものとして、神社建築史上重要な事例となる。郡主神社では床下が煤けていること自体が知られておらず、伝承もない。それがここだけのことならば原因を探る手立てがなかったが、同様の事例が比較的近い地域に2例ある。豊岡市の日出神社本殿（国重文）と福知山市の島田神社本殿（国重文）である。郡主神社も含めて、これらは似た時期の三間社流造本殿であり、地域的なまとまりを認めてもよい範囲に所在する。これら三棟の本殿床下が著しく煤けていることは、偶然の一致とはいえないだろう。

日出神社本殿は三間社流造で、室町後期の建築である。昭和三十五年に建造物調査を行った野地脩左は、床下が著しく煤けていることを発見し、古老から祭の宵宮に氏子の子達が籠っていたという貴重な聞取りを得ている。野地は翌年の報告で、そのことを古い祭事をしのぶよすがとして付記しておくと書いた[7]。当時すでに古老の伝聞になっていたとみられる。

島田神社本殿も三間社流造で、文亀二年（1502　内法貫墨書）の建築である。平成十九年から二十年にかけて解体修理が行われ、床下が激しく煤けていることが判明した。地面を調査したところ数か所の焚火の跡が確認されたが、床下使用の伝承は全くなかった[8]。

床下が煤けていることについて、早くに報告があった日出神社本殿は孤立した事例だったが、近年島田神社本殿、そしてこの調査で郡主神社本殿が加わった。日出神社と郡主神社では煤の原因がわかないが、島田

図645　郡主神社本殿



①　平面図

②　本殿正面

③　本殿床下

7　野地脩左、多淵敏樹「兵庫県出石郡但東町畑山の日出神社本殿について」（『日本建築学会論文報告集』69号　昭和36年）

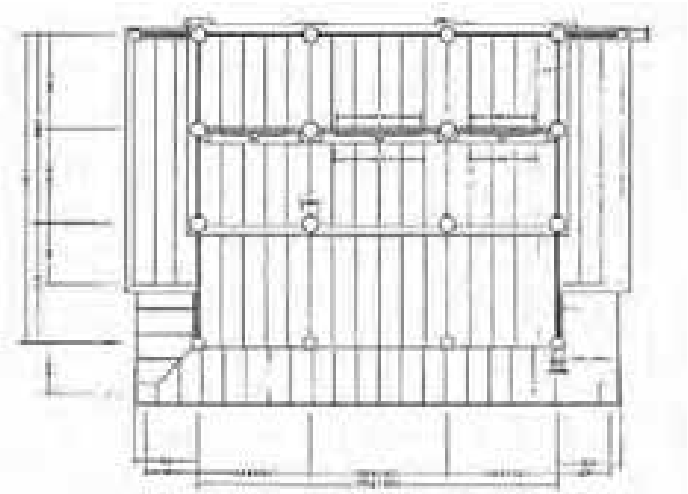
8　『重要文化財島田神社本殿修理工事報告書』（京都府教育委員会　平成21年）

図646　島田神社本殿

①　平面図（注8修理工事報告書より転載）

③　解体状況

図647　日出神社本殿



①　平面図（文化財建造物保存技術協会『重要文化財日出神社本殿修理工事報告書』（同保存修理委員会、昭和49年）より転載）

②　本殿全景（①に同じ）

④　本殿床下

②　本殿全景

③　本殿床下

神社の事例からそれらも床下での焚火によるものと考えてよいだろう。

⑵　香美町の籠りと籠堂

本殿床下の使用法が伝わるのは、日出神社における子供の籠りだけである。それもずいぶん以前に途絶えていて、今は伝承もない。しかし、そのことから３つの神社本殿では籠りが行われたという推定が成立する。

一方、建造物調査が進むにつれて、前節でみたように町内には籠りを行なう建物がたくさん残っていることが分かった。この地は籠りが盛んな地域なのである。『兵庫県神社誌』や民俗資料調査報告書には籠堂という言葉も出てくる。筆者らの調査は建造物が対象であり、行事については簡単な聞取りだけなので籠りの実態は詳しくはわからない。しかし逆に建造物調査から、江戸時代には本殿での籠りはほぼ行われていないと判断できる。調査では、古い年代の本殿はすべて対象とし、幕末までのいろいろな種類、規模を含めて取り上げた。17世紀の遺構は数少ないので、この時期の動向は不明であるが、床下が煤けた本殿は発見していない。また、以下に参照する民俗資料調査報告書でわかるように香美町の籠りは多彩であるが、本殿床下で行われるという記述はない。中世の神社本殿で行われた籠りが、近世以降には行われていないのである。

このことから籠りの場の変遷について、ふたつの可能性が想定できる。第一は本殿で籠る行事の消滅、第二は行事の場の移動である。決め手はないが、後者の可能性が高いであろう。その理由は、第一に本殿に籠るのは重要な神事であり、跡形もなく消滅するとは思えない。第二に日出神社では子供の籠りが伝えられているが、香美町でも子供の籠りが堂で行われている。第三に本殿床下は三社とも狭隘で、焚火をたくと内部は耐え難いほど煙たく、かつ火事の危険性が高い。籠りの場が本殿以外の建物に移る理由は十分あるのである。つまり、香美町の籠りの行事の中にはかつて本殿床下で行われたものがあるが、それは近世には本殿以外の場、つまり籠堂に移ったと考えられる。

町域では昭和四十四年度に小代地区、四十七～四十八年度に但馬海岸域で民俗資料緊急調査が行われた。これら報告書に記載された籠りと籠堂の事例をA、Bに掲げ、Cに今回の建造物調査で判明したことを追加する。

A.『小代　小代地区民俗資料緊急調査報告書』[9]の事例。

この調査は小代地区の熱田、小長辿の調査を中心とし、近隣他地区の行事も参照している。その記述で行事の地区や場が曖昧な事例には？をつけた。地名、建物名、日時、行事名、参加する人、行事内容などを列挙するが、それらが完備しない記述もある。

１．東垣　大日堂　籠り祈祷　1月27日　部落中の人。28日が祭日で市がたつ。当番は月交替で神主という。鍵を管理する。

２．秋岡　堂で行事　籠り　1月4日　エンヤツケ　10才くらいの子3人が主役。

３．新屋　堂で行事　籠り　1月5日　オトウ（エンヨサンヨ）　子供3人。行事のあと地区全戸から集めた米と餅米で餅を2個作り、子供が堂に籠って朝まで餅のもりをする。翌日餅を切って全戸に配る。

両部落（熱田、小長辿）には言葉のみある。

４．秋岡　堂を拠点とする　1月14日　ドンド　キツネガエリ　シリハリ　子供参加。

５．新屋　堂を拠点とする　1月14日　ドンド　キツネガエリ、シリハリ　子供参加。

両部落（熱田、小長辿）には言葉のみある。

６．熱田？観音堂　百万ビョウ　囲炉裏に大きな火をたき、輪になって数珠をまわしながら「南無阿弥陀仏」をとなえる。

７．熱田？小長辿？　2月3日年越し参りをして、お宮（堂？）に籠る。

８．小長辿　稲荷社境内の2軒の籠堂　籠り　4月1日、9月24日の氏神祭礼の宵宮

９．熱田　9月19日　氏神祭礼　一夜籠る

B.『但馬海岸　但馬海岸地区民俗資料緊急調査報告書』[10]の事例。

この調査は香住地区の民俗調査である。

１．御崎　平内神社舞堂　正月3日間籠る　花遊び

２．鎧　薬師堂　1月3日　籠り　オトウの夜行事と朝

9 『小代　小代地区民俗資料緊急調査報告書』（兵庫県教育委員会　昭和45年）

10　注6前掲書

表15　神社本殿の床下規模

	建物名	年代	身舎桁行	身舎梁間	広さ	床高（地面から）
a	郡主神社本殿	応永十五年（1408）	3.6m	1.9m	6.8㎡	1.2m
b	島田神社本殿	文亀二年（1502）	5.4m	3.6m	19.4㎡	1.7m（内陣）、1.5m（外陣）
c	日出神社本殿	室町後期	4.7m	2.5m	11.8㎡	1.7m

行事（筆者注：平成二十五年現在でも籠りは行なわれているが、神社とは無関係である。）

3．境　米粉神社　籠堂　1月2日　行事の後自由な若衆宿となる　粟棒行事　12、3才から20才の男子

4．七日市　12月31日　天満神社境内の建物　宮籠り　子供が籠る

5．宇日　12月31日　宮に籠る　トキノコエ　青年

6．七日市　1月6日　宮籠り　キツネガリ

7．浜坂　1月24日　宮籠り　愛宕さんの祭日

8．七日市　1月25日　宮籠り　初天神

9．七日市　2月3日　宮籠り　節分

C. 建造物調査の事例

建造物調査における聞き取りでは、大晦日、正月、秋祭りの前日に神社境内の堂に籠るというのが一般的だった。ここではA項2の補足と熊野皇神社での子供の籠りを追加する。

1．A項小代地区２の堂は、『兵庫県神社誌』の小代神社の項に行事の記事があり、籠堂とでているから、7小代神社観音堂である。聞き取りによれば、現在は10月15日に籠るが、正月は雪が多いので神社には来ないという。現地では正月の籠りは忘れられているとみられる。

2．兎塚口大谷の〔1〕〔11〕熊野皇神社での聞き取りによれば、昭和四十年代まで正月に小中学生が餅を持って集まり、一晩籠ったという。意味は分からないとのことだった。これはA項３の子供が餅のもりをするのと共通性がある。

多彩な籠りの事例の中で、日出神社との関連からまず子供の籠りを検討しなければならない。香美町の子供の籠りの中でもっとも広範な分布がみられるのはキツネガエリである。『兵庫探検　民俗編』[11]では「キツネ狩り」の項が立てられ、県内では播磨、丹波、但馬の全域、県外では福井県敦賀市から鳥取県米子市にみられ、全国各地の鳥追い、モグラ打ち、イノシシ追いと同系列の小正月行事とされている。この行事には正月小屋が付属し、秋田県のカマクラのように神が祀られ、子供が籠る場合もある。しかし、A、Bの報告書を見る範囲では、この地域のキツネガエリでは村堂が行事の拠点にはなるが、籠りが重い意味を持つわけではない。

籠り自体に深い意味がありそうなのは、A2秋岡の小代神社観音堂エンヤツケ、A3新屋の堂のオトウ（エンヨサンヨ）、C2口大谷の〔11〕熊野皇神社籠堂の籠りである。A2とA3は同種の行事である。A3には全戸から堂に上げられた餅を一晩管理するという仕事が加わり、C2では行事の意味は分からなくなっているが、同じことをしている。

似た性格の3つの行事の中では、A3新屋のオトウが最も完備した内容をもっている。まず、オトウという名称が神事性を表している。行事の主役は５、６才の3人の子供で、酒杯をもつ子が弓を持つ子と槍を持つ子に酒を飲ませ、紙で作った悪者を弓で射、槍で突く。その後、大人は若い少年を持ち上げてエンヨサンヨと唱えながら囲炉裏の周りを廻り、オーサンヨといって少年をあけ方に倒す。その後、地区全戸から集めた米と餅米で餅を2個作り、子供が堂に籠って朝まで餅の守りをする。翌日は餅を切り、全戸に配って行事は終了する。オトウには1月5日の春オトウと10月の秋オトウがあり、前者は弓を、後者は槍を保管するという。この行事は餅を搗き、切り分けて集落に配るという点で、正月行事である。村岡の大糠にも正月にオトウの餅つきがあり、〔4〕大糠神社観音堂では盃事や頭渡しがあるが、子供の伝承は聞かなかった。

(3)　本殿での籠りの意味

日出神社の伝承は秋祭りで、正月行事ではないが、新屋のオトウが春オトウ、秋オトウと言う点が参考になる。香美町での聞き取りでも、秋祭りの宵宮に籠るという事例は珍しくないから基本的に籠りは神社の祭と正月の年2回あり、日出神社でも正月行事があっ

11 『兵庫探検　民俗編』（神戸新聞社　昭和46年）

た可能性が高い。

次に、本殿床下でどのような祭祀ができるだろうか。本殿床下の面積と床の高さを表15に示す。

3棟とも狭小で、島田神社本殿と日出神社本殿では大人がかろうじて立てるが、郡主神社本殿では大人は無理である。新屋の行事のある部分がかつて本殿床下で行われたと仮定しても、主要部分は無理で、行なわれたのは籠りだけだろう。籠りの一般的な性格は、祭りの前日に潔斎のために籠るというのが普通である。これは香美町も例外ではないし、日出神社の籠りがそもそも祭りの宵宮と伝承されていた。

籠りと子供とを巡っていろいろと考察したが、正月行事や秋祭りなど重要な村落祭祀の前日に本殿床下に籠ったのだろうという単純な結論に達した。日出神社ではそれは子供であるが、香美町の事例を通じて、子供が主役となる行事があることがわかった。それは小正月の正月小屋のような子供全般の行事ではなく、新屋のオトウという名称が示すように、地縁共同体としての村落の神社行事である。この場合の子供は、一般的な各地の祭礼における一つものに類するものと理解するのが正しいだろう。一つものは多くの場合、美麗に着飾って馬にのるか、大人に肩車されて地面を歩かない聖別された子供である。養父郡養父町船谷のなき笑い祭りには、えんや踊りという少年の踊りがある。これから類推すると、秋岡と新屋でいうエンヤツケ、エンヤサンヨのエンヤは子供のことなのだろう。祭礼の前の潔斎に子供が籠るのであれば、大人が籠ることもないとはいえない。そうするとこの現象はもっと広がる可能性がある。本殿床下の籠りとして今知られているのは日吉大社などごく限られた範囲であり[12]、香美町で得られた籠りの習俗と建築との関係に関する知見は重要である。

⑷　神社の籠りの場の変遷

郡主神社、日出神社、島田神社の床下は単なる床下で、舗設はない。もちろん仏壇や本尊もない。籠りは神のため、自身の清浄のために行うのであるから、そこには本尊は必要がないと考えられる。熊野皇神社における仏を祀らない籠堂は、本殿床下に近い純粋な籠りの場であって、仏堂の簡略形ではないのであろう。逆に言うと、籠堂は仏堂であることが多いが、それは籠りの場の本質ではないといえる。

宿の観音堂のありかたは特殊なので大筋の流れからは除外するとすれば、神社での籠りの場は、江戸時代においては簡素な境内仏堂ないし単なる堂すなわち籠堂だった。中世においては籠堂の有無は確認できないが、近世になって初めて作られたとは思えない。そうすると、中世には神社本殿と籠堂で籠りが行われたと推定される。本殿床下に籠るのは特殊な意味をもったであろう。時代が新しくなるにつれて変化したことは本殿床下の籠りが行われなくなったことである。唯一日出神社だけが、子供が本殿床下に籠っていたことを昭和30年代まで伝承していた。

香美町の籠りと籠堂、そして香美町とその周辺の籠りの痕跡を残す中世神社本殿の存在は、神社本殿の理解と、籠りの習俗に関する深い問題を提起する。

おわりに

このように香美町には数多くの村堂があり、日本の村堂の標本ともいうべき多彩な種類があることが分かった。ここでの整理はなお未熟なものであるが、まず一地域のなかで村堂の多彩な実態を把握できたことは重要である。

ついで、籠堂および神社本殿床下での籠りの検討を通じて、中世的な籠りとその場の実態がある程度明らかになった。これらの事例は中世から近世にかけての神社信仰のありかたについて重要な新しい知見をもたらしたといえる。この調査は建造物を対象としたので、二次調査を行ったのはごく一部であった。惜しくも二次調査直前に取り壊されてしまった堂もある。ぜひとも、村堂全般に関する悉皆的調査ならびに民俗学的な調査が実施されることを祈る。　（黒田）

12　拙著『中世寺社信仰の場』（思文閣出版　平成11年）

２　大糠神社観音堂の墨書について

はじめに

村岡区村岡大糠の大糠神社には本殿に隣接して観音堂が建つ。小規模な仏堂で、正月には大糠集落の住民が集まり、正月を祝うとともに本尊である観音様に供える餅を搗く行事を行うという。集落の年中行事と密接に関係した貴重な建物であるが、その一方で、堂内の柱や厨子には廻国修行者などが記した多くの墨書が残っており、日常的に旅人たちが利用していたことが知られる。

仏堂の柱や壁面に文字を書く、または文字を記した板や紙を打ち付ける、貼るという行為は、中世から近世にかけて広く行われてきた。その内容や目的は、仏堂への参籠者による落書から、本尊への供物として記された寄進状までさまざまである。近世の札所寺院では参詣者により建物に納札や千社札が貼られたり打ち付けられるが、これらも同様の事例として考えることができる。

こうした行為については先行研究において紹介され、その特徴・意義も明らかにされつつある[1]。ただ、仏堂内に記された墨書を網羅的に調査した事例は非常に少なく、堂内にどのくらいの墨書が記され、その内容は如何なるものであったのかが明らかとなることは稀である。今回は観音堂の内部に残る墨書を調査し、それぞれについて釈文を作成した（史料二）。そこで、以下では堂内に記された墨書を年代・内容ごとに整理し、その内容について考察を加えていくこととする。なお、本文中で部材の位置を示すのに用いる番付は四十四頁の図面に付したものである。

１．墨書の概要

堂内に書かれた墨書の内容について検討する前に、観音堂の建築的特徴を行論に必要な点に限定して確認するとともに、墨書の概要をみておきたい。なお、観音堂の建造物としての特徴は、79～81頁で詳しく述べられているのでそちらを参照していただきたい。

（１）観音堂について

大糠神社は、交代寄合山名氏の陣屋町であった村岡の南東約１㎞のところにあり、神社の前を山陰街道が通る。

観音堂は境内の東に位置する。大糠集落の住民が年中行事に利用しており、「村堂」に分類される建物と考えることができる。方三間の小規模な仏堂で、側廻りは、正面中央間に引き違いの板戸を設け、その他は板壁である。内部は天井を張らずに小屋組をみせた簡素なつくりで、正面前寄りに囲炉裏を設け、奥には厨子を構える。建立年代を示す史料はなく、現存する墨書の年号、および柱の風蝕から、18世紀前期頃に建てられたと考えられる。

現在の側廻りの板壁は、昭和三十七年（1962）の修理にともないすべて新調したものだが、側柱にはそれぞれ板決りの痕跡が残り、当初から柱間を板壁で閉ざした閉鎖的な建物であったことがわかる。また、平成元年（1989）には屋根を茅葺から瓦葺に替えており、その際に小屋組の部材も取り替えたと考えられる。

（２）堂内の墨書について

前述のように、観音堂内には多くの墨書が残されており、現段階で180箇所以上に確認できる。その内容は、姓名、日付、旅の目的、名号、狂歌など多岐にわたり、それぞれが単独で記される場合と、組み合わせて書かれる場合がある[2]。

墨書が現存するのは、柱・貫・厨子廻りで、軒桁より上の部材には確認できない。おそらくはほとんどの墨書が手の届く範囲に書かれたのであろう。また、板壁には最も多く墨書が記されていたと思われるが、残念ながら修理により取り替えられており、以前の状況を知ることはできない。

---

1 山岸常人編『百済寺本堂墨書史料集』（平成14年）
山岸常人「仏堂と文書　－板･柱･壁に書かれた文書をめぐって－」（『中世寺院の僧団・法会・文書』（東京大学出版会　平成16年）、初出は平成4年）
藤木久志『戦国の作法』（講談社　平成20年、初出は昭和62年）
若松寺観音堂墨書調査会編『若松寺観音堂墨書調査報告書』（天童市教育委員会　平成20年）
三上喜孝「中近世仏堂墨書と地域社会－天童市若松寺観音堂墨書の調査をふまえて－」（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』六　平成21年）

2　全国の仏堂に残された墨書のなかには、「かたミかたミ」という文言や、「かたみとなれや筆のあと」というフレーズを含む歌を記す事例が広範にみられる（前掲三上「中近世仏堂墨書と地域社会－天童市若松寺観音堂墨書の調査をふまえて－」）。だが、観音堂の現存する墨書にはそれらを確認することができなかった。

厨子は正面に両開きの板扉を備え、その内側に引き分けの格子を入れる。墨書は扉の両面と格子の表面にも記されており、現在は扉に鍵が掛けられているものの、以前は扉を自由に開閉することができたようである。ただ、板扉の裏面や格子はそれほど煤けておらず、日常的に開かれていたわけではないと考えられる。

２．墨書の年代

観音堂に残された墨書には、干支や日付を記したものが多くみられるが、なかには年号を書く事例もある。側廻りの板壁がすべて取り替えられており、分析の限界はあるものの、現存する年号の数を整理すると以下のようになる（括弧内は記された年号の個数である）。宝永（１）、正徳（１）、享保（14）、元文（２）、寛保（２）、延享（１）、文政（１）、昭和（１）

年号を記した墨書は23箇所に確認できる。そのなかで最も古い年号は、「に三」の柱に書かれた宝永三年（1706）で、観音堂の建立年代は宝永三年以前ということがわかる。それに次ぐのは「ろ四」～「い四」の飛貫に残る正徳五年（1715）である。その一方で、最も新しい年号は、昭和37年の修理の際に記された墨書を除くと、文政八年（1825）である。

このように、年号を記した墨書は18世紀前期から19世紀前期に分布しているが、最も特徴的なのは、18世紀前期～中期の年号が集中すること、とりわけ享保の年号が13箇所と飛び抜けて多く、全体の約６割を占めることであろう。

そこで、これら年号を持つ墨書をみると、①記主の出身が明らかとなるものが14箇所あり、上総国、武蔵国など関東諸国を居所とする者が６名と多いこと、②六十六部など廻国修行者の記した墨書が７箇所あることが指摘できる。年号が18世紀前中期に集中する理由については、廻国修行者の残した墨書が比較的多いこと、元禄・宝永期には六十六部による廻国供養塔の造立が本格化し、享保期には隆盛に向かうこと、西国三十三所巡礼を行う巡礼者の数も同様に元禄期に急激に増加することをふまえるならば[3]、廻国修行の流行にともない六十六部などの廻国修行者が増加したことと関係すると考えられる。一方、享保期とそれ以外とで以上の傾向に大きく異なる点はなく、享保期に集中する理由は不明である。

３．観音堂を利用する人々

堂内の墨書には、姓名・出身地・旅の目的・行先などを記したものが数多くあり、どのような人々が観音堂を利用し、墨書を書き残したのかが明らかとなる。

表16は、記主の出身地が明らかとなる墨書、および記主の姓名や出身地など、複数の情報が判明する墨書を一覧としたものである。墨書のなかには、日付・姓名・名号のみを記すものが多数あるが、ここではそれらを除いている。この表をもとに、観音堂を利用した人々について整理すると、以下の点が明らかとなる。

（１）記主とその出身地について

記主は大きく①苗字を持つ者、②苗字を持たない者、③法名を持つ者に分けられる。③については、自らを六十六部と称している事例や、旅の目的を廻国としている事例が散見されることから、六十六部聖や念仏聖といった廻国修行を行う宗教者が含まれると考えられる。一方、①②については、観音堂が山陰街道に面していることから、街道を往来する旅人である可能性が高く、参詣、あるいは休息・宿泊に利用していたのであろう。墨書のなかには「たばこ申候」というものもあり、観音堂の利用目的が明らかとなる事例として興味深い。

一方、出身地を記す記主のほとんどは他国の出身で、大糠近辺や但馬国出身の者はほとんどいない。

出身地を国ごとに分けると29ヶ国となり、北は陸奥国、南は肥後国まで全国的に分布する。出身国のなかで最も多いのが関東諸国で、武蔵国の16名を筆頭に、上総国・下総国・上野国の各５名、常陸国の４名とつづき、全体で35名となる。それに比べて、山陰諸国の出身者は少なく、丹後国が１名、因幡国が２名、伯耆国が３名、出雲国が２名の計７名である。同様に、畿内出身者も少数で、山城国の１名、大和国の２名、摂津国の３名、計６名に過ぎない。したがって、墨書からみる限り、関東諸国出身の旅人が多く観音堂を利用していたとすることができる。さらに、旅人のなかに

3　小嶋博巳「近世六部の組織性」（巡礼研究会編『巡礼論集２』六六部回国巡礼の諸相　岩田書院　平成15年）
田中智彦著・田中智彦論文集刊行会編『聖地を巡る人と道』（岩田書院　平成16年）

は陸奥国・肥前国・肥後国といった遠隔地出身の者もおり、全国各地からの旅人が山陰街道を往来していたことがわかる。

（2）旅の目的と行き先

墨書には、記主の姓名などとともに旅の目的が書かれる事例が26例ある。墨書の総数と比べるとごく少数だが、旅の目的が判明する貴重な事例である。

旅の目的は、①廻国、②六十六部廻国、③三十三所巡礼の３つに分類できる。その内訳は、①が14例、②が11例、③が１例である。こうした旅を行っている者のなかには、納経のため諸国の寺院を巡る六十六部聖や、廻国修行を行う念仏聖とともに、法名を持たないものの、①～③を目的に旅をしている者が含まれる。近世には、百姓や町人など宗教者ではない人々による廻国修行や巡礼が広く行われており、表16でも江戸・伯耆国・因幡国からの廻国修行者のいたことが確認できる。一般の人々による廻国修行や巡礼は物見遊山を兼ねることが多く[4]、修行としての側面がどの程度濃厚なのかは不明だが、18世紀の前中期には、こうした人々が山陰街道を往来していたことは確かであろう。なお、表では関東地方からの旅人が多数を占めていた。その大部分が廻国修行者・巡礼者というわけではないだろうが、なかにはそうした旅を目的とする旅人が含まれるのではないだろうか。

さらに、墨書のなかには、廻国修行者などが納経札を納める代わりに「奉納大乗妙典」と記す事例や、「南無阿弥陀仏」の名号を書く事例が多くあり、観音堂は単なる休息所ではなく、参詣の

4　前掲田中『聖地を巡る人と道』

表16　大糠神社観音堂墨書の記主・内容一覧

姓名	出身地		旅の目的	行き先	備考＊
	飛騨国		廻国		南無阿弥陀仏
利兵衛	武蔵国	江戸霊岸島	廻国		
浅右衛門	伯耆国	会見郡渡村			
	能登国	能登郡筆染村	廻国		
山村左□	常陸国	水戸			
岡田勘助	伊勢国	桑名			
	武蔵国	江戸			「南無阿弥陀仏」
応誉浄感	摂津国	大坂	廻国		
伊藤新右衛門			廻国		
善三郎	伯耆国	米子西町	三十三所巡礼		「奉　三拾三所」
善右衛門		鹿島郡			
	武蔵国		廻国		
池田吉兵衛	武蔵国	江戸			
	武蔵国	江戸	廻国		
新井伍太舗	上野国	村上村			
山本武□ 岡山□	伯耆国	久米郡三保村	六十六部廻国		
	但馬国	大糠村			
山本長			六十六部廻国		
□衛門 大西	武蔵国	妻田村			
円海法印	但馬国	美含郡			
谷口善八政房	常陸国	鹿島郡水戸	廻国		
卯山義道	尾張国	知多郡	六十六部廻国		「奉納大乗妙典」
根岸弥一良	上野国				
浄心	上野国	惣社町			
	摂津国	大坂	廻国		「南無阿□」
	安芸国	広島	六十六部廻国		
郎誉是空			六十六部廻国	妙見山	同行衆井□□・浦□□ 「奉納大乗妙典」
大嶋九兵衛	武蔵国	江戸浅草			同行四人
渡部平左衛門	上野国			丹後	
		長浜村			たばこ
浄観		八日市場			
然誉廊澄	下総国	匝瑳郡			「南無阿弥陀仏」
	伊勢国	桑名			
	下総国	岡田郡大輪村			
□村久兵衛			六十六部廻国		「奉納大乗妙典」
	武蔵国	江戸谷中		（四国阿波）	
恵岸	武蔵国	江戸	廻国		
木寺利右衛門	信濃国	筑摩郡大町			
	陸奥国	南部			
小和田八左衛門	尾張国	熱田			「南無妙法蓮華経」
廻休信士	上総国	天羽郡金谷村			
垂心	丹後国	中郡苗代村	六十六部廻国		「奉納大乗妙典」
	伊勢国				
大戸清四郎	上総国	夷隅郡江場古村	（廻国）		「南無妙法蓮華経」 三人組 （墨書の書かれた日付が石井彦次郎のものと一致することから彦次郎と同行していたと考えられる。）
岡□右衛門	出雲国	神門郡□江村			
木村久兵衛	武蔵国	江戸	六十六部廻国		
	因幡国				
	信濃国				
	伊勢国	松坂			同行四人
	出雲国				
	常陸国				
小安武兵衛	上総国	萬喜村			
一誉性空	武蔵国				「南無□」
中田□一郎	武蔵国	江戸			
西川吉平	豊後国				
海善	下総国		廻国		同行二人 「南無阿弥陀仏」
知道法印	武蔵国	足立郡下石戸	廻国		
喜八	伊勢国	城野			
石井彦次郎	上総国	（夷隅郡江場古村）	廻国		同所三人組

対象であったとすることができよう。

また、ごく少数ではあるが、三十三所巡礼を行っている者も確認できる。墨書には「奉納西国三十三所」と記したものがあり、西国三十三所巡礼の巡礼者が書いたものと考えられる。さらに、「奉　三拾三所」と記されたものもある。そもそも観音堂は観音を本尊としており、巡礼者にとっては参詣の対象であったと考えられるが、観音堂の本尊が著名な信仰対象として認識されて、ある時期には地方的な三十三所の札所であった可能性も想定できる。墨書の年代の偏りもこのことと関係するかもしれないが、詳細は不明であり、今後の調査を俟ちたい。

中嶋宗□	武蔵国	江戸		丹後	
石橋八□	伊勢国	桑名			
慶□	肥後国	熊本			同行□人
太右衛門	伊予国	松山			
直誉	伊勢国	津			
中山長三郎	大和国	宇智郡二見村			
土橋氏	越陽				「南無阿弥陀仏」
秀海	紀伊国	高野山			「南無大師遍照金剛」
坂本儀兵衛 出羽円西	摂津国	大坂			
受然	山城国	京都			「南無阿弥陀仏」
唯心	淡路国				
常貞	美作国				
清島兵十郎 弥惣	大和国	宇智郡寿命村			
庄兵	下野国	太□			
野田忠兵衛	武蔵国	江戸市ヶ谷			
西川や法□	常陸国	水戸			
欣誉	武蔵国	越ヶ谷			
自照	下野国	日光			同行三人
清誉願故	下総国				
鈴木理右衛門	三河国	賀茂郡小向見村			
久木田藤助	因幡国	鳥取	六十六部廻国		
法厳	上野国	新田郡内島村	六十六部廻国	丹後	同行三人
亮運	上総国	のどの			
一葉円入		福島村	廻国		大日本回国
伊藤伊左衛門	下総国	海上郡十日市場村			
橋本又四郎	肥前国	長崎	六十六部廻国		

＊　欄中のカギ括弧内の名号などは名前とともに記されたものである

ところで、墨書のなかには、旅人が行き先を記したものがごく僅かながらある。そのほとんどは共通しており、丹後、あるいは妙見山である。丹後については、成相寺や智恩寺といった六十六部の巡拝寺院[5]、西国三十三所の札所となっている寺院があることから、これらの寺院への参詣を目的とした旅人が記したものと推測される。

一方の妙見山は、但馬国の妙見山、または摂津国の能勢妙見山のいずれかであると考えられるが、以下の理由から前者の可能性が高いといえる。すなわち、三浦秀宥氏が紹介された與兵衛という六十六部の事例からは、巡拝先として「但馬国妙見宮帝釈寺」はみられるものの、摂津国を回った際に能勢妙見山へ納経をしていないことがわかる[6]。さらに、観音堂内の墨書には「是より明見山丹州罷通り」と記したものがあり、順路を考慮するならば、これを書いた旅人の場合は、但馬の妙見山から丹後の寺社へと向かう旅の途中であったと考えられる。

以上の事例からは、観音堂から東へ向かう回国修行者の行き先として、丹後があり、その中途に但馬妙見山に立ち寄るかどうかという選択肢のあったことが判明する。行き先を記す事例はごく限られており、廻国修行者の順路として一般化することはできないが、観音堂を通過する修行者の行き先のひとつとしてこうした寺社のあったことは確かであろう。

おわりに

以上、大糠神社観音堂内に残された墨書についてみてきた。書かれた内容は非常に多様ながら、そこからは、関東諸国を中心とした諸国からの旅人、六十六部・巡礼者などの廻国修行者が観音堂に参詣するとともに、休息所として利用していたことが明らかとなった。また、僅かな事例ではあるが、廻国修行者の巡拝経路についても解明することができた。

ただ、こうした街道沿いの村堂に墨書が書かれる事例はほとんど見いだせておらず、観音堂のように堂内に大量の墨書が記されるのが一般的であったのか、観音堂の本尊が信仰の対象となったため、多くの参詣者による墨書が残されたのかは不明であり、今後の調査の進展が期待される。

とまれ、観音堂とそこに書かれた墨書は、近世の旅のあり方や廻国修行者の具体的な姿を描き出すことができる非常に貴重な文化財である。　（登谷）

5　田代孝「六十六部回国納経の発生と展開」（前掲『巡礼論集２』）

6　三浦秀宥「六十六部聖」（萩原龍夫・真野俊和編『仏教民俗学大系』２　聖と民衆　名著出版　昭和61年）

３　棟札にみる近世の香美町域の建築工匠

香美町の寺社には多数の棟札が残っており、今回の調査において確認できただけでも60枚以上ある。そのうち、近世のものを中心に二次調査対象建物の建立年代の根拠とした棟札や木札等の釈文を巻末（史料一）に掲載する。

本節では、これらの棟札等をもとに近世の香美町域の寺社造営に関わった建築工匠について整理しておきたい。

１．工匠の出身地とその変化

表17は、工匠が書かれている近世の棟札や木札などを抜粋し、建立年代順に整理したものである。彫刻師の丹波柏原町住中井権次については次節で取り上げるので、ここでは割愛する。

まず、香美町の寺社の建立に携わった大工棟梁・大工・小工について、その在住地域に着目してみたい。表17のゴシック体で示した部分は、香美町域（旧美含郡、旧美方郡、旧七味郡）以外に在住していることが確認できる工匠である。工匠の在住地について以下の特徴を指摘することができる。

① 18世紀前期までは、出石や豊岡のほか、二方郡や養父郡などの他地域に在住する大工が活動している。

② 18世紀中期になると、香美町域（旧美含郡・七味郡･美方郡）在住の大工単独での工事が増加する。ただし、美含郡森村にある大乗寺客殿及び庫裏の寛政六年（1794）の建立では、地元の大工とともに豊岡や出石の大工の参加が確認できる。

③ 19世紀中期から幕末にかけては、朝来郡や二方郡など近隣の地域の大工による工事が再び確認できるようになる。

上記の特徴とその変遷について、少し詳しくみてみたい。

まず①については、寛文十一年（1671）の木原大明神（附章史料一の掲載番号は二十一（１）。以下、附章史料一の番号のみを記す）の建立、延宝四年（1676）の十二社権現（二十九（１））の建立、出石の青山市郎右門とその一統が棟梁と大工をつとめた正徳二年（1712）の大乗寺観音堂再建（五（１））などがこれに該当する[1]。美含郡香住村一帯は、文禄四年（1595）以降、出石城主の所領となった。また、美含郡油良村や守柄村は豊岡藩領であった時期もある。しかも、豊岡や出石湯嶋村と香美町は但馬浜街道で結ばれていた[2]。すなわち政治、流通などを介して交流が盛んな地域間で、建築工匠やその技術も移動しうる状況であったであろう。

しかし、18世紀中葉になると、香美町域に住む地元大工単独での工事が多くなる。しかも、美含郡森村の青山氏や旧七味郡高津村の下垣氏、七味郡平野村の太田氏については同姓の大工が散見される。一族が大工として活動していたのであろう。18世紀中期には香美町域内に在往する建築工匠が増加していた可能性が高い。

したがって、今回の調査からは、本地域の寺社造営に関わる工匠に関して①から②への変化、つまり18世紀前期ごろまでは近隣の城崎郡湯嶋村や出石から優れた工匠を招いていたが、次第に地元の工匠だけで工事を遂行できるようになっていったという変化を指摘することができる。

２．同一建物の建立と再建にみる工匠の変化

さらに、かかる変化については、同一建物の建立と再建の棟札が残る次の２事例（表17の網掛け部分）からも確認できる点は重要であろう。

旧美含郡小原村遍照寺には、寛文十一年（1671）の木原大明神建立（二十一（１））と宝暦三年（1753）の同社再建（二十一（７））の棟札が残る。二枚ともに美含郡長井庄の七ケ村が願主として記されていることから、木原大明神は小原村近隣七ケ村の総鎮守であったという椋橋大明神に該当すると考えられる[3]。

さて、この木原大明神の寛文度の建立では、城崎郡湯嶋村の藤田平兵衛と同郡今津村の安藤五兵衛が大工棟梁をつとめている。大工は同郡の藤田六良右門以下３名がつとめている。なお藤田は延宝度の十二社権現本殿建立の棟梁と同一人物である。しかし、宝暦度の

---

1 『出石町史　第一巻』（出石町　昭和59年）によると、出石城下には扶持を支給されていた御大工をはじめ、多くの大工が居住していたという。ただし、香美町で活動した大工の居住は確認できていない。

2 『兵庫県の地名』（平凡社　平成11年）

3 前掲『兵庫県の地名』

再建では、棟梁・大工ともに地元の工匠が従事している。

一方、旧七味郡高津村の勢主山神社には、本堂の天和三年（1683）造立（五十五（１））と天保十二年（1841）再建（五十五（４））の棟札がある。ここでも、天和度建立は養父郡の大工であったのに対し、天保度再建では地元の高津村の大工の名が記される。

このような変化の傾向は、出石や豊岡といった城下町や在方町から伝えられた工匠やその建築技術が、18世紀に近隣の地域の香美町域内で定着していくことを示しているのであろう。さらに言うならば、香美町の寺社建築にみられる装飾の独自性などは、かかる経緯のもとで18世紀以降に地元の工匠が作りあげてきた技術・意匠であると評価することもできよう。

なお、他地域の工匠から地元の工匠単独での工事へと変化する傾向は、兵庫県の旧大河内町域でも指摘されている[4]。ただし、三木の大工が活躍したという旧大河町域の事例と、他郡とはいえ近隣の大工が活動していた香美町域の事例を簡単に比較検討することは難しい。上記の変化を一般的と評価するには、さらなる検討が必要である。

３．地元と他地域の工匠の協業

ところで、寛政六年（1794）の大乗寺客殿及び庫裏の建立（五（２））では、地元の美含郡森村在住の青山常七が棟梁をつとめ、その後見に豊岡の彦四郎重賢が付く[5]。さらに、38名にものぼる多数の大工には、美含郡の森村や小原村、美方郡下浜村のほかに、豊岡や出石在住者が含まれる。この造営は大規模であったために、地元だけでは工匠を十分に確保できなかった可能性は否定できないが、①から②への変化を考えると、他地域と地元との混合組織が存在していたことは注目に値する。

地元と他地域の工匠の混合組織については、旧養父郡石原村にある名草神社本殿の建立でも確認できる[6]。宝暦四年（1754）の本殿上棟札には、表に棟梁・大工・木挽の名前、裏にその在住地が記される。これを整理すると、棟梁２名のうち、宮本七郎兵衛春重は出石、田中木工右衛音当宗は同じ養父郡の八鹿村に在住していることがわかる。さらに、大工14名のうち、７名が出石城下在住であるのに対し、２名が地元の石原村、他の５名も同じ養父郡の八鹿村や関宮村などに居住している。すなわち、18世紀の但馬国における大規模寺社造営については、出石などの他地域と地元の工匠の混合組織での工事が可能であった状況が想定される。ただし、これについても、一般化するにはさらなる事例検討を必要とする。

４．幕末の動向

19世紀中期になると、香美町域では地元だけではなく、朝来郡や二方郡の大工の活動が目立つようになる。19世紀以降の交通・流通網の拡大や変化と関係する可能性はあるが、事例が少なく、実態を把握することは難しい。

５．建築工匠以外の工匠

ここまで大工に着目してきたが、今回の調査で確認できた棟札には、木挽や屋根葺の記述もある。木挽については、地元の工匠のほか、隣接する二方郡の辺地村や久谷村、城崎郡や豊岡から招かれている。屋根葺については、豊岡や城崎郡湯嶋の工匠が確認できる[7]。近世を通して他郡から招くことが定着していたようである。建築工匠が地元で確保されていた状況とは対照的である。（岸）

---

4 『神河町の寺社建築－旧大河内町域－』（神河町教育委員会　平成21年）

5 建部恭宣「丹後地方における大工の活動と宮津葛屋町の大工たち」（『京・近江・丹後大工の仕事－近世から近代へ－』第三章、思文閣出版　平成18年）で紹介される天明二年（1782）の網野神社（網野町）の建立棟札には、地元大工棟梁の後見に「但州豊岡町後見　彦四良」とある。これは、寛政六年の大乗寺客殿・庫裏の造営の棟梁の後見をつとめたとされる豊岡の彦四郎重賢と同一人物であると想定される。豊岡の大工組織の詳細は不明であるが、但馬・丹後地方の大工は後見となることができうる豊岡大工のもとで技術を習得した上で各地元で活動できる体制が整っていた可能性がある。

6 『名草神社建造物調査報告書』（養父市教育委員会　平成20年）。以下、名草神社に関しては本報告書を参照した。

7 前述の旧養父郡の名草神社の宝暦四年の本殿建立では、木挽として名草神社門前在住の７名があげられている。一方、名草神社には明和元年（1764）の本殿屋根替札もあり、「宇葺方棟梁」として城崎郡湯嶋村住人の中村平四郎光軌他１名があがる。さらに、豊岡や出石在住の工匠の名前も記される。事例は限られているものの、近世の但馬地域においては城崎郡湯嶋や豊岡の屋根葺の工匠が広い範囲で活躍していたことがうかがえる。

表17　香美町域の棟札に見る工匠一覧

附章	史料一	掲載番号	棟札等名称	和暦	西暦	旧郡・村名	大工棟梁	大工
一	米粉神社	（1）	寛永十年造立棟札	寛永10年	1633	美含郡境村		一日市村　弥右門
七十二	八幡神社	（3）	年欠三宝荒神社社頭再興棟札	17世紀中		不明		萱野村　野村弥兵衛家次
十九	八幡神社	（1）	応安元年八幡宮建立棟札写墨書	応安元年	1648	美含郡無南垣村		藤原宗重
一	米粉神社	（2）	寛文九年御社造立棟札	寛文９年	1669	美含郡境村		一日市村　長三良介
二十一	遍照寺	（1）	寛文十一年木原大明神建立棟札	寛文11年	1671	美含郡小原村	**城崎郡湯嶋村　藤田平兵衛、城崎郡今津村　安藤五兵衛**	**城崎郡　藤田六良右門、城崎郡　長崎長二良、城崎郡　木工田平三良森久、城崎郡　藤田平左衛門**
二十九	十二社神社	（1）	延宝四年十二社権現（本殿）建立棟札	延宝４年	1676	美含郡余部村	**城崎郡湯嶋　藤田平兵衛**	□□□、黒崎三郎兵衛、家田惣兵衛、瀬取次郎助
五十五	勢主山神社	（1）	天和三年本堂造立棟札	天和３年	1683	七味郡高津村		**養父郡羽山庄吉井村　□□小兵衛門□□**
二	通玄寺	（1）	天和四年客殿建立棟札	天和４年	1684	美含郡境村		中井源左衛門
二十五	八坂神社	（1）	元禄七年本殿建立棟札	元禄７年	1694	美含郡余部村		**二方郡浜坂村　藤原森上源大夫**
二十一	遍照寺	（3）	宝永八年鐘撞堂建立棟札	宝永８年	1711	美含郡小原村		**番匠　出石　鳥羽源四郎**
五	大乗寺	（1）	正徳二年観音堂再建立棟札	正徳２年	1712	美含郡森村	**出石ノ住人青山市郎右門**	**仕手　出石　角岡喜太夫、五郎兵衛、九左衛門、岩瀬平九郎　一郎右門弟子　青山吉右門、同　加兵衛、同　市三郎　市郎右門兄第　青山半兵衛、同　加右門、正木五郎左門**
十九	八幡神社	（2）	享保四年八幡宮再建棟札	享保４年	1719	美含郡無南垣村		**出石町内　青山　新左衛門尉**
十九	八幡神社	（3）	享保四年八幡宮蟇股墨書	享保４年	1719	美含郡無南垣村		
五十七	薬師堂	（1）	享保九年薬師堂建立棟札	享保９年	1724	七味郡原村		村岡　角谷羽右衛門
三十七	薬師堂	（1）	享保十二年薬師如来堂造立棟札	享保12年	1727	美方郡村岡村		村岡　南与兵衛、南五兵衛
一	米粉神社	（3）	享保十四年大明神再興棟札	享保14年	1729	美含郡境村	若松村　高家尚留	同子　助太夫、守柄村　中村長兵衛
十六	大倉神社	（1）	享保十四年小倉大明神社（本殿）造立棟札	享保14年	1729	美含郡本見塚村	上岡村　中井伝九良、森村　青山嘉七	下浜村　和田梶右衛門、□□村　森田六兵衛、間室村　勘九郎、上岡村　重太夫
二十一	遍照寺	（5）	寛延二年観音堂建立棟札（建立は享保二十一年）	享保21年	1736	美含郡小原村		**出石城下　吉良兵衛**
二十一	遍照寺	（6）	寛延二年大師堂再建棟札	寛延２年	1749	美含郡小原村		守柄村　長兵衛、当所　平祐、一日市　仁平次
二十一	遍照寺	（7）	宝暦三年木原大明神再建棟札	宝暦３年	1753	美含郡小原村	守柄　長兵衛 下役　下浜　梶右衛門	当所　平助、一日市　仁平次、訓谷　伊平次
六十九	小代神社	（3）	宝暦三年観音堂棟札	宝暦３年	1753	七味郡秋岡村		武右衛門
四十七	森脇神社	（1）	宝暦八年本殿縁小壁墨書	宝暦８年	1758	七味郡森脇村	**出石　角岡平八郎高家**	**角岡太郎八道運、平八弟角岡七五郎**
九	兵主神社	（1）	安永四年棟札写	安永４年	1775	美含郡九斗村	無南垣村　中村与一左衛門保高、**豊岡村　中井庄三郎広光**	
七十一	吉滝神社	（2）	年欠熊野七社大権現宮再建棟札	天明２年	1782	七味郡鍛治屋村	棟梁藤原大工　大谷村中村杢右衛門吉孝、実山村　太田治八安繁 後見藤原大工　中村惣右衛門吉次、平野村　太田半八安績	
七十八	荒霊神社	（1）	天明五年三荒霊神宝殿再建棟札	天明５年	1785	七味郡石寺村	平野村　大田忠右エ門、長坂村　中村友七	脇大工　平野村　常七
十	多田神社	（1）	天明六年妙見宮建立棟札	天明６年	1786	美含郡丹生地村	畑村　金右衛門、畑村　宗兵衛、畑村　新左衛門	
六十	お堂（阿弥陀堂）	（1）	寛政三年阿弥陀堂再建棟札	寛政３年	1791	七味郡長瀬村		平野村　太田忠右衛門安次、源太夫、美含郡三谷平太夫光信
五十九	観音堂	（1）	寛政五年喚鐘刻銘	寛政５年	1793	七味郡長瀬村		当郡大工職　関対馬守藤原家景
五	大乗寺	（2） （3）	寛政六年客殿及庫裏建立棟札	寛政６年	1794	美含郡森村	**大工棟梁後見　豊岡　彦四郎重賢** 豊岡彦四郎門人　森村大工　青山常七	**仁方湯村　源三郎、豊岡　彦七、**守柄　忠右衛門、**湯村　魯平、豊岡　善蔵、丹後　常四郎、**下浜　和四郎、**湯村　常右衛門、**上ケ　弁治郎、万吉、惣助、森　徳右衛門、与吉郎、与七、**豊岡　源助、**余部　治郎太夫、多子　源太夫、余部　元治郎、伊兵衛、小城　清兵衛、**今森　茂八郎、出石　安兵衛、**市場　甚八、林　五平治、松本　栄助、太兵衛、太左衛門、作和　定七、長七、竹野浜　伊右衛門、諸寄　五郎左衛門、吉助、御崎　定四郎、訓谷　新七、猶治郎、一日市　勘治郎、守柄　金治郎
八	伊勢神社	（4）	旧畳骨墨書	寛政６年	1794	美含郡下浜村		
八	伊勢神社	（5）	式台獅子彫刻刻銘	寛政６年	1794	美含郡下浜村		
八	伊勢神社	（6）	式台欄間彫刻刻銘	寛政６年	1794	美含郡下浜村		
八	伊勢神社	（7）	式台玄関欄間障子框墨書	寛政６年	1794	美含郡下浜村		守柄　忠右衛門
八	伊勢神社	（8）	三門彫刻刻銘	寛政６年	1794	美含郡下浜村		
七十二	八幡神社	（1）	寛政七年稲荷社再建棟札	寛政７年	1795	七味郡貫田村		平野村　太田忠右衛門
五十五	勢主山神社	（2）	寛政九年妙見大菩薩社建立棟札	寛政９年	1797	(七味郡か)		高津村　下垣清左エ門
三十七	薬師堂	（2）	寛政十一年薬師如来宮殿再建棟札	寛政11年	1799	美方郡村岡村		高津村　下垣清左衛門忠義、作山村　宗衛門
六十五	荒霊神社	（1）	文化元年三宝大荒神社再建棟札	文化元年	1804	七味郡水間村	大谷村　中村治平	
七十	大日堂	（2）	享和四年三宝大荒神社再建棟札	享和４年	1804	七味郡東垣村		茅野村　宗兵衛
七十	大日堂	（3）	文化七年大日如来宮殿再建棟札	文化７年	1810	七味郡東垣村	太田忠右エ門光往	
七十二	八幡神社	（2）	文化十二年八幡大菩薩社再建棟札	文化12年	1815	七味郡貫田村	平野村　太田忠右エ門光住	
五十五	勢主山神社	（3）	文化十五年千原大権現再建棟札	文化15年	1819	七味郡高津村		高津村　下垣治左衛門義忠、源兵衛、藤左衛門
二	通玄寺	（2）	文政七年経蔵上梁銘	文政７年	1824	美含郡境村		工匠　若松村　喜七
五十五	勢主山神社	（4）	天保十二年本堂再建棟札	天保12年	1841	七味郡高津村		高津村　吉中源兵衛、高津村　伊右衛門
七十一	吉滝神社	（3）	弘化三年善滝宮内殿再建棟札	弘化３年	1846	七味郡鍛治屋村	新屋村　重治良 後見　平野村　吉左エ門 脇棟梁　茅野村　弁右エ門	佐坊村　嘉吉、新屋村　重治弟子
五十七	薬師堂	（2）	弘化四年地蔵堂建立棟札	弘化４年	1847	七味郡原村		**二方郡辺地村　佐七**
四十二	熊野皇神社	（1）	嘉永二年蔵王大権現普請奉納札	嘉永２年	1849	美方郡兎塚村	**朝来郡竹田村　冨田元三郎成方**	当所大工世話人　長左エ門 **同所（注　竹田村か）　長三良、元八、滝三郎、喜代助、周助、市治郎、磯平、乙治郎、兵吉、林蔵、助太郎、佐七、**八井谷　治三良
四十二	熊野皇神社	（2）	嘉永二年蔵王大権現社再建棟札	嘉永２年	1849	美方郡兎塚村	**朝来郡竹田　冨田元三由成方**	
四十二	熊野皇神社	（3）	嘉永二年蔵王大権現建立棟札	嘉永２年	1849	美方郡兎塚村		**朝来郡竹田　冨田元三由成方**
五十七	薬師堂	（3）	嘉永二年薬師堂再建棟札	嘉永２年	1849	七味郡原村		**二方郡辺地村　喜左衛門、二方郡井戸村　竹三郎**

小工	木挽棟梁	木挽	屋根葺	その他（畳司、石工、彫物師など）
		城崎郡　吉良兵衛	**青野　市良兵衛**	
		市左衛門、八右衛門	治郎兵衛	
	油良村　村重三郎	河西谷村三右門、□本村　市兵衛、**出石村　又七** □□村[　　]、同村　孫□門、同村　八郎右門、一日市村　七兵衛		
				作者　出石住　福冨権四良
村岡　角谷善左衛門、山田村　和田九右衛門 山田村　久右衛門		山田村　吉右衛門		
		御亦村　伊兵衛		
		□□村　伝右衛門		
		当所　文七、当所　平兵衛、森村　伝右衛門	**宇屋　湯嶋　平四郎**	
		平四郎、助右衛門		
		挽引　九斗　与一朗、無南垣　弥助		
茅野村　中村清兵衛、中安勇八、村尾弁右衛門秀政、井上彦四郎、中村善八、太田常七、小田垣数右衛門、井上友治郎、村尾源蔵		実山村　勝治郎、神水村　安七、野間谷村　定右衛門、太谷村　伊八		
		長坂村　治八		
又市		佐四郎		
平野村　太田常七、村尾惣兵衛		**二方郡久谷村　助治郎、吉五郎**		
	森村木挽　定助 定助後見　伝右衛門 杣人棟梁　下浜村五兵衛	守柄　助七、守柄　幸助、大野　幸七、阿金谷　市四郎、松本　利平治、大谷　五郎七、**宇日　治郎吉、豊岡　十助**、小丸　嘉助、羽入　平吉、轟　清蔵、切浜　磯五郎、七味小代　伊右衛門、早渡　孫治郎、**二方久谷　清三郎、七左衛門**、御崎　吉左衛門、守柄　徳太郎、平四郎	**葺司　豊岡　権七、荘助**、香住　嘉兵衛	畳司　宇兵衛、善八 竹野浜　石工　武助、喜助、久四郎 **丹後宮津　惣七、出石　兵八、佐七、■田　伊左衛門、冨吉、藤八、豊岡　荘三郎、七兵衛、湯島　辰五郎、七五郎、丹後湊　新五郎、徳治郎、幸七、甚右衛門、源兵衛**
				畳細工人　美含郡竹野浜　福田善八 （注　大乗寺のものも含むか）
				彫物師　丹州栢原町住人　中井権次正貞
				丹州栢原住人　中井権次正貞、門人　久須真助、中井清次郎
				彫物師　青龍軒　中井権次橘正次
高津村　清兵エ、高津村藤八、**二方郡浜坂　和七**		長坂村　治郎右エ門、**二方郡辺地村　常七**		
中村杢右エ門、中村長吉良	水間村　林五良			
		実山村　治兵衛		
		二方郡久谷村　太良右衛門		
敬三良	忠宮村　武右エ門	佐坊村　利左エ門		
	中大谷　松右エ門	口大谷　彦左エ門、中大谷　吉兵衛、中大谷　伊三郎、口大谷　民右エ門	**豊岡　善五郎、喜平治、義三郎、善三郎、善作**	
		二方郡久谷村　半助		

４　丹波彫物師中井氏の活動

柏原在住の彫物師中井氏の歴代は、丹波から但馬にかけての各地で、寺社建築の装飾彫刻を制作し、彫刻や脇障子に刻銘として記してその名を残してきた。その活躍の時期は近世後半から近代に及んでいる。中井氏の活動については早く日向進が詳細な論考を発表しており、その後も地方史家が中井氏の事跡を追って報告を公表している[1]。中井氏の活動はこれらの諸論考で尽くされているが、香美町内でもその作品は知られており、今回の調査でその実例を新たに見出したものもあるので、その史料を追加して、香美町の遺構を中心としつつ、中井氏の活動について整理をしたい。

中井氏の末裔の過去帳･家伝を踏まえて､既往研究では中井家歴代について以下のことが判明している[2]。

中井家の祖は延宝六年（1678）に没した戒名帰屋院道源居士だが俗名は不明である。四代目が｢彫刻元祖｣とされる。歴代を列記すると以下の通りである。

第四代	中井言次忠貞（君音）	
	享保七年（1722）生	天明七年（1787）没
第五代	中井丈五郎正忠	文政元年（1818）没
第六代	中井権次正貞	安政二年（1855）没
第七代	中井権次正次	明治十六年（1883）没
第八代	中井権次正胤	昭和三年（1928）没
第九代	中井権次喜一郎	昭和三十三年（1958）没
第十代	中井丈夫	昭和六十三年（1988）没

そもそも中井氏は幕府の京都大工頭中井大和守の系譜を引くと称している。その真偽はともかく、元々は建築工匠であったようで、四代忠貞の兄弟久太夫は柏原八幡神社三重塔の棟梁を務めている。五代正忠の弟良平の家系も建築工匠を職としている。建築工匠の家から建築彫刻を主たる職とする家系が成立してきたと見て良い。

現段階で知られる中井家の関わった建物の一覧は表18に示すとおりである。これは前記文献と香美町及び丹波市内の寺社建築調査で収集した史料を総合したものである。制作年代が判明するもののみを掲げた。

中井家の動向について概観する。

中井姓の工匠の活動は､17世紀中期から知られる｡網掛で示した六例は建築工匠として働いた事例である。しかしこれらがすべて後の柏原の彫物師中井家と直接繋がるかどうかは不明である。実際、出石や豊岡に居所を構えた中井姓の工匠もいた。また前述の如く、中井家は一族の中に工匠として活動した庶流もあった。

彫物師としての活動は18世紀中期以降とされてきた。これまで知られている最古の事例は柏原の五社稲荷神社本殿（宝暦六年　1756）である。

中井氏の活動範囲は丹波・但馬の各地に及んでいることは、すでに日向進が指摘している。ただし初期は丹波市とその周辺での仕事が主であって、広範囲にその仕事の場を広げるのは六代目の中井権次正貞になってからである。

香美町においても、大乗寺客殿及び庫裏の式台玄関の彫刻を六代目権次正貞が制作しているのが、中井氏の活動の初例となる｡そして七代目の権次正次の代で、香美町内での仕事の痕跡は消える。もちろん香美町内の近代の遺構の調査は充分ではないので断言はできないが、六代目と七代目の19世紀前期から19世紀中期までが香美町内での中井氏の活躍時期であり、それはそのまま中井氏が広範囲の地域で活動をした時期とも重なっていると見ることができよう。

では、彫物師として中井氏は一棟の建物のどの範囲まで仕事をしたのであろうか。実際の遺構からは、建物に付けられた一つの彫刻や脇障子に刻銘を記していることがほとんどであるから、彫物師の仕事は確実には当該刻銘のある彫刻か脇障子に限られる。あるいは欄間であれば、欄間の彫刻群に限定される。しかし実際の建物で当該彫刻の周辺を観察すると、刻銘のある彫刻のみが孤立した作風ではないようにも見える場合がある。

例えば、向拝の中備の龍に刻銘があれば、その下の虹梁、虹梁の木鼻、中備の上にある唐破風の彫刻なども一連の作風と見受けられることがある。また当該彫

1　日向　進「丹波柏原の彫物師中井氏とその営業形態―近世丹波・丹後における建築界の動向―」（『日本建築学会計画系論文報告集』第396号　平成元年）
『名草神社本殿大工彫刻調査報告書』（養父市教育委員会　平成22年）
大槻良雄『彫物師柏原住人中井家のこと』（私家版　平成14年）
竹内　脩『中井権次について』（奥付無し）

2　歴代の記述は註(1)の論考に依る。

刻の納まりがよく、建築工事と一連の作業で、寸法なども的確に把握して彫刻がはめ込まれていることが多い。具体的に言えば、45大田神社本殿の向拝の彫刻がその一例である。図648に見える意匠にも部材にも不整合は見られない。

しかしそうなると、身舎の木鼻や拳鼻なども大工の作なのか彫物師の作なのか、判別が容易でない。

日向の紹介する史料に依れば（前掲註1）、彫物師の関与する部材として、木鼻・手挟・根肘木・蟇股・脇障子（現代の用語で表記）が挙げられている。制作料についても、総額の大半を彫物師が請け取っている例を挙げている。このようなことが一般的であったのであれは、彫物師の仕事は、建物の装飾的な部分の大半に及んでいたと見るべきであろうか。大工側は軸部構造の中核部分や屋根などに限定されて仕事をしたことになる。そのように想定すれば、大工と彫物師は相当に密接な協力の下に作事に当たっていたと見なければならない。

香美町域における中井家以外の彫物師は、幕末から近代の68光明寺弥勒堂の「豊岡住秋塚治助広貞」や26長福寺山門の「香住一日市本多正一」が知られるのみで、それ以前には、中井家以外は彫刻師としての名を残した家系はない。しかし妻飾に雲紋の板壁を入れる33相田神社本殿と48皇大神社本殿は、その彫刻が彫物師の仕事だとすれば、同系統と見て良く、中井家以外にも彫物師の家系があったとの想定が可能である。

中井家の仕事に注目することによって、彫物師の職務の範囲や活動の動向についての解明のヒントがあるように思われる。事例の多い丹波市内の調査成果を待って検討を続けたい。（山岸）

図648　45大田神社本殿向拝の彫刻

表18　彫物師中井家の事跡一覧　（網掛は建築工匠の事例）

No.	建造物	文化財指定等	建立年代	所　在	典拠・刻銘場所	銘等	系譜	典拠
1	通玄寺客殿		天和2年(1682)	〔兵〕香美町香住区香住	棟札	大工　中井源左衛門守重		
2	大歳神社本殿		享保10年(1725)	〔兵〕丹波市柏原町南多田	棟札	大工　中井安左衛門棟了		丹波86
3	遍照寺観音堂		享保19年	〔兵〕香美町香住区小原	簑束墨書	出石うおや町　中井惣大夫		
4	当勝神社本殿		寛延2年(1749)	〔兵〕朝来市山東町当勝	棟札	彫物師棟梁　丹波国柏原町　中井言次忠定	四代目	名草報告、山東町史・日向・大槻
5	五社稲荷神社		宝暦6年(1756)	〔兵〕丹波市柏原町柏原	脇障子裏	中井言次君音	四代目	日向
6	日吉神社本殿		宝暦11年	〔兵〕丹波市山南町井原	脇障子裏	彫工　当国柏原住　中井言次君音	四代目	丹波28
7	明願寺本堂		宝暦13年	〔兵〕丹波市柏原町南多田	棟札	匠工柏原住人中井久太夫尉藤原棟寛		
8	神田神社本殿・拝殿		明和2年(1765)	〔兵〕篠山市大山上		（言次君音）	四代目	大槻
9	兵主神社本殿		安永4年(1775)	〔兵〕美方郡香美町香住区九斗	棟札写	大工　豊岡村　中井庄三郎広光		
10	三柱神社		天明2年(1782)	〔兵〕養父市八鹿町元町	棟札	彫物師　但州柏原　中井権治	四代目	名草報告
11	観音寺		寛政7年(1795)			中井権次正貞		日向
12	観音寺経蔵	県登録	寛政10年	〔兵〕朝来市和田山町竹田		彫刻　柏原　中井丈五郎（寺伝）	五代目	
13	稲荷神社本殿		寛政11年			中井丈五郎正忠・久須善兵衛正精・同官蔵	五代目	日向
14	稲粒神社		寛政12年	〔京〕福知山市川北		中井丈五郎正忠・久須善兵衛正精	五代目	日向・大槻
15	金剛院		寛政12年	〔京〕舞鶴市鹿原		中井権次正貞		日向・大槻
16	阿上三所神社		享和2年(1802)			中井丈五郎正忠	五代目	日向
17	瑞光寺観音堂		文化3年(1806)	〔兵〕丹波市柏原町上中	棟札	棟梁　中井栄八安棟		
18	沢田八幡神社		文化8年			中井丈五郎正忠・中井文五郎正貞	五代目・六代目	
19	大原神社拝殿		文化7年ヵ	〔京〕三和町大原		（丈五郎正忠　久須善兵衛政精）	五代目	
20	八幡神社本殿		文化8年	〔兵〕篠山市沢田		（丈五郎正忠　文五郎正貞）	五代目	大槻
21	天満宮本殿		文化10年	〔兵〕丹波市柏原町新町		（丈五郎）	五代目	大槻
22	柏原八幡三重塔		文化10年	〔兵〕丹波市柏原	文書	中井久大夫・利兵衛・与兵衛		日向
23	稲荷神社本殿		文化11年	〔兵〕丹波市柏原町室谷		（丈五郎正忠）	五代目	大槻
24	柏原八幡三重塔		文化12年	〔兵〕丹波市柏原		（丈五郎正忠　権次正貞）	五代目・六代目	日向
25	八幡神社本殿		文化12年	〔京〕綾部市八津合町	脇障子	中井青龍軒政忠		日向
26	長安寺薬師堂		文化13年	〔京〕福知山市	棟札	中井丈五郎正忠・久須善兵衛政清・権次郎政貞・徳治郎政義	五代目	日向
27	勢主山神社		文化15年	〔兵〕美方郡香美町村岡区高津	彫刻裏	彫物師　当国原町住人　中井権次正貞	六代目	
28	愛宕神社		文政2年(1819)	〔兵〕丹波市市島町上垣		（丈五郎正忠　久須善兵衛政精）	五代目	

29	大乗寺客殿及び庫裏		文政7年	〔兵〕美方郡香美町香住区森	式台彫刻裏	彫物師　丹州柏原町住人　中井権次正貞　久須真助　中井清次郎	六代目	
30	清養寺		文政7年	〔兵〕養父市八鹿町馬瀬	向拝龍彫刻裏	彫物師　丹州柏原町住人　中井権次正貞	六代目	
31	満福寺観音堂		文政8年	〔兵〕養父市十二所	向拝龍彫刻裏	彫物師　但州柏原町住人　中井権治　正貞	六代目	名草報告
32	進美寺観音堂		文政10年	〔兵〕豊岡市日高町赤崎	向拝龍彫刻裏	彫物師　但州柏原町住人　中井権次　正貞	六代目	
33	八幡神社拝殿		文政11年	〔兵〕丹波市柏原	墨書	再建之大工　大工町　中井良平		
34	八幡神社拝殿		文政11年	〔兵〕丹波市柏原		（権次正貞）		大槻
35	二宮神社		文政11年	〔兵〕養父市大屋町大杉	脇障子裏・棟札	彫物師　但州柏原町住人　中井権次　正貞、久須真助正美　中井清次正用	六代目	
36	三嶋田神社本殿		文政12年	〔京〕久美浜町金谷		（権次正貞）		大槻
37	相應峰寺圓通殿	県登録	天保3年（1832）	〔兵〕美方郡新温泉町清富	向拝虹梁上の鳳凰彫刻	彫物師　丹州柏原町住人　中井権次橘正貞	六代目	
38	大原神社拝殿		天保3年	〔京〕三和町大原		（権次政貞）	六代目	大槻
39	三宝寺本堂		天保4年	〔兵〕丹波市柏原町大新屋	向拝	（権次正貞）	六代目	大槻
40	観音寺本堂		天保4年	〔京〕福知山市観音寺	欄間	（権次橘正貞）	六代目	大槻
41	天満宮本殿		天保5年	〔兵〕丹波市氷上町小野		（権次正貞　久須真助　中井清次良正用）	六代目	
42	光明寺本堂		天保7年	〔京〕綾部市		氷上郡栢原住人　彫物師　中井権次正貞　同清次良正用	六代目	大槻
43	大護神社本殿		天保９年	〔兵〕丹波市氷上町助松		（権次橘正貞）	六代目	
44	宗雲寺観音堂		天保12年	〔京〕久美浜町		中井権次正貞	六代目	日向・大槻
45	光明寺本堂		天保13年ヵ	〔兵〕美方郡香美町小代区平野	向拝虹梁上の彫刻裏	彫物師　丹州柏原町住人　中井権次橘正貞	六代目	
46	三島田神社		天保13年	〔京〕久美浜町		中井権次正貞	六代目	日向
47	赤渕神社楼門		弘化年間ヵ	〔兵〕朝来市和田山町枚田	中央虹梁上龍彫刻裏	彫物師　但州柏原住人　中井権次橘正貞	六代目	
48	経王寺		弘化3年（1846）	〔兵〕豊岡市出石町下谷		中井正貞？	六代目	
49	関神社本殿		弘化4年	〔兵〕養父市関宮	脇障子裏・棟札	但州柏原町住人　彫物師　中井権次橘正貞、蒸五郎正次　喜之助正吉	六代目	
50	浄仙寺		弘化4年			中井権次正貞		日向
51	生野神社本殿		弘化5年	〔京〕福知山市		彫物師　当国柏原町住人　中井清次郎正用		日向
52	大田神社本殿		嘉永2年（1849）	〔兵〕美方郡香美町村岡区大笹	向拝虹梁上の彫刻裏	彫物師　丹州柏原住　中井権次橘正貞	六代目	
53	熊野皇神社本殿		嘉永2年	〔兵〕美方郡香美町村岡区中大谷	向拝虹梁上の彫刻裏	彫物師　丹州柏原町住　中井権次橘正貞	六代目	明治二十三年の作り直しかも？
54	満福寺本堂		嘉永5年	〔兵〕養父市十二所		中井正次？		
55	大乗寺七面堂		嘉永5年	伊根町	向拝彫刻裏	中井権次橘正貞	六代目	日向
56	大乗寺山門		安政2年（1855）ヵ	〔兵〕美方郡香美町香住区森	龍彫刻裏	彫刻師　青龍軒　中井権次橘正次	七代目	
57	大久保神社		安政3年	〔兵〕養父市大久保	脇障子裏	但州柏原城下住人　中井丈五郎橘正次	七代目	
58	遍照寺　大師堂		安政3年	〔兵〕美方郡香美町香住区小原	向拝虹梁上の彫刻裏	丹州氷上郡柏原城下住人　中井丈五郎橘正次	七代目	伝では寛政6年（1794）
59	当勝神社拝殿		慶応4年（1868）	〔兵〕朝来市山東町粟鹿	向拝龍彫刻裏	但州柏原城下住　中井権次橘正次	七代目	大槻
60	中尾神社		慶応4年	〔兵〕養父市能座		中井権次正次	七代目	
61	高井神社覆屋			〔兵〕香美町村岡区高井	向拝龍彫刻	彫物師　但栢城下　中井権次橘正次	七代目	
62	東西寺本堂	県登録	明治17（1884）	〔兵〕朝来市生野町口銀谷	向拝中備	彫刻師　丹柏住中井清治良　橘　正實		
63	宇良神社		明治17年	〔京〕伊根町本庄		中井権次		日向・大槻
64	蛭子山屋台		明治18年	〔京〕加悦町		（中井権次橘正胤）	八代目	日向
65	稲崎神社		明治31年	〔京〕与謝野町（旧野田川町）		（中井権次正胤）	八代目	日向・大槻
66	牧山神社拝殿		明治45年	〔兵〕丹波市山南	側通正面中央	彫物師　当郡柏原町住　中井清次郎　橘　正實		
67	深田神社拝殿		大正8年	〔京〕与謝野町（旧野田川町）	彫刻	彫物師八代目　中井権次正胤	八代目	日向
68	三つ石稲荷		大正3年	〔兵〕丹波市柏原町新町		（権次正胤）	八代目	大槻
69	延命寺		大正7年	〔兵〕丹波市山南町小畑		（権次正胤）	八代目	大槻
70	天満宮拝殿・本殿		大正7年	〔兵〕丹波市春日町朝日		（権次正胤）	八代目	大槻
71	深田神社拝殿		大正8年			中井権次正胤		日向
72	天満宮拝殿		大正10年	〔兵〕丹波市氷上町小野		中井権次正胤持性院	八代目	大槻
73	二宮神社本殿		大正13年（1924）	〔兵〕養父市大屋町夏梅	向拝彫刻裏	丹波氷上郡柏原町　彫刻師	八代目	
74	若宮神社		大正14年	〔兵〕丹波市山南町奥野々		（権次正胤）	八代目	大槻
75	熊野神社		大正14年	〔京〕福知山市		中井権次正胤	八代目	日向
76	井上神社拝殿		大正	〔兵〕養父市吉井	向拝龍彫刻裏	丹波氷上郡柏原町　彫刻師八代目　中井権次正胤	八代目	
77	三宮神社拝殿			〔兵〕養父市大屋町筏	向拝龍彫刻裏	丹波国氷上郡柏原町住　彫刻師八代目　中井権次橘正胤	八代目	
78	二宮神社拝殿		昭和13年（1938）	〔兵〕養父市大屋町大杉	向拝龍彫刻裏	丹後宮津九代目　彫刻師　中井権次元丹波柏原	九代目	
79	一宮神社拝殿		昭和	〔兵〕養父市大屋町中	向拝龍彫刻裏	丹後宮津九代目　彫刻師　中井権次　元丹波柏原	九代目	
80	和田神社拝殿		昭和	〔兵〕養父市大屋町明延	向拝龍彫刻裏	丹後宮津九代目　彫刻師　中井権次　元丹波柏原	九代目	
81	四ヶ峰神社拝殿		昭和	〔兵〕養父市大屋町横行	向拝龍彫刻裏	丹後宮津九代目　彫刻師　中井権次　元丹波柏原	九代目	
82	愛宕神社本殿			〔兵〕丹波市市島町上垣	脇障子銘	彫物師　栢原住　久須善兵衛正精　中井丈五郎正忠		大槻
83	岩戸寺			〔兵〕丹波市市島町岩戸	欄間	（久須善兵衛正精　中井丈五郎正忠）		大槻
84	厳島神社本殿			〔兵〕丹波市市島町上牧	向拝?彫刻銘	当社彫物師　栢原町住人　中井権次　橘正貞		大槻

〔　〕内は兵庫県か京都府を示す　　出典の記載なきものは実際の調査による

ま と め

これまで報告し、論じてきたように、香美町域内の寺社建築には他の地域とは異なるいくつかの特質がある。再度まとめると以下の四点となろう。

① 18世紀に建立された建物が多く遺されている。

② 多様な構造形式の神社本殿が残されている。

③ 小規模ながら細部意匠に工夫をこらした社殿が多い。組物・蟇股・支輪・木鼻などに多様な形式と彫刻が用いられている。

④ 「堂」が多く残され、今も村人の信仰の場として使われている。その形態や機能は多様であり、その歴史的変遷も窺い知ることができる。

規模・形式などの面から目に付きやすい建物は大乗寺や黒野神社など、ごく限られているが、むしろ、小規模な一間社が町内に散在すること自体に、歴史的・文化的な特質があると評価しなければならない。

小規模ながら独特の構造形式の神社本殿があり、それらには豊饒で個性的な細部意匠が用いられている点（①～③）で、香美町の神社社殿群は県内、否、全国でも突出した地域的特性をもつとみてよい。これらは散在しているのではない。中世以来のこの地域の社会構造や宗教情勢を継承して、この地に存在しているのである。

小規模な社殿群と共に「堂」の建物と民俗がなお息づいている点（④）も深い感動を呼ぶものであった。昭和四十年代に、伝統的な民俗消滅への危機感から行われた民俗調査から半世紀近くが経った今、建造物調査を通じて、なお伝承されている民俗を知ることができるのはきわめて貴重である。

このような良質の近世寺社建築が遺存する要因は、この地域の住民の敬虔な信仰心と、祖先の残した遺産への敬意にあると考えられる。しかし変動の大きい近年の社会状況の中では、これらの珠玉のような建物群の継承も困難になりつつある。建造物と不可分の民俗もまた危機的状況にある。

しかし単品の優品を指定する現在の文化財指定の考え方では、これらの社殿群や「堂」を保護してゆくのは容易ではない。今後も自立的に安定した豊かな地域社会を維持してゆくために、この地域の文化的特性を示す文化財であるこれらの寺社建築を顕彰し、保護するための施策が必要である。

本書の報告内容によって、個々の建物の価値や個性を再認識していただき、末永くこれらの近世寺社建築が保持されてゆくことを期待したい。歴史に裏付けられた個性ある建造物を守り伝えてゆくことは、その地域の個性や環境の質の継続的な向上に繋がるはずである。

なお、香美町に近接する新温泉町・豊岡市などの寺社建築の詳細は未調査であるから、上記のような特質が、香美町に限られているのかどうかは今後の調査に委ねられねばならない。兵庫県登録有形文化財に登録された養父市の神社建築の事例を見ると、意匠や装飾に工夫をこらしたものが見られる。例えば関神社本殿（弘化四年）・斎神社摂社楯縫神社本殿（宝暦十年）・養父神社本殿（19世紀中期）などである。しかし、これらと比較しても、香美町の寺社建築は規模・装飾・建立年代などの面で独自性が顕著だと感じられる。今後の周辺市・町の調査の進展も待ちたい。

とはいえ、香美町の近世寺社建築群の文化的価値が極めて高いことは揺るがない。行政的にも積極的な保存の施策がとられることを、調査を担当した者として、期待したい。

この調査にこころよく協力いただいた各村の住民の方々、御住職・神職の皆様に、謝意を表します。

本書の執筆に際しては、特に沿革の記述などで以下の文献に依拠した部分が多い。煩雑になるのでその都度註記できなかったことをお詫びしておきたい。

兵庫県神職会『兵庫県神社誌』
（臨川書店　昭和13年、昭和59年復刻）
『兵庫県の近世社寺建築』（兵庫県教育委員会・兵庫県近世社寺調査団　昭和53年）
『美方町史』（美方町　昭和55年）
『村岡町誌』上巻・下巻（村岡町　昭和55・57年）
『日本歴史地名大系　第二九巻１　兵庫県の地名』
（平凡社　平成11年）
『わがむらの歴史・文化遺産』
（香住町教育委員会　平成17年）

香美町文化財調査報告書第１集
「香美町寺社建築調査報告書」
平成２５年３月
発行　香美町教育委員会
香美町歴史文化遺産活性化実行委員会
〒667-1392
兵庫県美方郡香美町村岡区村岡390-1
香美町教育委員会生涯学習課
印刷　北星社